

「悪魔を殺して平気なの？」  
「天使と墮天使も殺したい」

サイキライカ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

永劫に転生を強制させられた主人公が無茶苦茶やるだけの話  
ただし、主人公はしょっちゅう出番無い

# 目次

- 転生して殺意が募りました — 1
- 殺意が爆発した。反省も後悔もしていない。 — 12
- 切り捨てられると思つてたけど、存外  
気に入られているらしい — 23
- なんでこつから仲良くできると思える  
のか理解できねえ — 33
- たまにはこういうのもあるか。 — 44
- 趣味が合わなきや役得とは言わねえ — 54
- うぜえ……もうそれしか言えねえ — 65
- 喜劇は喜劇だけさあ… — 76
- 主人公とオリキャラのプロフィール — 87
- 知らないって、見てると笑えるな — 92
- 勘違いも程々につてな — 100
- ひっさびさに愉しくなってきたな — 107
- 次は、少しは平穩な世界だとありがた  
いな — 118
- 少しは面白いこともござえますがねえ — 118

やるだけ、やったよな？

126

彼らの恐ろしさを私達は初めて理解した。

147

お久しぶりですっていうには大分時間が経ってますね。

154

これは貴方が生きている証。私はそれが嬉しいんです

162

茶番は終わりにしようぜ。

171

我達は本気であるぞ

184

首を吊う価値は貴様らにない

190

弱点が分かっているなら突くのは当然で

202

しよう？

202

神は死しても不滅である

209

死ぬ前に覚えておけ。日本の神は二つの顔があることを。

219

修羅と逝き、羅刹と死ぬが日本の兵(つわもの)よ

230

目標を発見。全て喰らい尽くす。

238

馴れ合いと共存は違いますよ。

248

戦う力がないから戦わないは言い逃れ

248

だわさ

269

戦えないのは嫌なんだ!!

269

『悪魔の駒』……ふふふ、正しく名前の通

269

りやね

277

僕は、この怒りを忘れない

287

誰にとつて、この世界は平和なんだか

295

じいくり、楽しんでくんなまし

305

冥界での戦いに参加した日本神話の軍

勢と備忘録

317

やることないって困るよな

324

妬ましいなあ……

331

偉くなんてなりたいもんかねえ？

340

お前ら本気なのか？

350

決着付けようか。

358

こんな日が長く続けばいいなと思  
いました。

368

釣るつもりが無いときの大物ほど扱  
に困るものはない。

380

よりもよつてこいつかよ

389

ああ、ぶち殺さなきやな

396

再会した姉様がリア充になってた件

403

我の他に神はなし

412

日本って、こわかったんですね

421

私は決めたんです

428

終幕？ 舞台ごとぶち壊すんだよ。

436

勢いでやってしまいました。今は反省

しています。

443

相互理解なんざ不可能だよ

450

戦う理由はそれぞれあるんだ。

459

準備万端で来てるに決まってるんだろ？

474

加減も遠慮も侮りも必要ない

487

番外編

アナザールート【グランギニョル】前

500

アナザールート【グランギニョル】中

513

アナザールート【グランギニョル】中2

アナザールート【グランギニョル】後1

アナザールート【グランギニョル】後2

アナザールート【グランギニョル】後3

アナザールート【グランギニョル】終1

アナザールート【グランギニョル】終2

アナザールート【グランギニョル】終3

アナザールート【グランギニョル】終4

アナザールート【グランギニョル】終5

アナザールート【グランギニョル】終6

アナザールート【グランギニョル】終7

【で】遊ぼう(2) ————— 644  
 Another IF『英雄派』 636  
 ぼう(1) —————  
 Another IF『英雄派』【で】遊 631  
 録 —————  
 アナザールート【グランギニョル】備忘 619  
 け —————  
 アナザールート【グランギニョル】おま 604  
 アナザールート【グランギニョル】メ 591  
 アナザールート【グランギニョル】終4 573

Another IF『英雄派』【で】遊 734  
 ぼう(8) —————  
 ぼう(7) ————— 721  
 Another IF『英雄派』【で】遊 705  
 ぼう(6) —————  
 Another IF『英雄派』【で】遊 693  
 ぼう(5) —————  
 ぼう(4) ————— 674  
 Another IF『英雄派』【で】遊 661  
 ぼう(3) —————  
 Another IF『英雄派』【で】遊  
 Another IF『英雄派』【で】遊

ぼう(9)

750

言った筈だ。正面から不意打ちだつて。

768

そう、だったのか。

778

仲間はずれは良くないよな？

790

遊ぼうぜ。

804

俺はやっぱりそういう奴なんだよ。

814

# 転生して殺意が募りました

「君、今から転生してね」

「……は？」

「あ、人間には厳しい世界だから特典二つ付けとくから頑張つてね」

「え？」

嘘だと思っだろうが、今のが第二の人生最初の記憶だった。

そうして訳もわからぬままなろう系のテンプレ転生を体験させられた。

そして俺が今思うことは只一つ。

「聖書陣営は滅ぼす。

何があつてもだ」

この一言につきる。

俺がこの世界に転生してから約四千年が過ぎた。

その間に俺の人外に対する殺意は研ぎに研ぎ澄まされていた。

言つちやあなんだが、四千年が過ぎたと言つても、人間を辞めたわけではない。

と言うか、辞められなかった。

それは俺に押し付けられた特典に由来する。

『種族固定：人間』『忘却補正』

この二つが俺の特典の全てだ。

種族固定はどんなことがあっても人間のままで居続けること。

例えば妖精に拐われても妖精になることもないし、吸血鬼に血を吸われても吸血鬼や食人鬼にならなくて済む。

ただし、基本スペックは人間のままでからとにかく弱い。そしてすぐ死ぬ。

そしてそれを補うのが忘却補正だ。

某運命と違い効果は生まれ変わっても記憶を引き継ぐこと。

つまり、自殺しようが発狂しようが楽にはなれない。

国を跨ぎ時代を跨ぎ合計四千年俺は世界を見続ける羽目になったのだ。

これなんて生き地獄？

ただ、何もかもが悪い訳じゃなかった。

最初のメソポタミアでは伝説のビルガメシユことギルガメツシユにモブの兵隊としてだが拜謁出来たし、歴史上の偉人や伝説の当事者の一部（全部モブだが）になれたのは其れなりに良い思い出だ。

だけど良い記憶ばかりでもない。

トロイアでヘクトール將軍を守りきれず死なせ、フランスでジャネットを見殺しにするしかなく、ジル元帥が狂つていくのを何も出来なかつたし、ブリタニアではカムランの丘でベデイヴィアが負傷したアーサー王を連れて逃げる盾になるしか出来なかつた。

そうやって生きていく内に、俺は『奴等』の存在が憎くて堪らなくなつた。

### 『聖四文字』

一般的にそう呼ばれるあのクソツタレがやったことを、俺は絶対許さない。

確かに奴は神としちやあ間違つちやいない。

他所の神を蹴落として信仰の覇権を握ろうとするのは神の、宗教の本質で其れを否と  
言えない。

信徒が暴走しまくつたのだから直接の介入はしていなかったからまだギリツギリ人間の責任だ。

だが、取り巻きの手綱を手離して好き勝手やらせた時点で奴は許されないし、許さない。  
い。

マルタの悲嘆を、ジョージの怒りを、ヨシユアの慟哭さえ利用した奴等を許せるものか。

ニーチェとジル元帥の件で既にくたばつたのは確定したが、野郎が唯一神である以上復活するためのバックアップが必ずある筈だ。

必ず奴等を諸共滅ぼすため、俺は転生の特典をフルに使い力をかき集めた。

といつても、そいつは形有るものではないが。

「おのれ……人間ごときがあ……」

踏みつけていた『元』人間のバケモノが恨みの声を上げる。

「ちっ、まだ生きてたのかよ？」

調息で練り上げた『氣』を体内で循環、小周天法を以て足を強化。

更に丹田と脾臓のチャクラ二つを回転させ加圧。

二つの力を合算させたエネルギーを足首の捻りを以て震脚と共にバケモノに叩き込んだ。

二つの力を叩き込まれたバケモノはまるで尻に爆竹を詰められた蛙のように爆散してあっさり死んだ。

これが俺がかき集めた力の一部。

肉体に依存しない『魂』を基点とする鍛練法。

ただし、それらは仙人や聖人になるためのものなので鍛練を重ねても最奥を極めることはできない。

そして

『アンサズ』

残骸と残る思念を燃料としルーンを刻み炎に換えて焼き払う。  
もう一つが知識。

魔道外法問わず忘却補正の恩恵をフルに使いその深淵を魂に刻み込んだ。

どこぞの禁書目録みたいに十万三千冊には届かないが、弾圧され消えた数多の魔術を行使するに必要な知識を保有している。

その中に某外宇宙に関わる文献がかなり含まれていたのには困ったが、狂人は人間と見なされないらしくいまだに発狂を免れているのは助かった。

ただし、魔術関連も負荷に耐えられるかは肉体に依存するため中々使う機会が少ないのが実情だ。

「ふん。」

呆気ねえな」

憐憫も湧かないようなバケモノを始末し終えた俺はその場を後にしながらクライアントに連絡を入れる。

「こっちは片付いたぞ。」

「……ああ。魂まで腐ってたから完全に消した」

携帯越しに落胆の声が聞こえるが俺は構わず言う。

「で、何時まで好き勝手やらせとくんだった天津神は？」

今回の報酬として、俺が求めた情報の引き出しを要求すると相手は不快そうな声で答えた。

「……そうかい」

それを聞いて、やっぱりなと俺は分かっけていて落胆した。

日本の神こと日本宗教は数少ない『聖書に勝った信仰』だ。

それも二度。

一度目は島原を拠点とした聖書陣営を水際で食い止めた島原の乱。

そしてもう一つは第二次世界大戦。

人間の歴史的には敗北したが、復興支援という名の天使による信仰の篡奪という侵略は完全に当てが外れ失敗した。

代償として悪魔陣営が入り込む不手際と後の禍根を残す失態を引き起こしたが、少なくとも天使の目論見に勝ったのは事実だ。

しかし、天津神は現在は地上に干渉出来ない。

敗戦の折りに結んだ天使との協定がそれを阻んでいるからだ。

しかしそれもうに形骸化し、更に『協定が続く限り天使は墮天使の日本国内への侵入を防ぐ』という条約も果たされたことは殆ど無い。

にも拘らず、天津神は動かない。

いや、正確に言うなら動けないか。

天津神はその殆どを地上の『崇神』の封印を保つために奔走させられている。少し調べれば解るが、日本という土地には起こしてはならない存在が多過ぎる。

特に有名な『神田』の某様は、封印されたままでさえほんの先触れでもグラウンド・ゼロを簡単に産み出す規格外の力を残している。

それらに触らせぬよう日本の神は神宝を差し出し国土を踏み荒らされ民を食い物とされても履行されない条約を飲み続け堪えている。

他所の神なら知ったことかと寧ろ叩き起こして大惨事にするだろう所を民のために堪えるからこそ、俺はこの国の神に力を貸し続けているのだ。

「……あ？」

携帯を切ろうとしたところで相手から新しい依頼を持ち掛けられる。

「駒王町？」

確か関東地方の悪魔が占拠している土地だったか？

内容は最近赴任した貴族悪魔があんまりにも杜撰な管理体制を敷いているためか、かなりの量の悪魔にさせられたバケモノが町中に入り込んでいるらしい。

俺はそのとある学園の生徒として入り込みバケモノと、可能であれば領主気取りの貴族悪魔を消すことが目的だそうだ。

「報酬は弾む……ねえ」

グラウンド・ゼロの最有力候補に踏み込むのは危なすぎるが、純血の貴族悪魔ならばこちらにも利がある。

「いいぜ。」

「期間は？」

細かい詰めは後日と最低限の情報だけを聞き、そして今度こそ携帯を切った。

そして数日後、今更ながら断つときや良かったなと後悔していた。

「う、うらぎりもの……」

つい今しがた骨がイカれない程度の手加減をして半殺しにしたソドムの犬がそう恨みの声を上げる。

犬の名前は兵藤とか言うらしいが、正直こいつを見てみるとトロイアが地獄になる原因となった。パリスの糞野郎を思い出すから不愉快極まりない。

「誰が裏切り者だ。」

「テメエが何をしたか解ってるんだろ？」

「当たり前だ!!」

踏みつけられながら兵藤は吠える。

「おっぱいが見たいから見ただけギャアアアアア!？」

最後まで聞いていたら耳が腐りそうなのでそのまま踏み抜いた。

一応骨は折ってない。

「殺つちやえ舞沢君!!」

「いいわ!! そのまま去勢して!!」

俺がメている光景に悲鳴どころか賞賛の声上がる。

舞沢というのはこの学園に潜り込む際に使った偽名だ。

あいつらは兵藤が起こした覗きの被害者共だが、そんな奴等の姿に不快感が募る。

「……チッ」

あまりの不快さに俺は足を退けると集団に背を向ける。

「後は好きにしろ」

そう言うのと早速私刑が始まり兵藤の悲鳴が上がるが、この『狂わされた』箱庭への怒りはその悲鳴を聞き流される。

「流石悪魔様だ。」

家畜小屋の整備は完璧ってか?」

誰にも聞こえない程度の声を吐き捨てる。

入ってすぐ気付いた話だ。

この駒王学園には『二つ』の結界が常に展開されている。

一つは欲望の解放と閉鎖。

この箱庭の中では人間の理性の手綱が緩められる。

だからこそ兵藤と今回は逃げられた後の二人は色欲のたがが外れ痴漢行為を行うし、女子共は暴力への抵抗を無くして過剰なまでに報復をしてしまう。

しかしそれらは閉鎖され学園の外へは向かわず、兵藤達がいくら犯罪行為を行おうと法的機関までは届かないし暴行の事実も外には漏れない。

まさに現代のソドムかゴモラ。

だが言わせてもらう。

本物のソドムもゴモラもこんなクソツタレな家畜小屋とは到底比べてはいけないほど穏やかで平和な国だった。

それをあの聖四文字の手下共は……

「ちよつといいかしら?」

「あ?」

思考を遮る声に振り向けば副生徒会長長の姿。

確か名前は……悪魔の名前なんかどうでもいいか。

「なんだよ?」

「提出された貴方の書類に不備があつたから確かめて貰いたいんだけど、放課後生徒会

室に寄って貰える？」

「分かった」

そんな訳はねえだろ。

書類を用意したのは日本神話のシンパの組織だ。

おそらく俺への探りを入れに来たのだろう。

だが、下手に波風を立てても動きづらくなるだけだから其れを了承して俺は教室へと向かう。

「木場君よ!!」

「キヤー! 今日も素敵ね!!」

途中、金髪のどう見ても日本人には見えない男と擦れ違い、その直後通りがかりの女生徒が黄色い悲鳴を上げる。

当人にはこやかに手を振ったりして愛想を返しているが、俺はそれが薄ら寒く見えて内心吐き捨てる。

(悪魔礼賛の結界様様だな)

もう一つの結界、則ち悪魔を讃えるよう刷り込む結界を俺はひたすら疎ましいと思いつながら教室に戻った。

殺意が爆発した。反省も後悔もしていない。

「失礼します」

放課後、一応緊張したフリをしながら呼び出された生徒会室に入ると、この学園を占領している貴族悪魔の片割れとその取り巻き共が待つていた。

今すぐぶち殺してやりたいところだが、生憎と正面切つて悪魔と殺し合いが出来るようなスペックは俺の体にはない。

だから、気付かれないよう調息を重ね丹田に氣を貯めながらただの一生徒のフリをする。

「書類の不備があつたつて聞いたんだが？」

そう言うのと生徒会長こと貴族悪魔は眼鏡ごしに俺を見る。

「舞沢君ですね？」

御足労を掛けて申し訳無いのですが、その件は此方の手違いでした」

「はあ」

「御詫びにお茶でもどうですか？」

私個人としても、少しお話がしたいので如何でしょう？」

表面は穏やかにそう言うが、その目はこつちを警戒していることがありありと見え  
た。

無視して帰りたい所だが、逆に情報を掴ませてもらうほうが後々動きやすいか。

「まあ、少しぐらいなら」

「ありがとうございます」

そう適当な席に座ると直ぐに湯気の立つティーカップが差し出された。

「紅茶は嫌いですか？」

「いや。」

だが、どつちか言うなら緑茶派だな」

毒物が入っていないことを香りから確かめてからそう言うと言貴族悪魔は僅かに眉を  
跳ねさせた。

「意外ですね。」

「コーヒー派だと思っていました」

「なんでも飲むだけだよ」

生水が飲めない国に生まれ変わるほうが多かったせいで飲むものに味がついていな  
いほうが心配になってしまった。

「それはそうと、なんでそれを？」

「図書室で貴方が借りた本にコーヒーの染みが付いていたそうなので」

「ああ、あれね」

探りを入れていている気配があつたから仕掛けておいたんだが、割りと簡単にボロを出してきたな？」

「いや、これは誘いと警戒しておくほうがいいか。」

「意外だな。」

生徒会長は見た感じシャルマーニに興味なさそうなんだが？」

「コーヒーの染みが付いていたのはシェイクスピアの詩集でしたよ？」

「あれ？」

ブラフに引つ掛からなかつた事に舌を巻きつつ惚けた振りをしておく。

「こちらこそ意外ですよ。」

話を聞いている風では貴方がシェイクスピアを熟読するようには思えませんでしたから」

「古い話は割りと読むぜ」

主に<sup>聖書</sup>テメエ<sup>神書</sup>等がどこまで真実を都合よく螺<sup>ね</sup>じ曲<sup>ま</sup>げ書き換えたか確かめるためにな。

「そう言う生徒会長さんも古い本を読むみてえだな？」

「こう見えても本にたいしては雑食なんです」

そんな風に一見趣味が合った風に見える会話を少し続けてから俺は何事もなく生徒会室を脱した。

「様子見か？」

「まあいい」

窺った限りあの貴族悪魔はかなり慎重みたいだし、殺るなら周りを少しづつ削り落とす長丁場を覚悟しておこう。

くくくく

舞沢が退室すると、支取蒼奈改めソーナ・シトリーは緊張からため息を吐いた。

「会長」

「大丈夫よ椿姫」

副生徒会長ことソーナの眷属である『女王』の心配する声にソーナは言う。

「少なくとも、すぐに彼は此方をどうこうするつもりはないようですから」

一切手をつけられていないカップを一瞥しながらソーナは考える。

舞沢と名乗る『彼』は、裏ではぐれ悪魔や外道に手を染めた魔術師を単独で狩るフリーランスのハンターとして名が通った存在であった。

そして彼が最も多く依頼を受諾している勢力は日本神話。

噂では神とも面識があるとも言われるが、しかしその手管は殆ど知られておらず、かろうじて銃器と格闘技に秀でているのが分かったぐらい。

そのため、転入の手続きの際には姉から日本神話の意向が判明するまで下手な刺激はしないよう釘を刺されたほどだ。

「匙を外しておいて正解でした」

「そうですね」

一番新しい『兵士』の眷属であり、忠誠心の高さに反しかなり血の気の多い彼が居たらどうなっていたかと胸を撫で下ろす二人。

「取りあえずリアス様にも話を通しておきましょう」

「そうですね」

幼馴染にして無自覚に問題を引き起こすトラブルメーカーに釘を刺しておこうと席を立つソーナ。

しかし、それを彼女がどう捉えるかまで予想できず、それ故に決定的な過ちを引き起こすなど彼女は知る由もなかった。

くくくく

あれから特にアクションを起こされることもなく数日が過ぎた。

学園は相変わらず暴走する欲望の坩堝であり、闇の中では悪魔が蔓延り人を喰らおうとしている。

昼は学園で不快感を高め、夜はそれを発散する序でに悪魔を殺す。

町に入ってから十日もせずに三体も悪魔を狩るのは新記録だ。

ここまで好き勝手やらせる辺り、悪魔は本気でこの町をグラウンド・ゼロにしたいらしい。

自滅したいのは勝手だが、やりたきや人間を巻き込まずに勝手に滅びろってんだ。

とはいえ今日は日曜だ。

学園でストレスを溜める必要もないんだから昼間ぐらいは平和に過ごさせて…

「…チツ」

そう思っていた矢先に不快感を与える筆頭の痴漢野郎こと兵藤の姿を見た。

しかもご丁寧にも隣に姿を変えた堕天使を侍らせ更には悪魔の護衛まで引き連れた。

「……まあいいか」

直線的な被害は悪魔のほうが高いが、堕天使も堕天使でのさばらせるには悪辣が極ま

る害獣であることには変わりない。

この際だ、気分を害された責任を取らせてやる。

俺は即座に気を張り巡らせ圏境を展開し存在を周囲に溶け込ませる。

圏境は極めれば不可視にまで至れるが、生憎と自分では認識させない程度が関の山だ。

しかし仙道を正しく修めていない相手ならこれで十分。

実際俺を認識出来るものは悪魔と墮天使も含め誰もいなくなった。

そうして俺は墮天使を追跡する。

どうやらデートのつもりらしくアチコチ遊び倒しているが、二人の温度差に墮天使の目的が兵藤の命だと察した。

そうしている内に悪魔の護衛は撒かれ夕方に差し掛かると人払いの掛けられた公園に入っていく。

……ここなら都合がいい。

気を練り、チャクラを回転させながら圏境が解けないよう注意を払いながら隙を窺う。

そうしていると、墮天使が正体を現し兵藤を嘲りながら殺すと宣言した。

混乱する兵藤を尻目に俺は軽身功、または軽気功と呼ばれる術を纏い右手に気を集中

させる。

「さよなら。恨むなら聖書の神を恨んでね」

そう空へと舞った墮天使が兵藤へと光の槍を放つ。

その瞬間、俺は動いた。

兵藤に槍が刺さり、その死が確定した僅かな隙に俺は跳躍して墮天使の背後を取る  
と、そのまま練り上げた氣を墮天使の心臓に叩き込んだ。

「……………え？」

それで終い。

叩き込まれた氣は経絡を廻り心臓に誤作動をおこさせ、そのまま心不全を引き起こし  
墮天使は何が起きたか理解する前に絶命した。

「二丁上がり」と

今のは俺の切り札にして知る限り人類最強と呼べる男が使った奥義『无二打』(にのう  
ちいらず)。

本人なら仙道もヨーガも使わず体術のみでやってのけたが、俺ではブーストをかけて  
真似事が精一杯。

というか、当人に指導を仰いで冥土の土産と身体に刻まれて殺された死因だったりも  
するんだから笑えねえ。

ともあれ、不意を打って墮天使の死体が手に入ったのは行幸だ。

人間一人の死で墮天使一体なら帳尻はあうどころかプラスだ。

さて、人払いの効果が消える前に死体を戴く…

「待ちなさい」

墮天使の死体に近付こうとしたところで在る筈の無い制止の声が放たれた。

振り向けば其処に居たのは紅い髪の貴族悪魔。

間違いない。

俺が殺すよう命じられたリアス・グレモリーだ。

グレモリーは俺にお構い無しに好き勝手くつ喋り始める。

「貴方、ソーナの言っていた日本神話の刺客ね？」

見たところ墮天使の始末をしたみたいだけど、此処は私の領地なのだから余り調子に

乗らないことね」

……

「それにしてもそつちの男の子は残念だったわね。

だけど気にしなくていいわ。

貴方の不手際は此方で無かったことにしておいてあげる」

……

「あら？」

この子神器をもつてるみたいね？

どうせ死ぬんだし、折角だから悪魔に転生させて可愛がつてあげましょう」

.....

「そういえば貴方もそれなりに強いよね？」

顔も悪くないし、貴方も悪魔に転生させてあげましょうか？」

.....

「光栄に思いなさい。

ひ弱な人間なんかから解放されて一万年の生を特別に」

気が付いたら俺の拳はグレモリーの心臓を破壊していた。

「.....え？」

縮地を蹴つて最短距離を踏み込み、会得した小周天のみならず制御が難しくなる大周天法まで使い周囲の氣までを腕に集約させ、更に普段は閉じている王冠から根までのチャクラを七つとも全開で回し、そうして練り上げた氣をグレモリーに叩き込んでいたようだ。

代償として腕の筋肉が爆ぜて血だるまになっていたが、それだけの氣をぶちこまれたグレモリーの肉体はバンチングされたように左胸がきれいに抉れ、向こう側まではつき

り見えるようになっていた。

信じられない様子で崩れ落ちるグレモリーに対し、俺は自分でもゾツとするほど冷えた声を発した。

「くたばれバケモノ」

切り捨てられると思つてたけど、存外氣に入られているらしい

リアス・グレモリーの失踪。

その情報は瞬く間に魔王サーゼクス・ルシファアの下まで届き、僅か数分で彼を半狂乱に貶めてしまった。

すぐさま駒王町へと飛び出し犯人に然るべき報いをといきり立つサーゼクスに対し、しかしその足並みは一步目から狂わされた。

日本神話の介入である。

日本神話は今回の件に併せ、前管理者であつたクレリア・ベリアルの不手際を槍玉に土地の返還を求めたのだ。

その態度にサーゼクスは激昂し全面戦争も辞さない態度を示そうとするも、セラフオル・レヴィアタン他魔王達の説得により辛うじて沈静化。

土地の管理については現在駒王学園に在籍するソーナ・シトリーを代役とし、彼女の実績で判断して欲しいと保留を訴えた。

その要望に対し日本神話はリアス・グレモリー捜索に関わる協力を最低限とする事を

条件に受諾。

その中でもたらされた墮天使の目撃情報により悪魔陣営は墮天使を再警戒することになり、アザゼルが水面下で進めていた和平は再び遠退くのであった。

~~~~~

「しかしまあ、よくもこう上手く行くもんだ」

ギコギコと鋸を引きながらそうごちる。

「どうしたら人間が不審を抱くか、そういうものは腐るほど見てきたからな。

悪魔だろうと揺するのは容易いことだ」

と、そう言ったのはスカジャンにデニムの一見ちよい悪オヤジ風ないい年の男性。

その正体はのっぴきならなかったあの状況から俺を隠し、殺害現場を隠匿した上で墮天使と貴族悪魔の死体ごと俺を安全な場所まで運んだ張本人であり、そして真正銘天津神の一柱である。

それも主神级の。

本来なら崇り神の抑えに忙しいのだが、雨期が近いためこれから始まるデスマーチに備え特別に休みを貰ったらしい。

「それでもタケさん。」

「なんで俺を助けたんですか？」

確かにグレモリーを殺すのは依頼だったが、だからといってアフターケアをしていらるるほど日本神話は暇ではないはず。

ちなみにタケさんの本名を口にするのと風に関わる神威が起きるため本名は出せない。

タケさんはあまり謙られるのを好まない神なので礼儀をなくさない程度に砕いた口調を意識している。

そう尋ねるとタケさんは当たり前だと腕を組む。

「お前は価千金の仕事をした。」

「ならば帰りの足を用意するぐらいの録を払うのが雇い主の筋だ」

「だからってサギリに全部隠させるのはやりすぎじゃ……」

「他にあの状況に適した、それでいて手が空いていた神があいつしか居なかったから仕方ない」

「がははと笑うタケさんだが、今更ながら相当滅茶苦茶やらかしてるよな。」

「いやまあ、タケさんは日本神話のやんちゃの代表みたいな神様だけどさ。」

「それにうーちゃんもお前を気に入っているからな。」

「助ける利があつてしかも娘が気に入った男だ。」

悪魔が絡む間はそうそう見殺しにはしねえよ」

うーちゃんとはタケさんの実の娘の一人でこれまた日本神話の中でも馴染み深い神様だ。

彼女もやはり実名呼びは避けるためにかのような可愛い呼び名が付けられている。

本人は呼び方が童みたいただと納得しきれていないけど。

俺は全く心当たりは無いのだが、なんでかうーちゃんは俺のことを気に入っている。

まあ、無邪気な親愛に唾を吐くほど腐ったつもりはないし、俺もたまに菓子とか奉じる程度だが小まめに謝辞を返している。

最近はお供えてもらえない半生系のスイーツをあげると無邪気に喜んでくれる。

「それはまあいいんだけど、あんまり近付き過ぎると穢れが移りますよ?」

そう、血と油でベツタリと汚れた鋸を血が飛ばない程度に軽く揺する。

何を切ってるか? 聞くと正気が削れるもんどだけ言っておく。

「上にかかるときに禊やりや問題ねえよ。

今時はそうそう禊でも神は生まれねえし」

「の割りには国津神は」

「ありや九十九神も含むからしようがない」

かなり適当だぞこの台風神。

いやあまりモコンの神とかエロゲの神まで網羅する日本神話の神様にそういった事を気にしてもしょうがないのか？

「真面目な話、お前が魔王の妹を消してくれたお陰で国から悪魔を排斥する計画が前倒しになってこつちは大分やり易くなったからな。」

このまま墮天使と悪魔が潰しあつてくれれば、その隙にミカとムナ辺りでも連れて天界に乗り込んで塵殺ついでに俺の剣を取り返してなんもかんも万々歳つてのが理想的だが、流石にそこまで上手くはいかねえだろうな」

そう顎を擦るタケさんの顔はさつきまでのちよい悪オヤジとはうって変わり、あらゆる理不尽を予想しそれを正面から叩き潰す戦場の戦士の顔だった。

「で、お前はさつきから悪魔の死体を解体して何に使う気だ？」

言つちやつたよこの神様!?

「あー、言つて怒らない？」

「内容次第だろ？」

「さいで」

うん。本当にこの神様やりづらい。

「端的に言えば骨を抜いてるんですよ」

「武器にでもするのか？」

「そうです。」

人間が人外にダメージを与えるのに一番簡単な方法は、天使や悪魔の肉体を武器にすることです。

悪魔の骨を使った弾丸なんかは特に天使が相手なら檜の棒と日本刀ぐらいの差が出ますね」

伊達や酔狂で聖書を滅ぼすと望んでいるわけではない。

こういつた外付けにも色々手を出している。

「成る程。」

確かに理に適うな」

気分を害してもおかしくない話を、しかしタケさんは納得したと頷く。

「怒らないんですか?」

「牛の骨や鹿の角を棍棒がわりに振り回して怒る神はそうはいねえよ。」

お前がやっていることはそれと同じだ」

そう肩を竦めるタケさん。

「まあ、死体に盛つたり生で食うなら流石に物申したけどな」

「流石にやりませんって」

そういう奴に覚えはなくてもないが。

世の常だが、長生きしたいと手段を問わない人種と言うのは少なくない。

今はやっていないが、二百年ぐらい昔には金のために狩った悪魔をそういう目的だとわかっけていて売り払ったこともある。

今は武器にするためにやらなくなったが。

「じゃ、俺はうーちゃんと飯食いに帰るわ。

次も間に合うとは限らねえんだ。

早々新しい身体にならねえよう、精々上手く立ち回れよ」

「分かってます」

そう言うのとタケさんは分霊を解き高天ケ原へと帰っていった。

それを見送りどうするかと考えて、明日も早いものだからもう寝ようと俺は悪魔と墮天使の死体をそのままに上へと向かった。

くくく

翌日、眠気を払いつつ通学路を歩いていたら因縁深い知り合いに会った。

「おやまあ」

「おやおやあ?」

全身から血臭を漂わせる白髪のカソツク姿の男は俺を見るなり愉しそうに笑った。

「見知った顔だと思ったら『アサシン』さんではありませんか?」

人を不快にさせるような喋り調で俺の通り名を口にしたのははぐれエクソシストであるフリード・セルゼン。

「何? 今更学生とかコスプレとかですか?」

「そういうそつちこそ、牧師は合わねえとか言つてなかったか?」

厭らしく煽るフリードに俺もまた同種のにやけ面を張り付ける。

そんな空気が愉快なのかフリードもケタケタと笑う。

「いやいやいや。」

ボクちんつてば神様のお言葉しか勉強させて貰えなかった可哀想なボーイですんで、やっぱりこつちの道に戻ったんですよう」

「そいつは可哀想なこつて」

こいつとはノリ的な意味ではウマが合う。

ただしスタンスが被りすぎて夜に出会えば殺し合う関係だ。

実際幾度も殺し合つてその度に痛み分けて終わつてる。

「そんな可哀想な君を主の所に蹴り込んで殺りましようか?」

「そつちは何れつて事にしときましょ。」

所で自宅、最近墮天使ぶつ殺したりとかしちやったりしてませんか？」

「丁度昨日殺った所だな。」

「いやあ、あんまりにも無防備だからつい殺っちゃったんだ☆」

ノリを会わせてそう言うのとフリードはテンションを下げポリポリ頭を掻いた。

「うわあ。」

色々言い訳考えてたボクちゃんつてばお馬鹿さんみたいじゃん」

「なんだ、お前墮天使の犬になったのかよ？」

「はーい！」

ボクちゃんお金が欲しいです！

なのでお仕事欲しくてつい墮天使に雇われちゃった」

野郎のテヘペロとか見る側には普通に罰ゲームなんだけど？

何これ？ 今すぐ殺していいの？

「それで、可哀想な小鳩ちゃんやんが居たからつい可愛がっちゃったんだけど、やり過ぎちゃったからどうしようかって地味に焦ってたんですよ。

でもま、死んじゃったってならそんな必要もないよね。

と言うわけで、ボクちゃん雲隠れしちやいます」

高いテンションのまま言うだけ言って逃げるフリード。

……しまった。この機にぶち殺しとけばよかった。

しかしフリードとは話してるとかなり楽しいのは本当なんだよな。

ああいう馬鹿やって楽しく生きようとする振りをしてる辺りもシンパシーを感じるし。

そんな感じで知り合いと短い再会の後、学園に着くと校内はリアス・グレモリーの病氣療養の噂で持ちきりになっていた。

その噂に対し心配する声がそこかしこで耳に入ってくる。

それと同じく兵藤の訃報も広まっていたが、普段の素行が素行だっただけに平和が訪れたと絶賛する声さえある始末。

「ま、自業自得だな」

特に何を思うでもなく、俺は退屈な授業が始まるまでの時間を潰し始めた。

なんでこっから仲良くできると思えるのか理解できねえ

「駒王町にある魔教会を訪れた墮天使の総督アザゼルは平伏する三人の墮天使を怒りと呆れの混じった目で睨んでいた。」

「で、お前らを唆したレイナーレはどうしたんだ？」

「それが……」

「さっさと答え」

「はい!？」

「恫喝されカラワナーナは吃りながらも神器所持者の抹殺に出たきり帰ってきていないと報告した。」

「……どうなつてやがる」

「その答えに苛立たしげに頭を掻くアザゼル。」

「そもにしてアザゼルは随分前から神器所持者の抹殺から身柄の保護へと方針を転換していた。」

「しかしレイナーレはその指示を知らず、あまつさえよりにもよって魔王の妹が管理する土地へと入り込んだ。」

(俺以外の誰かが勝手に指示を出したのか?)

思い当たる奴は何人かいる。

アザゼルの方針転換を面白く思わない者。

神器の解析に人道的配慮を導入したことに不満を抱く者。

そして事実上休戦状態である現状に怒りを抱く者。

『神の子を見張る者』はアザゼルがワントップの一枚岩ではあるが、しかしアザゼルの方針に全ての墮天使が賛同しているわけではない。

そういつた組織に不満がある誰かが裏で糸を引いている可能性をアザゼルは感じていた。

もしくは既にテロリストへと降っているか……。

「あ、あの、あたし達は……」

「……とりあえず本拠地で詳しい話を聞かせろ。」

それ次第で酌量を考えてやる」

この場で消されるのではと怯えるミッテルトにそう言うときアザゼルは連れてきた上級墮天使に後を任せ、レイナーレが確保したという神器保有者の様子を確認しに向かう。

「(イ)か」

まあ死にはしていないだろうと特に何も考えず扉を開けたアザゼルは、視界に広がる光景に即座に後悔を覚えた。

換気がされていない部屋の中は凄まじいまでに雄の臭いが立ち込め、その発生源であるベッドには両手を鎖で縛られた少女が全裸で縛られていた。

鼻が曲がりそうな悪臭の中、少女に近付いたアザゼルは改めてその少女が『手遅れ』であると理解して溜め息を吐いた。

「酷え真似をしやがる」

全身を雄の体液で汚された少女の瞳は濁りきり、生命活動を続けるだけの肉塊と何らかわりないまでに壊されていた。

これでは稀少な『聖母の微笑み』も二度と使うことは出来ないだろう。

「取り敢えず回収だけはしておくか」

万が一回復すれば良し。

意識が回復しなくとも所持者を生かしたまま神器を抜き取る技術の披検体として使えばいい。

それだけの価値が少女に宿った『聖母の微笑み』にはある。

「厄介な真似をしてくれる……」

もう此処には用はないと踵返し部屋を出ていくアザゼル。

そして今後指示なく駒王町への侵入を行った者は問答無用で裏切り者として処罰することを改めて強く言明。

それから一月後、とある幹部が現状を打破するため駒王町へと侵入を果たし本格的な活動を始めた。

~~~~~

いきなりだが、また生徒会室へと呼び出された。

「さて、今度はどう出てくるかな？」

万が一に備え対悪魔用の弾丸を装填したトカレフ他いくつか対策は仕込んであるが、予備のマガジンまでは用意していないし総掛かりで来られたら揺り潰されて終わりだな。

タケさんの警告の矢先にと来るだろう来世での説教に背筋を寒くしながら生徒会室に入ると、のっけから首に剣が添えられた。

「え〜と、これはなんの冗談かな？」

白々しく惚けながら両手を上げて相手を確認すると、そいつは木場とかいう悪魔であつた。

「止めなさい木場さん」

「ですがソーナさん!!」

「確かに彼は最も怪しい容疑者ですが、証拠もなしに斬ることは許しません」

人を無視して好き勝手言ってくるな。

それはそうと流石日本神話。

情報管理は徹底しているぜ。

「あのさ、さつきから訳分かんないんだけど？」

「すみません舞沢君。」

ですがもう少しだけそのまま質問に答えてください」

そう言う貴族悪魔にざっと室内を確かめれば、中々どうして俺を逃がさない布陣がか

なりの精度で敷かれている。

が、逆に今俺の首に剣を突きつける木場とその後ろで露骨に敵意を向けている凸凹二

人組が布陣の完成度を崩している。

一目で解るほどの温度差から、おそらくこの三人は昨日殺ったグレモリーの、他はシ

トリーの配下なのだろう。

「正直首が冷たいんでさつきと終わらせてくれるか？」

「貴様……」

ぎしりと歯を鳴らす木場にシトリーが怒声を放つ。

「これ以上続けるなら追い出しますよ!!」

「っ……」

「舞沢君もです。」

不愉快なのは分かりますが、ですが彼等は余裕がありませんので余り煽らないでくだ

さい」

「へいへい」

敢えて余裕を見せながら俺はシトリーの問いに答える態度を示す。

「で、なんで俺はこんな目に遇わされてんだ?」

「単刀直入に聞きます。」

舞沢君、貴方は日本神話の指示で駒王学園に入り込んだのですね?」

「違う。」

俺に依頼したのは日本神話を崇める神道勢力だ」

この情況を乗り切るためには下手な嘘は控えるべきと俺は正しく訂正する。

そう言うのと、凸凹の奇乳と呼ぶべきほどでかいものをぶら下げた方が苦虫を噛み潰し

たように顔を歪める。

「では、彼らの依頼は?」

「悪魔の殲滅」

刹那、首筋から痛みが発せられる。

どうやら斬ろうとして辛うじて留まったみたいだ。

「ではもう一つ。」

貴方はリアス・グレモリーを討伐しましたか？」

「いや」

「嘘は通じません。」

私はシトリー家の悪魔。

真実を暴く力があります」

原典のお前シトリーならな。

内心嗤いながら俺は確信をもって嘘を突き通す。

「俺はリアス・グレモリーに手を出しちやいない」

「……………解りました」

そう言うときシトリーは木場に剣を下ろすよう言う。

「……………分かりました」

シトリーの命に洩々剣を下げる木場。

直後、俺は適当に手加減して木場をぶん殴った。

「がっ!?!」

完全な不意打ちに木場の体が吹っ飛ぶのを何故と固まる中、俺はハンカチで止血をしながら吐き捨てる。

「首こいつの怪我はこれで勘弁してやる」

「木場先輩!?!」

「木場くん!?!」

テーブルを巻き込み倒れた木場に駆け寄る凸凹二人を無視して俺は問う。

「まだやるか?」

「上等じゃねえか!?!」

こっから先は命の取り合いだとプレッシャーを掛けてやると生徒会からいかにもヤンキー染みた男が吠える。

「匙!?!」

「しかし会長!?!」

「今のは木場君が悪かった。

それで今は納めなさい!?!」

「っ、……解りました」

恫喝に近いシトリーの声に匙は悔しそうに引き下がる。

「で、今から俺をぶち殺すか？」

狙って挑発に聞こえるようそう聞いてみれば、意外とシトリーは冷徹に答えた。

「いえ、冥界陣営は日本神話との敵対を望んではいません。

ですので貴方が私達に直接刃を向けるまで貴方の身の保証を約束します」

「だから、はぐれ狩りに協力しろと？」

「駄目でしょうか？」

条件はそれほど悪くない。

が、それを受ける利点はたいして無い。

いや、一つ思い付いた。

「条件が二つ」

「調子に乗ってんじゃねえぞ temeエ!」

「匙!!」

そのやり取りが囁みつくチワワと飼い主みたいで地味に笑えたが、下手に馬鹿にして今の空気を台無しにしても意味がないと俺は堪えながら条件を口にする。

「一つは弱え奴と足並み揃えても邪魔なだけだ。

誰でもいい。

足並み揃えてもいいと思わせるだけの實力があると証明しろ」

「だったら見せてやんよ!!」

そう言った直後、匙が俺に殴り掛かってきた。

「止めなさい匙!？」

転生悪魔の力でも人間を簡単に」

パァン!

シトリーが制止を呼び掛ける声が終わる前に匙の放った拳は片手で弾かれた。

「な!？」

驚く匙。

「温いぞ」

そのまま丹田を回し震脚から崩拳に繋げ、匙の水月に撃ち込む。

「いぶお!？」

中々良い悲鳴を上げて匙の身体が吹っ飛び、その背後にいた木場を巻き込んで派手に纏れて倒れた。

「全然駄目だな。

さっきの話は無しだ。

お互い勝手にやったほうが早え」

ストライイクなんて内心笑いながらそう言い捨て、シトリーが何か言うのも無視し俺

は生徒会室を脱した。

たまにはこういうのもあるか。

『ソレ』に気付いた瞬間、私は信じられないと思いました。

「温いぞ」

匙先輩の腕をあつさり払い除けた舞沢さんの全身から膨大な氣が溢れ、そして洗練された動きは一切の無駄はなく人の身でありながら転生悪魔の匙先輩を殴り返してしまいました。

「大丈夫、匙!？」

「ゴフツ、かはっ!？」

鳩尾を打ち抜かれた匙先輩は上手く呼吸が出来ずに必死に喘いでいます。

間違いありません。

あれは『仙術』です。

匙先輩が氣を流し込まれ経絡が機能不全を起こしているのが証拠です。

それも姉が暴走したのと違い、完璧に制御されています。

「なんて奴だ…」

「やっぱり日本神話なんて信用してはいけなかったのよ!？」

制止を無視して生徒会室を出ていく舞沢さんを周りが非難していますが、私は彼の仙術に惹かれ、気が付けば彼を追っていました。

「小猫ちゃん!？」

無我夢中で追い掛け、追い付いたのは校門の前でした。

「待ってください!!」

私の声に舞沢さんは嫌そうにしながらも足を止めてくれました。

「なんだよ？」

「まだやるってか？」

「違います」

「あん?」

必死で走ったせいで激しくなった動悸を抑えようと胸を掴みながら私は心の底からの願いを叫びました。

「私に、仙術子種を教をえて下てください!!」

「……………はあ?」

猫?としての本能が勝手に口を滑らせました。

しかも下校時刻で沢山生徒が居ます。

……………明日からどんな顔で登校したらいいでしょうか?

~~~~~

「一応確認するが、さっきのは間違いでいいんだな？」

「はい。」

「あれは間違いですので忘れてください」

学園中に響いたとんでも発言のお陰で小悪魔を連れての近くの公園まで戦略的撤退を余儀なくされた俺はどうしてそうなったのかを問いただし頭を抱えた。

暫く学園には近付きたくなかったんで休もうとしたんだが、生憎とクライアントは通えの一点張りで取り付く島も無かった。

マジで今からシトリ―塵殺してズラかつちまおうかな…。

「お願いします。」

私に出来ることならなんでもするので仙術を私に教えてください」

「そう頭を下げる悪魔。」

「嫌だね」

「…どうしてもですか？」

上目遣いで保護欲を掻き立てようとしたって無駄だ。

「なんで悪魔を強くしてやんなきゃなんねえんだよ？」

「それは、」

「はつきり言うぞ。」

俺は悪魔が嫌いだ。

序でに言うなら天使も墮天使も神も人間だって大っ嫌いだ」

そう言い切れば小悪魔は悲しそうに俺を見る。

「どうしてですか？」

「皆嘘吐きだからだ」

「嘘吐き？」

「……」

なんでこんな話を悪魔に聞かせているのかと話を打ちきけることにする。

「悪魔に教える義理はねえ」

「……」

そうして沈黙が落ちる。

重苦しい空気が煩わしいと思いつつも自分から離れるのはなんか嫌だと思いつつも悪魔が消えるのを黙って待つ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

五分が過ぎ、十分が過ぎ、一時間を越え夕闇が濃くなりだした所で俺はこんなに必死になって我慢比べをしているのか馬鹿らしくなり、そしてとても悪辣な事を考えるようになっていた。

「おい悪魔」

「……搭じ……白音です」

なんで言い直したか少し気になったが、どうでもいいと切り捨て俺は悪魔の誘惑を口にする。

悪魔相手に悪魔の誘惑するのは洒落が効いているだろう。

「さっき言ったな？」

出来ることならなんでもするって」

「はい」

「だったら条件として悪魔の秘密を知ってもらおう。」

ただし、それを知ったらお前は冥界には居られない。

それだけ聖書の悪魔達にとつてこの話は劇薬だからだ」

それを聞いたら俺のもつてるもんをなんでもくれてやると言った。

予想通り小悪魔……白音は懷疑と忌避の感情を見せた。

「どうして貴方がそんな話を……？」

「そもそも含めて教えてやるよ。

で、どうする？」

安寧を棄ててはぐれ悪魔になつても力に手を伸ばすか。

耳と目を塞ぎ今の安寧に沈むか。

「選ぶのはテメエだ。

好きにしな」

「……………」

そう言うと白音は俯いた。

そうして再び沈黙が訪れるが、今度はすぐに終わった。

「教えてください。」

仙術を、そして貴方の事を」

「……」

答えを聞き、俺は白音に背を向ける。

「始める前に一つ課題を出す。

そいつの答えを得たら放課後ここに来い」

答えを待たず俺は課題を口にする。

『バアル神』『ソロモンの壺』『悪魔バアル』。

この三つの真実を見付けてみる。

それが出来たら始めてやる」

そう言い残し俺は今夜の悪魔狩りに向かった。

そうして悪魔狩りに出たわけだが、シトリーは真面目らしく使い魔を大量に配置しはぐれ悪魔を片端から狩っていた。

「無茶しないで匙!!」

「あの糞野郎にいいように言われたまままでいられねえんだよ!!」

適当に悪魔の気配を探ってブラついていると昼にぶっ飛ばしてやった悪魔がなんか叫んでいた。

「力だ!! もつと力を寄越せ『黒い龍脈』!!」

奴の神器らしい蜥蜴に怒鳴ってるが、そんな姿を俺は特に何も感じることもなくその場を後にした。

「しっかし、なんなんだろうな？」

白音に欲情しているわけでも微塵もないし、殺せるかと聞かれれば何の感情もなく首をへし折ってやれる自信はある。

にも関わらず、俺は破滅してでも力を欲するかと問いを投げた。

まあ、たまに起きる気まぐれなんだろう。

「帰るか」

グレモリーの『加工』も終わってねえし仕事がないならそれでいいやと俺は工房に足を向けた。

くくく

翌日、予想通り俺が白音を手込めにしたロリコン野郎という不愉快三倍増しとなった風評被害でストレスを溜めに溜めながら依頼だからと我慢して迎えた放課後。

流石に一日で答えは出ないだろうと思いつながら時間を潰していると、意外なことに白音は公園に現れた。

「答えは出たみたいだな」

その目は忙しなく泳ぎ、周囲を警戒しきつた姿を見れば聞くまでもない話だ。

「三千年前、イスラエルの王ソロモンは72柱の魔神を従えました」  
声を震わせながらすがる目付きで喋り出す白音。

「ソロモン王はある日、彼等に真鍮の壺に入るよう命じ、その壺を湖へと捨てました」  
語る。

知ってはならない真実の一片を。

「壺に宝が隠されているとイスラエルの民はその壺を引き上げ封を開けてしまい、彼等は自由になり故郷へと引き上げます」

そこまで語った白音に俺は決定的なため押しをする。

「ソロモンが使役したと言われている魔神の正体は他宗教の神々だ。

だから彼等の故郷とは、其々が信仰されていた国。

だけど冥界には同じ名前の悪魔がいる。

そして奴等は神であったことを知らない。

此れが意味する答えは？」

恐怖からか顔を真っ青にしながらも、後に下がる道を自分から放棄した白音は悪魔の秘密を口にした。

「冥界の悪魔は『聖書の神』によって生み出された紛い物です」

その答えに俺は悪どくなっているだろうと思いつつも笑った。

「正解だ」

## 趣味が合わなきや役得とは言わねえ

昔話をしてやるよ。

今から三千年ぐらい前のエルサレムの話だ。

当時のエルサレムは多くの神の顔が並んだ、宗教の自由が許された国だった。

それを容認したのがソロモン王だ。

当時はまだ神の擁護も無く人が生きていくには厳しい時代だった。

ソロモン王は聡明にして賢明だった。

信仰を強要しても神と神、なにより人同士で軋轢が生じるだけだと分かっていたソロモン王は民に信仰の自由を与え、代わりに勧誘に制限を設けることで神と人の軋轢を最小限に抑えて見せた。

だからこそ神々はソロモン王を認め、宗教の垣根を越えて協力することさえあった。

だが、そんな理想都市も長くは続かなかった。

当時の聖書勢力は新興の弱小勢力に過ぎず、ソロモン王が信仰しているとはいえ一神教という性質から横への繋がりも薄く、神の中でもその立場はかなり低かった。

それに不満を抱いたのが天使達だ。

天使達は自分の主がその位を高めるにはどうするべきかと考えた。そして、至ったのだ。

「私達を高めるのではなく、他の神を貶めればいい」と。

後は転がり落ちるだけだった。

天使達はソロモン王に命じた。

神の代命と嘯き、『他の神を貶めよ』と。

断るならば、信仰の証としてシバの女王を主へと捧げよとさえ言った。

ソロモン王は苦しんだ。

この国を支える数多の神を裏切るか、それとも心から愛した女を失うかの板挟みに曝され、狂う寸前まで追い詰められた。

その果てに……ソロモンは愛を選んだ。

神々を欺き壺へと封印して壺を湖へと捨てた。

この時ソロモン王は考えていた。

封はすぐに解かれるだろう。

それまで天使を抑えていれば被害はやり直せる程度で済むと。

それがどれだけ甘い算段か、いや、天使が主のためならばあらゆる悪逆さえ正しいこ

とだと信じている存在だったと知らなかった事がソロモン王の最大の過ちだった。

ソロモン王が神々を封印した直後、天使は主が生み出したアダムのあばら骨から作ったりリスを使い、封印した神と同じ名を持つ『悪魔』を生み出した。

悪魔はそれぞれ与えられた神の存在を騙り暴れ尽くした。

神殿を破壊し、民を殺し、信仰を奪い尽くした。

封印された神々が解放された時には、かつてのエルサレムはもう何処にも無かった。

信仰を奪われ信徒を殺された神々は迫る消滅の末路を怒り、残る力を振り絞り聖書の神を、仕える天使を、紛い物を、エルサレムを、ソロモン王を呪った。

後は歴史が語る通りだ。

エルサレムは複数の宗教勢力が己の物だと争う地獄となり、信仰を喪った神は消えて同じ名を持つ悪魔だけが残った。

他の呪いはどうなったか？

天使は色欲を知って墮ちるようになり、悪魔は欲望を知って手綱を振り切り更なる暴虐を始め、聖書の神は慈愛と傲慢の境界を喪い傲り昂り、そしてソロモン王は……愛を喪った。

「これが真実だ」

そう言い終えると白音は悼ましそうに顔を歪めていた。

「どうして、貴方はそれを知っているのですか？」

「なんだ、信じるのか？」

「……そんな辛そうな顔で嘘を言うとは思えません」

「……」

忘れられないってのは、つくづく厄介だな。

「俺は前世を忘れられないんだよ」

「……」

「何度も生まれ変わった。

いいことも悪いことも数えるのが面倒なほどあった。

俺は、それを全部忘れられないんだよ」

「それは……何年もなんですか？」

「最初の記憶はメソポタミアだって言ったら信じるか？」

「信じます」

茶化してみたが、白音は即答しやがった。

厄介な空気になってきたのを察した俺は本題に入ることにした。

「とにかく約束は約束だ。

立川流でもカーマ・スートラでも望むだけ教えてやるよ」

「私が知りたいのは仙術です」

空気を混ぜ返すため下ネタに走ったのだが、どうやら通じなかつたらしく素で返してきやがった。

「へいへい。」

んじゃまあ、コースを決めるか」

「コース？」

「ああ。」

大まかに三日、一月、百年の三種類だな」

「なんでそんなに極端なんですか」

へえ、中々キレのある返しをするじゃねえか。

「内容が極端だからな。」

それぞれのリスクだが、三日は死ぬ確率が高くて一月は一生ものの怪我をする確率が高くて百年はとにかくめんどくさい。

因みに期限の理由は芽が無けりゃあそれ以上やっても無駄だからだ。

お勧めは一月だな」

「中身をもっと詳しく教えてください」

「つたく、我が儘な」

取り敢えず空気は入れ換えられたか。

「見つけたぞ!!」

改めて説明しようとした矢先にそれを遮る声が入った。

聞き覚えのある声に俺は素で驚いた。

「うーちゃん!?!」

そちらを見れば子狐を連れた小麦色のワンピースの中学生程の少女がいた。

「おんし、散々妾が喚んでおるのになぜ応えぬのじゃ!?!」

「え?」

そううーちゃんが言うも心当たりはない。

「いや、鳥は来てねえんだが?」

「携帯のほうじゃ!!」

「え?」

あー……」

そう言われて漸く合点が言った。

「悪いうーちゃん。

昨日充電し忘れて家に置きっぱなしにしてたわ」

今日白音は来ないだろうとたかを括ってたからすぐに戻るつもりで置いてきたのだ。

「……まったくお主は妙なところで抜けておるの」

事情を納得してくれたようであーちゃんが深く溜め息を吐いた。

「詫びにクレープ奢るから許してくれよ。な？」

「チョコとイチゴとパイナップルで許してやろう」

「ありがたやありがたや」

そんなもので許してくれる辺り本当にうーちゃんはお優しいことだ。

タケさんなら大吟醸十本からだからなあ…

「あの、」

うーちゃんの登場ですっかりおいてけぼりを食らった白音が恐る恐る声を発した。

「もしかして、日本神話の神ですか？」

「そうじゃー！」

俺の態度から察したのだろう確認を取る白音。

俺が説明するより先にうーちゃんがふんすと胸を張る。

「今こそはこのような童の姿じゃが、妾はまごうことなき天津神の一柱じゃ。」

故あって真名は未だ明かせぬ故、うーちゃんと呼ぶがよい」

「……あの」

助けを求める視線に俺は色々どうでもよくなり素直に助け船を出してやることにし

た。

「細かいことは気にせず言われた通りに呼べばいい。

敬意さえしつかり抱いていれば多少崩してもうーちゃんはそう怒る神じゃねえ」

悔れば父親のタケさんが許しちやおかねえからな。

タケさんは特にうーちゃんを大事に思ってるから、うーちゃん泣かせた日にやあ嵐で犯人もろとも周辺が更地になるだろうな…。

「分かりましたうーちゃん様」

「様はいらんぞ」

「うーちゃん」

「うむ」

納得したと應揚に頷くうーちゃん。

「で、態々こつちに来るなんて何かあったのか？」

崇神の件で忙しいだろうにと尋ねるとうーちゃんは真剣な目で俺に言った。

「事代主が主宛に神託を下したのじゃ」

「…拝聴します」

どうやら本気で聞かなきゃまずいらしく俺は膝を突いて聞く体勢を取る。

「『藤の花が散る迄に猫？を仙猫へと育て上げよ。』

怠れば汝が悲願叶わぬぞ』とのことじゃ」

「…承知しました」

どうやらまた厄介なことになったな。

期限も殆ど無いのに当ては無し。

相変わらずハードなことって。

「それとお主もじゃ猫よ」

「私もですか？」

「うむ。」

『家族の想いを知れ』だそうじゃ」

「……」

その言葉に白音は混ざりすぎて変な顔をしてやがる。

大方、家族関係に思い違いから来る歪みでも抱えてんだらう。

「用も済んだし妾は帰るぞえ」

「クレープはいいのか？」

「主も妾も今は忙しい故、後日改めて馳走になろう」

そう言うとうーちゃんはお供を連れて帰っていった。

残された俺達はどうしたら良いかと考え、取り敢えず目先から考えるために言った。

「白音。」

悪いが予定が変わった。

速攻で仕上げるために三日コースを受けてもらおうぞ」

「……何をするんですか？」

うーちゃんの話が頭から離れないらしく話し半分になってるが時間がないのはこっちも同じだ。

「sex」

「……え？」

「立川流をベースにまぐわいを通して太極を体感させて経を啓く。」

腹上死したくなきや死ぬ気で目覚めろ」

逃げようとする白音の経絡に氣を流し込みスタンガンの要領で拘束するとそのまま担ぎ上げる。

「待ってください!!」

私その、初めてなんです!？」

「安心しろ。」

俺も今回は初めてだが経験自体は豊富だ。

処女でも涅槃に届かせる業はいくらでも知っている」

「そうじゃなくてエッチなのは好きな人とするべきです!？」

「友愛で sex するのはソドムの常識だ」

「それ駄目なやつですよ!？」

「聖書の倫理観ならな」

喚く白音を柳に風と受け流し、俺はそういうのに使えるセーフハウスへと向かう。

そして三日後。

「……責任取ってください。」

嫌だと言っても、来世に逃げてでも必ず捕まえて責任取らせませす」

三日三晩やり続けて仙道の基礎に到達した白音は色々目覚めた状態で俺にそう言った。

うぜえ……もうそれしか言えねえ

三日の荒行の後、翌日が日曜だったからついだとばかりに更に基礎の基礎の最低限を叩き込むのに使い、次の週になってから俺は登校した。

なんでか白音と同伴しながら。

「おい、あれ……」

「嘘だろ……?」

「なんで転校生が塔城と一緒に登校してるんだ!？」

予想通り開幕からこれだ。

「おい、離れろよ」

「嫌です」

人の腕にべったりくっつく白音にそう言うも匂い付けでもするように腕に擦りつく

白音。

「あの野郎、小猫ちゃんに羨ましい……」

広域範囲知覚をするでもなく妬みと嫉妬の感情が俺に向けて犇めいている。

いっそ、爆破テロでも起こして廃校に追い込んで……つて訳にもいかねえか。

「小猫ちゃんから離れて!!」

ますますやる気を無くしていた所で案の定グレモリーの下僕共が嘯みついてきた。

「よく見て物を言え。」

こいつが引つ付いて離れねえんだよ」

「よくも小猫ちゃんを拐ってくれたね」

「人の話聞けよ」

視野狭窄通り越して異星人にでも転向したのかって聞きたくなる勢いで木場が殺気混じりに木刀を向ける。

誘拐云々は否定出来ないがな。

「こいつに何をされたのかは聞かないわ。」

「だけど日本神話の手先となんか一緒にいても不幸になるだけなのよ!!」

「朱乃先輩……」

見ている笑えるぐらい必死にそう喚く奇乳悪魔に白音が俯く。

……なんなんだろうなこの茶番？

「めんどくせえ」

「あつ」

付き合つてられなくなり白音を振りほどくと俺は懐から紅い棒が幾つも繫げられた多節棍を抜く。

そのままギミックを起動し連結して全長二メートルほどの一本の棍へと姿を変えさせる。

「気に入らねえんだろ？」

「だつたらこいつでケリ付けてやるよ」

腰を落とし相手から半身の体勢でそう嘯いてやる。

「驚いたな。」

「拳だけだと思つてたよ」

「なんでもやるだけだ。」

俺は、弱つちい人間だからな」

呼吸を一つ。

丹田を回し氣を集約。

棍の『本性』は見せずただの棒として偽る。

空氣が張詰め、木場も遊びではないと木刀を構える。

突如始まった決闘に周囲までもが固唾を飲んでその結末を期待する。

まあ、流石にこのままとはいかせないよな？

「そこまでです!!」

これだけ大事になりやあ生徒会が動かねえ筈もなく、割って入るシトリーの姿に俺は狙い通りと棍を解体し構えを解く。

「一体どういう事ですか?」

「向こうが突っ掛かってきたから対応したまでだ」

「……本当ですか塔城さん?」

周りを見て、現状最も中立であったらうと当たりを付けたシトリーの問いに白音はまつすぐはいと頷く。

「小猫ちゃんどうして……?」

向こうからしたら裏切られた気分なのだろうが俺はどうでもいいと校舎に向かう。

「ちゃんと手綱は握つといてくれよ?」

「……」

嫌みつたらしくわざとそう言い捨て教室へと向かう。

今朝の騒ぎが既に伝わっているらしく、絵に描いたような針の筵に逆に愉快とさえ思いつながら適当に授業を聞き流していく。

「舞沢さん」

昼になってたまには購買にでも顔を出すかと席を立ったところで白音が教室に来た。

「お昼を一緒にいいですか？」

ざわりと教室が五月蠅くなるのが煩わしく思い俺は拒否した。

「屋上で寝るからパス」

それだけ言うとは脇をすり抜け屋上にと見せかけ人氣の無い校舎裏に逃げる。

「なんでこんなめんどくせえ事しなきゃなんねえんだ？」

上からも言われたし修行だからと丁寧に蕩げさせ過ぎたせいか、白音の奴はべつたりくつついてうざつたいし、そのせいで悪魔共は更にめんどくせえ事になってやがる。

もういつそ、白音も含めて殺しちまうか？

別に白音が件の妖猫とは限らねえんだし、今からでも他の妖猫を探してみるのも手だな。

「まあ、それはそれとしてだ。

覗きは楽しいが覗かれるのは趣味じゃねえんだよ」

軽身功で壁を蹴り高く跳躍。

同時に多節棍を抜いてチャクラを3つ回し氣の索敵の精度を高める。

「そこか!!」

捉えた微かな氣配に向けて多節棍を振り抜くが、相手は壁を蹴って棍を回避。

そして更に何も無い空間を足場に三角飛びの要領で死角に入ると鞭のようにしなる、

体勢からおそらく蹴りを放つ。

「ちいつ!？」

回避は間に合わないと言わなかった身体を蹴りに合わせて反らし可能な限り合気でダメージを無くす。

ミシリツ

「ぎっ!？」

糞が!？」

トラツクに跳ねられても無傷でやり過ぎしてやった技の上から骨まで届くなんてどんな馬鹿ぢか……違う。

「太極……いや、白音が言ってた闘気だな？」

妖怪上がりの邪仙でも使わねえような大周天のなりそこない。

周りから無尽蔵に氣をかき集めて振り回すだけの二ト口のような拙い業。

屋上まで下がりそう考察をすると、仕掛けてきた相手も昇ってきた。

「正解にゃん」

聞いていたらしく襲撃者、黒い着物を無駄にエロく着崩した女は両手を猫の手にしてポーズを取る。

「いきなりのご挨拶だな？」

「何もんだ？」

「正直買ってる恨みはダース単位であるので理由が思い当たりすぎる。  
「つれないにやあ。」

「せつかくこんな美人が可愛くしてるんだから少しは付き合つてにや」  
「キャラ作りうぜえ。」

「が、待てよ？」

「よく見りや白音にどことなく似てるか？」

「それに頭に付いてる猫の耳も修行中（○）に白音から出たのとそっくりだ。  
「だとしたら……ああ、そういう。」

「はあ、めんどくせえ」

「構えを解いて天を仰ぐ。」

「うーちゃん、いや、今回は事代主神か？」

「なんか俺、怒らせるようなことしたかよ？」

「急にどうしたんにや？」

「お前、塔城小猫の身内だろ？」

「にやっ!？」

「さっきまでの剣呑さがどこに言ったんだと言いたくなるぐらい露骨に狼狽える猫。」

「そそそそそんなにやこにやいにや」

「キヤラ作り止めるかせめて日本語で喋れ」

レパトリリーならセム語からイス人のまで網羅してるから理解できるならなんでもいいけどよ。

「と、とにかく私と白音はにやんの関係も…」

「なんで塔城小猫の本名知ってんだ？」

「にやあ!!」

わざと通しの名を口にしたのにあっさりボロを出す女。

こいつ、本気でテンパると一気にダメになるタイプか？

いや、あんな状態でもいつでも逃げられるよう身体はなってるから相当修羅場慣れしてんな。

となると下手に仕掛けるより口で引っ掻けたほうがやり易いな。

「で、三日三晩かけてやり倒した白音の姉ちゃんが何の用だよ？」

「ああ？」

うわ、一気に沸騰しやがったよ。

一周回ってなんか面白くなってきたな？

「あんだよ？」

別に白音が誰とやろうが本人の勝手だろ」

「あんた、死にたいみたいね？」

「お前と白音は赤の他人なんだろう？」

「だつたらますますお門違いだろうが？」

「私はお姉ちゃんとして白音を幸せにする義務があるね!!」

吐いたな？

「く、くはははははは、あひやひやひやひやひや!?!」

「何が可笑しい!?!」

作つてたキャラを投げ捨てて激怒する女に心底くだらねえと馬鹿笑ひする。

「幸せだつて?」

あいつがテメエに捨てられてどんな生活してたか知つてて言つてると思うと可笑し

くてしかたねえよ!!」

「ぎゅう…」

思い当たるらしく歯を軋ませて唸る女。

ああ、こんな馬鹿みてえなすれ違いなんかもう見飽きてんだよ。

「なんなら未来を言い当ててやろうか？」

テメエの事だ。

なんかの機会を見計らって白音にだけ解る印かなんかで誘き出して連れ去る気なん  
だろ?」

「っ!?!」

露骨に目を見張る女にますます笑いが込み上げる。

「その後なんかよくある話だ。

姉の説得虚しく憎悪にたぎった妹は姉を詰り、そんなもって妹のお友達が割り込んで  
大乱闘。

最後はみんなくたばってさあおしまいってな」

シエイクスピアでも取り上げねえ在り来たりすぎる三文悲劇。

ああ、実にくだらねえなあ。

「笑うな!?!?」

顔を真っ赤にして女が叫ぶ。

「私だって白音を連れていきたくった!?!」

だけど悪魔から逃げるためには置いていくしかなかった!!」

二人で生きていたくて、そうするしかなかった私の苦痛を他人のお前が笑うな!?!?  
感情が荒れ狂って目尻に涙を浮かべながら叫ぶ。!!?!」

叫ぶ女に俺の馬鹿笑いがピタリと止まる。

「笑うに決まってるだろ？」

「殺してやる」

殺気立つ女だが、これが笑わずにいられるか。

「姉様……」

悲劇が一瞬で喜劇に変わる様を、腹を抱えて笑わねえで何が人生だ。

喜劇は喜劇だけどさあ…

「姉様、どうしてここに居るんですか？」

「白音!？」

さあて、クソくだんねえ喜劇を楽しませて……

「どうしてその人の隣に居るんですか？」

あ、あれ？

「白音……?？」

「わたしからだいすきなひとをとっちゃうんですか？」

な、なんか狙った展開と違うんだが……?？」

「落ち着いて白音!？」

私はお姉ちゃんとして交際相手はきちんと選ぶべきと」

「わたしのしあわせ、またとっちゃうの?？」

やべえ。

目からハイライト消えて露骨にやべえ空気纏ってやがる。

って、纏ってんの空気じゃねえ。

修行として普段から練るよう教えた小周天で練った気が漏れ出して可視化してやがんだ!？」

「おねえちゃん」

こてんと首を傾ける様がもうホラーにしか見えねえ。

「おはなししよう?」

「にやああああああああ?!」

プレッシャーに負けて白音の姉が全力で逃げ出す。

おかしいなあ。俺は喜劇になるよう「まいざわさん」……。

「なんだ?」

「ほうかごまつてますね?」

それだけ言うると白音は氣を纏って屋上を蹴って姉を追った。

「……さて、寝るか」

取り合えず考えるのは止めよう。

調子こき過ぎて最終兵器染みた何かを生み出しちまった責任は……ねえよな?

「一体何の騒ぎですか!？」

午後は丸々サボるつもりで寝ようとしたところで生徒会が雪崩れ込んできた。

「舞沢さん!!」

屋上で何があつたんですか!？」

破壊された屋上の惨状に非難が俺に向く。

……どうやら俺は傍観者じゃなくて喜劇の役者に抜擢されてたらしい。

こうなりや自棄だ。

馬鹿躍りを踊りきるしかねえな。

「塔城の姉とかいうのに襲われたんだよ」

「塔城さんの……?」

まさかSS級はぐれ悪魔の黒歌ですか!？」

「テメエらの格付けなんか知らねえよ」

確かに強かったが、あれでSS級って悪魔の規準はどうなつてんだ?

俺が抵抗できる程度だったし日本神話の基準だったらせいぜい上位とかその辺りだぞ?」

「塔城が追っかけてったから心配なら今からでも追えばいい」

転移系の術でも使わねえと無理だろうが。

「貴方は追わないんですか?」

「なんで?」

「……塔城さんは貴方を慕っています。」

心配じゃ無いんですか？」

「別に。」

あつちの目的は俺つつう悪い虫がくつついたから払いに来ただけみたいだし、心配する理由がねえよ」

「しかしそれで塔城さんまではぐれ悪魔になったら」

「お前が困るだけだろ？」

「……校舎の修繕費はそちらに持っていたいただきます」

せめて一つぐらいは勝ちたかったのか、そうシトリーは言うと言上を後にした。

「払ってくれるかねえ？」

俺だったらはぐれ悪魔の侵入を許した管理不手際を突いて逆に叩くけどな。

「ま、どうでもいいか」

漸く静かになったんだからと俺は一時の安らぎを寝ることに使おうとして、携帯が震えている事に気付く。

「今度はなんだ？」

開いてみればうーちゃんからのメールだった。

『放課後前回の公園に猫を連れて来るよう』ね。

承知しましたっつと」

返信を送ると今度こそ俺は寝ることにした。

~~~~~

で、放課後いつもの公園に顔を出してみたんだが……。

「この度は本当に申し訳ありませんでした」

邂逅一番で白音の姉から土下座されたわけだ。

「別に気にしちやいなえよ」

死体蹴りは大好きだが、ハイライトが消えた白音が横に立ってる状態のこいつを蹴っても面白い展開どころかめんどくせえ事になるのが目に見えてるしな。

「私からもすみませんでした。」

姉にはよくいつて聞かせましたので、同じことはもう起こりません」

ね？ と問う白音に土下座したままカタカタ震えて「ハイ」と答える姉。

「取り合えず起きろ。」

もうちよいしたらうーちゃんが来るだろうから」

「うーちゃんがですか？」

漸くハイライトが戻ってきた白音に事情を知らない姉が誰だと首を傾げる。

「待たせたの」

礼儀を欠くとヤバイから説明しようとした矢先に本人が登場した。

「よう」

そしてその後ろにタケさんまで来ちゃってるよ。

「な、な、なな」

なんちゃってとはいえ仙術使いらしく一目で神格を見抜いた姉が、指を出しかけて不敬だと引つ込めた中途半端な体勢でガタガタ震え出す。

「そう怯えるでない猫よ。」

妾達日本神話は主に危害を加える気は無いのじゃから」

そう言うのと姉は一転目を点にする。

「え?」

どういう事だ?

「昨日冥界陣営と談合しての。」

正式に黒歌と白音の二人を日本神話が身請けをすることになったのじゃ」

唐突な話に固まる二人を他所にタケさんがうーちゃんに代わって話を続ける。

「( )最近、各神話勢力に対し無差別テロを繰り返している『禍の団』なる組織がある。

その黒猫がその一派に所属しているのが解ったから利用させてもらうために引

き取ったんだよ」

「っ!？」

タケさんの言葉に姉が固まり白音が姉を見る。

「とと様、そのような言い方では怯えさせてしまうでしょうが」

「む、軽率だった」

うーちゃんの苦言にタケさんが本気で申し訳なさそうに謝る。

ほんと、タケさんはうーちゃんに甘いな。

「言い方が悪かったな。」

ともあれ無差別テロを素直に受けてやるほど日本神話は暇でも鷹揚でもない。

故に、元々両親共に日の本の国に住まう者だった白音、黒歌の二人を日本神話は拉致監禁と無断転生させた冥界陣営から取り返す事にした」

「利用するため、ですか？」

白音を庇いながら膝を震わせ、そう問う姉。

「お前達は被害者だとはいえ、流石に無償でやってやれるほど日本神話も余裕はない。別にこの提案を拒否して大陸に逃げるってならそれでも構わねえぞ？」

その場合は身請けの話は流れて姉妹諸共逃亡者となるがな」

「……………」

タケさんの言葉に姉、黒歌は苦虫を噛む。

「とと様…」

「かか様までが腰を上げた以上もう座していられる状況じゃない。

その意味は解っているだろうーちゃん？」

「ですが…」

タケさんの叱りにうーちゃんが俯く。

そうこうしていると、突如黒歌が伏した。

「その件、謹んでお受けいたします。」

ですが白音は、妹は平穩に過ごさせてください。

であればこの黒歌、如何様な任も命の限り果たして見せます」

「姉様?!」

黒歌の言葉に白音が悲鳴を上げる。

「心配すんな。」

やって貰うと言っても禍の団が日本で活動を始めるまで潜入して適当な具合を見計らって戻ってくればいいだけだ。

その間、妹のほうはこいつに付けておく」

「おい」

なんでそうなる？

「俺を巻き込むなよ」

「仕事の一環だと思え。」

事が始まるまでに仙猫として仕上げるのが俺からの指令だ」

「……へいへい」

仕事つてなら仕方ねえ。

面倒に頭を掻いていると白音がこつちに來て頭を下げた。

「改めてよろしくお願ひします」

「勝手にしろ」

もうどうでもいいや。

なんでうーちゃんや俺達を見て満足そうに笑つてんだか。

ほんと、ワケわからねえ。

「ちよつと」

と、今度は黒歌が突つ掛かってきた。

「白音に変なことしたら許さないんだからね？」

「ね・え・さ・ま？」

黒歌の釘刺しに近付きたくない空気を纏う白音。

「と、とにかく白音の事は任せたわよ!!」

そう吐き捨て黒歌は仙術で飛んで逃げた。

……なんなんだかな。

「まあいいか。」

他になんかあるか？」

「暫くはこのままだ。」

悪魔達が取り零したはぐれ悪魔が出ればそれを狩れ。

禍の団が動き出したらまた連絡する」

「委細承知」

そう言うと二人は帰っていった。

「……帰るか」

踵を返して公園を出れば何故か白音も付いてくる。

「なんだよ？」

「一緒に居させてください」

「……勝手にしろ」

いちいち振り払うのもめんどくせえ。

どうせ付き合いも今生で終わりだ。

目障りになるまでは、好きにさせてやるよ。

# 主人公とオリキヤラのプロフィール

## 【主人公】

本名『不明』

繰り返される生の中で幾度も新しい名前と呼ばれ続けたため、本人はどれが本当の名前なのか分からなくなり裏社会に入る度に捨てたため事実上存在しない。

業界では『アサシン』と呼ばれ、今回は『舞沢章（まいざわあきら）』の偽名を使っている。

好きなもの：動物

理由は打算も懷疑も抱かず接せるから

嫌いなもの：人間、悪魔、神及び眷属、セックス

人間が嫌いな理由は飽きずに戦争を繰り返し不幸の連鎖を止められないから。

悪魔はエルサレムの件とその後の世界の悪徳を拡大させたから。

ただし、メフィストは聖書と関係ない真性の悪魔であり魔術の指南を受ける程度に存在を許容している。

神とその眷属も同上。

人との関わりを基本善性とアニミズムの視点でしか関わらない日本神話は数少ない例外。

セックスは何度となく繰り返された生の中で山のように忘れたい悪夢を経験したから。

### 『一例』

女に転生したら実の父親から5才でレイプされ十年間毎日犯され続けた。

別の生では男であったがサド公に嵌まった貴族に四肢を切り落とされ死ぬまで家畜に犯された。

そんな経緯もありセックスは修行のツールとしてしか致さない。

仮に望まれれば相手に配慮して満足させるよう致すが自分からは求めないし気持ちよくても愉しいとは思わない。

武器：中国武術全般、ヨーガ、仙道、魔術、呪術

長年繰り返し返した生の中で仙道とヨーガを起点とし、それを最も生かせるのが中国武術であったため主要としている。

師は多くいるが、中でも李書文は人類最強だと思っている。

魔術及び呪術系統は千以上を網羅し一通り使用できるが、その筋の専門家には劣る。

他にもヘクトール直伝の投げ槍やレオニダス一世から遅滞防御の極意を教わっている。

転生特典：忘却補正、種族固定『人間』

どちらも本人にとつては呪いでしかない悪夢の元凶。

この二つのためにどれだけ輪廻を繰り返しても何一つ忘れることは出来ず、そして狂いたくても狂わせてくれない。

愛も、夢も、希望も、悲哀も、絶望も、苦痛も、なにもかも忘れることが出来ないため、その内心は転生による別れの辛さとかつて抱いた愛を忘れないから誰かを愛することも出来ず孤独に生き、憎しみを忘れることが叶わぬため燃え続けないと立っていらなくなる恐怖に震える亡者と化している。

この呪いから解放される手段はただ一つ。

人類滅亡だけ。

本人はそれを理解しているが、自分の手で滅亡を加速させる事は望んでいない。隣人を愛することを語ったヨシユアとの約束だから。

【日本神話】

『うーちゃん』

日本の神様で馴染み深さでも最も有名な神の石柱。

本来は成人した女性だが、字と現界による容量削減の割りを食い見た目が中学生程度にまで下がってる。

他の神から甘いと評される程人間が大好きで、お供の狐と共に人の営みを見守るのが喜び。

主人公の救いのない真実を知っており、本当に救いはないのかと心を痛めていたが、最近条件を満たす存在に至り色々画策していた。

『タケさん』

日本神話のやんちゃ担当。

特技は酒造りと龍殺し。

良かれで大惨事を引き起こした過去があり、それを反省して最近までは大人しくしていた。

人間に対する評価は雑草。

態々手を掛けずとも勝手に生まれ、育ち、増え、そして自身に最適な環境を作つていく逞しい存在だと見なしている。

しかしうーちゃんの頼みに弱く、ちよくちよく人間の手助けをしてたりする。

主人公の秘密は知っていたが神たる身では根本的な解決はできないと静観するつも

りであったが、うーちゃんの頼みもあつて割かし気にしてやっている。  
シヴァとは集合されたこともあるため越えるべき壁と認識している。

# 知らないって、見てると笑えるな

「最近暇だなあ…」

はぐれ悪魔を探して夜の駒王を闊歩してみるが、シトリーは意外と真面目にやつてるらしく一月近くも音沙汰なしの平和な日々だった。

別段金に困ってるわけでもないし、暫くすれば禍の団とかいうテロ組織も動くだろうから余暇でしかねえだろうけど。

と、そんな事を思っていたわけだが、まあ噂をすれば影というか、血の匂いが微かに香る。

「チンピラの某だったらタマを潰してやろうかね？」

寒いジョークをかましつつ血の匂いを辿っていけば、そこにいたの知己の気狂いと幾許かの死体だった。

「おやおやおおやあ？」

どこの誰かと思ったらソウルフレンドのアサシン君じゃありませんか？

まだこつちにいらしたのです？」

「そつちこそケツ捲るって言ってたじゃねえかフリード」  
ブラザー

互いに微塵も思っていない台詞を吐き、何時でも殺れるよう間合いを測る。  
「ああ、そうそう。」

ここに居る悪魔なんだが、その中の白いちびっこ。

あいつ、日本神話を買ったから手え出すと日本で仕事が出来なくなるぜ？」

別にどうなろうと関係ないが、死なせるとうーちゃんに泣かれると思えば釘差しぐらいはしておく。

「それマ？」

「超マジ」

「うそおん」

がっかりと肩を落とすフリード。

「あ、そうそう。」

見て見て、最近雇い主になった奴から貰ったチヨーカーかちよいい剣」

そうやって見せびらかしたのは昔見た剣だった。

「名前はなんとあの有名なエクスカリバーどうえす!!」

それも二本！と両手に一振りづつ握って見せびらかすフリード。

……アホ臭。

「……あれれえ？」

なんでテンション下がってござんす？」

「だってよう、違う剣振り回してエクスカリバーとか言ってるの、見てて寒くなんねえ？」

「え？ もしかしてパチモンだったりしますかこれ？」

そうあわてふためたかと思えばフリードはおちやらかしたバカ面を晒す。

「なあんて、ボクちん剣はよく切れればなんでもいいんで偽物でもオールオツケーです!!」

相変わらず愉快的な野郎だ。

「ほんとは叩き切りの実験台にしてあげるつもりでしたけど、いいこと聞いちゃったから特別見逃してあげまあーす

じゃねばーい!!」

そうケタケタ笑いながら前回より高く飛んで逃げるフリード。

……って、

「あの野郎、死体押し付けやがったな？」

糞面倒臭い事させやがって。

一応俺も裏社会の人間なので表に騒がれないよう事後処理をするしかなく、変に時間を無駄にさせられたのだった。

~~~~~

そして翌日。

事後処理のために特に問題は無いが完徹をさせられた腹いせにつまらない授業を全部寝て過ごすことにしてたら生徒会から呼び出された。

「パス。」

勝手にやってろよ」

仲良し小好しなんて間柄でもねえんだしとバックレようとするが、呼び出しに来たチンピラはイラついた様子で言う。

「此方だつて呼びたかねえよ!？」

だが日本神話勢はてめえしか居ねえから仕方なくだな」

「塔城でいいだろうが。」

フリーランスの俺と違ってあいつはがっちり日本神話の所属だろ」

「は?」

なんでグレモリーの眷属が悪魔を裏切つてんだよ!？」

「姉妹仲良くするためらしいぞ」

「そう……なのか……?」

「詳しく知りたきゃ本人に聞け」

と言うわけで俺は帰る。

「後は勝手にどうぞ」

「つて、そんな訳に行くか!」

ぶつ飛ばしても良かったが、途中で面倒臭くなり付き合うだけ付き合うことにした。面倒臭い覚えしかない生徒会室に入ってみると、いつもの面子に知らないのが二つ。

「なんか面倒臭そうだから帰っていいか?」

「開口一番それかよ!」

チンピラは意外と突っ込みの才能あるな。

まあ、どうでもいいけど。

「舞沢さんこつち」

シトリーと新顔との中間ぐらいでぼつんと座っていた白音が見るなり腕を引つ張ってくる。

「小猫ちゃん……」

グレモリー眷属のヒステリーが人を殺せそうな視線を向けてくるが一切関わらず白音の好きにさせる。

……タケさん、面倒臭い仕事は懲り懲りだぜ。

「そちらの二人は？」

「日本神話の関係者です。」

本件に関して知っておく義務があると呼びました」

俺は単なる雇われだぞ？

どういう理屈で日本神話の所属になったんだ？

「それで、そこ二人はなんぞ？」

見た感じ、『マトモじゃない』人間みたいだけど」

「は？」

俺の軽いジャブに髪の毛の長い方が露骨に反応する。

「悪い悪い。」

言い方が悪かったな。

カタギの人間には見えねえって言ったつもりで間違えたよ」

まあ、本当にマトモじゃ無さそうだがな。

訂正に長髪は露骨に舌を打つ。

「イリナ。」

主の使いとして礼節を忘れるな」

「……わかってるわよ」

どうやら、よっぽど愉しいことがあったみたいだな？

知り合いでも消されたか？

特に気にも留めず、始まった短髪の女の話を買いつまんで聞き流す。

なんでも、教会で管理していたエクスカリバーのうち三本が盗まれて日本に持ち込まれたらしい。

で、犯人は墮天使の過激派コカビエル。

二人は残るエクスカリバーを持たされ奪還しに来たと。

「捨て駒か」

氣を見るまでもなくこいつらじゃ束になってもフリードの足元にも及ばねえ。

大方、コカビエルの供物にさせて日本への再侵攻の足掛かりにでもするつもりなんだろう。

まったく、本当に天使は変わらねえなあ。

「舞沢さん、氣が乱れてます」

「ん？」

いかんいかん。

天使への怒りのせいで白音に気づかれるほど練りが甘くなっていたらしい。

「君達の先輩さ」

気が付いたら木場が殺気だつてた。

……なんかあつたのか？

## 勘違いも程々につてな

「こんな時、どんな顔したらいいでしょうか？」

「指指してゲラゲラ笑ってやれば？」

校庭に転がった木場の姿に困惑する白音にどうでもいいと適當ぶっこく。

よく分からんが木場が教会の連中に復讐だなんだと因縁吹っ掛けてぎやーすか騒いだ揚げ句、二対一のケンカを始めてボロクソに負けただけで特に面白くもなかったし。

「貴方」

時間の無駄だったなと帰ろうとしたら長髪が絡んできた。

「ん？」

「一誠君が死んだ時駒王町に居たのよね？」

「誰だそいつ」

居た気もするが、よっほどでないで見なくなつた顔はその他にぶっこんで思い出さな  
いようにしてるからな。

「三大変態に数えられていた彼です」

「ああ、あいつね」

墮天使殺るときに囮にしたゴミか。

「確かに居たが、それがどうしたよ？」

「なんで、なんで一誠君を助けてくれなかったのよ!？」

「こいつもヒステリー持ちなのかいきなりキレやがった。

「貴方悪魔を殺すのが仕事なんでしょ!？」

「だったらどうして一誠君が悪魔に殺される前に悪魔を殺さなかったのよ!？」

「……どうでもいい話だったか。」

「喚く暇があんならお前が悪魔を殺して回れよ。」

「俺は悪魔殺す以外にも仕事やってるから忙しいんだ」

「最近は何かに白音に懐かれてひたすら面倒臭いってのも有るんだからよ。」

「っ、この!？」

「帰るべと背中を見せれば長髪がぐねぐね曲がる玩具を俺に向けて斬りかかった。」

「なっ!？」

「趣向返しに軽身功で玩具の剣先に乗ってみせながら吐き捨ててやる。」

「下手糞」

「仙道の知覚範囲は全周完全網羅してんだ。」

「その上露骨に殺気に向けてくればどう斬りかかるか宣言してるのと変わらねえよ。」

「いの……」

剣を操作しようとしたが、そんな長髪に白音が接近した。

「何してくれてんですか貴女は？」

震脚からの寸勁を長髪に叩き込みぶつ飛ばす。

「ゴッ!？」

お手本のような一打に長髪が縦に回転しながら相方のとこまでぶつ飛んだ。

修行の成果がよく出てるな。

「よくも舞沢さんに手を出してくれましたね？」

戦争ですか？ 戦争ですわね？

分かりました。塵殺します」

ハイライトが消えた目で可視化した氣を迸らせながら構える白音。

あんまりな変化に見ていた連中が呆氣に取られ、木場なんか世界が終わったかのよう  
な顔してやがる。

……白音の奴、最近こうなる事が多いような？

「アホに付き合っでないで修行行くぞ」

「…分かりました」

頭をポンポン叩いてやると元に戻るが一々こうしてやんなきゃならんのが面倒臭い。

タケさんの依頼だし、もう暫くは我慢するけどさ。

「待ちなさい!？」

外野が喚いてるが興味はねえ。

無視していつもの公園に向かう。

「あ、そうだ。

白音、日本神話はなんだって？」

「向こうからは何も。」

一応うーちゃんのお社に報告しに行くつもりです」

まあ、把握はしてるだろうよ。

日本国内で八百万の神の目と耳の届かない場所はねえし、今回の事も交渉材料としてもう動いているかもしれない。

「行きます」

「いこぜ」

氣を練りながら軽い組手を少々打ち合う。

特にやる事が無いときはこうして仙道の修行と平行して八極拳を学ばせているが、これが中々白音と相性がいい。

本人は悪魔に転生した特典で怪力と耐久力上昇の恩恵を貰ったらしいが、一定以上の

連中になれば攻撃を食らえば即死が当たり前な世界になるのだから、必要なのは受けと避け。

特に白音は妖猫だったといっても小柄で耐久力よりも機動力に優れているのだから一撃が重い重戦士系より手数と機動性を尊ぶ軽騎兵として伸ばした方が成功するだろう。

そういう訳で、破壊力は氣で賄いつつ手数の多い大陸拳法を教えている。

個人的に、妖猫の白音が十二形拳を使うようになったら笑えると思うからその内修めさせようと狙ってる。

「あ、そうそう。」

白音には言つとくわ

「なんですか?」

下段蹴りと見せ掛け浴びせ蹴りを

放ち、着地から蹴り上げ踵落としのコンボを繋げつつ白音に伝えておく。

「なんですか?」

避けられるよう手加減した一連の連撃を捌ききつたのを確認し、俺は話を続ける。

「あいつらが持ってた剣、あれエクスカリバーじゃないから」

「そう…なんですか?」

よつぽど驚いたらしく手が止まる白音。

「うん。」

あいつらが持ってたの、確かにアーサー王縁の剣だけど、あれアーサー王が折った選定の剣カリバーンだぞ」

目を真ん丸にする白音に一休みいれるかとベンチに座り俺は言う。

「そも、エクスカリバーは湖の貴婦人がアーサー王に預けた黄金の剣だ。

あんなどんちきな機能もなければ、そもそも折れる代物じゃねえ」

あの剣が折れるとしたら、それこそ大陸を両断するような馬鹿な真似が必要だろう。隣に座りびびったりくつつきながら白音はこてんと首をかしげる。

「じゃあなんで教会はカリバーンをエクスカリバーと勘違いしたんでしょう？」

「さあな。」

持ってた奴が勘違いしたか貴婦人がエクスカリバーだと騙って渡したか、どちらにしろ原型を無くすぐらいねじ曲げられちまってたから、今更どう弄ろうと裏で流れてる安もんとどっこい程度の代物にしかならねえよ。

あれなら天目一箇が打った剣の方がよつぽど信頼できるな」

まあ、昨日の死体を見るに切れ味はそれなりだから、李書文先生やフリードぐらいの奴が振り回せば違うだろうけど。

ガシヤン

「あん？」

「そんな…がらくたに僕の人生は、僕達は命を弄ばれたと言うのか…：…？」

木場がなんか絶望に沈んでた。

今の話聞いたのか？

「まあいいや。

帰るか」

「木場先輩は…」

「ほっとけほっとけ。

関わってもいいことにならんぞ」

それでもいいなら好きにしろと言ひ残して俺は帰ることにした。

# ひつさびさに愉しくなってきたな

「今回の内ゲバに関わる気はない。

が、民と土地に何かしたら下手人がどの勢力に属し、どのような立場にあらうとぶち殺す。

というか日本でやるな冥界でやれ。

それと天使共は面貸せ」

以上が日本神話の見解である。

「実に適切な意見だな」

翌日から木場が学園から消え、更に事件が起きることもなく二日が経過し、ぷらぷら歩きつづいぎという事態の際にはどうするかと考える。

実際問題、コカビエルなんて相手に自分ではほぼ確実に勝てない。

策を練り慢心で腐らせその上で悟られず奇襲を掛けて一撃で仕留めるならば漸く可能性が一桁パーセントあるかどうか。

幹部クラスの墮天使と人間とのスペックの差にはそれだけの隔絶があるのだ。

一応チャクラを全門開いた状態であつた大周天を行えば一分ぐらいは正面からでも拮

抗できるはずだが、一分を越えた時点で大周天で吸い上げた氣により肉体が破裂して死ぬだろう。

「スナイパーライフル…禁呪弾でも一発で仕留められないだろうし二発目は通じない。

ブラフマーストラはそもそも習得してない。

投擲は…穂先に使える刃がねえしなあ」

可能性を羅列するもどれも現実的ではない。

転生のタイミングが合わず、何より嫌な予感がしたから避けていたが、やはり旧暦の間に影の国でガエブルグを修得しておくべきだった。

足元の、教会から派遣された短髪を跨ぎ、いよいよ頭打ちだなと困ってしまう。

「貴様!？」

なんでか短髪が嘯み付いてきた。

「なんだようるせえな」

こっちはコカビエル始末する手段考えるので忙しいってのに。

「なんで見捨てるんだ!？」

「…なんで？」

別に共闘してるわけでもないし、俺からしたら助ける理由がないぞ？

「お前には人の心が無いのか!？」

「そんなもん、あるに決まってるだろ!!」

短髪を蹴り飛ばし多節棍を抜いて降ってきた斬撃を打ち払う。

「があっ!?!」

手加減無しで蹴り飛ばしたからか悲鳴を上げるが無視。

多節棍を棍へと変形させて相手を見る。

「あつひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!?!」

逃げたねーちゃんを追っ掛けてみればマイファイバリットとの感動の再会しちゃいましたよ?」

「随分御機嫌じゃねえか。

なんか楽しいことでもあったか?」

「いえーす」

ちやらけイカれたふうに見えながらも、ギラギラとした俺への殺意の手綱を手放すことなくフリードは嘯く。

「最近激しいエツチがとんと御無沙汰だったんでえボクちん不満全開消化不良だったんですがあ、ついさつきまでなんでもオールオツケーな牝豚ちゃんをgetしちゃいましたね。

そしたらもうハッスルハッスル。

チヨースつきりさせてもらったお陰で快眠快便ですよ。

ありがとうジーザスクたばりやがれ」

なんというか、何時にも増してテンションが高いな。

「だけじゃねえんだろ？」

「もっちもちのロンローン。」

「じゃーん、新しい玩具でーす!!」

「今度も二本!!と最近見た玩具を見せびらかすフリード。」

「貴様…イリナをどうした!?!」

「イリナ？」

「あ、牝豚ちゃんね。」

「飽きちゃったから首絞めックスで神様のところにボツシュートしといてあげたよ。」

「僕ちゃん超優しいでしょ？」

「……っ!?!」

「よつぼど受け入れ難かったらしく声にならない声で罵詈雑言を叫ぶ短髪。」

「そんな雑音を聞き流し俺は棍で肩を叩きながら訊ねる。」

「で、もう一匹も捕まえに来たど？」

「oh、yes。」

雇い主が何かに使いたいみたいなんで拾ってこいつて。  
社畜は辛いですよ」

「あつそ」

やるのか別の使い道があるのか……まあ、俺には関係ない話か。

「んじゃまあ、殺るか」

「いいんですかあ？」

私絶対好調ですから瞬殺しちやいますよ？」

「瞬殺ねえ……」

鼻で笑い調息で練った氣を丹田で回し嘯く。

「そりやあこつちの台詞かもよ？」

「あひや☆」

奇怪な笑い声が交差し、俺達は遊び始めた。

~~~~~

目の前で起きている事が現実だと私の頭は受け入れられなかった。

「ヒャア!!」

「シィッ!!」

イリナを辱しめた揚げ句殺したと嘯く下郎とアサシンと呼ばれた舞沢という日本神話の戦士との戦いは、私に現実の壁というものを嫌というほど叩き付けた。

神速の体捌きを可能とさせる『天閃の聖剣』と幻影を生み出す『夢現の聖剣』を振るうフリードに対して、舞沢が使うのは短いロッドを鎖で繋ぎそれを組み合わせ完成させた一本の長いロッドのみ。

教会のエリート戦士として育てられた自分が聖剣を使いイリナと二人掛かりでも一方的に蹂躪されたフリードを、舞沢は特別な何かがあるようには見えないそのロッド一本で捌いていた。

「ミーたん大分身!!」

ふざけた口調で『夢現の聖剣』を使い大量の分身を生み出したフリードが分身と共に斬りかかる。

「バラバラコマ肉の完成だ!!」

「抜かせ」

舞沢は幻影には目もくれず、何処から斬りかかるのか最初から分かっているかのよう  
に体を捻りロッドを振り回して本物のフリードを穿つ。

「ちいっ!?!」

幻覚に惑うことなく放たれた突きに、フリードが舌打ちを打ち大きく飛び退くと首をかしげる。

「どうしたことでしょ？」

聖劍の匠の技とおいたんのさいきよー劍技が全く通じません。

アサシンタワ、なんか秘密を隠してませんか？」

滅茶苦茶な劍の腕とふざけた物言いだ、反して構えは一切油断なく隙を窺っている。

対して舞沢は気軽にロツドで肩をトントン叩きながら鼻をならす。

「そんなのあるに決まってるだろ？」

つうか、それ以前にテメエが手え抜いてんのが理由だよ」

涼しげにそういう放つ舞沢に私の背筋が冷たくなる。

あれで手を抜いている…だと？

聖劍による加速を用いた超高速連撃も、もう一方の聖劍による分身を用いた攪乱も、どちらも片方だけでさえ並以上のエクソシストを翻弄して一方的に勝てるだろうに、舞沢はそれを手抜きと吐き捨てた。

「変な玩具は飽きてんだよ。」

遊ぶんなら本気で遊ぼうぜ？

「じゃなきや、萎えちまうよ」

「……キヤハ☆」

舞沢の言葉にフリードが聖剣を投げ捨てる。

「思ってた通りやつぱアンタ最高だよ。」

ひっさびさに本気、出しちゃうぜ」

そう言ううとフリードは懐から黒塗りの短刀を抜く。

「こちらに取り出したるは神も仏も所縁も何もございませんだだのヒ首。」

しかしながら頑丈でよく切れるボクちゃん自慢の逸品でござえます」

くると逆手に握り腰を沈めるフリード。

「……いいねえ。」

あんな玩具振り回すよりよっほど似合うじゃねえか」

そう笑うと舞沢はロッドを分解し三本の短いロッドが繋がった状態に切り替える。

「……」

「……」

さつきまでの騒がしさが嘘のように二人は無言で対峙する。

張り詰めた空気が満ち、私は蹴り折られた肋骨の傷みも忘れ思わず生唾を飲み込んだ。

それが引き金となった。

「っ!!」

次の瞬間二人の姿がブレ、ギインと甲高い音が響き短刀とロッドが噛み合っていた。

馬鹿な…教会最強の聖剣を握っていた時よりも速いだと!?

私が驚いている間にも立て続けに短刀が閃きロッドがそれを打ち払う。

「ひゅ…」

突如ロッドがバラけ、舞沢は先端のロッドに握り手を持ちかえるとまるで鞭のようにロッドを振るった。

「きひい!!」

連続する打撃をフリードは捌くも、僅かに手数が足りないと見るや這うように身を沈め弾丸のように懐へと潜り込む。

そのまま何故か更に身を捻り背中からぶつかると、舞沢の身体が異様に吹っ飛んだ。

「なっ!?!」

ただのチャージであそこまで飛ばせるものなのか!?

驚愕する私を他所に危なげ無く着地した舞沢は愉快そうに笑う。

「へえ?」

貼山靠なんて何処で覚えたんだよ?」

「大陸ではつちやけてた爺さんに教わったんですよう。

その後ぶつ殺されかけたんで逃げたんですけどねえ」

意味がわからない。

しかし舞沢は理解できたらしくつくつくと笑う。

「李先生は相変わらずみたいだな」

お前も知り合いなのかよ!?

「もしかしておたくもですかい?」

「槍と拳を少々な。」

自慢しとけよ、あの人が殺そうってするのは強い奴だけだからな」

「わあい」

その言葉に何故かフリードはケタケタ笑いだす。

……理解できない私がおかしいのだろうか?

煤けた気持ちになる私を尻目に二人は再び構える。

「なんなら同門らしく拳一本でやろうか?」

「それも悪くないんですが、そいつはまたの機会につてことで」

「来世の間違いじゃねえのか?」

「そでした」

愉しそうに牙を剥き、二人は再び交差した。

次は、少しは平穩な世界だとありがたいな

「ヒヤツハアアアアアア!!」

「シヤアアアアアアアア!!」

フリードとの愉しいぶつかり合いはここ数十年の間でも最高潮をマークした。

李先生は……うん。あれは桁が違いすぎて楽しむ暇ないから。

大陸武術に手を染めて千五百年弱。

前も含めその間、鬪争を呆れるほど繰り返してきたが、これほど熱い戦いは多くなく、久し振りに魂が燃え上がる感覚に酔いしれた。

それがいけなかった。

「良いぜフリード<sup>ブラザー</sup>。

テメエは本気で……」

ドンツ、と背中から何かが貫通する衝撃が走り、意思に反して力が抜けて棍がカラカラと地面を転がる。

「時間切れだフリード」

「……こいつはあんまりじゃねえですかコカビエルの旦那？」

「貴様が戯けているからだ」

力が入らないのに身体が倒れないのは、背中から刺された天使の使う光力の槍が支えているからだ。

「エクスカリバーを持つてこい。」

「奴が実験を始めるそうだ」

小周天をフルに行い絶命は避けているが、今回はどうやらここまでみたいだな。

「聞こえているかアサシンちゃん。」

生きてたら続きやろうぜ」

そう耳打ちするとフリードは離れていく。

暫くして槍が消えると俺の身体が自然と倒れる。

「おい、生きてるのか!？」

短髪が近寄ってきたが、それよかさつきからブルブル震えている携帯の方が気になる。

「悪いと思うなら、俺のズボンの携帯を寄越せ」

「携帯？」

「これの事か？」

言われた通りに携帯を持たせたのを確かめ、言うこと聞かない身体を氣で無理矢理動

かし携帯を耳に当てる。

『生きてるか?』

「腸ごとシェイプアップさせられてるが、ギリギリイザナミ様の厄介にはならず済みそうだ」

『ならいい。』

天津神として正式に命じる。

今すぐ猫を連れて関東を離れろ』

……なんだと?

『野郎、駒王の龍脈に暴走術式なんて余計なことしやがった。』

はつきり言う。

そのせいで神田の御霊がぶちギレた』

……聖書陣営、終わったか。

『なんとか最後の封印だけは解けぬよう死守してはいるが、現界は防げないだろう。間違いなく今回に関わる連中は全員死ぬ。』

お前は…』

「タケさん」

なら、丁度いい。

「悪いが今日付けで日本神話との契約切らせてもらおうわ  
『おい』」

「白音はそつちで頼んます」

そう言おうと俺は携帯を踏み潰す。

「聞いてたか？」

物のついでと短髪にも警告しとくか。

「今から此処駒王町はグラウンド・ゼロになる。

死にたくなけりゃあ逃げろ」

「どういうことだ？」

「コカビエルが関東の守護神の逆鱗に触れた。

聖剣の回収がしたきや、一旦関東から離れて終わるまで大人しくしてからにするんだ  
な」

「お前は どうするんだ？」

「フリードと決着つける」

仙道で出血を押さえつけ、棍を拾い歩き出す。

後ろで短髪が喚いてるが、準備する時間が勿体ねえから無視して歩き出す。

「何故そこまで決着に拘る!？」

態々先回りしてそう怒鳴る短髪を押し退けながら俺は言う。

「勿体ねえんだよ」

「勿体ない？」

「久し振りに、覚えていたいと思わせた相手との最期を、こんな締まらねえもんにしてたまるか」

どうせ皆置いていくんだ。

だからこそ、忘れたくないと思えた記憶だけは持つていく。

そうじゃなきゃ、なんもかんも本当にどうでもよくなつちまう。

そう言い捨て、短髪を残して俺はセーフハウスへと向かった。

~~~~~

「起きろ」。

交代の時間だ」

……………ヘクトール將軍？

「そろそろ次の戦端が切られる。

今度こそアキレウスを仕留めてやれば、流石にオデッセウスも退いてくれる筈だ」

無理だ。

將軍はアキレウスに勝てない。

「上手くいくさ。

じやなきや、トロイアはおしまいだ」

將軍、これは茶番なんだ。

ゼウスが仕掛けた、人間を減らすためだけに行われている誰も救われない茶番なんだ。

「心配すんな。

ペンテシレイア率いるアマゾネスは勇猛で、パリスの阿呆だっていい加減目を覚ましてくれる。

息子達のためにも、絶対に勝って終わらせるんだ」

そんな未来は訪れないんだ。

アンタはアキレウスに殺されて、ペンテシレイアも負けて、疲れきっていたトロイアは停戦協定の証と偽ったトロイの木馬を受け入れて滅びてしまうんだ。

「そういえばお前、昔酒の席で面白いこと言ってたよな？」

確か、前世の記憶を引き継げるんだろ？」

ああ。確かに酔った勢いで將軍に話したことがあったな。

「じゃあさ、俺が死んだら俺のこの槍、お前にやるよ。」

「代わりに、俺の息子の子孫が絶えるぐらい遠い未来まで俺達の事を覚えていてくれるって約束してくれるか？」

ああ。忘れてねえよ。

トロイアでの愉しい日々も、將軍が酒の席のノリでお持ち帰りして奥さんに泣かれて本気で謝ってた馬鹿な話まで、何千年先までだって全部持つていつてやるよ。

「ありがとよ。」

さて、今日も生き残れよ」

……

……

……

……

休むために仮眠していたせいか、懐かしい記憶を思い出した。

「まだ、間に合うな」

時間を確認し、そうごちる。

状態は六割程度まで回復した。

大周天を含めて総動員してやれば、コカビエルは無理でもフリードとの決着までは持

つだろう。

ここからはただの消化試合。

日本神話は今回の件で全面戦争する事で腹を括った。

出来れば聖書の陣営が滅びる前に生まれ変わって、戦争に参加してやりたいところだが、まあ望みは薄いだろう。

人間に生まれ変わるのには確定していても、産まれるまでのスパンは疎らで、しかも戦えるようになるまでに時間が掛かるのだ。

それまで聖書の陣営が本気になった日本神話に耐えられるはずがない。

「……………いくか」

今生最後の戦いだ。

せめて、最後まで記憶に残しておきたいと思えるものになってもらいたいと思いがながら、俺はセーフハウスを後にした。

少しは面白いこともございますがねえ

「あー、くつそつまんねえですよ？」

「カビエルの糞がギリシヤの冥界からパチくつて来たケルベロスに必死こいて抵抗する悪魔を眺めながら俺は飽き飽きしていた。」

「絶対離すんじゃねえぞ『黒い龍脈』!!」

「皆、匙を援護するわよー!」

「防衛は私に任せて!!」

神器使いの坊主を中心に確実に仕留めようとしてるみたいだが、堅実すぎて欠伸がでちまう。

それに、

「どうしてなんだ？」

僕の復讐が、どうして叶わないんだ……?」

さつきなら復讐だなんだと絡んできてる悪魔は本当に詰まらないですしね。

なんつうか、色んな意味で弱つちい。

頭も意思も目的もなんもかんも弱つちい過ぎて雇用人の爺が統合したエクスカリ

バーのパチもん適当に振り回してるだけで終わっちまりましたよ。

こういう時こそ女壊すか殺りがいのある相手がいないと、俺っち本気でやる気を無くしちいますぜ。

「憐れだな。」

「おめおめ生き延びたなら、そのまま踞っておれば生の目もあつたらうに」

「バルパー・ガリレイ」

「おや？」

「なんか面白そうな気配がしやすな？」

「貴様が…貴様さえいなければ僕たちは…」

「ふん。」

「もう少し芽が出るかと思つたが…いや、試してみるか」

「爺が懐から抜き出した聖剣の適合因子とかいう珠を悪魔に放りやがった。」

「貴様と同じ施設に居た実験体から抜き取つた聖剣を扱つたための因子だ。」

「既に絞り滓だ。もう役にもたたんからくられてやろう」

「いい趣味してるねえ。」

「みんな…」

「悪魔が手を伸ばすと珠が光つて人の形した人形が出てきやがった。」

「皆、そこにいたんだね」

お涙頂戴な展開で悪魔が手を伸ばしたが、人形が遮るように喋った。

『どうして?』

「…え?」

『どうしてふくしゅうなんてかんがえたの?』

くひゃ!!

「こいつは中々愉快なことになってきましたね?」

『ぼくたちはきみがいきでいてくれればそれでよかったのに』

『あくまになつてもいきでいてくれればよかったのに』

『どうして、ぼくたちをりようしたの?』

「違う!?! 僕たちは復讐する権利が!?!」

『うそつき』

「え?」

『にくいのはきみだけ』

『ぼくたちをりゆうにふくしゅうしたかっただけ』

『どうして?』

『どうして?』



悪魔の絶望の叫びに俺の腹筋が限界を迎え腹を抱えて大爆笑しちゃった。  
いいでちゅよー。

悪魔の慟哭ほど酒を旨くする肴はそうはねえ。

今夜の神の子の血は実に旨いだらう。

「……あは」

さつきまで泣きわめいていた悪魔が今度は狂ったように笑い出す。

ああ、狂ったようにじゃなくて本当にイカれちゃいましたか。

どう料理してやろうかなと思っていたら、今度は珠を砕いた剣に異変。

砕けた珠を吸収して変化した。

あれは、悪魔の魔力と光力を剣に相乗りさせてんすかね？

「馬鹿な？」

禁手化したとて聖と魔の相反する力を一つに纏めただと？

あり得ん……いや、まさか……？」

なあんかぶつぶつ言ってますがねえ？

後ろ、狙ってやすぜ？

案の定爺はコカビエルが投げた槍を喰らってあっさりくたばる。

「才を無駄に回したなバルパー」

んで、コカビエルが得意顔でほざく。

なんでも聖書の神は随分前にくたばってたそうだ。

え？　今更それ？

フリーランスであちこち雇われてたが、それ、何処の神話でも公然の秘密でしたぞ？  
ま、ここに居る悪魔達は知らなかったみたいですし、無意味ではなかったみたいですが。

「聖劍聖劍聖劍聖劍聖劍聖劍聖劍聖劍ヒヒヒヒヒ!!」

いい感じにぶっ壊れた悪魔が手のヘンテコ劍を滅茶苦茶振り回して来たんで軽く腕を切り落として胸をぶった切ってやったが、禁手化した劍との相性が悪かったらしく一回受けたエクスカリバー（笑）を歯零れさせてくれやがった。

「おっは!!　結構やるじゃん？

ま、死んじやったけどね」

ピクリとも動かなくなつた悪魔から視線を外し、他の悪魔を見ればケルベロスに何体か食い殺されながらもケルベロスの首を二本落としていた。

「ふん、期待はしていなかったがこの程度か……」

落胆してるコカビエルですけどね、ケルベロス一匹でも過剰戦力つてもんですよ？

そういう戦争再開の狼煙にするって言った術式どうなってるんだ？

「発動まで後十分程だ。

今更怖じ気づいたか？」

「そんなこと、あるかもしれないことも無いこともございませえん。

でも、今更ながらこれやったら日本神話まで大乱闘スマッシュ聖書大戦に乱入するんじゃないですかい？」

「ふん。

こんな片隅で媚を売りながらこそそこそと生き延びただけの田舎神話が首を突っ込んできて、俺達墮天使をどうにか出来るとでも？」

その時はその思い上がりや奴等の命で購わせてやろう」

「やいど」

そもそも眼中に無かったと。

日本神話はギリシャ神話やインド神話さえ直接戦闘になるようなことは絶対に避けてるってぐらいヤバイ陣営なんですけどねえ？

ま、その自信が何時まで続くか見物だな。

それよかだ。

「しゃあっ!!」

聖剣を手放し勘に任せてヒ首を振るう。

振るつた匕首は一切の殺気さえ漏らさず突き出された棍を払い、そしてそれが期待通りの相手だったことに俺は上機嫌に笑う。

「おやおやおーやあ？」

愛しのマイライバルたんつてば、こんな夜更けにラヴコールしちゃうんでちゆかあ？」

マジなら吐き気がしそうな冗談を吐いてみれば、アサシンは棍を3節にバラして陰惨に笑う。

「一人でマス掻いてるのに我慢しきれなくてついな。

テメエの尻にぶちこんで、来世までぶっ飛ばしたくてたまんねえんだ。

ちよつと付き合えよ」

「いやあん。

もう素敵すぎて俺ちゃんのマイサンフル勃起しちやったじゃないですか。

これはもうテメエのタマで責任取って貰うしかないですよ？」

「くくつ、お互いに殺り足りねえみたいだし、様子見は無しで決めにいくぜ」

「けきや☆

お宅がそんなに積極的だなんて、ミーが女だったら××ぐしよ濡れにして逆レやつてま

すよっ！」

くっそふざけたやり取りの合間にもお互い殺意がぶつかり合って背筋をゾクゾクさせやがる。

もう我慢できず飛び出せば、アサシンも同じらしく即座に獲物が噛み合った。

やるだけ、やったよな？

残された時間は僅か。

体力の限界を超えるため、大周天法を行い大氣に満ちる命氣を取り込みチャクラを強引に回して加速する。

例えるなら軽油で動くエンジンにニトロをぶちこむようなもの。

故に時間が経てば経つほどに俺の身体は崩れていく。

「シィッ!!」

棍が風を切つて振り下ろされるもフリードの腕は正確に棍を捉え往なしていく。

おいおい？ 仙道無しで着いてこれる人間なんざ李先生以来だぞ？

悪態を吐こうにもそんな余裕はない。

吐き出す呼吸が熱い。

制御しきれなかった氣が熱をもって身体を焼いていく。

毛細血管が破裂し視覚が赤く濁り全身がどす黒く染まっていく。

膨大な氣の消費量を僅かでも増やすため負荷に耐える時間を増やすための氣功によ

る治癒促進と平行して知覚を更に拡大する。

世界が速度を落とし、脳が視覚の外までを視認してしまい焼け付くような痛みを発しながら思考を加速させ、一秒を六十倍に圧縮し状況を情報を整理する。

フリードが俺が自滅前提の無茶をしているのに気づいたらしく、自滅する前に殺し尽くすと気炎を吐く。

短髪が警告を無視し無謀にもコカビエルと対峙している。

その手に持っていたのはローランに流れたドウリンダナ。

どうりでどこを探しても見付からないわけだ。

今回は無理だが、来世で必ず回収する。

シトリーとグレモリーの動ける方は頭数を減らしながらケルベロスに……って、なんでお前までいる白音!?

うーちゃんが誘導に失敗したか？

まあいい、死にたいってなら勝手に死ね。

それよりタイムリミットだ。

龍脈の暴走は……糞が!?

「おい、フリード」

「あんですか死にかけ野郎」

「今すぐ此処を離れろよ。」

龍脈が暴走を始めたら、ヤベエぞ」

「……糞!!」

意味を察したらしくフリードが舌打ちを打つと構えを解く。

「また中途半端で終いですかい」

「勝ち逃げしたって笑ってるよ」

俺の言葉に不快そうに舌を打つ。

「生きてたらまた遊んでやりますよ」

「期待しないで待ってるよ」

そう、言葉を交わすとフリードは聖剣を掴み加速して戦場である駒王学園から退避していった。

「……っ、」

後は白音にも一応言っとくかと思ったが、思ってた以上にガタが来ていたらしく膝が崩れて倒れ込む。

「舞沢さん!?!」

俺が倒れたのを見たらしい白音がケルペロスの顎をカチ上げ俺の傍に跳んできて絶句した。

「こんな……すぐに手当てを……」

「どうせ後一時間も持ちやしねえ。」

んな事より早く逃げろ」

「嫌です!!」

逃げるなら一緒じゃなきゃ嫌なんです!!」

ちつ、くつそめんどくせえ事を言ってるなよ。

「言った筈だ。」

俺は、」

なんで此処まで説得に必死なのか自分でも解らないまま白音を言いくるめようとしたが、それよりも先に広がった知覚が白音に向けコカビエルが光の槍を投げたのを捉えた。

「この状況で俺が逃がしてやるとでも?」

万全の状態なら避けられただろうその一投を、白音が俺を庇おうと動き始めたのに気付いた瞬間、身体は俺の意思を無視して白音を突き飛ばしていた。

「舞沢さん!!?!!」

胸を貫く衝撃が走り、白音の悲鳴が異様に遠くに聞こえさつきまで煩かった頭を含む全身の痛みも薄れていく。

命が終わる、馴れた感覚だ。

これで魂が肉体から離れば、ほんの僅かな間だけだが俺は無限の地獄から解放される。

次の生が始まる頃には天使も居なくなってるだろうし、そうしたら何をするか考えとかなきゃ……………な……………

~~~~~

「まい…ざわ…さん…？」

庇おうとした私を逆に庇った舞沢さんが光の槍に貫かれ倒れ付しています。

理解が、追いつきません。

頭の冷静な部分はまだ彼の氣は失われていないと叫んでいるのに、私はゆつくりと血の池へと沈んでいく彼の姿を認めることが出来ず動けませんでした。

「ふん。

フリードとの打ち合いを見て少しは期待したのだが、所詮下等な人間でしかなかったか」

コカビエルの吐いた言葉をどうしても理解できません。

どうしてなんでしよう？

悲しくて、辛くて、泣きたくて、殺したぐらいじゃ収まらないぐらい憎いののに、私の身体はまるで血が凍ってしまったように冷たくて動きません。

「貴様!？」

「お前にも厭きた」

教会のエクソシストがコカビエルの軽い払いで吹き飛ばされ、聖剣と一緒に私達の傍に転がってきました。

エクソシストが手にしていた聖剣のオーラはまだ悪魔の身である私にはとても熱いのに、私はそれでも寒いと思いました。

「ギャアアアアア!？」

「匙!?!？」

復活したケルベロスに匙先輩が捕まってしまいました。

助けなきやいけないはずなのに、それでも私の身体は冷たくて動きません。

どうしてですか？

どうして、どうして……ああ、そうだったんですね。

私はずっと、ただ甘えていただけだったんですね。

姉様に甘えて、部長に甘えて、舞沢さんに甘えて、甘えて甘えて甘えて甘えて甘えて



に大地が静まり返りました。

『命を喰らうなら見逃してやろう。』

奴の生む命が潰えるは妾の呪い故に。

然し』

雲一つ無い空から急に自然には起こりえない黒い落雷が落ち、その落雷が収まると雷が落ちた場所に新たな人影が存在していました。

『この国を益無き戦の貢ぎ物と捧げるならば話は別ぞ』

それは死者が着る白い着物の下に見える肌隙間なく包帯を巻いた、女神と思わしき御方でした。

い  
ですが私を知る女神とは違い、とても冷たい氣を纏うとても女神とは思えない恐ろし

い  
「貴様、日本神話の神か？」

「……」

「答えぬなら構わん。」

俺の邪魔をした報いを受けることに変わりはないのだからな!!」

そう言うと同時にコカビエルが光の槍を女神に投げ付けました。

ですが、槍は女神を素通りし背後の校舎をただ破壊しただけでした。

「貴様、何をした……?」

異様な結果にいぶかしむコカビエルですけど、女神は口を開かず不意に背を向けると何時からか匙先輩を口から離し伏せていたケルベロスに歩み寄って行きました。

「お主は外の根の国の番犬よな？」

なんと憐れな、無理矢理引き立てられそれが堪らなかつたのだな」

そう女神が慰撫すると、ケルベロスは先程までの狂暴さが嘘のようにくうんと甘えるように鳴きました。

「ふむ、厳つい成りなれど中々愛いやつよのう」

まるで小さな犬を可愛がっているような態度で鼻を撫でる女神にどうしていいか、私は別の意味で動けなくなってしまいました。

「あ、あの」

「駄目です会長!」

シトリー会長が女神に話し掛けようとしたら、女王の椿姫が後ろから羽交い締めにして無理矢理伏せさせました。

「椿姫、貴女何を!」

「お叱りは後で!!」

とにかく彼の神に一切話しかけてはなりません!?

彼の神に僅かでも不興を買わせてしまえば、それだけで此処に居る全員にとても恐ろしい事が起きてしまうんです!!」

「椿姫……？」

そう叫ぶ椿姫先輩は口を開くのも恐ろしいのかシトリー会長を押さえ付けながらガタガタと震えていました。

「貴様……」

彼女の態度にコカビエルが怒り心頭となり槍を構えました。

「この俺を無視するとは、余程死にたいようだな!？」

コカビエルは手に握った槍に、見るだけで肌がひりつくほどの光力を溜めて構えました。

「奇妙な技を使うようだが今度はそうはさせせん!!」

「この土地ごと吹き飛ぶがいい!!」

そう言うコカビエルは高く舞い上がり上空から槍を女神に向けて投げました。

「この子がこれ以上怪我をするのは忍びないからの。」

焼け。『黒雷』

コカビエルを見ることもせず女神がそう言うのと、見るだけで飲み込まれそうなほど濃い陰の氣で形作られた黒い雷が発生しコカビエルの槍を呑み込んでしまいました。

「馬鹿な…?」

今のはこの結界を破壊し尽くすだけの光力を込めた筈だ!?

貴様は一体何者なんだ!?

コカビエルが恐慌していますが、相変わらず女神は相手にしません。

「俺を嘲るか!?!」

女神の分際で調子に乗るなよ!?!?」

コカビエルは怒りのままに光の槍を連続で投げ始めました。

しかし、先程の繰り返しです。

槍は女神を素通りし、ケルベロスに当たりそうなものは黒い雷が焼いて消す。

数十、いえ、百近い槍の投擲が何の効果も果たさず無駄に終わるとコカビエルは光の槍を手に急降下して斬りかかりました。

「これなら防げまい?!?!」

今度こそ仕留めたと確信したコカビエル。

ですが、

「漸く参ったか。

いつの時代も、男は仕度が長いのを」

斬りかかったコカビエルを、新たに現れた甲冑武者が正面から受け止め、そのまま切

り裂きました。

彼らの恐ろしさを私達は初めて理解した。

「何者……だ……?」

兜と面で顔を隠した鎧武者の一刀に切り伏せられたコカビエルは、それでもなお立ち上がった。

バシヤツ!

その姿を確かめようとしたコカビエルに向けて鎧武者は腰に提げた瓢箪の中身をぶちまける。

「酒……だと……?」

顔を濡らし口の中へと入ってきた液体から発する醸されたアルコールの香りにコカビエルは正体を口にした。

「玩弄するつもりか?」

それもよかろう。

奴はそれだけの真似をしでかしたのだからな」

包帯で全身を隠した女神の言葉にコカビエルは激情で身を焼く。

「天使共に正面から挑むこともしなかった臆病者風情が!!」

怒りから上空から槍を射掛ける事を拒否し、プライドが吠えるまま光の槍を奮い甲冑武者へと斬り掛かるコカビエル。

武者は手にした和刀を以てそれをあつさりいなすと、刀を翻し更にコカビエルを斬りつける。

「ふざけるな。」

ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな!!」

戦争がしたかった。

自分達は落ちこぼれではないと証明したかった。

主の呪縛から解き放たれた真に世にあるべき存在だと証明したかった。

そのための戦争がしたかった。

なのに、この様はなんだ？

包帯まみれの女神に相手にされず、その上鎧武者には切り伏せられ酒を掛けられるという恥辱を浴びせられた。

一体、どこで間違えたというのだ!?

幾度も斬られながらコカビエルは怒りのままに槍を鎧武者へと振るう。

「……なんだよ、これ?」

異常な光景に匙が痛みを忘れ声を震わせる。

夏も本格的に近付いているはずなのに学園内は異様に冷え、中心では圧倒的な力をひけらかしていたコカビエルが正体も解らぬ鎧武者にいいように翻弄されている。

まるで現実感の湧かない光景に誰しもがただ行く末を眺める中、ついにコカビエルが一矢報いた。

「ウオオオオオオ!!」

獣のような咆哮を上げ、捨て身で槍を振り抜く。

避けきれなかった槍の穂先が面を貫き兜を飛ばす。

「……………なん……………だと……………?」

兜の下、面の奥には『何も存在していなかった』。

「貴様は一体…」

コカビエルの問いが終わる前に、斬!!と音が響きコカビエルの腕が落ちる。

「ぐおおおお!!」

本能的に死を察知し翼を使い上空へと逃げるコカビエル。

対して鎧武者は落ちた兜を拾いあげ、再び被り面を着け直すと、まるで秘密を知ったことを激怒するように全身から陰の氣で形作られた黒い霧を発する。

「小癩な!!」

最早プライドに拘っている場合ではないと翼をも砲門に見立て大量の光力の槍をバ

ケツを引っくり返したような勢いで投射した。

対し黒い霧を纏う鎧武者から霧が人形に集い、新たに七体の鎧武者を生み出した。

まるで昼と夜が逆転したような光量が学園内を照らす中、七体の鎧武者は槍、薙刀、長巻、鉞、槌、大刀、刀をそれぞれ構え正面から迎撃する。

目を眩ませる閃光の中七体の鎧武者はそれぞれの獲物を振るいその全てを打ち払ってしまおう。

「何なんだ……」

あれだけの光力の槍を以てしても碌な結果すら残せなかったことにコカビエルは自然と後退する。

「何なんだ貴様達は?！」

先の砲撃で光力の半分以上を消費したコカビエルは残る力を集約させ、これ迄やったこともないほどに圧縮した光力の剣を生み出した。

「俺達墮天使は、何より優れた種族なのだ!!」

翼をはためかせ大気を強く打って鎧武者へと突貫。

迫るコカビエルに対し鎧武者は他の鎧武者を霧へと戻すと鎧の中へと吸い込み上段に刀を構え迎え撃つ。

「貫ったあああああ!!」

刀が僅かに揺れた瞬間、更なる加速を掛けコカビエルが砲弾のごとく鎧武者へとその身を擲った。

しかし、結果はあまりに残酷であつた。

「……馬鹿な」

我が身を賭したまさに乾坤一擲のその攻撃は、光の剣が鎧を貫くことなく碎け散るといふ結果のみを残して終わる。

そして現実を認める暇など与えるかというように鎧武者が刀を振り下ろす。

ざくりと音が響き、断たれたコカビエルの首がずり落ちてその身が崩れ落ちる。

終わった。

誰もがそう思うなか、信じられないことが起きる。

「どういうことだ!」

なんと、首を切られたコカビエルが頭だけの状態で叫びを上げたのだ。

「知れたことよ」

自身の身に起きたことが理解できず喚くコカビエルに対し、女神は初めて言葉を向ける。

「お主が口にしたのは根の国の酒。

ヨモツヘグイを為したお主は、黒い鳩から根の国の民と成り果てていたのだ」

「……………」

女神の言葉に目を見開くコカビエル。

「どんな気分じゃ？」

抗う手も足もなく、鞠のように蹴り転がされるしかない我が身の感想は？」

「…あ、ああ……………」

俎の上の鯉にも劣る状態へと突き落とされたコカビエルは絶望の呻き声を上げる。

「それが、貴様が虐げ続けた命たちの立場ぞ。

お主は此れから、その首一つだけで根の国が終わるまで過ごしてもらおう」

女神のあまりに残酷な宣告にコカビエルは血の涙を流し赦しを乞う。

「殺してくれ!!」

頼む、なんでもする!!

もう二度と日本の神には逆らわない!!

だからこんな、こんな姿で生かされるのだけは嫌だ!!」

「精々泣き喚くがよい。

根の国は今の時代にあつて少し静かすぎたゆえ、多少の賑やかしの良い音響になろう

からな」

「うおおおおおおお!!」

目を覆いたくなるような無惨な姿を晒し泣き喚くコカビエルを改めて兜を乗せ直した鎧武者が掴み上げる。

「御主も難儀じやの。」

首を動かせば要が崩れるからと、首無き身体のみで参じなければならぬとは」

女神の言葉に鎧武者は空の兜を横に振って否定する。

「ふむむ？」

それを飲めば溜飲が下がるならば安いものど？

：奴の生んだ命らしいのう」

それは呆れなのか関心なのか、当人達はそれで通じたらしく鎧武者の姿はコカビエルの首を持ってゆつくりと薄れ始める。

「もう逝くのか。」

満足したら此方に渡してたもうれ」

嫌だ嫌だと泣き叫び、殺してくれと乞い願うコカビエルの首を携え鎧武者は夜の帳が上がり始めた駒王学園から姿を消した。

お久しぶりですっていうには大分時間が経ってますね。

意識が浮上し、また新しい生が始まるのかと溜め息を吐きそうになったのだが、

「よお、久しぶりだな」

軽く手を上げて挨拶する嘗ての上司に俺は目を疑った。

「ヘクトール將軍？」

どうということだ。

今まで死んだ知り合いと逢うことなんて、どういう形であってもなかったのに。

疑問で頭を一杯にする俺に將軍は苦笑する。

「相変わらずお前は硬いな。」

そんなんだからアマゾネス達に喰われちまうんだろ」

「本気でやめてください」

強さは並だけど鹿っぽくて可愛いとか言って逆レされたのは本気でトラウマの一つなんだから。

「と、言ってもだ。」

俺はお前の知っているヘクトール本人じゃない。

ドウリンダナに残されたヘクトールの残留思念をドウリンダナが形作った、この対話のためだけに作られた存在だ」

「だったら」

「だからって偽物扱いするなよ？」

俺はヘクトールという男が残したお前への無念なんだから」

俺への？

困惑する俺に対しヘクトール將軍は頭を下げた。

「済まなかった」

「え？」

「あの時のただの軽口を、お前はずっと本気で守ってくれてたんだろ？」

だが、もういいんだ。

俺達のことをこんなに長く覚え続けたんだ。

もう十分だ。俺達のこととは忘れちまえ」

「……違う」

忘れられないから覚えていたんじゃない。

「俺は、忘れたくなくて覚え続けているんだ」

トロイアでの日々を俺は忘れなくなかった。

ガキの頃にバカをやったこと。

兵士に志願して筋が良いと將軍に目をかけて貰ったこと。

パリスの馬鹿が目先の欲望に走って毎回酷い目に遭ったこと。

そして、最後まで勇敢に戦ったヘクトール將軍の事を、俺は忘れなくなかったんだ。

「……そうか」

そう言うと將軍は困ったように笑う。

「そうまで言うなら仕方ない。」

だがな、真面目すぎて惚れてくれた女を泣かせるのはどうなんだ？」

「惚れている？ 誰が？」

人付き合いを避けるためあまりいい人間とは思えない振る舞いを続けてきた。

そんな俺に誰かが惚れているなんてありえない。

「お前さん……昔からそういうところあったよな」

首を傾げていると將軍は何故か心底可哀想なモノを見る目で溜め息を吐いた。

「あの娘だよ。」

ほら、猫耳の白いやつ」

「白音の事ですか？」

いや、あいつは俺の事が好きなんじゃなくて依存してるだけだ。

否定しようとしたら將軍はますます可哀想なモノを見る目を深くした。  
「ああ、お前さん。」

經驗重ね過ぎたせいで僅かでも勘違いを含んでたら対象と見なせなくなってるのか  
……」

難儀な奴めと嘆を吐く將軍に待ったを言う。

「いや、純然たる愛情ほど怖いもん無いっすよ?」

オリオンとかシグルドとかの末路を知ってるだけに、愛情には多少の混ざりものがあつた方が安心できる。

「そもそも、俺はもう死んだんです。」

前回の感情を引きずることほど惨めなもんは少ないっすよ」

下世話な話のせいでかなり砕けた言い様をする俺に將軍はニヤリと笑う。

「前回じゃなきやいいんだな?」

「え? いや、だから」

「よしてきた。」

お前さんの魂が離れないよう繋いでるだけだったが、今の話を聞いた以上本気で繋いでやろうじゃねえか」

なんか、えらく不味い空気が……

「くくく……後悔するなよ？」

愛憎劇においちやあ神話一の悪名は伊達じゃないことを見せてやる」

「いや、それ主にゼウスの糞が原因じゃないっすか!？」

悪名をひけらかすとか何をする気だこの人!？」

ヤバイ。

経験を掘り返すまでもなく大惨事が始まるのが見える。

というかコレ、本当に本人じゃないのか？

もうエリユシオン辺りからやってきたけど気まずくて残留思念と偽ってるだけと言われても納得しちまうぞ。

「……って、え?！」

引き揚げられるような異様な浮遊感を感じ、俺は間抜けの声を漏らしてしまふ。

「ちっ、もう時間か」

「なんで残念そうなんだよ!？」

本当に何がしたいんだ？

「とにかくこれだけは言っておく。

もつと人生楽しめ!!

お前にはその権利と、それ以上に漸く平和な時代にたどり着いた者としての義務があ

るんだってことを忘れるな!!」

「將軍!!」

あんた、やっぱり…

「そして七転八倒して俺達を愉しませろ!!」

「今『達』って言わなかったか!?!」

一体どんだけの数の存在がおれを見てるんだよ!?

本気で感動した俺の気持ちを返せ!!

そう叫ぶ前にヘクトール將軍の姿は小さくなり、俺の視界は白く塗りつぶされた。

くくく

そして次に視界が開いた先にあつたのは、一度目にした天井だった。

「……あの部屋か?」

白音に仙道の初歩を身体に叩き込むのに使った部屋と一致する天井に、俺はゆっくりと首を捻り辺りを見回す。

「痛っ」

僅かに首を捻った際に筋肉が悲鳴を上げ、それが暫く動かしていなかったことに起因

するものだと察した。

「数週……いや、一月以上動かしてないなコレ」

だとすればかなり筋肉が落ちてしまっているだろう。

取り戻すのに相当掛かるなこれ。

部屋はやはり白音と三日ほど過ごしたあの部屋だった。

「起きたかによ？」

聞き覚えのある声に痛みを無視して顔を向ければ、そこに居たのは知り合いだった。

「……黒歌か？」

「とりあえず記憶ははっきりしてるみたいによね」

「唯一の取り柄なんぞな」

リハビリがてら軽口を叩いてから俺は状況を尋ねる。

「何がどうしてこうなった？」

大周天を使い肉体が崩壊しかけていたところで、更に白音を庇って致命傷を受けた事までは覚えてるが、そこから先は真つ更なのだ。

俺の問いに黒歌は肩を竦める。

「残念だけど私もあんまり知らないの。」

フリードって覚えてる？

あいつの持ってたエクスカリバーを同行していた禍の団の同僚が買い取りに行くのに着いていって、その時あんたが死んだって聞いたから確かめに来たのが今さっきにや」

「……そうかい」

奴は無事に逃げ切ったらしいな。

「フリードはどうした？」

「買い取りに応じてエクスカリバーを渡して代金の小切手受け取った直後に、突然遊び足りないって言い出して仕掛けてきたから他の同僚と一緒に袋叩きにしてやったにや。

止めを刺そうとしたら逃げられたけど、その時は大分ピンピンしてたから多分生きてるにや」

「ふうん」

ああいう手合いは引き際をよく弁えてるし、何処かで元気にやってんだろ。

「……まいさわさん？」

他に何か聞き出せないかと問いを向けようとしたところで、白音の聲が部屋に響いた。

これは貴方が生きている証。私はそれが嬉しいんです

鎧武者がコカビエルの首を持って消えて暫し、悪魔にさえ現実とは思えない光景が続き呆然とする中、包帯で素肌を隠した女神は東を見遣り呟いた。

「さて、妾も飽いた。

長鳴鳥の声を聞く前に戻らねばな」

その言葉に誰もが安堵の息を吐いた。

素性を知る者はその怒りが己と仲間に向かわなかったことを。

素性が分からぬ者は女神の理解したくない恐怖が終わることを。

「参ろう。

お主の飼い主には、傷が癒えるまで預かると後で遣いを出してやるからのう」

女神の言葉にケルペロスがワンと鳴き、まるで主に付き従うように静かに立ち上がり側へと向かう。

「お主らもじゃ」

そう言紡ぐ女神の言葉に、突如校庭内に30以上の人の形をした塊が姿を顕す。

「な、なに、これ……?」

戸惑うソーナの声に答えてか女神はヒトガタを眺め憐れむように呟く。

「外津の外道に喰われ弔いもされぬ迷い人よ。

主らの苦惱は今宵終わる。

妾と共に在るべき根の国に参るがよい」

その言葉で彼等がはぐれ悪魔に関わり、遺体もなく行方不明者として処理された被害者だとソーナ達は理解し絶句する。

はぐれ悪魔に喰われた者は魂までも食い尽くされていたと思っていたからだ。

認識の浅さを思い知らされ言葉無くすソーナ達の前でヒトガタ達は救いを求めるように女神へと集まっていく。

そして、白音の横で倒れていた舞沢の身体からも白いヒトガタが浮かび上がろうとしていた。

「っ、駄目!!」

気付いた白音の悲痛な叫びにデュランダルが僅かに光を放ち、舞沢から抜け出そうとしていたヒトガタの動きが鈍る。

「止めよ」

抵抗を続けていたところに女神の声が突き刺さる。

「其奴は既に黄泉路へと向かう定めが決まった。

今だその御霊は身体に縛られているが、一時と待たずそれも終わる」

そう言い、女神は初めて白音生者を見た。

「貴様は理を否定するのか？」

あの男イザナギのように、死の理を否定し死者を愚弄するか!!」

封が悲鳴を上げるほどの怒気を放ち白音を濁った瞳で睨み付ける女神。

その瞳に射抜かれた白音の心臓が竦み上がり悲鳴を上げ痛みを訴える。

しかし、白音は痛みを堪え、その視線に抗った。

「お願いします。

ほんの少しだけ、待ってください」

白音は地に伏し、真摯に乞い願った。

「まだ舞沢さんの心臓は動いています。

私に、彼を助ける機会を下さい!!」

痛みを振りきるように叫ぶ白音に女神はほうと僅かに怒気を緩める。

「どうしてもか？」

「はい」

「其奴が、お前が主と仰いだ魔性を殺していてもか？」

なんの感情も見えない問いに空気が凍る。

「…………え？」

「何を言われたのか理解できず硬直する白音に女神は瞳の中の怒りを深くさせ言葉を発する。

「どうした、貴様の意思とはその程度か？」

「言われ、背骨を氷柱に変えられたような寒気を感じた白音は身を震わせながら答える。

「それでも助けます。

「助けて、真実を本人に確かめます」

「其奴が虚言を吐くやも知れんぞ？」

「助けます」

「衝撃的な言葉に驚いた白音だが、それでも本当の気持ちを言葉にする。

「彼ともう一度話をしたい。

「こんなお別れなんて堪えられない。

「伏して答えを待つ白音に女神は軽く息を吐いた。

「…………よかろう。

「どうやらお前以外にも其奴を生かそうとする者が居るようだしな」

「ただしと女神は言う。

「妾に虚ろを吐き、妾に背<sup>理</sup>こうとしたお前には罰を受けてもらう」

そう言うのと白音は右目から焼けるような痛みを覚え、その痛みに声も出せず蹲る。  
「お主の右目は妾が預かる。」

返してはしくばその者を根の国に送ることぞ」

そう最後に告げ、女神は朝日が差し込む前に姿を消した。

~~~~~

「で、それか」

金に近い綺麗な色だった白音の右目は灰色にくすんでいた。

それに対して俺の感想は一言だった。

「お前馬鹿だわ」

「なっ!?!」

「俺が死んだところで何も変わんねえんだよ。」

別に死ぬのなんかとつくに慣れたし、命拾いしても嬉しくもなんともねえんだよ。

第一……」

事実を羅列していたら白音が大粒の涙をポロポロ流していた。

次いでに後ろで黒歌が絶対零度の空気を纏っている。

「あー、悪かった。」

少し言い過ぎた」

微塵も思つちやいないが、こういう時に好き勝手振る舞うと本気でめんどくさいことになる、嫌というほど経験してきたため無難な対処をしておく。

「一応礼は言っておく。」

ありがとうよ」

こういうときはばつが悪そうに謝ってから礼を言えば大体丸く収まるもんだ。

特に、依存しているタイプの女はこれで納得してくれるんだが……

「嘘つき。」

そんなこと、少しも思つてないです」

「……さてな」

クソツ、なんでこう今回に限って統計が外れるんだか。

おまけに黒歌の殺気がかなりヤバイ感じだしよ。

こういう場合、最も話を切り替え易い話題が……って、そういえばだ。

「治療したっていつてたが、よく間に合ったな？」

落ちる前の体感と話を聞く限り、俺の命がその後一時間も持ったとは思えないんだ

が。

本気で疑問に感じていると白音は憮然としながらも理由を答えた。

「……ギャー君の神器で保たせたんです」

「誰だよそれ？」

事前情報にはそれらしい名前はなかったんだが。

「ギャー君は旧校舎に封印されていたんです。」

貴方を救うために封印を壊して引きずり出しました」

「ふうん」

こういう場合、本人か神器がとにかく厄介なのに制御がからきしでつてのが一番あつた傾向なんだよな。

で、俺の治療に役立つとなれば……

「もしかしてそいつ、『停止世界の邪眼（フォービトウン・バロール・ビュー）』の持ち主か？」

「なんで分かったんですか？」

やっぱ当たりか。

「二百年ぐらい前に殺しに掛かった奴が持ってたんだよ。」

なんだよアレ？

フオモールの邪視の王の名前なのに即死系じゃねえとか詐欺だろ」  
お陰で返り討ちにされたんだよなあクソが！

「あのさ、さつきから意味がわからない会話してるんだけど私にも説明してくんない？」  
内心悪態を吐いていると黒歌がそう割り込んできた。

「別に構わねえがよ」

いい感じに誤魔化しが利いてきた手応えを感じ、俺は本題に移る。

「それよりも、日本神話はどうしたんだ？」

国産みの女神まで動いたとなれば既に戦端を切り戦争を始めていてもおかしくない。  
自分が手を下せないことは残念だが、この件は関わることを諦めていたから聖書陣営  
が滅びたって事実さえ知ればそれでいい。

俺の問いに、白音は非常に言いにくそうにしながらも答えを発した。

「何もしていません」

「……Really?」

思わず英語が出るくらい今の言葉が信じられなかった。

「日本神話はコカビエルが倒された後完全に沈黙していたんです」

「……なんでだ？」

動かないはずがない。

奴等は、日本神話の逆鱗に触れているのだから。

本気でいぶかしがる俺に白音はその理由を口にした。

「タケさんが言っていました。」

『釣りは獲物が掛かるまで待つもんだ』と。

おそらく、今日駒王学園で行われる三勢力の和平会談を狙っていたんだと思います」

茶番は終わりにしようぜ。

夏休みに入り人気の無くなった駒王学園を見上げ、サーゼクス・ルシファーは複数の感情が入り交じった顔で呟いた。

「漸く来れたか」

最愛の妹が姿を消して数カ月。

魔王の責務に縛られ陰鬱と激情に揺れる気持ちを抑えながら今日を迎えた。

リアスの身を案じながらも、心の何処かでは既にリアスは生きていないと思っ  
た。

だが、希望を捨てるにはまだ早いと折れそうな気持ちを支え今日を迎えた。

「手懸かりだけでも掴んでみせる」

生きているならどんな手段を講じてでも見付け出す。

死んだというならその下手人をなんとしてでも捕まえてみせる。

そう意気込むサーゼクスに、同伴したセラフォルは声を掛けた。

「気負いすぎよサーゼクスちゃん」

「セラ……」

「折角念願の和平が始まるんだから、もつと明るくしなきや」

今日までの苦悩を間近で見えてきたからこそ明るく励ますセラフオール。

「……そうだね」

和平会談が無事に終われば争いの種は消える。

転生悪魔により人口も増え冥界は最盛期へと向けて舵を切ろうとしているのだ。

此処で控えている暇はない。

「ごめんね」

と、意識を切り替えたサーゼクスに突如セラフオールは謝罪を口にした。

「どうしたんだいセラフ？」

「本当はもつと早く言わなきゃいけなかったんだけど、リアスちゃんについて少しだけ情報が入っていたの」

「……なんだって？」

申し訳なきさそうに謝る言葉にサーゼクスは耳を疑う。

「どうしてそれを今、」

「ソーナちゃんから今回のコカビエルの顛末を聞いた際にその話があつて、正直信憑性が殆んど無かった話だから私が止めていたの」

「……そうか」

藁にもすがる気持ちであった己を省み、サーゼクスはセラフオールの気遣いに感謝した。

「すまない。」

だが、せめて前日には聞かせてもらいたかったな」

「……………ごめんね」

その笑みが無理をしていると気付いたサーゼクスは、相当に酷い情報なのだろうと察した。

「セラ、それは何処からの情報なんだい？」

「日本神話よ」

「また彼等か……………」

サーゼクスは今日まで日本神話とは友好的な関係を築いていると思っていた。

だが、今年に入ってからその確信は大分揺らいでいた。

リアスの失踪から始まり、SS級はぐれ悪魔の黒歌とその妹でありリアスの眷属であった搭城小猫の返還要求に、更には今回のコカビエルの造反に対しても協力を拒んだ上で最終的には独自兵力を投入しての一方的な殲滅。

およそこれ迄の彼等とは一線を画す行いの数々にサーゼクスは彼らこそ界限に蔓延る不穩の種の元凶ではないかとさえ考えるようになっていた。

「彼等はどうしたというんだ？」

こちらに不満があるならば、それこそ言ってくれなければ解らない。

自分達は争いを終わらせ、冥界の繁栄を望んでいる。

だからこそ、対話を望んでいるのだ。

その考えこそ致命的な間違いだとサーゼクスは気付かない。

日本神話は既に問いを放ち、その答えを待ち続けているのだ。

しかし彼等は致命的な思い違いをしていることに気付かないためにその答えを出せ  
ずにいる。

故にこれから始まるのは必然ですらない事だった。

彼等は『若い』故に知らない。

かつて、神さえ安定を知らぬ混沌の時代、小さな島国で産まれた神々が周りからどう  
見られていたのか。

信仰を大陸に広げる気の無い引きこもり？

然して脅威とも取れない小物？

放置すれば何れ消える雑種？

否

彼等のかつてを知る神は彼等の恐怖を忘れていない。

彼等のかつてを知らない神は彼等の不気味さに踏み込めない。

何故なら、彼等は『原初の時代』から変わらないのだ。

彼等が温厚である？

否

彼等は役割を終えて沈黙しただけだ。

彼らこそ人がまだ神を知らない時代から存在し、そして今もなお人の傍らに在り続けるもの。

それ故に今もなお変わらず変わり続けるもの。

その意味を彼等が知るのはすぐであつた。

「とにかく先ずは和平を成そう。」

そして改めて日本神話との対談を行おう」

「ええ。」

外交官としていい結果を引き寄せてあげるわ」

明日への希望を信じ校舎へと向かう二人。

その姿を、小さな者は氷神のように冷えた瞳で見届けていた。

「駒王の地を見守りし土地神より申し上げる。」

魚はすべて魚籠の中に入りました。

後は煮るなり焼くなり存分にどうぞ」

くくく

そうして駒王学園に天使長ミカエルと、墮天使総督アザゼル、魔王サーゼクス・ルシファアが揃い踏み、加えて当時コカビエルと対峙した者の中から代表で参加したソーナ・シトリーと姫島朱乃、アザゼルに同伴した今代白龍皇でヴァーリ、そしてミカエルが参加させた教会の悪魔祓いゼノヴィアと、ソーナの姉でもある外交担当の魔王セラフォル・レヴァイアタンの八名により会談は始まった。

先ずは当時の状況を共有するべくアザゼルより事の経緯が語られようとしたが、それにミカエルが待ったを掛けた。

「アザゼル。」

今会談に当たり日本神話への通知はしたのですよね？」

その質問にアザゼルは僅かに吃り、気まずそうに返答した。

「いや、事を優先していて忘れていた」

「そうですか」

ただでさえある事情により日本神話を刺激したくない状況にあった天界として、その

答えは非常に不味いものだった。

「伝達の不備としてこちらで処理しておきますが、貸しとしておきますよ」

「……解ったよ」

和平締結前に余計な貸しを作ったことに後悔しながら改めて会談を開始する。

アザゼルはコカビエルの暴走により明らかとされた聖書の神の死の開示による混乱と、今後起こりうる他宗教の報復ならびに昨今神話関連に対してテロ行為に走る集団に備え、三大勢力は膠着状態を解消し和平を結ぶべきと呈した。

「天界は異存ありません」

「冥界も同じく」

元より機会を伺っていた両者はアザゼルの提案を肯定し、一先ずは和平の成立が決定した。

「はあ、こんな呆気なく終わるならとっとと終わらせとけばよかったぜ」

緊張状態の維持と余波による小競り合いで散っていった同胞を思いアザゼルはやるせないと息を吐く。

そうした中、セラフォルーが口を開いた。

「それでなんだけど、私から少し提案というか、お願いがあるの。

ソーナちゃん、宜しく」

「はい」

セラフオールの言葉で前に出されたソーナは、事前の打ち合わせ通りコカビエルとの戦闘とも言えない戦いの顛末を語る。

「正直、私は今も理解が及んでいません。

あれほど凶暴だったケルベロスを言葉ひとつで手懐け、恐ろしい呪詛を身に宿し、死者の魂を根の国という場所へと連行した女神と、あのコカビエルを一方的に倒してしまつた首の無い鎧武者について、今でも現実だったのかと疑うほどです」

そう締めくくるソーナにアザゼルは推論を口にする。

「鎧武者は解らんが、女神の方はおそらくイザナミで間違いないだろう」

「イザナミと言うと、日本神話の死者の国を統べるという？」

「ああ。

悪魔と墮天使の所領『冥界』やギリシャ神話の『冥府』と違い、日本神話の地下世界は閉鎖的で余所の神話体系でも殆んど情報を掴んでいない場所だ。

おまけにイザナミは死を操る権限も握ってるって話だ。

万が一があれば相当に不味い相手だが、それだけじゃないんだろ？」

「はい。

コカビエルとの戦いが終わり、その際日本神話より雇われていた人間がイザナミに魂

を連れていかれそうになったのですが、リアスの眷属であった『戦車』の元転生悪魔が阻んだんです。

その際、女神が口にしたんです。

その男がリアスを殺したと」

ソーナの告白にサーゼクスはギチリと爪が食い込み血が零れるほどに拳を握りしめ口を開く。

「これはあくまで僕個人からの頼みと思ってくれて構わない。

イザナミが如何様な意図を持って発したかはまだはつきりしないが、しかし、イザナミがリーアの、妹の行方について情報を握っている可能性がある。

その上、最近になり日本神話が動きを活発化したことも無関係じゃないはず。

可能性の話だけなら日本神話がテロリストと通じている事も在りうるだろう。

もしもの場合、協力してくれないか？」

頼むと頭を下げるサーゼクスだが、漏れかけている『滅びの魔力』と相まり殆んど脅迫と化していた。

「どちらは一向に構いません。

日本神話とは協定がありますが、その場合は冥界に助力すると約束します」

(そうであれば『あの件』もうやむやにしてしまえますしね)

「こちらも問題ない。

元よりテロリストと戦うための和平だ。

協力しないでどうすんだって話だ」

腹の中で黒い算段を立てるミカエルとサーゼクスの藪をつつくまいと了承するアザゼル。

早速どう仕掛けるかと協議を始めようとするが、日本神話はそんな暇を与えるほど鷹揚ではない。

「随分好き勝手言ってくるじゃねえか」

その声が響いた直後、轟音を発して扉が内側へと吹っ飛ばされた。

「今の声は……?」

粉塵が舞うなか、それを割って部屋へと踏み込む影。

「ご機嫌よう聖書の皆々様。

たかが和平一つに何百年掛かってんだテメエ等?」

現れたのはランニングシャツにスカジャン、ハーフパンツにサンダルとおよそ場違いと言うしかない格好をしたタケさんだった。

「お前は、スサノオだと!?!」

「ああ?」

タケさんを確認したアザゼルの叫びにタケさん改めスサノオは不愉快極まりないと悪漢めいた唸りを漏らす。

「デメエよう？」

いつ俺が呼び捨てでいいなんていったよ？」

敵意を通り越し殺意と見紛うほど磨り上げられた怒りに緊張が走る中、それを割る更なる声が乱入する。

「開幕から喧嘩腰に挑むでないわ!!」

スサノオを叱ったのは、夏の陽気など知ったことかと言わんばかりにワインレッドの女性用スーツをガツチリ着込んだ凛とした麗人であった。

叱られたスサノオは不満そうに唇を尖らせる。

「姉貴い………礼儀も知らねえ相手に嘗められてたら主神の沽券にかかわんぞ？」

「お前こそ少しは弁えて振る舞いなさい。」

父親の風評は子に悪影響を及ぼすとニニギが証明したでしょう？」

「む。………確かに」

何処か漫才にも通じるやり取りをする二人にそれまで黙っていたミカエルが会話に割って入る。

「お久しぶりです天照大御神殿。」

建速須佐之男命まで伴つてとは、随分穩やかではないようで？」

正しく尊称も含めて呼べば天照は友好的に見える態度を見せた。

「ええ。

しかし、それも致し方ないのでは？」

と、ちらりとアザゼルを一瞥しミカエルに視線を戻す。

「協定により入るはずの無い黒鳩が妾の守る国に居れば、それはもう張り詰めるしかあるまい？」

「黒鳩……」

烏と嘲られるのには慣れていたが、黒い鳩と言われれば流石にもによるモノがあった。

「それで、まるで宣戦布告でもしに来たような登場だったが、話があるなら聞く用意はあるよ」

日本神話のツートップと云って間違いはないだろう二人を前に、激情の手綱を強く握りながらサーゼクスは問う。

「ええ。

勿論話をしに来ました。

愚弟、例のものを」

「はいよ」

呼び方に物申したげにしながらも須佐之男は持っていた麻布袋をテーブルに乗せる。  
「……………それは？」

僅かに匂う血の臭いに怪訝と問う言葉に、須佐之男は何でもなしに答えを口にした。  
「ついでさつきここに襲撃を掛けようとしていたテロリスト二人の首だ」

## 我達は本気であるぞ

「首……ですか？」

余りに血生臭い土産に若干もといかなり引きながら真偽を疑うセラフオルーの言葉に、天照は然様と薄く笑みを映し述べる。

「先程主等是我達に不穩の影在りと申したであらう？」

故に我等と奸賊共と縁無き証拠として、なにより日ノ本の国に要らん災禍をもたらさうと企んだ報いを与えるついでに下手人の首を土産としたのよ」

そう麻袋の紐を引いて中の品を明らかにする。

「ぐっ!？」

「これは!!」

晒された首の凄惨さに呻くミカエルとアザゼル。

「うぷっ……」

ゼノヴィアが耐えきれずトイレへと駆け込み朱乃とソーナが絶句して場が騒然となる中、ヴァーリはただ無言で見にまわり、下手人と挙げられた首がどちらも知るものであったサーゼクスとセラフオルーは背筋を凍らせながらその名を口にした。

「カテレア？」

「ディオドラ……」

かつて『レヴァアイアタン』の名を争った旧知の存在との壮絶な再会にセラフオールは現実を受け入れきれず、サーゼクスもアスタロト家の若き芽の悲惨な末路に言葉を無くす。

「それと、これは二人が所持していたテロリストの証左だ」

そう言い須佐之男が黒い蛇のように蠢く何かが入った小瓶を二つテーブルに置く。

「そいつは……まさかオーフィスの『蛇』か!!」

『無限』の龍神であり、テロリストの首魁として奉り上げられている存在の末端だと気付いたアザゼルが悲鳴に近い叫びを上げる。

「こちらに進呈しましょう。」

喰らって利用するも禍の団の対策に持ち帰るも御随意に」

神にさえ効果を発揮する神器級の品をあつさり譲渡する天照に、アザゼルはこれが逆に罠ではないかとさえ思えてきた。

「いいのかよ？」

「こいつはお前達にも価値は少なくともははずだ」

「戯け」

アザゼルの問いを須佐之男が吐き捨てる。

「俺達八百万は自然の体現、世界の触覚そのものだ。

態々理を歪めるものなんか欲しがる訳ねえだろ」

馬鹿にするなど苛つきを見せる須佐之男に天照も同意する。

「然り。

我達は国の行方を見守り、その末路を見届けるが存在<sub>理</sub>。

人に抗えぬ理不尽故に此度は腰を上げたが、元来我達は動かぬことが何よりの吉報

よ」

自らの在り様を口にする天照に、突如朱乃が我慢できないとヒステリックに叫ぶ。

「ふざけないで!!」

何が理よ!?

母を見殺しにしておいて何が国の守護者よ!!」

神道に連なる者であった母を神道が殺したと糾弾する朱乃だが、天照は冷徹に言葉

解す。

「当然であろう。

貴様の母は己の過ちを糺さず野垂れ死んだ愚か者なのだから」

「な……………ん……………」

あまりに痛烈な言葉に怒りさえ消し飛ぶ朱乃に、天照は慈悲を掛けることなく切り捨てる。

「お主の母は自らの立場を弁えておきながら、その死地から遠ざかることもなく身を守る備えもしなかった。

そのような愚か者に我等は慈悲をくれてやることはない」

赤から白へと顔色を変える朱乃の思い違いを正すつもりはなく、天照はただ事実を語る。

「お主がどう思おうと私の意見は変わらぬ。

墮天使を愛したこともその胎に墮天使の仔を宿したことも私は咎めん。

が、そうまでしたなら何故日ノ本の国を出て行かないだ？

国に仕えるより墮天使を選んだのなら、国を出ねば命が危ういと分かっていた筈。

野分の海に泳ぎに出るような愚か者に、妾がどうして慈悲を与えねばならない？」

人は弱いからこそ有事に備え、構え、万難を廃してそれで漸く生き物としての起点に並ぶのだ。

「多くに備え、それでもどうしようもないなら私も手を差し伸べよう。

死期の迫る老いた母のために、在りもしない冬の筈を真剣に探す、そんな愚直な愚か者のために筈の一つも生やしてやる程度のもので良いならな」

真剣に生き、理不尽に耐えようという者への細やかな褒美ぐらいは与える慈悲はあると嘯く天照に、朱乃は憎しみを込めて睨む。

「私は貴女達を絶対に認めない!!」

「それでよい」

「え……」

「信じるも信じないも自由よ。」

我達は芦原中国を統一してより今日まで、一度として民に信仰を強要はしておらん。

己の意思で崇め奉るというからこそ、我達は応えるのだから」

なんと言おうと不快一つ買えぬ天照にぎりぎり歯を軋ませ黙り込む朱乃。

「して、黒鳩よ。」

あやつの恨みの根はお主にも咎が有ることは分かっておろうな？」

「……」

「努々忘れるな。」

主が遊び呆けていたからこそ斯様な事が起きるのだから」

黙り込むアザゼルにそう釘を刺すとミカエルに視線を向ける。

「大天使ミカエル。」

此度の件、並びにこれ迄の汝等の態度から凡そ協定を遵守する意思は無いと此方は判

断した」

「それは、」

この先の発言を予想し制止しようとして口を開きかけるミカエルを待たず、天照は日本神話の決定を突き付けた。

「よって、我達が協定の証として預けた『天叢雲劍』並びに『天羽々斬』の即時返還を要求する。

これに応じない場合、天界は日本神話に対して敵対意思を持つものと判断し宣戦布告を申し付ける」

劍を返さぬなら戦争だと言い切る天照に、室内は完全に凍りついた。

## 首を弔う価値は貴様らにない

日本神話による事実上の脅迫の前にアザゼルが声を張り上げた。

「そいつは待つてくれ」

この時、アザゼルは『致命的な過ち』を起こしていた。

「今現在『神の子を見張る者』で神器の所持者から命を奪わずに抜き取る術式を構築している。

『天之尾羽張』の回収は、その神器使いから抜き取るまで待つてくれ！」

アザゼルの過ち、それは名前が酷似している竜殺しに使われた『天羽々斬』と、神殺しに使われた『天之尾羽張』を聞き間違えた事だった。

そして、その剣の所持者は……

「今、なんと申した？」

殺意さえ消えた風の中心で天照が瞳孔の開いた瞳で問いかけ、須佐之男もまた感情が抜け落ちた瞳でアザゼルを見る。

「アザゼルそれは!!」

天津神に隠していた最大の急所を晒され焦るミカエル。

それが、とどめだった。

「薄汚ねえ鳩共が、とと様に何をしたのかって、聞いてんだろが!!!」

直後、駒王学園を中心に極小ながら超高密度の低気圧が生まれ、校舎は内側からの圧力に耐えきれず吹き飛ばされた。

発生した低気圧は渦を巻き竜巻となって荒れ狂う。

「落ち着いて下さい須佐之男!!」

「黙れ」

事を説明しようとしたミカエルの腕が突然膨張し皮膚を破って吹き飛ぶ。

「ギャアアアアアア!!」

内側から爆ぜる激痛に絶叫を上げるミカエルに対し、暴風に晒されながらも微塵の揺らぎもなく立ちその目を太陽のような輝きを湛えた瞳へと変貌させた天照は告げる。

「最早貴様等に掛ける言の葉はない。

根の国など生温い。

我等を和魂<sup>本</sup>当<sup>当</sup>に<sup>怒</sup>荒魂<sup>怒</sup>へと変<sup>せ</sup>えた事<sup>た</sup>を悔いて消えろ」

赤い瞳がミカエルを貫き、直後ミカエルは腕と同じように全身を膨張させ紅い花火となった。

「なんだよ……これは……?」

暴風圏から辛うじて逃げ仰せられたアザゼルはミカエルの最期に呆然と呟く。

天照はいつの間にか集った黒い鳥の群れに命ずる。

「八咫よ往け!!」

『戦を始める。』

此度の敵は今現在葦原中国に蔓延る混迷の根本。

敵は我等を愚弄し、神産みの父を害した外道である』!!」

天照の怒気を纏う神託を受け、足が三つある異形の鳥が四方へと散る。

もはや戦争を回避する術はない。

戦争を回避するための会談から三勢力崩壊の引き金が落ちたことに絶叫をするアザ

ゼル。

「一体なんで、なんでこうなるんだ!」

「黒鳩よ」

アザゼルの慟哭など知ったことかと言うようにゾツとする声で天照は告げる。

「月が一度満ちるまでを猶予とする。

間に合わずはそち達黒鳩郎党の首を以て虚ろの責を償え」

そう告げ嵐が収まりきる前に天照は消えた。

「月が満ちるまで……一月も無えじゃないか……」

天照の怒りを鎮めるために口にした術式は数年掛かって漸く概要が完成したばかり。与えられた猶予では間違ひなく間に合わない。

自ら墮天使の首を絞めてしまった現実にどうしたらと途方に暮れるアザゼル。

そうした中、嵐が漸く収まり、周囲を綺麗さっぱり吹き散らして僅かに落ち着いた須佐之男が姿を顕す。

しかしその姿は先程までの現代装束ではなく、白い袖と裾の長い伝承に語られる装いとなっていた。

「姉貴、先に行きやがったな？」

舌を打ち、そして強襲を仕掛けてきたヴァーリを軽く打ち払った。

「止めるヴァーリ!!」

「止めるなアザゼル!!」

禁手化を発動し白い鎧を纏ったヴァーリは喜悦に満ちた声で吼える。

「最早戦争は避けられないんだ。」

ならば、日本神話最強の武神を仕留める機会を逃せる筈がない!!」

建前を押し出しながらも戦いたいという本心を隠しもしないヴァーリ。

対して須佐之男は一切の感情を宿さぬ瞳でヴァーリを見上げ、呟いた。

「俺を討つだど？」

蛇だか蜥蜴だか知らねえが、爬虫類が俺と戦うだと?」

戯けと須佐之男は吐き捨てた。

「地に臥して野垂れろ」

直後、ヴァーリに異変が現れる。

「があっ!?!」

突然心臓に激痛が走り胸を押さええて苦しみ出す。

『ヴァーリ!!』

宝珠からアルビオンが悲鳴を発したが、ヴァーリは答えることが出来ないまま大地へと落下した。

「ごっ、がはっ!!」

禁手化が解除された事を意に介す余裕もなく、大地を掻き筆りながら壮絶な表情で必死に呼吸をしようと足掻くヴァーリ。

「止めろ、ヴァーリを殺さないでくれ須佐之男!!」

ミカエルの理不尽な死に続き養子にも等しいヴァーリの無惨な姿を見せ付けられ嘆きの悲鳴を上げるアザゼルだが、須佐之男は一言で切り捨てた。

「そう願う親や子や友の前で、お前は幾人神器使いを殺してきた?」

それが、ヴァーリが死ぬ前に聞いた最後の言葉だった。

「あ……」

呆気なく絶命したヴァーリ息子に刻まれた壮絶な貌にアザゼルは力なく膝を突く。

天界の統括者である天使長と歴代最高と謳われた白龍皇を羽虫を払うより軽く葬った二柱の神の存在に、アザゼルは心が折れた。

「頼む、教えてくれ」

自分達も後を追うだろうとの確信から、だからこそせめて一人でも逃がすためにその力の正体を知ることを選んだ。

「ヴァーリをどうやって殺したんだ？」

二柱が強大な神であることは知っていた。

だが、ミカエルとヴァーリを鎧袖一触に屠る程とは聞いていない。

それ以前に、それが叶うというなら何故今日まで悪魔がのさばる事を許容してきた？

何より、今の時代に神はその力の多くを『科学に奪われている』。

疑問が渦巻くアザゼルに、瓦礫の中から這い出してきたゼノヴィア他生き残りを視界の端に捉え須佐之男は答えた。

「気圧を下げた」

「……気圧？」

「知らないか？」

生物の血液の中の酸素は気圧0の状態まで下がると血の中で剥離して気泡となる。  
あの蜥蜴は心臓に血中の気泡が詰まって窒息して死んだ」

「……」

アザゼルは耳を疑った。

ヴァーリの死因もそうだが、何より『神が科学を利用した』事が理解出来なかった。  
神とは不確かな存在でなければならぬ。  
理解の及ばぬもの。

超常の奇跡と人が崇めるからこそ神は生まれ力を持つ。

だが、須佐之男は自らを貶める『科学』<sup>神殺し</sup>を肯定し振るつたのだ。

なにより、

「気圧って、お前は『台風』の具現じゃないのか!？」

何故『台風』の神が『気圧』を操作できるのかアザゼルは理解できない。

そんなアザゼルに対して須佐之男は逆に不思議そうに問う。

「お前、野分がどう生まれるか知らないのか?」

「……は?」

「海で生まれた低気圧が渦を巻いて野分は育ち膨れ上がりながら国を走る。

この国では十の頃には学舎で習うことだぞ?」

「そうじゃない！」

そうだからといって、お前が気圧を支配する理由には……」

ならないと叫ぼうとしたアザゼルに、須佐之男は獯猛に笑い宣う。

「日ノ本の国の民はそう信じたからだよ」

「は？」

「野分を起こすは俺の務め。」

野分が起きるのは気圧が理由。

ならば『須佐之男は気圧を操れる』。

日ノ本の民は、俺を崇める民はそう信じた。

だから『俺の権能は増やされた』

ここで一つ雑談を挟もう。

ヨーロッパで著名なる科学者であるニコラ・テスラという者が居る。

彼は交流電流を科学し、その成果として落雷を制御せしめた。

その結果、ギリシヤの神ゼウスを始めとした雷神は神性を貶められ僅かな信仰さえも

完全に失う羽目になった。

だからこそ、須佐之男の言葉はあまりにも有り得ない異端なのだ。

「お前ら、頭がおかしいよ……」

神だけじゃない。

科学を肯定しながら、その上で神を肯定し信仰を失わないこの国が理解できないと、アザゼルは生まれて初めて『理解の及ばぬ未知』を知り、『理解出来ない恐怖』を知った。

「で、今度はテメエらか?」

そう言うのと、畏れながらも殺気立つサーゼクスに視線をくれる。

「リーアを返せ」

最早交渉の余地は無いと『滅びの魔力』を纏い迫るサーゼクスに、須佐之男は殺気を霧散させる。

「お前の妹なら首だけなら無事に残ってたが、そいつでいいなら後で持っていくぞ」  
怒りと混乱とで冷静な判断が出来なかつたは言い訳にさせない。

だからこそこの状況で、戦争を止めるよう訴えず同盟相手の助命を乞うでもないサーゼクスの態度に相手にすることの無駄を悟り、隠すことなくそう言う。

そしてそれは、サーゼクスの籠を外すに十分な言葉であった。

「殺してやる」

『超越者』と呼ばれる由縁である『滅びの魔力』そのものへと変貌する。

気が付けばアザゼルとヴァーリの姿は無い。

遺体を弔い僅かな存続の目に懸けるため冥界へと逃げ帰ったのだろう。

賤しいとは思わず賢明と賛して須佐之男は問う。

「そいつは宣戦布告と受けとるが構わないな?」

「聞くまでもない話だ!!」

殺意に吞まれるまま襲いかかるサーゼクスだが、須佐之男は意に介さず告げる。

「追い返せ『国之狭霧神』」

そう口にした直後、サーゼクスを囲うように白い霧が視界を塞ぐ。

「無駄なことを!!」

『滅びの魔力』を全方位に放ち霧を吹き払うサーゼクスだが、霧が晴れた先に広がったのは崩壊した駒王学園ではなく冥界の荒野であった。

「……!!」

まともに相手にもされなかった事を理解しサーゼクスは声にならない怒りの咆哮を上げた。

「夢……じゃないんだよな?」

あり得ない展開のバーゲンセルにどうしたらいいか解らなくなったゼノヴィアがそう漏らしていると、須佐之男が近寄る。

「ひい……」

「自分も白龍皇のように殺されると思ったゼノヴィアが尻餅を搗いて情けない悲鳴を上げる。」

「怯えるな。」

「お前の剣に免じてなにもしねえ」

「え？」

「ただし、お前達の統括者に対して一つ言付けを受けてもらう」

「そう言う須佐之男は言付けの内容を口にした。」

「日本神話は今回の戦争の後、人間社会への干渉はこれまで通り最小限に留まる。」

「我らへの無意味な期待は寄越さぬよう。とな」

「それは……」

「勝つて天界と冥界を滅ぼす結果になろうと聖書陣営の所持するものに関する権利を主張することはないと、そう言う須佐之男が理解できず困惑するゼノヴィアに、つまらなそうに述べる。」

「俺達日本神話は日ノ本の国の行く末を見守る以上の目的は無い。」

「そしてその果てが滅びでも他国に飲み込まれてしまうでも、それが民が選んだ道の果てなら構わない」

「……」

「俺達は自然そのものだ。

荒ぶる姿も慈しみ栄えさせるもこの星の流れのままにある。

それをどう捉え、どう扱うかはお前達が決めることだ」

だが、と須佐之男は背を向けながら告げる。

「聖書の鳩は例外だ。

奴等はやつちやあいけねえことをやった。

ならばこそ、俺達は報いを受けさせる。

俺達に喧嘩を売り付けた蝙蝠も同じだ」

そう言い残し、須佐之男もまた駒王学園から姿を消した。

弱点が分かってるなら突くのは当然でしょう？

その日、世界中の神話体系に衝撃が走った。

『日本神話主神「天照大御神」の名に於いて宣言する。

今日この日を持ち、我等日本神話は聖書陣営の一角、天界との戦争状態に突入する。  
この戦に停戦は存在しない。

各陣営にはどちらかが絶滅するその結末を見届ける事のみを望むものである』

神話の異端、小さな島の修羅、古き神の生き残り等と言われどの勢力とも一定の距離を保ち続けた日本神話が間借りなりにも世界最大規模を誇る神話勢力を相手に戦争を起こしたのだ。

それも、単独で、である。

それに対して各陣営の感想は二つに分かれた。

「誰の手も借りぬなど奴等は死ぬ気か？」

「いや、何か秘策があるのかもしれない」

一つは独力のみで戦うことに異様さを覚え戸惑う声。

これは主にヨーロッパを始めとした日本神話から遠い陣営から発せられた。

「ああ、遂に怒らせたか」

「奴等が動くなら、結末は想像するまでもないな」

もう一つは聖書陣営の終焉を確信する声。

これは仏教や道教を始めとした日本神話に隣接した陣営である。

そして、その後更に投げられた檄文により世界は更に揺れた。

『日本神話は天界の大天使ミカエルを虐殺し世界を揺るがす逆賊と相成った。

これに対しサーゼクス・ルシファーは冥界陣営を代表し、同盟相手である天界を援助するため断腸の思いで日本神話の討伐を決定した。

各陣営はこれに続き、世界の安寧の維持のために協力を求める』

『建速須佐之男命より警告する。

この戦に首突つ込むならどちらに与しようが例外なくぶちのめす。

戦後の冥界の権利は好きにさせてやるから座つて見てろ』

片や世界の安寧のため共に立ち上がろうと訴えるサーゼクス、片やおこぼれが欲しければ余計な茶々を入れるなど釘を刺す須佐之男。

完全に真逆の内容を同時に送られた各陣営だが、その結論は完全に一致していた。

「なん、だつて?」

檄文の送付から数時間後、送り返された各陣営からの返答にサーゼクスは耳を疑つ

た。

「誰も動こうとしない…?」

どうしてだと思わず声を荒げるサーゼクス。

「彼等はこの世界がどうなつてもいいというのか!!」

天界が落ちれば聖魔のバランスが崩れ世界は開闢以前の混沌へと戻る危険さえ有るというのに、それをただ座して眺めようと云う各神話への怒りを抱く。

いや、彼らもまた世界の混沌を望んでいるのかもしれない。

信仰の零落を良しとせず、信仰を取り戻すため再び神話が相争う時代を望んでいるのだとサーゼクスは確信した。

「お前たちの思い通りにはさせない…」

日本神話を誅戮し、我等がある限り世界は恒久的に平穩の時代へと向かうのだと知らしめてやると拳を握るサーゼクス。

「大変だサーゼクス!!」

軍備の再編を急ごうとしていたサーゼクスだが、転がり込むように執務室へと飛び込んできたファルビウム・アスモデウスの声によりその意識は逸らされた。

「どうしたんだファルビウム?」

日本神話の侵攻が開始されたのかと警戒をするサーゼクスだが、彼は日本神話を全く

理解していなかった。

「天界が、落とされた」

それは、天照の発した宣戦布告より僅か八時間後の出来事だった。

~~~~~

天界を構築する七つの階層の内六つは今、地獄と言うに相応しい様相と化していた。

一番下の階層では角を生やした巨大な蛇のような恐ろしき存在が穢れを振り撒き縦横無尽にのたうち回っていた。

その一つの上の界層では数多の小鬼を従えた首しかない鬼が穢れを放ち男を殺し女を犯していた。

更にその上の界層では幼い外見の男の天使が太い柱に全裸で括られその身をなぶるように白い蛇が肌の上を這い廻りながら穢れを満たしていた。

その上の界層では人の上半身が背中が繋がった異形の存在が手にした弓と剣と斧を振るい屍山血河を作り赤い地獄と変えていた。

更にその上では米粒よりも小さな羽虫が階層中を満ち満たしそこにいる全てを喰らっていた。

そして最後に、最上階層のすぐ真下は牛の頭を持つ魔神が破壊の限りを尽くし終え何も残ってはいなかった。

「ああもう、姉上は彼等の封を解いてしまつてどう始末を付けようというんですか？」

最上階層にて足元の地獄を作り出した者達を率いていた男神は、ノートパソコンのキーボードを叩きながら神経質そうな声で独り言を続けていた。

「姉上の怒りも解りますし私も腸が煮えくり返るのは同じですが、朝敵ばかり解放しろなどと間違いなく後先考えてないでしょう？」

いや、実盛神は朝敵と言うには誤弊がありますね。

ともあれ困るんですよ。

彼等を御すなら私の権能が適切なのは理解しておりますが、ですが月の運行が一秒遅れるだけで天体にどれ程悪影響が及ぼされるか解つておいででしょうに。

また残業ですか？

七万時間の残業に更に二億ほど追加しろと？

ええ。ええ。構いませんよ？

残業万歳ブラック企業は私の憩いの場であり煙草一つ吸う暇もなく仕事をするのは楽しいですからね」

途中から愚痴なのか錯乱しているのか判断がつきかねる台詞を垂れ流す七三分けの

髪にスーツと眼鏡という日本のサラリーマンのテンプレートを身に纏う男神がノートパソコンで何かを打ち込み続けていると、突然背後で奇声上がる。

その声の主はミカエルより『システム』を守るよう言い渡されていた大天使ガブリエルであった。

しかし今の彼女は瞳の向きが不揃いになり自らの爪で身体中を掻きむしり血だるまとなりながら奇声を上げる狂人と成り果てていた。

「もう結構ですよ」

そんなガブリエルを一瞥もせず男神が言うと、ガブリエルは狂った様子で笑いながら『システム』へと頭を強打する。

何度も打ち付ける内に荘厳な気配を湛えていた『システム』に剥がれた皮膚が張り付き飛び散った脳しように汚し尽くされていく。

やがてガブリエルが絶命し、大天使の体液で穢れたシステムに対して男神：月読命は回収した天羽々斬を無造作に振り下ろす。

たったそれだけで『システム』は真つ二つに切り捨てられた。

呆気ない結末に月読命は眼鏡を軽く上げて酷評した。

『聖櫃』を基とした自慢の硬度も穢れで汚してやれば、刃を削られたなまくらの一振りでも簡単とは…

聖書の神は天界に敵が入れないとでも思っていたのでしょうか？」

あまりに杜撰。

と評価するまでもないと切り捨てると、目的のものが詰まった麻袋を担ぐ。

「さて、天羽々斬は刃引きされ、天叢雲は折れてましたが、天目一箇神であればどうにかなるでしょう」

そう言うのと早急に引き上げて仕事に戻らんと、階下で久方ぶりの自由を存分に味わんと暴れ続ける崇神を捕らえに向かった。

## 神は死しても不滅である

「何もしない……ですか？」

取るものも取らず急ぎヴァチカンへと舞い戻り事態を報告したゼノヴィアは、代表として話を聞いたヴァスコ・ストラダー枢機卿の言葉に思わずオウム返しに問いを重ねてしまった。

「ええ。」

彼等の破滅は主の導きそのものですから」

にっこりと微笑むストラダー。

『盗んではならない』。

彼等は日本神話から宝剣を盗み、神器へと仕立て上げた。

主の発した言葉を守れぬ僕にどうして我等が救いの手を差し伸ばさねばならぬのですか？」

「それは……」

天使だからと言いかけたゼノヴィアに先んじストラダーは告げる。

「戦士ゼノヴィアよ。」

これは試練なのです」

「試練」

悲痛に顔を染めながらもストラダーダは天を見上げ天井の絵画を視線でなぞりながら語る。

「主は身罷られ、最早地上に主の愛は無くなってしまったのですか？」

いいえ。

主は居られずとも、多くの言葉、多くの教えを残していただいております。

そう、主の遺された愛は確かに地上に残っているのです。

我々がやるべき事は主の遣いを守ることではなく、主の遺された愛を守ることです」

「遺された愛を……」

「そうです。

大地には未だ愛を知らぬものが数多く居る。

彼らが道を外さぬよう、私たちは主の遺された愛を以て彼等を導かねばならぬのです」

ストラダーダの言葉は未来を見据え、その先に居る多くの迷える子羊達を憂っていた。

「間違えてはなりません戦士ゼノヴィアよ。

私達は主の代行。

暗き道を照らし主の愛を伝えるのがその役割なのです」  
戦うばかりが役割ではない。

寧ろ、真に成すべきは主の愛を必要とする者に教え、その愛を後世に正しく伝えることなのだ。

「……はい」

ストラダーの教えに強い感銘を抱いたゼノヴィアは改めて教会の剣であることを誇りと胸に刻む。

「ですが戦士ゼノヴィア。

分かっていると思いますが……」

「勿論です。

主の事は、誰にも言いません」

天使達とやっている事そのものは変わらないだろう。

だが、この大地は既に愛無き世界なのだと知らずともよいことなのだ。

それは教会を守るためではない。

神を信じ、その愛を守ろうとする信者の愛を守るために必要なことなのだ。

「君には辛い試練となるだろう。

だが、君は一人ではない。

辛い時はいつでも頼ってくれ。

同じ試練を歩む者として、必ず力になろう」

親身にそう言うストラーダにゼノヴィアは心から感謝を伝えその場を辞する。

そうして一人になったストラーダは、椅子に深く腰を据えて小さく呟いた。

「主よ、私の中の悪魔と戦う力を…」

ゼノヴィアの話聞いた直後、ストラーダは真実を秘するためゼノヴィアを亡き者にせねばと考えてしまった。

しかしストラーダはそれこそ己の試練なのだ気付いた。

より多くの者の事を考えれば、今すぐゼノヴィアを殺してしまうことは間違いではない。

だがそれは余りにも独善であり、なにより多くのために一人の敬虔な信者を貶める行いを神は許しはしない。

例え主が亡くなっていても、ストラーダの信仰はストラーダ自身を赦さないのだ。

主の教えに背かぬため、ロザリオを手にストラーダは己の中の悪魔を祓うため一心に神の言葉を口にし続けた。

~~~~~

天界が落ちたという報は上級貴族達へも伝わり、そのため『大王派』の筆頭ゼクラム・バアルの重い腰を上げさせる事態となった。

「この事態、どう収集付けるつもりだサーゼクス？」

日本神話は危険だとゼクラムはサーゼクスに釘を刺していた。

ゼクラムが知る限り、日本神話の武力はインドに遠く及ぶものではないが、その精神性は必要がない限り近寄ることを避けようと思うほどに異端であった。

「いや、問題は無いはずだゼクラム」

「僅か八時間で天界を陥落した勢力相手によくほざく」

現状は悪魔こそ至高の存在と信じるゼクラムにさえ猶予など無いと思わせるのに、何故そうまで言えるのか。

それが虚勢ならわからなくもないが、しかしサーゼクスにはそれ以外も含んでいるように見えた。

「日本神話は宣戦布告前、会談に乗り込んだ時点で既に天界に攻め込んでいたと考えれば究極的に無理はなくなる」

「……成程」

会談から宣戦布告迄には一日以上間があった。

日本神話がその事実を外に漏らさぬためにミカエルを討つたと考えれば、確かに辻褄は合う。

「だが、長く見積もっても48時間だ。

貴様を含めた冥界の最大戦力を投入すれば同じことは可能だろう」

「それと天界には大量の魔素が満たされていた。

相手の弱点を突いた上で反抗の暇を与えずに成したから可能な訳で、魔素が通じない

冥界ならば切り札も通じない」

「故に、地力で勝てる冥界に敗けはないと?」

「そう言うことだ。

あの正体の分からない神格達はおそらく日本神話の切り札だ。

奴等さえ退ければ残る懸念はスサノオだけだ」

サーゼクスの考えは半分は正しい。

日本神話は天界が苦手とする呪いを主軸として電撃戦を以て即時平定を成してみせた。

だがしかし、切り札と想像した崇神は崇神の中でもまだ大人しい存在ばかりであり、切り札どころか主力の選択肢の一部でしかない。

「それに日本から冥界に繋がる門は全て閉ざしている。

入り込もうとすれば即座に感知できる」

そう言い切った直後、来客を告げるベルが鳴った。

「セラか？」

ゼクラムが来客中に来そうな心当たりが他になくそう呟いてから、彼女を最後に見たのは何時だったかと頭を巡らせていると玄関が何やら騒がしくなり、そしてその犯人はすぐに応接室へと入ってきた。

「よお、サーゼクス<sup>がきんちよ</sup>。

約束果たしに来たぜ」

それは最初に見た時同様スカジャンを羽織った姿の須佐之男であった。

「貴様、どうやって冥界に入ってきた!？」

日本神話の侵入を確認した時点でサーゼクスに報が飛ぶよう指示を出していたにも関わらず、須佐之男は報が届くより先にサーゼクスの屋敷へと入ってきた。

怒りと警戒がない交ぜになるサーゼクスと、この状況にありながら単独で敵首魁の元に現れたその神経が理解できず困惑するゼクラムを尻目に、須佐之男は手にしていた桐の箱をテーブルに置く。

「じゃあこれで約束は果たしたぞ」

「約束だと?」

一体何の事だと問うゼクラムに、何でもなさそうに須佐之男は言う。

「言われたからな。

妹を還せって。

だから返りに来た」

「妹……まさか!?!」

頭一つ分の大きさの桐の箱にゼクラムは中身を察し後ずさる。

「安心しろ。

敵とはいえ死者には礼儀を払うのが日本式だ。

ちやんと焼いて骨だけにしてある。

そつちの流儀は知らんから日本式の骨壺に詰めさせたが、問題無かったか?」

そう問いを放った直後、『滅びの魔力』が須佐之男を貫き壁を壊して外へと吹き飛ばした。

「サーゼクス!?!」

不意打ちをかましたサーゼクスに驚きの声を上げるゼクラムだが、サーゼクスは耳を貸した風もなくくつくつと笑いだした。

「……初めてだ。

誰かを、こんなにも憎いと思ったのは初めてだ!!」

咆哮と同時に『滅びの魔力』の塊となり、吹き飛ばした須佐之男を追って屋敷を飛び出した。

一方吹き飛ばされた須佐之男は数十キロ程吹き飛ばされ、何もない荒野で着地すると全く堪えた様子もなく残念そうに頭を掻く。

「まあたやつちまったみたいだな。

姉貴の時といい、なんでこう気を利かせると相手を怒らせちゃうんだか……」

須佐之男自身、挑発の意思は全くなかった。

単に断るだけの理由がなかったから約束と見なし、しかも態々必要もないのに埋葬の手間も省けるようにしただけなのだ。

それが相手の神経をこれでもかと言うほど逆撫でしたわけだが。

「まあいいや。」

最後の義理も果たした。

後は、喧嘩の始まりだ」

そう獐猛に笑みを刻むと須佐之男の背後を広範囲に霧が押し隠す。

「野郎共!!」

久方ぶりの祭りの始まりだ!!

存分に暴れてこい!!」  
その声に答え、霧の中から軍勢が現れた。

死ぬ前に覚えておけ。日本の神は二つの顔があることを。

招来させた軍勢の中に居る筈なのに姿の见えない神に気付き、須佐之男は先頭に立つ武神に問う。

「ミカ、姉貴とムナはどうしたよ？」

ミカと呼ばれた武神、建雷命はうんざりした顔で答えた。

「大神様と大己貴殿は外津神共が騒がしいとの事で残られたぞ」

その言葉に須佐之男は心底不快そうに吐き捨てる。

「けつ、どいつもこいつも強突く張りが。」

欲しいもんはくれてやるってんだから、大人しくしてりやあいいものを」

「然もありなん。」

奴等に辛酸を舐めさせられた者達故に自ら戦陣を望むのだろう」

「気持ちには分からんでもないが、だったら最初から自分達で戦を起こせてんだ」

「それと、月読殿担当の一部の荒神が再封印を拒んでいるため鎮圧に主力の何柱が引き抜かれていったな」

「兄貴はまあ……仕方ないな」

一年の半分は遊んでいられる自分に比べ、月読命の就業時間は新月の一日以外休みが存在していない事を考えれば多少の譲歩もする。

「で、最終的に何人連れて来れたんだ？」

見渡す限り神は一握りで、殆どは時代も格好もそれぞれ違う元人間の武者や兵隊達の姿に加え異形の妖がちらほら。

「天津四柱、国津三柱、崇神二柱、それから根の国より武士が八千、侍が一万四千、靖国から帝国陸軍が六千、帝国海軍千、それと裏京都から二百が参列している」

「三万弱か。随分少ないな？」

「希望者がこの百倍を越えたから篩に掛けた。」

「狭霧神二柱でもこの数以上は難しい故にな」

「日の本の民は相変わらずの戦狂いか」

「俺達がそうだからな」

「違いないと須佐之男は建雷命から受け取った剣を肩に担ぐ。」

「ミカ、総大将は任せるぞ」

「俺がか？」

「俺は前で暴れる方が性に合う。」

それに、」

見据える先に、『滅びの魔力』と成ったサーゼクスの姿を捉え告げる。

「痲癩起こした餓鬼は殴らんと気がすまねえ」

そう言ううと大地を踏み碎いて跳躍、迫り来るサーゼクスへと斬りかかった。

「……あいつはいつもこうだ」

自分勝手に振る舞う日本神話一の乱暴者に頭を抱えながらも、建雷命は己の役割を  
意識を切り替え号令を発する。

「全体に告ぐ!!」

我々は今より殺戮に酔う荒神となる!!

来るものは殺せ!!

逃げるものも殺せ!!

この戦に倅いは無し!!

目についたものすべてを殺し根切りをもって日ノ本の国を篡奪せんとした事の報い  
を与える!!」

建雷命の檄を聞き兵達が応じる声で大地を震わせる。

「全軍、進め!!」

サーゼクスを追うように展開を始めたおよそ二百の冥界の軍を目指し、日本神話が関

の声を上げながら進軍を始めた。

眼下に駆ける日ノ本の兵に先じてぶつかり合うサーゼクスと須佐之男。

『滅びの魔力』を弾丸のように射ち出すサーゼクスに対し須佐之男は十束剣を振るってそれらを切り払う。

「滅びと言うから警戒したが、成る程、それなりに興味深い」

切り払った飛沫が服を掠り消滅させたのを見て感心する須佐之男。

「調子に乗るな!!」

嘗められていると感じたサーゼクスは怒りのまま『滅びの魔力』を集束させた光線を放った。

「そいつはよろしくねえな!!」

直撃を避けるため身を翻して射線から外れるもサーゼクスは放射を続けたまま須佐之男めがけ風ぎ払う。

「せい!!」

避けられないと判断した須佐之男は剣の先だけを気圧を下げた状態にして一閃。

振り抜かれた剣先が急な気圧の変化に耐えきれずかまいたち現象を起こし、擬似的な空間断裂を引き起こして『滅びの魔力』を遮断した。

「なん……」

「権能込みなら今のぐらいは払えるか」

驚愕するサーゼクスに頓着する様子を見せず、今の結果を冷静に分析する須佐之男に、サーゼクスは益々怒りを募らせる。

「私を甘く見るな!!」

射撃が通じないなら近距離だと『滅びの魔力』を剣のように保ちフェンシングの要領で斬りかかる。

「西洋剣はあんまり得意じゃないんでな!!」

正面から来るサーゼクスへ十束剣を唐竹に降り下ろす。

実態を持たない『滅びの魔力』と化したサーゼクスに物理的な攻撃は無意味とそのまま受けると、その予想に反し十束剣はサーゼクスの身を切り裂いて燃えるような痛みを与えた。

「がああっ!!」

咄嗟に魔力を全方位に放つと、堪らず下がった須佐之男に向けて叫んだ。

「何だその剣は!?!」

聖なる力にも屈しない滅びの魔力たる己を切つてみせた剣をあり得ないと叫ぶサーゼクスに、須佐之男は剣先を突きつけながら悠然と嘯く。

「こいつは『布都御魂』」

日本神話の中でもとびきりヤバイ神剣だ」

ひゆうと一振りしながら滔々語る。

「元々は単に切れ味のいいだけの剣だったんだが、信者があれやこれやと信仰をドカ盛にしてくれやがったもんだから今じゃあ『斬った』という事実を押し付けるとんでもねえ代物になっちゃまった」

「斬ったという、事実だつて？」

「そう。」

「雲だろうと風だろうと炎だろうと、こいつが斬れば『斬った』という事実が優先され、形があるうとなかろうと切断してしまうのさ」

「なんだ……それは……」

それはもう反則なんて次元ではない。

世界の在り方を構成する『概念』そのものではないか。

その恐怖にサーゼクスは叫ぶ。

「何故だ!!」

どうしてなんだとサーゼクスは叫ぶ。

「何故、それほどの力が在りながら世界の平穏を乱すんだ!」

争いの無い世界こそ全ての者が目指すべき世界だと訴えるサーゼクス。

「戯け。それこそが貴様の傲慢よ」

だが、その主張に対し須佐之男の目はこれ程に無いほどに冷えきったものだった。「平穩などという幻想に縛られた愚か者め。」

よく聞け。

世の理は常に強者によつて成立するものよ。

貴様のそれはただの憐憫。

己が何より強いと盲信し、他者を見下し愉悦する浅ましきお前の本性よ」

「なんだと……!!」

一方的な詰りの言葉に二度激怒するサーゼクスだが、その口が開くより先に須佐之男の言葉の刃が突き刺さる。

「ならば何故妹を放逐した？」

「それ、は……」

「真に妹を想うなら、厭われようと妹の傍に信に足る己の従僕を配すべきだった」  
「違う!!」

否定するサーゼクスだが須佐之男は赦さない。

「お前は常にこう思っていた。」

『如何な事態であろうと、妹が己が威光をちらつかせれば万事ことは無しと終る』と

な

「……」

反論しようとするも、意思に反して喉は微かに震えるだけ。

「それがお前の傲慢よ。」

確かにお前は弱くない。

この俺に遊びを無くそうと思わせるだけの傑物よ。

だが、力に反してその性根は童にも劣る。

愛を謳いながら己が悦に浸ることのみを由とする浅ましき餓鬼。

それこそお前の正体ぞ」

「違う、違う違う違う違う違う!!」

私はリーアを愛していた!!

だからこそ、彼女の夢を遮るまいと」

「そうして己が領地と嘯く町で死んだことに気づくまで三月も放置したと」

いつそ愉快だと言うように暗い笑みを浮かべる須佐之男。

「あ……………ぐつ……………」

どんな言葉も現実が軽く切り捨ててる。

「お前は思い違いをした。」

我が日ノ本の国が平穩だと？

愚か者め。

日ノ本の国が平穩である時、それは乱が起きたその時よ  
争いあるからこそ日本は平穩であると須佐之男は宣う。

「日ノ本の国は常に戦で燃えねばならぬ。

弱き胤を間引き、強き胤を次代に継がせることが日ノ本をより強くした。

日ノ本の国が五千を越えて今もなお中津国より立ち続けたるはそれが理由よ。

そして今もそれは続いておる。

そのような事も分からぬ盲者であつたからお前は妹を死なせたのだ」

貴様の怒りは見識の浅さが招いたただの八つ当たりだと詰る須佐之男に、サーゼクスは今度こそ理性を捨てて死力を尽くしても殺してやると殺意を渦巻かせる。

が、同時に頭の片隅で何かがおかしいと頭の中のほんの僅かに残つた冷静な自分が必死に警鐘を鳴らす。

「お前は、誰だ？」

今更問うまでもない問いだ、問わねばならぬと訴える予感に従いそう問いを放つと、須佐之男はどうしてか愉快そうに笑みを刻む。

「ほう？」

ただの愚昧と思えばほんの少しは目が肥えていたか」

そう愉快そうに口を開くと須佐之男は言う。

「俺は須佐之男であると同時に父伊弉諾が禊残した穢れよ。

海を荒らし病を統べる須佐之男命の荒御霊なり!!」

剣を肩に担ぎ、堂々とそう名乗った。

「荒御霊……?」

「二重人格なの、か?」

野粗ながらも神らしい神格を纏っていた時とは打って変わる禍々しさに満ちた気配を放つ今の須佐之男に、戸惑いの声を漏らすサーゼクス。

その言葉に須佐之男は不愉快だと鼻を鳴らす。

「貴様の尺度で俺を計るか無礼者め。

だがまあよかろう。

これからお前は五体を刻まれ朽ち行く冥界の最期を見届けねばならぬのだ。

多少の無礼は流してやるが情というものよ」

そう言った直後、須佐之男は一陣の風となりサーゼクスの懐に潜り込んでいた。

「あ、」

「先ずは右の腕からだ」

劍が振り抜かれ、サーゼクスの右腕が宙を舞った。

## 修羅と逝き、羅刹と死ぬが日本の兵（つわもの）よ

上空でサーゼクスの腕が切り落とされた頃、地上でもまた火蓋が切られていた。

しかし、状況は展開した悪魔達に日本神話の兵が撃ち抜かれる一方的なものであった。

「弾幕を集中しろ!!」

奴等の武器にこの距離で届くものはない!!」

彼我の距離は約二キロ。

幾ら二万の頭数がいようとこの距離を維持し続けなければいずれば兵は潰えるだろう。

だが、彼らの顔に余裕も愉悦も存在しない。

「なんであいつらこの状況で真っ直ぐ突っ込んでこれるんだ!!」

倒れた味方を踏み潰し、散った仲間を盾にしてじりじりと距離を詰めてくる。

死ぬことを恐れぬどころではない。

死んでも殺す。

兵達の顔は殺意に歪み笑みときさえ見える形となつて、死にながら距離を詰め続ける。

奴等は何なんだ？

痛みが怖くないのか？

死ぬのを何とも思わないのか？

味方を使い潰して、それでも戦いたいのか？

青銅の板を木の鎧に張り付けた武士が魔力の炎に燃やされながらも足を止めることなく走る。

赤い鎧の侍が両腕を失いながらも口に刀をくわえて走る。

足を吹き飛ばされた武者が他の武者にしがみついて身を盾にしている。

どれもこれも正気じゃない。

殺せど尽きぬ狂気の進軍にやがて恐怖が手を緩めさせる。

そうして二千が倒れたところで距離は500を割り、ついに反撃が始まる。

「弓兵隊、鉄砲隊、撃えー!!」

将官の声と同時に弓が引き絞られ五月雨のごとき曲射を放ち、火繩銃が号砲を放つ。

放たれた射は障壁に阻まれ殆ど効果を上げなかったが、代わりに弾幕の密度が下がり

兵の足は更に加速する。

「あいつらイカれてやがる!!」

魔力弾をひたすら撃ち込む悪魔の一人が、味方の矢に撃たれながらも一向に構うことなく走る敵兵の姿を見てしまいそう叫ぶ。

矢だけではない。

鉄砲の玉も味方を容赦なく穿ち、それにさえ撃った方も撃たれた方も意に介さないのだ。

イカれているなんてものではない。

奴等は一人残らず狂人だ。

「一番槍貫ったああああああつ!!」

そうして遂に先頭を走っていた円に十字の陣羽織の侍が眷属悪魔を刀の射程に捉え斬りかかる。

「ひいっ!!」

鬼のような形相と火を吐いたような気炎に堪らず悲鳴を上げて障壁を張って辛うじて斬撃を防ぐ。

「しゃらくせえ!!」

大人しく斬られる!!」

首を取れなかったことに激昂し侍が滅茶苦茶に刀を振って障壁を切り刻む。

あまりの剣幕に反撃する暇もなく必死に障壁を展開し続けた眷属悪魔に、窮地を察した同僚が横から人間大の魔力塊を放ち侍の上半身を泣き別れにする。

「大丈夫か!」

安否を確かめる声に、しかし眷属悪魔が答えることはなかった。

ドスリと鈍い音が腹部辺りから響き、驚愕する同僚の顔に一体なんだと視線を下に向け、自分の腹から槍の穂先が飛び出しているのに気づいて悲鳴を上げようとしたが、しかし今度はごろりと視界が回転した。

「首い、取ったぞ」

鬼のように笑う侍の顔を最後に悪魔はその意識が絶たれた。

一度踏み込まれば最早逃げ場は何処にもなかった。

翼を広げようにも天からは矢の雨が降り、無理矢理飛んだものは針ネズミのようになって地へと落ち、待ち構えていた槍の群れに突き刺され早贄のようにされる。

悪魔達は必死に抗うも百を倒す間に一人殺され、まるで鑪で削られるように潰り潰されていった。

しかし全てがではない。

複数の箇所では接触状態でも侵攻を免れている場所があった。

「この先にはいけません!!」

その筆頭がサイラオーグ・バアルであった。

バアル家由来の『滅びの魔力』を持たずに生まれた彼は、一族から無能と蔑まれながらも努力を重ねレーティングゲームの期待の若手と呼ばれるまでに成長した。

その彼の得意武器は己の身体。

鍛え上げた筋肉が放つ拳は空を裂くほどであり、『獅子王の剛皮（レグルス・レイ・レザール・レックス）』を纏ったサイラオーグは現状において最も戦果を挙げている戦力として活躍していた。

しかしながらこれはゲームではなく戦争だ。

まるで誘蛾灯に集る虫のごとく日本神話の兵がサイラオーグ目掛け集っているが、それでも全てとは行かず半分以上は目についた悪魔を優先的に狙って移動している。

「ほう。」

外津の神話の獣の毛皮か」

現状の打破に至る手段が見えず焦りを覚え始めたサイラオーグの前に建雷命が立つた。

「手こずっているようだから様子を見に来たが、悪魔の中にもお前のような漢は居たか」  
建雷命はサイラオーグの身体を見てそう評を下す。

「その神気、貴様が頭か？」

「然り。」

望まわずながら今回の遠征の頭目を担うことになった建雷命だ」

その答えにサイラオーグは一縷の希望を見いだした。

「つまり、お前を倒せばこのような戦いも終るんだな？」

「俺に挑むか……いいだろう」

サイラオーグの言葉に建雷命は服を脱ぎ禪一枚の姿を晒す。

「あの乱暴者ではないが、俺とて腹を立てていることに違いはない。

俺との相撲を望むなら相手になろう。

只し、命を賭けてもらう」

「それはこちらの台詞だ!!」

建雷命の言葉にサイラオーグは自慢の拳を叩き込む。

「ふっ!!」

建雷命は振り抜かれた拳をパシンと鳴らしながらしつかり掴むと、突如その腕が氷の塊と化してサイラオーグの腕を凍り付かせた。

「なっ……!?!」

驚愕に染まるサイラオーグに対し建雷命はあつさり言い放つ。

「命を賭けろと言ったはずだ」

空いていた手でベルトを掴むと建雷命はサイラオーグをぶん投げた。

「うおおおおお!!」

視界が何回も回転しながらサイラオーグは宙を舞い脳天から地面に叩き付けられた。

「なんとという力だ」

神器を纏い竜種にさえ匹敵する力を持ったサイラオーグをあつさり投げたサイラオーグをあっさり投げたサイラオーグを、怒りを通り越して感動すら覚える。

「どうした。」

「負けを認めるなら貴様の助命は考えてもいいぞ？」

一方建雷命もサイラオーグにまだ磨く余地があると思ひ、果てまで鍛えれば期待できるだろうと降参を促す。

しかしそれはサイラオーグにとって受け入れがたい提案である。

「降参などせん!!」

冥界などどうでもいいが、俺とて守るもののために此処に居る!!」

死しても矜持は棄てんと言ひ張るサイラオーグに建雷命は一言「そうか」と言った。

「ならば続きた。」

死力を奮え。でなければ次は首を振り切るぞ」

殺気を放ち構える建雷命に、サイラオーグは後の事を考えている余裕はないと持ちうる全てを投入する。

「此の身、此の魂魄が幾千と千尋に墮ちようとも、我と我が主は此の身、此の魂魄が尽きるまで幾万と王道を駆け上がる。」

唸れ、誇れ、屠れ、そして輝け。

此の身が摩なる獣であれど、我が拳に宿れ、光輝の王威よ。

舞え。

舞え。

咲き乱れる『獅子王の紫金剛皮・霸獣式』!!」

その咆哮に従うように纏う鎧がより攻撃的になる。

「そうか。

それがお前の答えか」

禁手化の代償に命を削っていることを把握した建雷命は、そこまで投げうつ覚悟に敬意を持って全身に雷光を走らせる。

「行くぞ。

お前の死力を見せてみる」

「言うまでもない!!」

咯血を撒き散らしながらサイラオーグは雄叫びを上げて躍りかかった。

## 目標を発見。全て喰らい尽くす。

『元』龍王の一角であり、現在は最上級悪魔として冥界にその座を置く『タンニーン』。彼は王として、時代の変化により失われていく同胞の生を守るため、悪魔として身をやつすほどに仲間を愛していた。

「があああああああああああ!!」

そんな、時に紳士とさえ称されるタンニーンがその威風からは想像もつかない憎悪にまみれた咆哮を上げる。

だがそれも然もありなん。

何故なら、彼にはもうそれしか残されていないのだから。

日本神話との戦争に最大戦力として招聘されたタンニーンだが、開戦直後、彼の耳に遠い自領地に住まう同胞の断末魔が響いた。

何が起こきた？

留守を任せた同胞達はどうなったのだ？

居ても立ってもいられず、ファルビウムの声を無視し周辺の建築物を破壊するほどの衝撃波を撒き散らしながら急ぎ領地へと舞い戻った彼が目にしたのは、巨大な蟲に噛み

砕かれ食い散らかされた同胞の亡骸の山だった。

その中には妻としたドラゴンと我が子の姿も含まれていた。故にタンニーンは絶望した。

嘆きは間を置かず怒りの可燃材となつて燃え上がり、狂気とさえ言えるほどの怒りに身を浸して憎悪のままに凝り固めた炎を叩き込んだ。

しかし蟲は魔王でさえ只では済まない業火を受けて無傷だった。

そればかりか蟲はタンニーンに構わず炎に巻き込まれたドラゴンの遺体を焼ききたての肉を差し出されたかのように食らい付き、まるで焼き加減を伝えるように頭を振つてその遺体を無残にいたぶった。

そこからはもう、言うまでもない。

炎が効かぬならとタンニーンは上空から己そのものを砲弾として蟲へと叩き付けた。

全身を使ったストーンピングは流石に堪えたらしく、蟲は喰うのを止めてタンニーンに牙を向けぎちぎちと牙を擦り合わせて威嚇する。

「虫ケラ風情がよくもおっ!!」

後ろ足で立ち上がり鋭い爪を顔の半分ほどに肥大した複眼目掛け突き出すも、爪はほんの少し傷を付けるだけで弾かれてしまう。

「うがああああああ!!」

自慢の爪を弾かれ激昂するタンニーンに対し、蟲は横に広がる牙からびゅうと音を発して体液を発射した。

その体液を浴びたタンニーンは身を焼く激痛に堪らず悲鳴を上げ、そして直ぐ様その正体に気付き憤怒の叫びで塗り潰す。

「龍殺しの毒だとい!？」

神経を焼く痛みと共に襲い来る虚脱感。

最初に龍殺しのサマエルを想像したタンニーンだが、音に聞くサマエルの毒とは違うとすぐに気づく。

この毒は獲物を捕らえるための神経毒。

鱗を溶かす酸性も体内へと沈ませるための付属にすぎない。

そうしてタンニーンは理解する。

「蟲がドラゴンを喰らうか!？」

この蟲はドラゴンを喰うただけに生まれ落ちた異形の化物。

日本古来の特異種であり、中でも唯一龍を喰らったと伝わる大妖怪『大百足』であった。

「燃え尽きろ!!」

生態系の頂点であるドラゴンの天敵を認めがたくタンニーンは再び憎悪を燃やして

炎を放つ。

先程より更に熱い炎は大百足を包むも、大百足は堪えた風もなく身をくねらせると節毎に生える鋭い足を蠢かせながらタンニーンに絡み付きその牙を胴へと突き立てた。

「がああああああああ!!」

牙から染み込む龍を溶かす猛毒にタンニーンが吠え、翼を大気に叩き付け大百足を絡み付かせたまま上空へと舞い上がる。

百を越えてもまだ尻尾が見えない事にこいつはどれ程巨大なのだと思い、すぐにいかに巨大であろうと必ず殺すと殺意に身を翻らせる。

「千切れろ!!」

きりもみ回転を繰り返しながら己ごと大百足を地面に叩き付けてやる。

これには流石の大百足も我慢しきれず、タンニーンから牙を抜いて逃げ出すと捻れを治そうと何度もぐるぐる回り出す。

「ぐ、う……」

大百足を引き離すことには成功したが、大分毒に浸されたらしく身体が重いと思い、そして何故かと疑問を浮かべた。

「毒の効きが弱い……?」

同胞の軀の様子から毒の効きはもつと強くなければ説明がつかない。

毒は遅効性だった？

ならば幼いドラゴンが逃げる時間を大人達が稼げたはずだ。

自分と彼らの違いはなんだと煮えたぎる憎悪に茹だる頭で考えたタンニーンは、しかしその答えに辿り着く。

「そうか、俺は転生悪魔だからか」

ドラゴンとしての性質は残っているが、タンニーンはドラゴンではなく悪魔である。故に龍喰らいの毒もあまり効きはしていないのだ。

悪魔へと転生したことで対抗できていることに複雑な思いを胸中に抱くも、すぐに感傷より殺意が上回り同時に一つの光明を見出だす。

「喰らえ!!」

捻れを治し再びタンニーンを睨み付ける大百足目掛け、タンニーンは火炎を小さく纏めた球を吐き付けた。

火炎弾は大百足に着弾すると業火となって大百足を燃やす。

チィィィィィィィィィィ!!

幾度も炎を放たれながらも平然としていた大百足が初めて悲鳴を上げたような金切り声を発した。

「やはりそうか!!」

それまでと違い、今回放った火炎弾には悪魔由来の『魔力』を込めていた。わざわざ魔力を使うまでもなくタンニーンの肺は空気を燃やして炎を吹く機能がある。

それは火竜の標準的な能力であり、言わば呼吸をするだけで火を吹くのが彼等だ。故に膨大な魔力を持ちながらも滅多なことでは使う必要もなく、今の今までタンニーンは魔力を用いずドラゴンの性能だけで戦っていた。

しかし相手は龍喰らいである。

どれだけ強大なドラゴンであろうとドラゴンというだけで優位に立つ大百足に効果がないのは当然だ。

そもそも大百足も含め、妖怪というものは弱点を突かれれば忽ち倒されてしまうモノだが、逆を言えば弱点を突かれなければ常に優位に立ち続ける理不尽な存在なのだ。

そして大百足の弱点は人間の唾。

冥界には絶対に存在しないモノが弱点である大百足は、その巨大すぎる巨体もあって冥界に倒せる手段はかなり限られていた。

そのため当初はサーゼクスの足止めとして召集されたのだが、当の目的が意味をなさなくなつたため、長らくお預けを食らい続けたドラゴンの肉を求めて戦線を抜け出しタンニーンの領地を襲つたというのが実情であつた。

「倒す手段さえ解れば貴様など!!」

悪魔の身と言えどやはりドラゴンでもあるため、大百足の毒は確実にタンニーンから力を奪い続けている。

遊ぶ隙は無しとタンニーンは普段使わぬ魔力を主軸に炎を燃やして吐き付ける。

魔力の炎に堪らぬと大百足は金切り声を上げながらのたうち回り、炎を消そうと身体を大地に叩き付ける。

「逃がしはせん!!」

仲間の、妻と子の仇である貴様を決して逃しはしない!!」

魔力によるダメージは劇的とまではいかないが、しかし僅かずつダメージを重ねている事がタンニーンの復讐心を満たし愉悦を覚えさせる。

しかし大百足とて黙ってやられてばかりでもない。

茶色い巨体を蠢かせ毒液をタンニーンに吐き掛ける。

「そいつはもう効かん!!」

ドラゴンの炎は貫通されたが魔力の炎なら毒液を沸騰させ蒸発させてしまう。

凄まじい悪臭を放ちながら消える毒液に、しかし大百足の馬鹿の一つ覚えのように何度も毒液を吐きかけた。

「くぐぐ!!」

最早貴様は狩られる獲物だと毒液を全て蒸発させ、なぶり殺してやると魔力の炎でじっくりと焼き続けるタンニーン。

だがしかし、その状況は長くは続かなかつた。

「ぐっ?」

ぐらりと身体が傾ぎ意識を朦朧とさせるタンニーン。

毒がまたまわったのか?

しかし最初以降は全て蒸発させ回避していた。

そう考えたところではたと気付かされる。

「そういうことか!!」

大百足はただ闇雲に毒液を吐いていた訳ではなかったのだ。

大百足は毒液を直接浴びせられないと悟るやいなや、タンニーンにわざと蒸発させる

よう吐き掛け気化した毒液を自ら吸うよう仕向けていたのだ。

「小癪な…」

蟲とは思えぬ狡猾さに忌々しいとタンニーンは怒りを更に燃やす。

「ゴアアアアアア!!」

咆哮を上げて魔力を纏わせた爪で切りかかるタンニーン。

先程と違いタンニーンの爪は硬い甲殻を抉って大百足に傷を与えるが、大百足は構う

ことなくタンニーンに巻き付き牙を突き立てる。

「オオオオオ!!」

痛みを燃料に更に憎悪を燃やしてタンニーンは大百足の身体に噛み付くと、そこから内側で炎を爆発させた。

内側からの圧力に流石の龍喰らいも耐えられず、大百足は内側から弾けるようにバラバラに吹き飛んだ。

「はあ……はあ……」

大百足が倒され訪れた静寂の中でタンニーンの荒い呼吸だけが響いていた。

そうしてようやく落ち着くと、去来したのは己の不甲斐なさだった。

「……済まない」

守ると誓った。

だが、一体も残らなかった。

戦争が始まると、念のため全てのドラゴンに一ヶ所に集まるよう指示を出したことが裏目に出てしまったのだ。

「うおおおお!!」

仇を討つても何も得られぬことにタンニーンは涙を流して慟哭する。

そうして泣いていたタンニーンを、飛来した砲弾が撃ち抜いた。

「があああああああああああ!!」

驚愕と痛みで絶叫する間にも次々と砲弾はタンニーンに突き刺さり、数百発以上の砲弾の雨が降り、そして止んだ頃にはタンニーンは原形さえ危うい程に破壊され死んでいた。

「目標撃破!!」

望遠鏡でその死を確かめた茶色の帝国陸軍の軍服を着た兵士の報告に、黒い士官の軍服を着用する将校は良しと頷いた。

「次の目標を探しに行くぞ。」

「戦車隊、進行再開!!」

将校の号令に隊員達が了解!!と唱和し、新たな獲物を探して走り出した。

馴れ合いと共存は違いますよ。

冥界の各地を戦禍が飲み込む中、アガレス領の空中都市アグレアスを警護するため配された悪魔シーグヴァイラ・アガレスは今、冷徹な面とは裏腹に自ら相對する敵に興奮していた。

「戦艦ね。……ふんふん」

信じがたい事に、彼女の敵として現れたのは空を航海する軍艦であった。

悪魔でも想像だにしていなかった敵を前に薄く笑みを浮かべるシーグヴァイラに、眷属達はその聡明な頭脳が既に勝ち筋を完成させたものと安心していった。

が、その内心は全く違うものであった。

（戦艦!!… 日本の戦艦よ!!）

戦争中に不謹慎だけど、きつとあの戦艦も日本の戦闘機みたいに變形してロボットになるに違いないわ!!）

彼女は日本のサブカルチャーに骨の髄まで沈み込んだ、間違った日本を信じる典型的な外国人のような女だった。

故に軍艦が空を飛ぶ不条理な光景を前にして、シーグヴァイラはただ期待に胸を膨らませていた。

「分かつているわね？」

「なんとしてもあの三隻の軍艦を捕らえるわよ」

主の言葉にそれが意趣返しを含めた報復だと思いついた闘志をたぎらせる眷属だが、本人はアニメに夢見た合体ロボットに違いないと必ず手にいれようとしているだけだった。

「……不愉快な気配がするな」

そんなシーグヴァイラの思惑を察してか、空母と呼称される艦種の平たい甲板に立ち、攻撃目標を眺めていた略式軍装を着た軍人は、タバコを燻らせながらそう不愉快に感じた。

「おい山本、何時になったら待機命令を解くつもりだ？」

開戦から12時間が経過し、しかし帝国海軍は目標を捕捉してからその動きを止めていた。

「ああ、そろそろ良い頃だろう」

将校の言葉に山本と呼ばれた軍人は懐中時計を確認してそう答える。

「戦争が開始して12時間待ったんだ。」

「今度は真珠湾のような事にはならないだろう」

かつての悔いを晴らすため無理を言って進攻を待たせていた『山本五十六』はそう言った。

「山口君、もういいよ。」

待ちくたびれているだろう鷺達を飛ばしてくれ」

山本の言葉に『山口多聞』はおうと応じると艦内に指示を飛ばす。

「全機発艦準備始め!!」

『人殺し多聞丸』と恐れられたかの将の言葉に続き、艦内は直ぐ様あわだたしくなる。

「一番、二番回せー!!」

甲板に設置されたエレベーターが稼働し、下から『九七式艦上攻撃機』並びに『九九式艦上爆撃機』を載せたりフトが競り上がり、即座に作業員が取りつくくとクランクを回してエンジンに火を着ける。

「感無量と、言うべきかな?」

プロペラを回し暖気を行う艦載機を眺めながら山本は呟く。

「複葉機の運用を前提として設計された故に、当時海軍が主力としていた飛行機の運用に大きく制限を受けていた鳳翔が、何の問題もなく九七式を発艦させようとしている姿が見れたことは嬉しいような、それが当時可能であったならと悔しいような」

山本のその言葉に山口は特に感慨も無さそうに言う。

「それもこれも全部『鳥之石楠船神』様のお陰なんだ。

喜べることはないだろう」

アグレアスの破壊のため、天津神であり船神でもある鳥之石楠船神はかつて海軍の運用していた軍艦の船霊を分霊に降ろし、空を飛ぶ軍艦として彼等に預けた。

そうして鳥之石楠船神が降ろしたのは中でも強い想いを受けていた空母『鳳翔』、駆逐艦『雪風』そして戦艦『長門』。

帝国海軍が誇る世界初の空母に、数多くの地獄が生温く思えるような戦場を生き抜いた古兵と、震災にあつて国民のために駆け帝国海軍の最後の意地を身を以てアメリカに示した国民の英雄。

艦隊と言うには物足りないが、しかし嘗てを生き抜いてくれた彼女達を率いる以上、たかが悪魔相手に負けることは許されない。

嘗ての心残りを払うため、山本は口頭にて引き金を引いた。

「さあ、今度は勝ちにいこう」

山本の言葉に続き、アグレアスを目指して艦載機達艦が空へと飛び立ち、雪風が雲を割つて前へと進み、号砲を兼ねて長門が当時世界に七隻しか持たなかった16インチを越える巨砲を天に向け放った。

くくく

一方、地上に残った天照は急遽来日の許可を取り付けてきた北欧のオーディンと須弥山の帝釈天ことインドラを相手に会談を行っていた。

「誠に申し訳ないが、現在我等は貴殿方に時間を割く余裕はありません。

観光でしたら、民に害を及ぼさぬ範囲で御自由にどうぞ」

暗に厭らしいタイミングで横槍入れてくるなとっこりと笑顔を添えて告げる天照に、オーディンは顎髭を撫でながら浅く笑う。

「その割りに忙しそうには見えんがな？」

「客人の前でばたつくような、行儀の悪さは許していませんよ」

互いの上っ面を滑らすだけの会話に、珍しく仏天としての正装を身に纏った帝釈天は咳払いをして話を始める。

「正直俺は機を見るべきとは思ったんだが、日本神話がよりによって『システム』を破壊したと聞いてな。

他の連中が騒ぐ前に腹積もりを確認しておきたかったんだ」

聖書陣営が今日まで破滅しなかった理由のひとつを、あっさり壊したと聞いた時は思わず腰が抜けるかと思つたほど驚いてしまった。

一手間違えなくても、この先日本神話は世界を相手取らねばならぬ危険を犯していた。

しかし天照は帝釈天の問いに笑顔を返す。

「帝釈天殿。御確認致しますが、亜細亜圏は日本とどのような関係を望んでおいででしょうか？」

「……」

笑みの意図が読めず押し黙る帝釈天に天照は言う。

「我等日本神話はこれ迄と同様神話世界の覇権に興味はなく、と様とかか様がお産みになられた葦原中国の行く末を見守ることを目的としております」

「見守るのう……」

天照の言葉にオーデインは瞳を鋭くする。

『『システム』を破壊したせいで最早それも叶わんと言うによくも言うわい』

聖書の神が生み出した『システム』は、聖書の神が奪い取った他神話の神の秘宝を神器として改造し世界にばら蒔き世界を混沌に突き落とした代償に、全ての神話に恩恵をもたらしもしていた。

信仰に依らない神々の存在の保証

これにより聖書陣営に信仰を断絶されたヨーロッパは当然として、信仰を残している

アジア圏においても地上への干渉には『システム』が必要であった。

事実上自ら自爆スイッチを押しに等しい日本神話を批難するオーデインに対し、天照は笑みを更に深くする。

「神は人に関わることなかれ。」

我等の意思は常に人の世に示されているのですから」

神が姿を顕さずとも日は照り風は吹き月は満ち欠ける。

人が想う神の形を態々大地に降ろす必要など最初から無いのだ。

「それはお主らが信仰を保っておるから言えることであろう」

「そうじゃねえよオーデイン」

勝者の傲慢と口にするオーデインに帝釈天は否と言う。

「こいつらは最初からイカれてんだ。」

信仰を失って構わねえ。

滅びて構わねえ。

選ばれたら生きる、選ばれなかつたら死ぬ。

徹頭徹尾、こいつらは自然の体現なんだよ」

人に祈られ求められ、それを欲し求めるのが神であるが、日本神話は例え欲しても一切求めない。

「見ているだけでいいんだ。

栄えるか滅びるか、伝えるのか忘れるのか、その選択は大地に生きる命が選んで決める。

その答えの果てが日本神話の滅亡なら、それを好しと笑って受け入れる。

自然の触覚として生まれた神さえ理解できない、意思を持たぬ自然が人の形に収まった存在。

それが日本神話というものなんだよ」

だからこそ、その逆鱗に触れることはどれだけ恐ろしい事か、天照の背後の座敷牢の中でのたうち回るアジュカ・ベルゼブブが雄弁に語っていた。

全身に鱗のように見えるアザを浮かべたアジュカは、声を漏らすことさえ許されないのか苦悶の表情で何かから逃れようと身をよじらせる。

「あやつのアレは？」

「我等に退くよう要求したので、厄神が流す予定の厄を壺毒で煮詰めたものを解呪して見せたら呑んでやろうと言ったところ、ああして見事に自爆したのですよ」

袖で口許を隠しつくつくと笑いながら天照は嘯く。

「厄の中に『悪魔の駒』に纏わる恨みや大蛇の呪いがたいそう混じっていたようで。いかにも憐れなので解呪が叶うまでああして保護してやっておるのですよ」

保護とは言うが、注連縄で四方を封じたその様子は封印としか思えない。

しかし須弥山も北歐も『悪魔の駒』には恨み辛みは山のごとくであり、その制作者であるアジュカがああしている様は実に溜飲の下がる光景である。

「して、主等が本当に世界がどうあるうとそれで良いと言うなら納得してやるが、『システム』を破壊した責任はどうしてくれる？」

「では、逆に問いましょう。」

『システム』を残していたとして、誰がそれを管理するのですか？」  
「む……」

実際『システム』を破壊しなかったとして、それを管理する勢力は他陣営に対し優位に立てる事は言うまでもない。

仮に全勢力が合同でと言ったところで、ハイそうですかと行きはしないだろう。

「いさかいの種になるなら、いつそなくなってしまう良い。」

『システム』が無くなっても百年二百年は効果は消えません。

それとも、北歐の知恵の神はそれだけの時間があっても聖書の神が作った物に並ぶ代物は作れないと仰りますか？」

本当に滅びたくないと言うなら、誰かに頼らず自分で足掻いてみせると暗に挑発する天照に、オーデインは反論を失い口をつぐむ。

「なるほど。」

日本神話は他所の神話にも厳しくあると

「あるがまま。」

変化が受け入れがたいなら抗えばいい。

変わるといふなら自ら倣え。

それは人も神も等しく変わらぬと申しているのですよ」

笑顔でそう言い切る天照に、完敗だと帝釈天は両手を上げる。

「お前達は相変わららず理解できん」

「お褒めに預かり光栄です」

世界から異端と距離を取られる神話の主神はにつこりと微笑んだ。

## 戦う力がないから戦わないは言い逃れだわさ

冥界は今や地獄と同義と成り果てた。

根の国より参じた鎧甲冑を身に包む戦士達が己の骸を重ねながら、それ以上の悪魔の死体で山を作った。

靖国から参った帝国陸軍が戦車隊で縦列を牽きながら旧悪魔の領地を荒し尽くした後、各都市を巡りライフラインを片端から破壊した。

転生悪魔を生み出すために必要な『悪魔の駒』を生産する空中庭園アグレアスは、帝国海軍が賜った艦隊を以て建築物を警護に回された悪魔もろとも悉く焼却し、島そのものも破壊し飛沫と砕け散って大地へと墜ちていった。

悪魔の悲鳴と日本神話への憎悪が渦巻く世界の中で最早原型を留めるのは墮天使の本拠地と首都リリスを残すのみとなった。

その悪魔にとつて最後の拠り所となった都市リリスに残った悪魔の殆どが集められ、なんとしてでも生き残ろうと防衛戦を敷いていた。

ここを抜けられたら絶滅する。

旧魔王派は榴弾の雨に石榴と散り、魔獣は妖怪の肴と喰われ、ドラゴンさえもが巨大

な蟲に食い尽くされた。

逃げようにも転移術は阻害され、墮天使領は強固な結界を張り何者の侵入も拒んでい

る。これほど分かりやすい窮地を前に、さしもの悪魔も己の終焉を感じ取っていた。

そんな中、唯一所在が明らかかなファルビウムに非難が集まるのは当然だった。

指揮系統を統括するファルビウムの屋敷に救いを求め悪魔達が殺到した。

「早くなんとかしてくれ!!」

「俺達を見殺しにする気か!!」

「魔王なんだからお前が戦え!!」

「眷属達は何をやっているんだ!!」

何十にも重ねた結界に阻まれ半ば暴徒と化した悪魔達が、入り口の前で行き場を失った怒りと絶望を吐き出し続ける。

しかし扉は微動だにすることもなく、眷属さえ顔を見せない。

そんな屋敷の中では、この状況下にありながら外の騒乱など知ったことかとはかりに宴が開催されていた。

「あはははははー」

高価な酒瓶が幾つも空けられ乱雑に転がり、誰もが腹の底から笑っていた。

「あはははははー！」

指揮権を預かるファルビウムもその一人だ。

屋敷の大広間に彼等は集い、テーブルが雑に脇へと寄せられ、その中心では一人の女が踊っていた。

その女は絶世の美女と言うことはない。

容姿で言うなら並みより少し上という程度。

そんな女が服をはだけさせ、とん、とん、とん、とりズムを踏んで踊っている。

一步踏む度悪魔は笑う。

はだけた服が舞う中で、下着で隠しもしない乳房や陰部がちらりと覗く度に悪魔は喜びに満ちていく。

そんな中で誰かが疑問を浮かべる。

何故私達は宴を開いているのか？

しかしそんな疑問も女の踊る足音に押し流され、喉から吹き出す笑いが脳裏を埋め尽くす。

楽しい。

時折誰かの頭がころりと転がるが、そんな事さえ愉快と笑う。

そうしてファルビウム以外のその場の全員が頭を転がし地に伏した。

それでもファルビウムは笑っていた。

「あはははははは！」

ファルビウムは楽しくて笑う。

「あはははははは！」

漸く気づいて笑う。

「あはははははは！」

自分達が、神の策に嵌まって滅びることを確信して笑う。

「あはははははは!!」

喜びを強要されながら、ファルビウムは降り下ろされる鼻の長い鬼神の刃に首を切り落とされても、最後まで楽しいと思わされながら、呆気なく絶命した。

ファルビウムの首が飛び、観客が居なくなると女は踊りを止めて息を吐いた。

「ふう。」

こんなに全力で踊ったのは久しぶりだったから疲れたわさ」

そうしてはだけた服を直していると、返り血で赤く汚れた男が厳つい顔に似合わぬ穏和な声で労った。

「お疲れ猿女」

「今は天細女だわさ」

天細女神は芸能の神。

そして隣に並ぶは彼女の夫である猿田彦。

およそ戦には向かない神ではあるが、此度の戦に彼女は自ら参じたいと申し出た。

当然猿田彦は反対したが、天細女の粘り強い説得に自分が着いていくならと条件を付けて折れた。

そうして参じた二人は、天細女の芸能の権能で対象を喜びと笑顔で拘束し、天細女の権能を無効化出来る猿田彦が止めを刺すことで要人の暗殺を果たしていった。

そうして最後の標的であったファルビウムをも始末し、猿田彦は携帯を取り出して連絡をする。

「こちら猿田彦。

頼まれていた要人は全員始末した。

……解った」

報告を終え、次の行動の指示を受けた猿田彦は携帯をしまう。

「次は誰だわさ？」

「俺達の役目は終わりだそうさだ。

宴で踊って欲しいから高天ヶ原に帰ってこいとのことだ」

「仕方ないのかわ」

そもそも無理を言つて振じ込んだ立場だ。

下手に抗議して命を落としても誰も喜ばない。

「さあて、次は久しぶりの高天ヶ原での踊りだわさ。

外津から入つてきた『ぼおるだんす』を御披露目してやるだわさ!!」

一角の役に立てただけでも来た意味はあつたと揚々と狭霧神を待つ天細女の背中を、あまり自分以外に肌を見せて欲しくないのだがと内心思いながら眺める猿田彦であつた。

~~~~~

そうして悪魔が砂上の楼閣と気付かぬまま都市リリスに身を寄せる中、サーゼクスの眷属達はそれぞれ必死に抗いながら、各々最期を迎えようとしていた。

「おおおおお!!」

本来の姿である巨人となつて拳を振るうスルト・セカンド。

『せいやあああああああ!!』

対するはスルト・セカンドより更に巨大な体躯を持つ国津神『建御名方神』。

自分より巨大で更に水神の性質を持つ建御名方神には切り札の炎も通じず、元より持

久戦を苦手とするスルト・セカンドは己の死を理解していた。

「アアアアアア!!」

しかし退けない。

恩あるサーゼクスの妻と子を逃がすために、他の眷属たちと共に死ぬつもりで残ったのだ。

そんな覚悟を胸に秘めるスルト・セカンドだが、建御名方神はそれを理解する必要はないとスルト・セカンドを巨体を以て押し潰した。

『戦車』のスルト・セカンドが死したのを見計らうように次々と他の眷属も息絶えていく。

スルト・セカンドと同じ『戦車』のバハムートは十束剣を振るう布津主神により光輝く身体を三枚におろされ大地へと叩き付けられた。

『僧侶』のマグレガー・メイザースは日本の陰陽師の放つ式神を相手に優位を維持していたが、不意に肩に乗った木の葉に押し潰されそのまま挽き肉に成り果てた。

『兵士』ベオウルフは大きな鬼との殴り合いの末に相手を絶命寸前まで追い詰めるも丸呑みにされた。

同じく『兵士』の炎駆は二柱の崇神を相手に奮闘するも撒き散らされた呪詛に身を浸し過ぎて全身から血を流して絶命した。

そして『騎士』の沖田総司は……

「死ねえ!!」

群狼のごとき侍の集団を相手に未だ交戦を続けていた。

『騎士』の駒の力で生前を超える神速を以て駆ける沖田だが、その顔にあつたのは怒りだった。

何故なら、沖田が相手にしている侍達は誰もが胴丸に鉢金だけの軽装の上から『浅葱色の羽織』を纏っていたからだ。

その羽織が何を意味するか、誰よりも沖田は知っている。

故にこそ、沖田は激怒した。

「死んだ者が未練がましく『新撰組』を名乗るな!!」

筋肉が悲鳴を上げるほどの踏み込みからの抜刀により一人が両断される。

しかし壬生狼達は一切臆することなく脱落した仲間の穴を埋め、再び果敢な切り込みを放ってくる。

「出る、鶴!!」

妄執に苛立った沖田が体内に棲み付く妖獣を呼び出した。

鶴は飛び出すと同時に狼達へと食らい付く。

虎の爪が隊士の一人を引き裂き、尾の蛇が別の隊士の喉笛に食らい付く。

そうして猿の頭が甲高い鳴き声を上げて威嚇するも、狼達はそれさえ意に介さず陣形を再編する。

それが沖田を堪らなく苛つかせた。

「消えろ消えろ消えろ消えろキエロキエロキエロ!!」

鶴だけでなく『一人百鬼夜行』とあだ名される様を体現して数多の妖獣が沖田から飛び出してくる。

「死んだ奴が新撰組を名乗るな!!」

その羽織は、僕だけが着て良いんだ!!」

新撰組を残すために外法に手を染め、悪魔になつても生き残り続けたのだ。

全ては新撰組を不朽とするために。

呪詛にも等しい沖田の叫びが引き金となり、津波のように妖獣の群れが壬生狼を呑み込み食らい付くした。

そうして全ての隊士を排除した沖田は刀を鞘へと納めた。

「グレイフィア様のところへ急がないと…」

グレイフィアもサーゼクスの『女王』であり余程の化け物相手でもない限りはそう遅れをとることはないだろう。

だが、日本神話はその余程の化け物を多数投入し、さらに息子のミリキャスを連れて

の逃避行とあつて安心と言う言葉は意味をなさない。

最速で追い付くと踏み出そうとした沖田は、直後に背後から凄まじい殺気を感じ振り向いた。

そうして振り向いた先には見えたのは、自身から出した妖獣が骸を晒し、その中心で一人の壬生狼が刀の汚れを振るって払う瞬間だった。

「なん……で……」

ここに来て沖田は初めて恐怖を覚えた。

そこに居たのが他の誰かならそれほどに驚きはしなかった。

土方なら当然だろう。

斎藤だつて当たり前だ。

近藤ならむしろ納得する。

新見や山南だつて構わない。

だが、だがこいつだけは居る筈がないのだ。

「お前は、誰だ？」

乾いてひりつく喉を震わせそう問う沖田に、壬生狼は刀を霞の構えで合わせながら堂々と口にした。

「新撰組一番隊隊長『沖田総司』」

そう名乗るその顔は、正しく鏡合わせのようだった。

戦えないのは嫌なんだ!!

「違う!!」

『沖田総司』の名乗りに沖田は叫ぶ。

「僕が沖田総司だ!!」

沸き上がる恐怖を掻き消そうと必死の形相で沖田は叫ぶ。

「僕が本物だ!!」

僕だけが本物なんだ!!」

死にたくないといかなる手段にも手を伸ばして此処まで来たのだ。

それを否定されたくないと呼ぶ沖田だが、霞の構えを解くこともなく『沖田総司』は一言で切り捨てる。

「だからどうした」

「っ!？」

必死の形相の沖田に比して『沖田総司』は淡々と述べる。

「お前が誰か、僕が誰かなんてどうでもいい。

薩奸を切る。

幕敵を切る。

日ノ本の敵を切る。

僕はそのための人斬り包丁だ」

そう言い捨てる『沖田総司』に沖田は気付かず一步下がる。

「違う!!」

僕は新撰組だ!!

僕だけが新撰組なんだ!!」

沖田はどうしてそこまで怯えているのか分からないまま必死に叫ぶ。

しかしそれすら『沖田総司』は切り捨てた。

「ならば、新撰組も斬るだけだ」

直後、『沖田総司』は霞の構えのまま踏み込んだ。

「しいっ!!」

「くうっ!?!」

高速の踏み込みから放たれた突きを沖田は『騎士』の動体視力で捉え往なすも、即座に刀は翻り巖流の燕反しがごとき上段振り下ろしからの下段振り上げに繋がった二連撃が放たれた。

「っ……!!」

上段を防ぎ下段を食い止めた沖田だが、直後に鳩尾へと足の裏が叩き込まれバランスを崩される。

「ぐっ!!」

刀が引かれ突きが来ると構えた沖田が次いで目にしたのは、半棒術の突き出しで放たれた鞘の先端。

生前なら鎖骨ぐらいいは簡単に砕けたろうが、悪魔の体が木の棒で殴られた程度で参るものかと鞘ごと切り捨てる積もりで晴眼から上段斬りを放つ沖田。

しかし振り下ろしたその腕は刀と鞘を手放した『沖田総司』の両手に捕まれた。

「しまっ……がはっ!!」

危険だと察した直後に視界が回転しながら背中に走った衝撃が、腕をとられて投げられたのだと理解したのはすぐ。

沖田が納めていた天然理心流は総合武術の流派。

『沖田総司』の鞘を使った半棒術や柔術なども修めた業の一つであった。

悪魔となり速さを得て使う意味もなくなった棒術や柔術に懐かしいと思う間もなく、『沖田総司』の手にした『乞食清光』の銀光に慌てて妖魔を解き放つ。

「ちっ!!」

流石にこれは堪ったものではないと『沖田総司』は妖魔を切り捨てながら沖田から距

離を取り、八相に構えて警戒する。

「ありえない……」

悪魔の身となり『騎士』の恩恵を得た沖田に剣で敵うものなど存在しなくなった。だというのに、この無様はなんだ？

相手はただの亡霊。

それも己を偽る卑怯者だ。

なのに、何故己は剣で奴に勝れない？

「認めない」

声を震わせながら沖田は平正眼に構える。

対する『沖田総司』も八相から平正眼に構えを取り直す。

切っ先はどちらも僅かに下がる独特な構え。

「認めない」

後世に曰く、沖田総司の剣は平正眼から放たれる突きが最も彼の才を顕すと。

「僕は、偽物なんかじゃない!!」

一步の踏み込みの音のみで、三度相手を穿つ『三段突き』こそ彼の真髓と人は謂ふ。

「きいええええい!!」

怪鳥がごとき甲高い叫びを上げて沖田が踏み込む。

『沖田総司』もまた同時に踏み込む。

二人の『沖田総司』は完全に同時に突きを放った。

一撃目、互いの刃が互いの刃を弾き剣が跳ね上がる。

二撃目、膂力にものを言わせた沖田の剣が先に放たれるも『沖田総司』は抗わず流れに任せて逆手に突きを放ちそれをいなす。

そして三撃目、

「殺った!!」

二度の打ち合いで完全に体勢を崩した『沖田総司』の心臓に沖田の刀は吸い込まれた。

「……………かはっ!」

心臓を貫かれ、『沖田総司』は血を吐いて地に伏した。

「勝った……………」

偽物が死に、自分こそが本物だと証明できて沖田は安堵の息を血と共に吐き出す。

胸に生えた乞食清光が心臓を貫いていたのだ。

「ぐ、ああっ!!」

刃の鋭さが心臓を抉る痛みを耐えて乞食清光を抜き、出血死を免れるため体内の妖魔で傷口を埋める。

「いか、なきや……………」

他の眷属は皆果てた。

グレイファイアとミリキヤスを守れるのは自分しかないと思っただけで、二人が使った逃走経路へと走り出した。

途中で何度か妖怪達に阻まれるも、多少の手傷を引き換えに全て斬り伏せ二人の許へと急ぐ。

そうしてふたりを見付けたが、そこで見たのは負傷して壁に凭れたグレイファイアを庇うミリキヤスの姿だった。

「見付けた!!」

急ぐ沖田だが、ミリキヤスがこちらに気付いた瞬間、驚愕で目を開いた。

「よくも母様を!!」

そうして怒りのままに『滅びの魔力』を放ち、予想だにしていなかったミリキヤスからの攻撃を無防備に喰らった沖田の下半身が消し飛ばされた。

足を失い地面へと倒れ込む沖田。

「ど、どうして……」

自分の顔を見忘れてしまったのかと腕を伸ばす沖田は、そこで漸くミリキヤスが勘違いをした理由に気づく。

伸ばした腕は人のものではなく、虎の腕へと変異していたのだ。

腕だけではない。

体は虎に、顔は猿になっていた。

おそらく消し飛ばされた下半身から蛇の尾が生えていたのだろう。

身に宿した鶴になっていたことに愕然とする沖田に向け、ミリキヤスはありつただけの『滅びの魔力』を両手に集めて沖田に向ける。

「父様の代わりに僕が母様を守るんだ!!」

決死の想いを乗せてミリキヤスは『滅びの魔力』を放った。

「待っ……」

逃げようもない状況で迫る絶対の『死』。

迫り来るに連れ沖田の脳裏に走馬灯が過る。

悪魔となりサーゼクスに仕えた百年弱の日々が克明に過り、そしてサーゼクスとの出会いが再生されたところで沖田の走馬灯が叩き切られるように終わってしまった。

「え？」

どうしてと沖田は思う。

どうして新撰組の事を思い出せない？

どうして京での戦いを思い出せない？

どうして故郷のことを思い出せない？

それも致し方ない事だ。

何故なら、沖田は新撰組の事を『記録しているだけ』なのだ。

『沖田総司』が『沖田』になったのは肺を患い死を目前として外法に手を伸ばした時。延命を望み挑もうとした『沖田総司』だが、寸でのところでそれが士道に反していると気付いたのだ。

そうして本懐を見失うことなく『沖田総司』は病と戦おうとするも呆気なく息を引き取る。

ならば『沖田』とは何者か。

その答えは誰にも解らない。

はつきりしていることは、彼が『沖田総司』本人の身体と記録を正しく持っていること。

そして、死に行く己が許せないと士道に背いてでも生きながらえようとしたこと。

その果てに、悪魔になることを了承した事。

それだけである。

「僕は、誰なんだ？」

誰にも答えられない問いの言葉は『滅びの魔力』により身体もろとも消え去った。

## 『悪魔の駒』…ふふふ、正しく名前の通りやね

度重なる戦闘の末に力尽きた母グレイファイアを守るため、ミリキヤス・グレモリーは初めて『滅びの魔力』を『敵』に向け、そして殺した。

「はあ、はあ、はあ……」

加減もわからず全力で行使した魔力の負荷に荒い息を吐き、胸を掴んでバクバクと煩く高鳴る心臓に落ち着けと祈る。

先程の妖怪は今までとは毛色が違う気がしたが、しかしそれを確かめる余裕は無かった。

そして、その余裕はこれからも訪れない。

「健気やわあ。

倒れたおつかはんを幼いながらに必死こいて守るなんて、うち、そういうん弱いんよ」  
ミリキヤスをそう評す声にそちらを向くと、そこに居たのは長い黒髪の絶世とも言える美女だった。

「お前も日本神話の手先か!!」

美しいよりも恐ろしいと思わせる美貌にミリキヤスは震える身体を圧して再び『滅び

の魔力』を使おうとするも、女はいつの間にか背後へと回り込み少年を優しく撫でてやるように手を這わしていた。

「実にええ子や。」

あんさんみたいな愛い子は、腹に入れて大事に大事にしてしまいたいわ」

訛りの強い京弁でそう嘯く内に、その身体は徐々に金の毛並みの塊へと変わり、そうしてやがて女の姿は金の身体に白い顔の大きな狐に変化した。

あまりに現実感のない光景に言葉を無くすミリキヤスを九つある尻尾の内の一つで捉えたまま優しげな声で嘯いた。

「そのまま大人しゅうしてくんまし。」

そやったたら、おっかはんも一緒に命はとりまへんから」

「母様!!」

母という言葉に再起動したミリキヤスはグレイフィアも自分と同じく狐の尻尾に囚われているのを見てしまう。

「母様を放せ!!」

気炎を吐き『滅びの魔力』を使おうとするも、狐はあかんでえと諭すように言う。

「うちの尻尾は敏感やさかいに、そないな危ないもん使われたら、びつくらこいておっかはんの身体をぶちいと潰してまうかもしれへんで?」

「っ!？」

賢い故にそれが暗に母の命が惜しいなら大人しくしろという脅迫であるとミリキヤスは察し背筋を凍らせる。

「あらあら。」

そないに怯えんでもあんさんらは大事な人質よつて、暴れへんなら腕の一本もなあんで野蛮な真似はせえへんよ」

証拠とでもいうように尻尾の締め付けは殆どなく、グレイフィアの様子からしても嘘ではないのだろう。

「人質……ですか」

誰のか等と問う必要もない言葉に狐はそうやと答えた。

「正確に言うんなら、人質ゆうのもちよおつと違うんやけどね」

「……どういうことですか？」

「それは後のお楽しみや」

のらりくらりと嘯く狐にミリキヤスは最初からの疑問をぶつけた。

「どうして、戦争なんて始めたんですか？」

ミリキヤスには解らない。

だからこそ問いを投げ掛けた。

その問いに対し狐はまるで笑ったように牙を見せる。

「せやねえ。」

うちは兎も角、日本神話はずうっと悪魔達に怒つとつたさかい、間が悪かったというしかありまへんね」

「怒つてた？」

「せやで。」

日本神話はああ見えて怠けもんどす。

世界がどうとなつても構わへん。

理を壊さなければそれでええと、なんもせえへんぐらい怠けもんや」

予想だにしない言葉に耳を疑うミリキヤスに狐はクスクスと笑いながら嘯く。

「うちなあ、昔一人の男に惚れてもうて、つい魂を持つてこうとしたんや。

でも、日本神話はなんもせえへんかった。

その男が自分達の直系の末裔やつて言うのに、民が本気で怒つてうちを絶対滅ぼしたるうつて仏連中をあちこち引つ張り出してまで息巻いとつても、日本神話はなんもせえへん。

そないな連中が怠けもんや言うたら可笑しいかえ？」

「……いいえ」

「せやろ。

「ただ、あんさんらはそないな怠けもんを本気で怒らせてもうた。

「そやからこうして根切りが見えるぐらい死んではるんや」

「……」

「判つてはいた。

「だが、冥界の悪魔が其ほどまでに殺されたことを改めて突き付けられミリキヤスは悲しみを叫ぶ。

「どうして、僕達は何をしたと言うんだ!!」

「『悪魔の駒』や」

「え……?」

「思いもなかった言葉にミリキヤスは言葉を失う。

「あれがただ悪魔に変える言うなら、日本神話の神さんもあないにえらく怒りはせえへんかったやろうね」

「そう愉快そうに笑うと狐はほないこかと言ひ、二人を捕らえたまま地を蹴り宙へと舞つた。

~~~~~

戦端が切られてから72時間が過ぎた。

天界陥落までを考えれば恐ろしいほどに粘ったと言えるだろうが、しかし実際はただ虐殺だけで終わらせた天界とは違い、冥界はアグレアスを始め多くの地を都市まで丁寧に破壊しながらの侵攻である。

それを加味すれば、果たしてどちらが時間が掛かったのか……

「見えているな冥界の王」

邪魔な両手足を切り落とされ、死なない程度に滅多切りに切り刻まれ髪を掴まれた状態で眼下の光景を眺めさせられているサーゼクスにそう問う須佐之男。

サーゼクスは答えず両眼から赤い滴を溢し続けている。

「これがお前が選んだ末だ」

お前が今の状況を作り出した原因だと言いつ切る。

「今現在、冥界の生き残りはあの街でほぼ全てだ。

酷い話だな。

お前が人間を取り込んでまで増やした悪魔がたったの二千まで目減りしたぞ。

状況は絶望的に見えるだろうが、人間が言うには総数が二千を下回らなければ種というものは存続可能だそうだ。

良かったな、今ならまだ挽回できるらしいぞ？

尤も、一万年の寿命がある悪魔にそれが当てはまるかは知らないがな」

特に益があるかも解らないことをつらつらと述べる須佐之男に漸くサーゼクスは口を開いた。

「どうして、私達はただ、未来が欲しかった、だけなのに……」

そんな事を言うサーゼクスに須佐之男は冷淡に告げる。

「ふん。『悪魔ではない』お前らしい願いだ」

そう言った須佐之男にサーゼクスは瞳孔を開く。

「サーゼクス。

お前はな、『癌』そのものなんだよ。

なんの変哲もない細胞が突然変異を起こした『悪魔の死に至る病宿主を殺す細胞』なんだよ」

「ち、がう……」

力を振り絞り睨むも微動だにすることなく須佐之男は冷淡に告げる。

「違わない。

何故なら、お前は『悪魔の駒』で以て冥界から悪魔を駆逐しようとしたからだ」

「……………はっ」

訳が解らないと言葉を無くすサーゼクスに須佐之男は嘯く。

「あれは生物を『悪魔』に変える物じゃない。

アレは生物を『お前の同類超越者』に変える代物だ」

「そんなわけがあるか!!」

有らん限り喉を震わせサーゼクスが叫ぶ。

「だったら何故私達は負けている!？」

全ての転生悪魔と眷属悪魔が自分に並ぶ超越者であるなら少なくとも今のよう  
に追い込まれている筈がないと叫ぶサーゼクスだが、それすら答えの範疇だと須佐之男は言  
う。

「当然だ。」

奴等の超越者としての異能は『死からの蘇生』だったからだ」

「……死からの……蘇生?」

「そうだ。」

それもただ一度だけ、死んでから『悪魔の駒』で『超越者』へとなった者のみが発現  
し、そしてその後はただの悪魔と変わらなくなるあまりに矮小な超越者だからだ」

須佐之男の言葉をあり得ないと否定するサーゼクスに立て続けに問いが放たれる。

「ならば何故『悪魔の駒』が悪魔自身に適用される?」

「違う」

「適用するのは所持者の力量以下と嘯きながら、例外的な『変異の駒』が何故存在する？」  
「違う」

「どうして愛すると嘯く女を眷属にした？」

「ち……がう……」

「何よりもだ。」

『悪魔の駒』を作ったのは誰だ？」

「……………」

製作者はアジユカ・ベルゼブブ。

即ちサーゼクスと同じ『超越者』。

「奴は自分が悪魔から産まれた別の種だと気付いていた。」

だが自然に増えるには悪魔という種は子孫が生まれづらく、野に広がるにはそれこそ万を数えても足りないかと理解していた。

だから『悪魔の駒』を生み出した。

お前等『超越者』が、悪魔に代わって地に満ちるために」

否定したい。

だが、幾ら経っても喉は否定の言葉を発してくれない。

それどころか、須佐之男の言葉は自分でも信じられないほどにストーンと納まるもの

だった。

「僕は……悪魔じゃなかったのか……？」

以前父が自分を指して「同じ悪魔とは思えない」と冗談混じりに言ったことがあった。成る程、父は正しく気付いていたのだ。

サーゼクス・グレモリーは悪魔から産まれた『悪魔を滅ぼすバケモノ超越者』なのだ。

「そんなことは俺に聞いてどうする」

『超越者』と悪魔がどう違うのかと漏らす言葉をどうでもいいと切り捨て、須佐之男はサーゼクスの顔を眼前に持ち上げる。

「貴様等二人が犯した罪を今此処で裁く」

然して須佐之男は大きな狐に捕まったグレイフィアとミリキヤス、そして都市リリスがサーゼクスから同時に見えるようにして宣った。

「選べ。妻同族と子かあの街同族の生き残り同族全てか。

選ばなかった方を貴様と共に殺し尽くす」

僕は、この怒りを忘れない

「父様!!」

「ミリキヤス!! グレイファイア!!」

愛する妻と息子が捕まった絶望と、親として己の惨めな姿を見せたことへの恥辱に叫ぶサーゼクスへその罪状を述べる。

それは日ノ本の民を悪魔に変えた事ではない。

「お前の罪は一つ。

『死』を貶めたことだ」

そもそも、日本では古来から人が偶然自発的を問わず鬼や妖に変わり果てることなど日常茶飯事だった。

故に日本神話は冥界の転生悪魔については自身で成るなら自業自得と、強制であるなら運がなかったと見逃し続けた。

ただ一つ、許しがたい行いに腸を煮えくりかえらせながら。

「お前達は死した者を生き返らせた」

過去において生き返りを願う者は神話現世を問わず多くあったが、そのどれもが絶対

的に叶わずに終わった。

それはエジプト神話のオシリス神とて変わらない。

確かにオシリスは妻の執念で生き返っているが、変わりにその命はセトと共に乾期と雨季に準えた限定的なものとしてであり、代償に二柱は交互に死しては生き返るを永劫繰り返すこととなった。

「森羅万象に於いて例外はなく、神も人も変わらずに絶対で在らねばならぬ『死』をお前達は貶めた。

それは、お前とお前を王と奉る悪魔が滅びる程度で購える罪ではない!!」

『死』を弄んだ者が死んだ程度で許される筈はない。

「だからこそ選べ!!」

王として民を道連れにするか。

親として妻と子を道連れにするか。

お前はお前の天秤天秤を自ら砕いて滅んでいけ!!」

選べる筈のない選択を強要する須佐之男にサーゼクスは嫌だと叫ぶ。

「ならば両方とも地獄に送ろうか?」

民は修羅道に、子は餓鬼道に、妻は畜生道に落としてお前に奴等が永劫苦しむ様を見せ付けてやろうか?」

「止めてくれ!!」

それは私の罪だ!!

どんな購いも果たして見せるから頼む!!」

必死に慈悲を願うサーゼクスに一切の容赦もなく須佐之男は決を迫る。

「くどい!!」

この罪はお前一人が購い済ませて終わる罪ではないのだ!!」

叱り付ける須佐之男にとうとうミリキヤスが悲痛に叫んだ。

「日本神話の神よ、僕が代わりに罰を受けます!!」

だから、どうか父様と母様は見逃してください!!」

両親のために己を差し出すと嘆願するミリキヤスにサーゼクスは駄目だと叫ぶ。

「お前がそんなことをしては駄目だ!!」

それは私の「黙れ」っ!!」

喉笛を締め付けサーゼクスから言葉を奪うと須佐之男はミリキヤスを冷たい瞳で睨める。

「童、お前は言葉の意味をきちんと理解しているのだろうか?」

まるで魂を握り潰されそうな圧力を放つ須佐之男の瞳にミリキヤスは恐怖しながらもそのつもりだと言った。



「息子に背中を押されねば答え一つ出せぬか愚物め」

侮蔑さえ含ませた須佐之男の言葉を最後に、サーゼクスは文字通りこの世界から消滅した。

「父様!!」

無惨な最期にミリキヤスの慟哭が響く中、須佐之男は事態の締めとこの場の全てに宣言した。

「進め!!」

須佐之男の号令を受け、待機していた日本神話の軍勢が動き出す。

戦車と軍艦の砲撃が都市を砕き飛行機が落とす爆弾が建物を炎で炙る。

そうした中を武士達が駆け、目につくものを片端から切り捨てていく。

そこに慈悲はない。

老いも若いも平等に、女赤子さえ刃の錆へと変えていく。

「ああああああああ!!」

目を覆う惨劇を前にミリキヤスの慟哭が空しく響く。

「さて、お前達二人はどうするか」

神との契約だ。

生かしておくのは当然だが、だからといって野放しにはさせられない。

「順当に言うなら封印が妥当だろうと考えていた須佐之男に狐がとある提案を持ち掛けた。」

「なあなあ野分はん。」

「あんじようしますよつてこの二人、うちが預かってもエエですかなあ？」

「どうする気だ九尾？」

「聞くだけならいいだろうと言う須佐之男に狐はクスクスと笑いながら嘯く。」

「いやねえ？」

「裏京都の代表に娘つこがおるんやけど、ええ子やからこの子を婿に宛がったろう思いましてなあ。」

「裏京都やつたらえらい真似もそうあきまへんし、それにそろそろ新しい胤の一つも入れへんとあきまへんと思つとつたきに、どないでつしやるか？」

「そんな、僕は……」

「狐の言葉に反しようとしたミリキヤスに狐はミリキヤスだけに聞こえる声で囁いた。「日本神話に復讐したいやる？」」

「せやつたら、うちの話に乗つとくとええで」

「狐の甘言としか思えない言葉に、しかし確かに胸の奥にしつかりと燦る怒りの炎を抱いていたミリキヤスはその提案に利を見出だした。」

「……どうして、ですか？」

「うちは元から日本の神は好かんのや。

せやから、あんさんが日本神話滅ぼすう言うんなら、妖怪連中纏めるいい方法を教えて手えを貸したるって話や」

「……………」

筋は、そうおかしくないのだろう。

実際妖怪を味方に付けられれば日本神話を滅ぼす目も見えるかもしれない。

「分かりました。

その話、お受けします」

「ほんまにええ子や」

ニタリと笑い狐はどないですか？と須佐之男に願ひ出る。

「……………いいだろう。」

ミリキヤス・グレモリーとグレイファイア・グレモリーの身柄は裏京都に預ける」

そう言ううと須佐之男は霧に包まれ姿を消した。

そうして取り残されたミリキヤスは父が消えた場所を見て、血が滲むほど拳を握る。

「ほな行きましょか」

「お願ひします」

狐に導かれるまま、復讐を誓いミリキヤスは冥界を後にした。

誰にとつて、この世界は平和なんだか

「なんなのよ、これ……？」

日本神話が宣戦布告を出してから五日後、ソーナを庇い重症を負ったセラフオルーがソーナとその眷属と共に冥界に戻って見た光景は、悪夢というしかない光景であった。

「酷い……」

「あんまりじゃないか!!」

街は尽く瓦礫の山と腐敗を始めた死体の悪臭で満ち、死と静寂のみが彼等を歓迎する地獄だった。

そこに命の息吹は感じられない。

その光景が、冥界は、悪魔は滅んだのだと嫌と言うほど彼等に理解させた。

だが、はいそうですかとセラフオルー達はそれを受け入れることは出来ず、手分けをして生き残りがいないか探すことにした。

「そっちはどうです椿姫？」

『駄目です。』

皆、死んでいます………』

繰り返せど変わらぬ報告に折れそうになりながらも、ソーナは主として気丈に振る舞い眷属達を励まして搜索を続けるよう指示を出す。

そうして数日を掛けて彼等が得た結論は、どう足掻いても悪魔の終焉は変わらぬというものであった。

「私達はどうしたら……」

「諦めないでソーナちゃん」

夢であったレーティング・ゲームの学校はおろか、明日の展望さえ見えない状況にさしものソーナも心が折れようとするも、セラフオールは可能性は消えていないと励ます。

「墮天使領に行きましょう。」

もしかしたら、生き残りがそっちに避難しているかもしれないわ」

この状況で期待も出来ない言葉だが、それでも言わなければ本当に心が折れてしまうと墮天使領を目指す。

そうして彼等を待ち受けていたのは、何者の侵入も拒むように展開された異様なほど強固な結界であった。

「あいっらあ……」

結界を挟んだ先に見える光景は、以前見たままであり、どう樂觀的に見ようと墮天使

が悪魔を見捨てたのは明白であった。

「和平を訴えておきながらよくも悪魔を見捨てたわね!!」

最早取り繕うこともなく抑えきれぬ怒りを魔力と共にセラフオールは結界に叩きつけた。

しかし渾身の魔力を以てしても結界はびくともせず、幾ら騒ぎ立てようと墮天使の一人さえ彼女達の前に現れようとしなかった。

「俺達、どうなっちゃまうんだ……?」

立つ瀬も寄る辺もない状況に不安の声を漏らす匙の言葉に、どう言えばと言い淀むソーナ。

「皆は心配しないで大丈夫よ!」

そんな絶望など知ったことかと言わんばかりにあまりにも唐突に以前のノリで笑顔を向けるセラフオール。

「こう見えても私には余所の陣営にもお友達がたくさんいるわ!」

私がお願いすれば必ず助けてくれるんだから☆」

軽いノリでそう語るセラフオールだが、燃え滓にも満たない自分達を助けるような勢力が、果たして本当に居るのだろうか?

「皆は心配しないで私に着いてきなさい☆」

絶望で狂ってしまったのかと言いたくなるほどハイテンションで飛び出すセラフオルー。

慌てて追い掛けるソーナ達を背後に、セラフオルーは笑顔の裏で決意していた。

(なんと少しでもソーナちゃんだけは守って見せるわ)

セラフオルーは正気だ。

だからこそ、生き残るためには何をしてでもという覚悟でやるしかないと理解していた。

それこそ、夜鷹のような浅ましい行為に身をやつしてでも。

悲壮なまでに覚悟を決め、冥界を後にしたセラフオルー一行。

その後、セラフオルーはオリュンポス陣営に保護を求め、其れを了承してもらう。代償として、自らをポセイドンの愛妾と言う名の奴隷に身を落とすことを条件に。

くくく

「迎えに来たでやんすよ」

「わふん！」

戦争が終わり、地下に在ると言う日本の死者が最期に辿り着く根の国で静養している

ケルベロスを迎えに来たベンニアと父オルクス。

久し振りの再会にケルベロスは普通の犬のように鳴いてベンニアを迎えた。

「今回はうちの子を保護してもらって本当にありがとうございました。」

あ、これハーデス様から御礼の冥府名産の石榴の詰め合わせです」

「これはどうも御丁寧に」

久方ぶりの再会に喜ぶベンニアとケルベロスに内心ほっこりしながら日本式で礼を払うオルクス。

伊邪那美命こと黄泉津大神はラツピングされた果物籠を受け取ると穏やかに微笑む。

「本当はハーデス様が御自身で御挨拶に来るはずだったんですが、いかんせん死の国はルールが厳しいのでおいそれと参るわけにもいかず、失礼とは思いましたが私が代理として御礼を申し上げさせていただきます」

そう頭を下げるオルクスに、いえいえと黄泉津大神は頭を上げさせる。

「こちらでも可愛い犬と触れ合わせていただけましたので、そう畏まらずともいいですよ」  
地上での冷酷さが嘘であったかのように穏和にそう言うと、ポンと手を叩く。

「そうそう。」

今回の冥界終了のお祝いにエレシユキガル女史から死の神だけで集まらないかとお話があったのだけど、宜しければハーデス氏から男神の方にお誘いをおねがいできない

かしら?。」

「そんな話が上がつてたんですか?。」

「ええ。」

でも私、逸話的に殿方に声を掛けるのは色々よろしくなくて、エレシユキガル女史もあまり人と話すのは得意でない方ですからどういたしましょうかと思いでいたのですよ」

聖書陣営に最も被害を被っていた死者の国の神にとって、此度の騒ぎは降つて湧いた吉報以外の何物でもなかった。

「分かりました。」

ハーデス様にお伺いして各神話に打診を打つておきましょう」

「宜しく願います」

諸手を上げて賛同するプルートの頭を下げる黄泉津大神。

その後ろで、お気に入りのオモチヤとばかりに振り回されている頭だけのコカビエルが涎まみれにされながら悲鳴を上げていた。

「助けてくれええ!!」

「コラ、そんなバツチイもんくわえちやダメでやんすよ!!」

「ギャアアアア!!」

コカビエルの悲鳴をBGMに、今日も根の国は平穩であった。

~~~~~

戦争終結から二週間後、身嗜みはしつかりしているものの憔悴しきった様子で高天ヶ原を訪れたアザゼルは倒れそうになる己を律し、手にした布にくるまれた棒状の何かを差し出した。

「約束のもんだ。

確かめてくれ」

それは悪魔を見捨ててまで完成させた術式で抜き出した鳶雄の神器から、更に混ぜ合わされていた余分なものを全て削ぎ落として本来の形へと戻された『天之尾羽張』であった。

「失礼」

差し出された剣を劍神が預かり、ためつすがめつ確かめてから其れが本物であると確認され、漸く天照は口を開く。

「これで主らは放免である。

何処となりとも行くがよい」

そう言うもアザゼルはいいやと首を振る。

「そもいかねえ。」

墮天使はインド神話に吸収されることが決まった。

俺は服従の証として、あんたらに首を持っていつてもらわなきゃなんねえ」

日本神話がどう思おうと、墮天使もまた聖書の一角。

それが丸々無傷と言うわけにはいかなかったようだ。

「それを言うたは梵天か？」

「ヴィシユヌ神だ」

「なんとまあ」

ヒンドウーの維持神にして数多の側面を持つヴィシユヌの沙汰とあつて、日本神話も

そう無視をするわけにもいかなかった。

「汚れ仕事はきつちりやれと申すか」

「向こうは手柄ぐらいはきちんと受け取るべきだと言つてやがったよ」

「方便をまあ」

実際、アザゼルというカリスマが残つていてはインド神話もおちおち背中を向けてい

られぬと考えたのだろう。

であればこそ、手柄を名目にいざとなつた際のヘイトを予め日本神話に全て押し付け

る心算なのだと言ふに察せた。

だからと言つて向こうの思うままと言ふのも面白くない。

「高天ヶ原に穢れを撒く気はない。

お前は同じ名の生け贄の山羊と同じように野に降りて放浪せよ。

其れが我等日本神話の沙汰である」

見逃したとも命をとる価値もないとも取れる決定を下す。

「いいのか？」

世界を乱したと復讐に走るかも知れねえぞ？」

「なればこそ、それを己が目で確めるがいい」

天照は袖で口を隠し笑う。

「神はなくとも世は回る。

例え聖書陣営が消えた影響で神魔のバランスが狂い今の世界が滅びようと、人はそこから這い上がり新しき世界を生き続ける弱く強い者達ぞ。

それを見届けなお復讐に走るならば、その時こそ我等日本神話はお前の首を取つてやろう」

自分達がやって来たことが正しかったのか、これから変わるだろう世界を自分で確かめろと嘯く天照に、アザゼルは息を吐き立ち上がる。

「なんて残酷な連中だ」

「我等は自然故致し方無し」

「ふん」

鼻を鳴らしアザゼルは一人神話の表舞台から姿を消した。  
その後、彼が姿を見せた記録は存在しない。

じいくり、楽しんでくんまし

『ええかあ？』

あんさんが復讐したい言うんやったら、大きく二つ足りへんもんを補うところから始めなあかん』

狐は言った。

『一つは縁や。』

日ノ本の神い相手に切った張ったで最後の最後まで屍になあてもあんさんに着いていこうって、そんな頭おかしゆうぐらいの奴を仰山味方に揃えなあ内に日本神話とやりあおうなんて、そんなん臍おで茶あ沸かすぐらい夢のまた夢や』

狐の言うことは尤もだ。

日本神話は古くから地に居着き、長く民から信仰を得て、その号令があれば死の国からさえ日本神話の為に戦いに来る者達を沢山抱えている。

それに対抗しようと思うなら、彼等と同じぐらいの忠誠心を持った仲間を集め、日本神話以外からの信用を勝ち得なければ父様のように他の勢力から見放され孤立してしまふばかりか、最悪は彼等にも日本神話に協力されてしまふだろう。

『そしてもう一つはあんさん自身の地力や。

最低でも野分はんとサシで渡り合うぐらいの力を持ってへんなら、はつきり言います  
が素直に諦めえ』

ああ。全くその通りだ。

弱ければ話にならない。

あの、父様を簡単に殺した神を僕一人で倒せるぐらい強くないと僕の復讐は果た  
せない。

『まあ、焦る必要はありませんよって。

戦には知恵も必要やしい、さつき言うた人の縁も時間掛けてゆつくり繋がなああかん  
もんどす。

あんさんは万年生きるんやろ？

妖怪だつて何千年も生きれますう。

ゆうつくりと、じいつくりと、必要なもんを時間を掛けて集めればよろしいどす』

そう笑った狐の声は、僕の胸の奥にしつかり刻まれた。

そう、刻まれたんですが……

「ミリキヤス！」

今日は私のおすすめの団子屋に連れてってやるからな!!」

「それは楽しみです」

そう、僕に笑い掛けてくれる許嫁の笑顔に、固く誓った筈の復讐心が溶けそうで辛いです。

正直言います。

僕は裏京都の管理者の娘、九重に一目惚れをしてみました。

彼女を一目見た瞬間、胸の奥が復讐の物とは別の熱で燃え上がり、ただ婿という立場を利用するだけの関係だった九重が僕に笑いかけてくれるだけで、幸せで世界が輝いて見えるようになってしまいました。

そんな彼女と許嫁となり、九重も嫌ではないというのだから何を文句がありませんか。

ええ。きっと、父様も母様と初めて逢った時はこんな気分だったのでしよう。

今では九重に笑ってもらうためにならあらゆる不可能さえも越えて何でもしてあげたいと思うほどになり、九重を泣かせるような輩は『滅びの魔力』を以てこの世から塵さえ残さず消し去ってやろうと、そう思うほど僕は九重を愛してしまつたのです。

これはきつと、父様から受け継いだグレモリーの血がそうさせているのでしよう。

……大丈夫。うん。

時間はたつぷりあるんです。

九重を幸せにすることは牽いては裏京都の妖怪の信頼を勝ち取ることに繋がるんです。

これは必要な事なんです。

ええ。ええ。

決して愛情に現を抜かして復讐を疎かにしている訳じゃないんです。

それはそれとして九重は今日も可愛いです。

そう己に言い聞かせ与えられた幸福を享受する様を、九尾の狐とリゼヴィム・リヴァン・ルシファーは嗤いながら眺めていた。

「ぶひゃひゃひゃひゃ!!」

復讐とか言いながら何あの様?

ヤツバ、チョー笑え過ぎて腹筋振れる!」

冥界終焉直後は日本神話への腹いせに確保したトライヘキサをけしかけようとしたが、そこに現れた狐の言葉に興味を持ち、そして今に至る。

そのまま笑いすぎて死ぬんじゃないかと思うほどゲラゲラ笑い転げるリゼヴィムを横に、人型に変化した狐はきゆうと唇を弧に歪めて嘯く。

「まあさか、こうまで見事おに堕ちるとは思わへんかったでえ?」

狐の思惑に、復讐の手伝いなど最初から存在しない。

狐が求めたのは、ミリキヤスが復讐と愛情の狭間でのたうち回り足掻き苦しむ様であり、その為に根回しを行ったにすぎない。

九重にしてもそう。

ミリキヤスが九重に溺れてもらっては面白くないが、かといってただ利用するだけというのも味気ないと、互いへ好意を向けるようほんの少し背中を押しはしたが、ああも見事に惚れ込むようにはしていない。

最も、ミリキヤスの懊悩はそれはそれで楽しめているため狐としては十分見応えがあると思っていた。

「ふふふ……」

あんまりにも可哀想だし、ちよつとお手伝いしちやおうかな？」

関係を拗らせ滅茶苦茶にしたいと口にするリゼヴィムに、狐は液体窒素をぶっかけるような殺意を向ける。

「アホ抜かしいな。」

今はだまあて見ときい」

団子を幸せそうに頬張る九重を蕩けた顔で眺めるミリキヤスに視線を戻し狐は嘯く。「こないやつたら、もつともおつと嵌まらせたほうがおもしろおなるう。」

につちもさつちもあかんぐらい惚れ込ませえて、ほんでやや子が今あの年頃になった

頃お、その幸せをぶちいつと潰すんや」

そうなった頃を見計らい再び復讐の火を燃やしてやれば、きつと愉しい結末へ転がり落ちていくだろうと嘯く狐。

ミリキヤスの子の前で九重を殺すのも良いだろう。

逆にミリキヤスをサーゼクスの立場に追い込んで裏京都をもろともにのつぴきならぬ状態にするのもいい。

破滅への道程は幾らでもあると嘯く狐にリゼヴィムは愉悦を想像し涎を溢す。

「いいなあ。

そんなこと言われちゃったら我慢するしかないじゃん」

ミリキヤスはどんな風に狂ってくれるだろうか？

もしかしたら復讐を捨てて幸福を享受する選択を選ぶかもしれない。

そしてそれを壊してやれば……

そう想像するだけでリゼヴィムは堪らなく愉しいと嗤う。

「あんじよう幸せになるとええ。

うちらは、あんさんらが美味しゆうなったら頂くよって」

世は全て我等の掌の上。

その果てに自分達が滅びを迎えても、きつとそれさえ愉しいのだろうと狐は暗い愉悦



「それで、悪魔はもう残っていないんですか？」

ことの顛末を教えに来ていただいたタケさんの話を聞き終え、私はそう尋ねた。御祓の影響で女性の姿になっているタケさんはいやと否定します。

「向こうから自慢げに言われた限りでだが、エジプト神話がフェニックス家の末娘をホルス神の嫁に迎えたそうだ。」

それと北欧がデイハウザー・ベリアルをエインヘリヤルに迎えたとも言っていたな。そう言うタケさんですが、表情からはなんとも思っていないさそうに見えます。

「それよりお前だよ。」

いい加減修行云々抜きに睦言の一つも交わしたのか？」

タケさんにそう言われ私の顔が真っ赤になるのを自覚しました。

「いい、いえ。」

まだ、その、相手にしてもらってません…」

言葉にしてみても、改めてあの人に私を見てもらってないなど悲しくなりました。

そう言うタケさんは頭をガシガシと掻きました。

「全くあの野郎は…。」

忘れじの呪いがあるからって、据え膳を無下にし過ぎだろうが」

「うう……。」

お願いですからそう言うのはもつと言葉を選んでください。

じゃないとその、自分がすごくエッチな女に思えてしまうんです……。

「まあ、男と女の色恋沙汰ばかりは神でも縁を結んだ先まではお手上げだからな。

諦めないで頑張れとしか言わんぞ」

「勿論です」

あの人が部長を殺したと本人から聞いた今も私の気持ちは変わりませんでした。

あの人に部長の最期を聞いた限り、どう考えても悪いのは部長でした。

ものすごく焦っていたからといって、堕天使を倒せる敵か味方も分からない相手だから甘く見られないよう意地を張ったあげく、自分の失態は簡単に覆せると見せ付けようとするなんて、そんなの怒らせるに決まってるじゃないですか。

私があの人立場だったら、きつとあの人と同じように殺すまでいかななくても仲良くしようだなんて思わなかったでしょう。

それで私は分かりました。

私はまだ、あの人『特別』になれていないと。

部長の事を話したのも、私に嫌われたり殺されてもなんとも思わなかったからに違いありません。

私にはまだちゃんとは分かりませんが、あの人『特別』になるにはもつとあの人

いろんな事を知らなければならぬのでしよう。

決意を新たにしていると、タケさんは満足そうに笑いました。

「うーちゃんが見込んだだけはあるな。

神として助けてやることは無いだろうが、本気の泣き言ぐらいは聞いてやるよ」

そう言うのとタケさんは用は済んだと帰っていききました。

タケさんを見送り私も帰ります。

今はあの人の寝泊まりに使っている4LDKのマンションの部屋の一つを借りています。

色々あつてギャー君も一緒です。

治療のときに色々見せたせいか、最近ギャー君と距離を感じています。

木場先輩は精神病院に入院したと聞きましたが、面会謝絶と言われ今日まで会えていません。

朱乃先輩は会議の後に行方を眩ましてしまい今も行方不明です。

姉様は任務に戻ってしまいました。

行く時にあの人にまた余計なことを言ったので、今度あつたらお話ししようと思いません。

マンションに戻るとあの人がりビングでリハビリをしていました。

「ただいま戻りました舞沢さん」

「おう」

声を掛けてもこちらを見ずに舞沢さんはゆっくりと太極拳を続けています。

結構な時間やっていたのでしょうか、汗が浮かび彼の匂いで部屋の中がいつぱいでした。

正直、ちよつと興奮してます。

吸血鬼のハーフのギャー君も嗅覚は鋭いはずですが気にならないのでしょうか？

そんなことを考えていると舞沢さんが太極拳を終えて汗を拭ってました。

後でそのタオルは貰つときましよう。

と、舞沢さんは部屋に行く教科書みたいな薄い本を持つてすぐに出てきました。

「戻つたんなら丁度いい。

勉強始めるぞ」

「はい？」

彼はいったい何を言つてるのでしょうか？

「うーちゃんからのお達しだ。

タケさん達が暴れさせたせいで駒王学園が廃校になったから、このままだとお前の学歴が高校中退になる。それは可哀想だから教鞭奮つてくれつて頼まれたんだよ」

「えくと」

「教えられるか心配だつてなら問題ねえ。

教会寺子屋師範学校全部経験済みだ」

「いえ、そうではなくて」

「先ずは一番成績の悪い数学から行くぞ。

言つとくが、終わるまで全員飯抜きだからな」

「どうやら恋の前に学業と言う強敵が待っていた私の前途は、物凄く多難みたいです。」

## 冥界での戦いに参加した日本神話の軍勢と備忘録

〔人間〕

『武士』

鎌倉以前に日ノ本で戦った『ぶし』ではなく『もののふ』と読む根の国の修羅。儀礼を尊ぶが敵には情け容赦なし。

大きく藤原、平、源の三派に別れて根の国でしょっちゅう殺しあつてる仲良しグループ。

『侍』

鎌倉以降に日ノ本の覇を競った羅刹。

日本神話に与するが武士よりも仏教寄りでそちらにかなり流れているらしい。

武士より更に細かいグループでもって互いに殺しあつて遊んでる。

『帝国陸軍』

根の国ではなく靖国で眠る護国の兵。

国への忠誠心がヤバすぎて靖国に隔離されているとも言える。

帝国海軍は味方だけど主に兵器と糧食関係で嫌い。

### 『帝国海軍』

陸軍と同じく靖国に隔離されている兵。

陸軍よりは幾分大人しいが、殺るときは陸軍と然して変わらないやべえ連中。

陸軍のことはそんなに嫌いじゃないが、零を突っぱねて独自に飛行機作ったりとかされたのでやっぱり仲良くする気はあんまりない。

### 『新撰組』

根の国から参じた悲劇の侍衆。

自分の失態を購うため沖田総司一人で参するつもりだったが、抽選の結果一番組全員で参加することになり、結果、沖田総司も含めて全員野垂れたが戦場で死ねた上に自分は間違っていないかったと無念はあれど悔いは晴れた。

### 【神】

『建御雷神』（たけみかづち）

須佐之男命からは『ミカ』と呼ばれている武神であり雷神だけど、記述からして雷神らしいことはまったくくしない神。

相撲が好きだが、本神の取る相撲は古式相撲かつ腕を氷柱にして相手を凍りつかせたり全身を刃にしたりとエクストリーム過ぎて最早SUMOUとなるため、相手になつてくれる神があんまりいないのが最近の悩み事。

科学ブーストでレールガンとかやれるが射はあまり好みでないためやらない。

『天細女神』（あめのうずめ）

芸能の神と崇められる元天津神の現国津神。

国津神としての名は『猿女』（さるめ）。

戦闘能力は皆無だが、踊りで周りを喜ばせ笑わせることで戦意を挫き幸福を与える権能を使う。

神話の記述内でも大事な場面ではいの一前に出てくるし重用されるぐらい重要な神。

更に日本で須佐之男命に次いで天津神と国津神の婚礼を成した事から種族融和の権

能も持っていた。

彼女を聖書陣営の対話に向かわせなかったことが日本神話の一番の答えだろう。

『猿田彦』（さるたひこ）

天細女神を妻に迎えた神。

天狗の祖として語られることから風の権能を、道祖神として奉られることから道案内の権能を、更に神話の記述から天細女神の権能を無効にする権能を有している。

『建御名方神』（たけみなかたのかみ）

諏訪に奉られている神。

有名な逸話が残念すぎて建御雷のかませと思われやすいが、本神は単身でミシヤグジ様を下した神だったりする。

巨体の神。諏訪から出雲まで届く大蛇の神などと多くの姿で語られるが、建御名方が怪力無双の神であることは事実である。

【妖怪】

## 『大百足』

伝承に語られし山を七巻半する巨大な龍神喰らいの大妖そのものではなく、大百足が遺した卵より孵化した子孫の一匹。

龍を主食とするため何も食えず常に餓えていたが、戦争に参ずれば龍が喰えると喜び参じた。

とはいえ喰えたのは龍神ではなく竜ではあったが、親たる大百足さえ食ったことがない竜の味に本蟲は満足した。

龍神殺しであり天然のドラゴンキラー。

タンニーンが莫大な魔力を得る『女王』以外で転生していたら結果は相討ち以下であつただろう。

名前を明記しなかったものはかなりの数になるため一切省きます。

なお、リクエストに関しては意見を求めた際に速攻でリクエストに関係のない要望がいくつも書き連ねられたため今回に限り完全に相手にするつもりはありません。

以下は備忘録みたいなものです。

セラフオールがオリユンポスに流れ着いたのは完全に出遅れた状態で、日本神話を除

く全派閥の談合の結果。

この時点でインドは墮天使を、北欧がデイハウザーを、ケルトがメフィストを、エジプトがレイヴェルを、仏教圏は呪詛の溜まり場となった天界を、メソポタミア他中東圏はマヤ・アステカとオーストラリア土着神と冥界を分割受領しており、唯一オリュンポスのみが権利を得られていなかったために他に行き先は無かった。

残党として狩られるか、形のない島でいつ辱められるかわからぬ恐怖に怯えるかの二択をセラフォルは身を売りゼウスの裁定の権能でオリュンポスの神は自分以外には手を出さないよう多少改善させている。

まあ、それでも横紙破りはオリュンポスの御家芸なんだろうけど。

デイハウザーは宣戦布告直後に日本神話に接触していた。

従姉妹の死の過去視をする代わりに戦争を短期で終わらせるための暗殺が必要な要人の場所を教える契約を交わしたが、種の滅亡を回避するための契約は真実を知り種族そのものへと憎悪に反転。

結果主犯格のゼクリラムを含む『王の駒』の使用者を皆殺しにした。

途中で眷属は皆死に、行く宛もなくさ迷うつもりでいたところをオーデインにスカウトされ、ロスヴァイセのエインヘリヤルになることにした。

レイヴェルは天界陥落の報を聞いた直後にフェニックス家がライザーの『女王』と共

に現在手元にある『フェニックスの涙』全てを献上することで下女として受け入れて貰うことになったが、フェニックスの源流であるホルス神が気に入ったため嫁として身請けすることになった。

メフィストはそもそも聖書の神がリリスから産み出した悪魔ではなく、更に地上の魔術組織には無くてはならない存在であったため、ケルト神話が代表で神話に対して反旗を翻さないゲツシュを刻む事で放免になった。

メフィストもタンニーンの事は残念だったが、それ以上の思惑もないため特に文句はなかった。

## やることないって困るよな

いやあ、聖書陣営は強敵でしたねー。

そんな笑える要素が微塵もねえ冗談なんかを頭に過らせつつ引き金を絞る。

イヤホン越しにもしつかりつんざく破裂音が耳を打ち、手にしたものが玩具じゃないと俺に教える。

そうして五発を的に叩き込んでからイヤホンを外し、後ろの店員に声を掛けた。

「南部式は知ってたが、ニューナンプはこうも勝手が違うもんなんだな」

「お客さん通だねえ」

無精髭の兄ちゃん風な店員は、椅子を逆さにして背に寄り掛かりながら笑う。

「しっかしそいつでいいのか？」

リボルバーだったらコルトからマテバまで揃ってるぜ？」

「欲しいのは威力じゃ無いんだよ」

ちなみにここは都心のとある銃模型店の地下の更に地下にある秘密のお部屋。

日本を裏から支えるまっとうな組織が管理してる銃のお店である。

なのでニューナンプも横流し品ではないちゃんとした新品である。

シリアルコードは存在しないがな。

「軽量低反発。それでいて精度もそれなり。」

日本人による日本人のための豆鉄砲。

サイドアームには十分さ」

使う弾が本命だからぶつちやけ銃身は趣味でいいんだし。

「弾はどうすんの？」

「未使用の空の雷管20個くれ。」

火薬と弾頭はこつちで調整する」

「そういうお客さんばっかりだよな」

最近じゃあ本命の得物のお伴に腰に銃を提げる退魔師なんて割りとよく居るからな。

エクソシストだと天使の光力を弾頭にした銃を使ってるが、日本だと自分で調整した

退魔弾を個人で作るのが主流だ。

特に意味を持たない雑談をしつつ、銃は貸し与えられた部屋の一つに郵送するよう手続きを済ませ、俺はカードで支払いを済ませ地上に戻る。

「……このまま帰つたらうるせえか」

真つ直ぐ帰ろうかと思ひ、一応踏み留まる。

日本神話との傭兵契約切つたはずなのに、なんでか契約が別のものとして続いていた

ため、致し方なく白音と同棲紛いの生活を続けて数カ月が過ぎた。

今のところ目的もないから構わないんだが、それにしたってなあなあで過ごし過ぎて  
いる気がする。

とは言うものの、三千年分の人生全てを殆ど投資していた聖書陣営絶滅計画はほぼ意味がなくなつた訳で、そうなってしまえばやりたいことなんてそもそも無いのだ。

と言うより、やりたいことの殆どはこれ迄で大体やりきってしまったと言う方が正しいか。

良いもんも悪いもんも経験したし、女にせがまれて子供をこさえたこともあれば逆に自分が赤ん坊孕んで産んだ記憶だつてある。

詰まるところ、俺には『未知』が無いのだ。

痛いも気持ちいいも、愛されることも恨まれることも、理不尽を振りかける側も掛けられる側も経験した。

無いのは精々……グロテスクなアートの素材にされることぐらいか？

それだつて近しい経験はあるんだから想像ぐらいは容易についてしまう。

そんなことをダラダラ考えていると目的地は目の前だった。

視界に入るのは個人経営のカフェ。

その店の中で白音とギヤスパ・ヴラデイが茶をしばいている。

と言っても白音の前にあるのはクリームが残滓がベツトリついた金魚鉢としか見えない器だったりするが。

ギヤスパアの標準サイズのプリン・ア・ラ・モードと比較すると笑いが出そうになるレベルだ。

「ま、しゃあなし」

ここまで来て回れ右をやっても意味はないから、俺はドアを潜って中に入る。

「舞沢さん！」

早速俺に気づいた白音が露骨に喜悦を見せて俺を招く。

「ブレンドをホットで」

カウンターを通り際に注文をしつつ白音の対面に座る。

「買い物は終わったんですか？」

「まあな」

肉体的にはほぼ全快と言えるも、やはり休みっぱなしで体は鈍っていたため、このままフリードと決着を付けるには格闘技一本では厳しいと感じ、手頃な得物を物色に出たのだ。

で、そういう訳で勉強を休みにすると言ったら白音は目敏くデートしたいと訴えたため、テキストで八割正解したらいいと条件を出したところ、残念なことに白音はボー

ダーを下回った。

が、それならと引きこもりのヴラディを外に引つ張り出したいと、半泣きで拒絶するヴラディを無理矢理引きずり出し、勝手についてくるといふ強硬に出やがった。

ヴラディは女装趣味はないが女物を着たがる愉快な性癖の持ち主で、その上それが下手な女より似合う残念な美形だ。

お蔭様で端からは美少女二人を待らせておきながらないがしろにする屑のような構図が完成し、どうでもいいのに不愉快な気分にならなくさせられた。

まあ、仕事の一環と思えば気にならなくなる程度だ。

「この後はどうするんですか？」

「本屋でも適当に覗いて新しい参考書でも揃えるぐらいだな」

そう言うのと白音は頬を膨らませる。

猫の妖のくせに栗鼠みたいだぞ。

「たまには他のこととかしたいです」

「例えば？」

「遊園地でデート」

遊園地ねえ……

「じゃあ、三日後に英語のテキストから問題出すからそいつで六割正解したら連れてつ

「やるよ」

「本当ですね？」

『約束』してやるよ」

まあ、テキストは東大模試を用意するがな。

「あの、」

と、珍しい事にヴラデイが手を挙げて意見を口にした。

「来る途中で可愛い服があったから見に行きたいです」

途中と言えば……

「あのゴシック専門のか？」

「はい」

まあ、別にいいんだが。

「金は有るんだろうな？」

四桁万円とか言われないうり払いもなくもないが、だからと言って払ってやる必要も感じない。

「は、はい。」

悪魔の仕事でお金は有りますから……」

言葉尻を弱めつつそう答えたヴラデイに俺はあつそと言いつつ来た珈琲を口にす。

すると、白音が不機嫌そうに漏らした。

「……ギャー君には優しいんですね」

優しい……ね。

「お前にはベッドで優しくしてんだろ」

そう言うのと周りが一齐に吹き出し白音が真っ赤になってテーブルの下に隠れた。

「外で言わないで下さいよ……」

泣きそうな声でそう訴えてるが、そんなもん知るか。

「言われたくなきや一々膨れんな」

にべもなく切り捨てると、白音は紅白揃った御目出度い顔で文句を垂れた。

「やっぱり私には意地悪です」

妬ましいなあ……

で、結果はというと。

「まずはあっちに行きましましょう！」

何がそんなに楽しいのか分からないレベルではしゃぐ白音に引きずられている俺が答えだろう。

正直甘く見ていた。

これまでの白音は転生悪魔の作用でリスニングは完璧なのだが、ペーパーテストでは意味がないどころか元の言語が勝手に変換されるせいで寧ろ足を引つ張り語学の成績はかなり悪かった。

にも関わらず、よっぽど遊園地に行きたかったらしく、三日の間修行以外は完全に英語漬けにしてまで猛勉強を始め、しまいにはボーダーの六割を越えてきやがった。

報酬はしっかりくれてやる主義なので、今回はからかいは完全に抜いて某夢の国に連れてってやることにした。

「なんか乗るのか？」

とはいえ、乗って楽しいもんなんか特にあるとは思えない。

「絶叫系なんかは仙道を使えばジェットコースター顔負けのハイスピードでスリリングな超軌道を描けるわけだし、メリーゴーランド系なんか野郎がどう楽しめと？」

そんなことは一応顔には出さず白音に問うも、白音は特にはないですと言った。

「じゃあ何で来たんだよ？」

ぶつちやけ俺からしたら遊園地なんてバカ高いグッズ関係で散財させられた挙げ句、空気を楽しませるを名目に時間を無駄にさせるための施設という認識しかない。

「舞沢さんは、遊園地に遊びに来たことはありますか？」

「……」

そう言われ記憶をひっくり返してみたが、そういやそんな記憶は無かった。

正確に言えば、その時の親に遊園地に連れてこられたことはあるが、しかし楽しいとは思えず、その時の親に不評を買わない程度にはしゃいだふりをしていただけばかりだった。

それ以外のデートでも遊園地は時間を無駄にするだけだと、行くのは映画館か水族館か市街デートで済ませていた。

「……誰かと来たことは無いな」

そう言うとうと白音は嬉しそうに破顔した。

「じゃあ私が初めてですね」

その言葉に本当に驚いた。

「舞沢さんのこれからも続く沢山の記憶の中で、私が初めてを貰いました」  
何がそんなに嬉しいのか分からない。

だけど、白音は欲しかったものを手にいれたと嬉しそうに笑う。

正直、少しだけ嫉妬を覚えた。

その感情に蓋をして、俺はいつものままに口を開く。

「……たく、折角来たんだ時間を無駄にすんなよ」

「勿論です！」

そう言うとき白音は時計ウサギばりに駆け足でアトラクションへと向かう。

その後ろ姿を追いながら、俺は小さく息を吐いた。

「まあ、今日ぐらいは付き合うさ」

~~~~~

夢の国で逢瀬を楽しむ白音とそれに付き合う舞沢を隣接されたホテルの一室から覗む者が居た。

その瞳は怒りに淀み、しかし殺意を発散することなく静かに機を窺っていた。

「曹操」

その呼び掛けに二人を睨んでいた男は視線を外さぬまま応じる。

「ゲオルグ、準備は出来たのか？」

その問いにゲオルグと呼ばれた男はああと頷く。

「後はお前の号令一つだ。」

「すぐに仕掛けるか？」

「いや」

指示を乞う言葉に曹操は待てと言う。

「狙うなら最悪のタイミングだ。」

「そうじゃなければ、殺したって殺したりないだろう？」

「そう指を窓に触れさせる曹操。」

すると、触れた指先から窓に蜘蛛の巣が描かれた。

指から発した壮絶な圧により窓がひび割れたのだ。

そのひび割れを見てゲオルグもそうだなと頷く。

「これは英雄になるための道程ではない。」

英雄になり損なった、間抜けな俺達の八つ当たりだ。

だからこそ、中途半端に終わらせてやるものか」

そう鬼気迫る声を低く吐く曹操。

彼等は『禍の団』における生き残りである。

冥界を征し神と悪魔の手から人類の自由を勝ち取ることを目的として、その果てに英雄となるべく集った一団であった。

しかし彼らの願いは碎け散った。

これ迄一度たりとも動くことが無かった日本神話の決起により、討伐すべしと挙げた聖書陣営が文字通り壊滅したからだ。

同時に悪魔達による同派の【旧魔王派】も廃滅しており、最高戦力であったヴァーリルシファアのチームも音信不通。

更に頭目であった【無限】のオーフィスも姿を消した。

それに伴い【魔術派】も自然解体され、残るは【英雄派】のみとなっていた。

そうして夢も希望も憎しみさえ行き場を無くした彼等は知った。

日本神話を聖書陣営へとけしかけ、己の夢を食い潰した怨敵の存在を。

『アサシン』舞沢章。

貴様さえ居なければ……」

情報提供者の言を元に独自に調査を重ね、舞沢が日本神話を動かしたのが真実だと彼等は判断した。

その答えは間違っている。

確かに舞沢が居なければ日本神話は今も臍を嘔みながら耐え続ける選択を選んでいただろう。

だが、それはあくまで耐えていただけだ。

舞沢が何かせざともそう遠からず日本神話は真実を知り、その怒りのままに聖書陣営を滅ぼしていただろう。

だがそれは最早仮定の話であり、舞沢が切っ掛けで日本神話は聖書陣営を滅ぼしたのは事実と否定できない話であった。

「ええそうよ。」

あの男が全部悪いのよ」

と、そこに新たな声上がる。

「起きていたのか姫島」

それは行方不明となっていた姫島朱乃であった。

朱乃は占拠していたベッドから降りると素肌にシーツ一枚の格好で曹操に寄り添う。

「妬いてるのゲオルグ？」

「笑えない冗談だな」

不愉快だと朱乃の言葉を切り捨てる。

復讐の相手を知らせてくれたことには礼を言うが、ゲオルグは己の復讐に自分達を巻き込もうと企む朱乃が気に入らなかつた。

しかも自分の身体を使つて曹操に取り入っている辺りが更に質が悪い。

曹操がそれを解つていて好きさせているため今は黙っているが、一々自分が上だという態度を取ることはかなり腹に据えかねている。

甘える仕種で曹操に纏わり付きながら朱乃は囁く。

「貴方なら絶対勝てるわ。」

何せ、貴方には本物の神殺しの槍が有るのだから」

朱乃が曹操に目を付けたのは、彼が世界に13種しかない神を殺す可能性を秘めた『神滅具』<sup>ロンギヌス</sup>の一つ『黄昏の聖槍』の所持者であつたからだ。

それも神の子イエスの死を証明した本物の神殺しの槍である。

この槍が有れば日本神話など必ず滅ぼせると朱乃は全てを擲ち槍を持つ曹操に取り入ろうとした。

朱乃の言葉に曹操は皮肉げに口の端を歪める。

「<sup>神滅具</sup>こんなものはただの棒きれだよ」

「……ええ？」

どん、と衝撃が走り、そして自分が曹操に刺されたのだと漸く気付く朱乃。

「どう」

してと言うより先に『黄昏の聖槍』から膨大な聖なるオーラが放たれ、悪魔の身である朱乃を一欠片も残さず消し去った。

「神どころか、邪仙一人にさえ打ち負ける棒きれだよ『黄昏の聖槍』はな」

そう言い曹操は朱乃が最初から居なかつたように槍を軽く振って消す。

「良かつたのか？」

少なくとも嫌つてはいないように見えていたゲオルグが問うも、曹操は何の関心もない様子で嘯く。

「用は済んだからな。

閨の相手と旨い料理は勿体無かつたが、放置しておけば厄介になる女だ。

手を切るなら早いに越したことはないだろう」

まるで道具を手放す気軽さでそう言う曹操にゲオルグは関心は薄くそうだなと頷く。

「折角夢の国に居るんだ。

夜のパレードで始めよう。

それまでは好きに遊んでで良いと伝えてくれ」

その言葉を受けゲオルグは解つたと『絶霧』を使い、来た時と同様に消える。

「妬ましいよ『アサシン』」。

お前のような奴が英雄になれて、どうして俺達は……」  
英雄になれなかった男は心の底から悔しそうにそう吐き出した。

偉くなんてなりたいもんかねえ？

正直甘く見ていた。(二回目)

人間心理を巧みに煽り喜怒哀楽をコントロールすることであらゆる施設へと誘導する施設配置。

その上で気候を含めてマーケティングを重ねた現地住民の趣味嗜好に合わせた商品を、店舗のみならず露店まで駆使し適宜提供することで財布の紐を緩めさせる商戦略。

シビリアンパワーを背景に生み出したオリジナルネームドを一定間隔で配置することで、どの施設にも客足が途絶えないよう配慮された集客戦略。

正に此処は人に夢を見させる国だ。

そんな夢に踊らされた白音に好きにさせた結果、一日で諭吉が十枚消えていたよ。

正直、甘く見ていた。(三回目)

「夢の国とはよく言ったもんだな…」

痛くはないが、だからと言って別に捨てたいわけでもなかった金が羽を羽ばたかせて飛んでいくのを幻視し、俺は疲れたままにそう呟いた。

「今日は凄く楽しかったです」

殆ど沈んだ夕暮れの中、もうすぐ締めのパレードが始まると言うのに妙に開けた広場で、ライトアップされたシンボルタワーたる城を背後に、鼠耳を付けた白音はそう笑う。「そいつは何よりだ」

楽しませるのが目的なら、確かに今回のチョイスは間違っていないかつたらしい。

「舞沢さんはどうでしたか？」

「俺か？」

「どうだろう？」

別に夢の国そのものは初めてではなかったが、こうまで計算されていたと知れたのはそれなりに楽しめたと言える。

「まあ、それなりにな」

「むう」

正直に言えば白音は頬を膨らませる。

頭の付け耳と相俟って本気で栗鼠みたくなってる白音に、ほんの少しだけリップサービスを付けてやることにした。

「お前とじゃなきや、今日ほどには楽しめちゃいなかったらうさ」

「……………意地悪」

そう言えば、暗がりでも分かるほどに白音は顔を赤くする。  
にしてもだ。

「白音、調息は怠ってないよな？」

「え？ は、はい」

戸惑いながらもそう頷く白音に俺は不愉快な気分で言う。

「残念だが、今日一日デート気分で終われねえみたいだ」

「!？」

そう言えば白音は即座に周りを見渡し、そして俺の言った意味を理解する。

「人氣がない……?」

「俺もさつき気づいたが、どうやら人避けの魔術が使われたらしい」

かなり上手の使い手らしく、入念な隠匿を重ねたソレは俺でさえ気付くのに時間を取られるほどだった。

懐に忍ばせた棍を変形させ、白音と背中を合わせて警戒する。

そうしている間にパレードが始まる。

彼方には認識を誤らせる魔術が使われているようで、巨大な台車の上では誰もいない  
眼下に向け役者達が愛想を振っている。

「来るぞ」

氣の乱れを感知し白音に警戒を促すと、パレードの反対側に夜闇よりも暗い霧のようなものが生まれ、そこから制服の上から漢服を纏う男が槍を携え現れた。

「今日は楽しかったかい？」

俺達へそう問う言葉に、俺は自分でも引くぐらい殺気を垂れ流しながら答える。

「さつきまではな。」

だが、テメエのそいつで台無しになったよ」

「舞沢さん……？」

白音の声が酷く遠い。

悪いな白音。

だがよ、あの槍は聖書陣営と並んで本気で叩き折りたいと思つてた代物なんだよ。

「テメエ、その槍を何処で手に入れた？」

「こいつか？」

問いに、男は不愉快そうに言う。

「産まれたときだよ」

「成程。神器か」

「ああ。」

神滅具『黄昏の聖槍』。

俺の人生を滅茶苦茶にしてくれた忌まわしい槍だ」

だろうなあ。

「神滅具……」

その答えに白音が半歩下がる。

それもしやあない。

アレは他のと違い、釘、十字架、聖杯と並んで真正銘聖書を由来とする槍だ。

しかもヨシユアの死を確定させ、更に二千年掛けて紡ぎあげた聖なる遺物の代表ともなれば、仙猫に至ってない白音では勝ち目は薄い。

「んで、何の用だ？」

「つうか、何処のどちら様だよ？」

「そう言えば男は槍を握る手に力を籠めた。」

「今は曹操を名乗っている『禍の団』の残党『英雄派』の頭目だ」

「英雄派、曹操ねえ……」

俗に言う三國志の頃には中国に産まれてなかったから顔は知らんが、なんでまた英雄で曹操なんだか。

「随分珍しい通り名を使うじゃねえか」

「こゝろ見えて俺の先祖は曹操なんだな。」

英雄を志すに当たって借り受けさせてもらった」

「……え？」

いや、それはねえだろ？

「何か？」

「先祖つて、做うならそこは先ずは字を借りねえか？」

んで、大成してから曹操を名乗る方が筋も通るし名を残せると思うんだが？」

そう言うのと曹操の顔が固まった。

もしかしてこいつ、何も考えてなかったな？

「た、確かにそうだが、曹操は中国国外ではあまり有名ではないから、先ずは先祖の名を世界に知らしめることが重要と借りたんだ」

声が震えてんぞコラ。

「まあいいや。」

趙雲だろうが項羽だろうがなんだって構わねえ。

で、態々デートの邪魔をしに来た理由は？」

軽いジャブを入れつつ本題を促す。

くだらないやり取りの合間に調息で練った氣はチャクラに廻しておいたから、既に硬氣功を発動できるまで溜めてある。

いざとなれば白音が逃げる時間ぐらいは稼いだ上でケツ捲るぐらいは出来るだろう。俺の問いに曹操はなんでもなさそうに言う。

「はつきり言おう。」

お前に八つ当たりをしに来たんだ」

「はあ？」

なんだそりゃ？

「俺達は人間の限界に挑みたいと、いや、英雄になりたくて聖書陣営に戦いを挑もうとしていた。」

だが、聖書陣営は俺達が動く前に滅んだ」

お前が引き金になってな、と初めて殺気を顕にした。

「英雄、ね」

あんなもんになりたいなら、態々余計な寄り道なんかしなきゃいいものを。

「一つ確認だ。」

お前の言う英雄ってのは、誰かの命を奪わなきゃ成れねえもんなのか？」

「……」

「はつきり言えば悪人ぶつ殺すよかNGOだ赤十字だのに参加して、飢えたガキに飯食わせてやるうって奴の方がよっぽど偉いやつに思えるがねえ」

「……ああ。今なら俺もそう思うよ。

だが!!」

曹操が怒りを表に出して吠える。

「だったら俺達のこの憤りをどこに向ければいい？

この槍が俺の故郷を奪った!!

俺だけじゃない!!

英雄派に参加するほぼ全ての者が聖書の神によって人生を滅茶苦茶にされたんだ!!

だから」

「だから復讐するは我にありってか？」

そうだ!!と叫ぶ曹操に、俺はいつそ憐れに思った。

「お前、勘違いしてんぞ」

「勘違いだと？」

「つまりさ、お前は不幸があれば必ずそれを帳消しにするだけの栄光があると思ってるわけだ。

……そんな訳ねえだろ」

視線に殺意を乗せて俺は突き立てる。

「人生ってのはな、必ずプラスマイナスがマイナスで終わるもんなんだよ。」

瞬間的にどれだけプラスを得ようと、必ずどこかでそれ以上のマイナスを押し付けられるもんなんだ」

「……」

「英雄なんて正にそれだ。」

先祖の名前を名乗ってんならその生涯はよく知ってるはずだ。

だからこそ聞くぞ？

曹操孟徳という男の生涯は、喪つたもの以上の栄光に満ち溢れていたのか？」

アーサー王は妻を寝取られ息子に国を裂かれた。

ヘクトール將軍は国を守れず道半ばで倒された。

ジャネットは国に見捨てられ凌辱の果てに焼き殺された。

シグルドは妻を忘れさせられその妻に刺し殺された。

ソロモンは天使の姦計に踊らされ全てを失った。

ラーマ王は取り返したシータ妃を自ら追放させられた。

ギルガメツシュは国の存続のために延命を図り寸でるところでその手段を奪われた。

後世がどれだけ賛美しようと、英雄と呼ばれた彼等の生涯は只一つの例外もなく、絶

望と悲劇ばかりで積み重ねられていた。

割りに合わない人生を送る覚悟は本当にあるのかと問う俺に、曹操は口を開く。

「だとしても俺は、」

その答えを聞ききる前に視界が突如回転した。

お前ら本気なのか？

殴られたと認識したのは無意識に棍を盾にして一回転してからだった。

「舞沢さん!？」

「避ける白音!！」

宙を舞う俺に悲鳴を上げる白音に警告を促し衝撃を流しながら着地し棍の状態を確認する。

状態は正常。戦闘に支障なし。

視界の端で白音が見たことがある剣の斬戟を避け此方に下がってくるのを見てから、改めて正体を確認する。

片や五本も剣をぶら下げた野郎で、もう片方は二メートル強のデカブツ。

警戒する俺たちを尻目に曹操が二人に呼び掛ける。

「ジークフリード。ヘラクレス。

仕掛けるのは早過ぎだ」

まあたそういう手合いかよ。

呆れ返る俺に構わずジークフリードと呼ばれた三本腕の優男は皮肉げに笑う。

「そうは言うが、あそこまで言われて俺達も我慢できなくなったんだよ」  
「……」

その言葉に黙る曹操。

そうしている間に曹操が顕れた黒い霧が発し、新たに二人、男と女が現れる。

「ゲオルグ、ジャンヌもか」

「……………は？」

待てよコラ。

「おい」

色々腹に据えかねて声を発したら奴等、面白い勢いでこつちを見やがった。

「ジークフリードもいいさ。」

ゲオルグだつて納得してやる。

ヘラクレスなんざ種ぶち撒きまくってたからあり得るだろう。

だがな、なんでジャンヌ・ダルクジャンヌ・ダルクが其処に居るんだよ？」

槍といいさつきから本気で人を苛つかせまくる奴等にそう怒気を叩き付ける。

女が怯みながらも口を開く。

「私はジャンヌ・ダルクの魂を継いだ者よ。」

何か文句でもあるわけ？」

「大有りだよクソアマ」

ジャンネットの魂を継いだから自分はジャンヌ・ダルクだあ？

こいつら、思ってた以上に調子こいてたみてえだな。

「舞沢さん？」

「すっこんでろ白音。」

こいつら全員、今此処で腸ぶちまけさせねえと収まらねえ。

だからよ、

巻き添え喰いたくなきやさつさと逃げろ。

ソレだけ言うと俺はアスファルトを踏み砕きながら跳躍した。

「速い！ だが!!」

ジークフリードが三本の腕にそれぞれ得物を握り迎撃に入る。

「破あつ!!」

振り下ろした棍の先端が音速に片足踏み込みながら、受けに回った三本ごとジークフ

リードを足首まで沈ませる。

「なんていう薙り」グラム握るならジークフリードじゃねえでシグルド名乗っとけ!!」ご

はっ!!」

棍を軸に半身を捻って脇腹に膝を叩き込み吹っ飛ばす。

「喰らえ!!」

ジャンヌ・ダルク

そのままクソアマへと走ろうとするが筋肉達磨が一步前に出てカウンターを撃ち込もうと拳を振り抜く。

「ヘラクレス名乗るならパンクラチオンぐらい修めてからにしろ!!」

紙一重で拳をすり抜け側転の要領で両足を首に絡め、チャクラを四つ廻して得たエネルギーを全部ぶちこんだフランケンシュタイナーをかまして顔面からアスファルトにダイブさせる。

「ジークフリード!!」

ヘラクレス!!」

三十秒と経たず二人ブツ飛ばされたことに阿呆が悲鳴に近い声を出す。

間抜け。甘すぎんだよ!!

フランケンシュタイナーの運動エネルギーに抗わず身体の力を抜いて宙に跳ぶことで一度引きながら棍を上空へと放り、右手を懐に挿じ込みニューナンプを抜いてジャンヌ・ダルクに照準を合わせ更に左手でルーンを虚空に刻む。

「『アンサズ』!!」

発砲と同時にルーンが炎に変わりゲオルグに飛ぶ。

しかし弾丸はジャンヌ・ダルクの前に発生した剣に弾かれ肩を掠めただけ。

ルーンに到っては黒い霧に吞まれ直後に俺の真後ろから飛び出した。

「貰っ『アイズ』!!」

既に刻んでいた氷のルーンを起動し炎を打ち消す。

それを見て、勝ちを見出だしていた曹操の顔に苦渋を刻む。

「……痛う」

「四人を同時に相手に出来るか……」

掠った肩から血が零れ目尻に涙を浮かべるジャンヌ・ダルクと一連の結果に警戒を新たにするゲオルグ。

「舐めんよ餓鬼共」

その程度は経験の範囲内なんだよ。

「テメエ等がどう考えてるか知らねえが、こちとら独りで悪魔を狩る手段を磨いて来たんだ。

撃った魔術が跳ね返される程度、予想できなくて悪魔狩りが成功する訳ねえだろ」

人間というだけで圧倒的に不利なんだ。

だからこそ正面を避け、暗殺を主体にして来たわけだが、だからといって他の技術は不要になる訳じゃない。

暗殺に適したロケーション作りのためわざと正面から一当てしなきゃならないこと

だつてザラに有つた。

「八つ当たりしてえなら本気で殺しに来い。

じゃねえなら……返り討ちに遭つてくれたばれよ」

ひゅんと空気を切つて回転しながら落ちてきた棍を掴み地面を貫いて突き立て、見せ付けるようにニューナンプの弾を交換する。

「……成程。」

噂に違わぬ使い手か」

槍を握りなおし曹操が俺の評価を口にする。

「甘く見ていたつもりはなかったが、いや、それこそ甘い目論見か」

「降参でもするつもりか？」

したつてぶち殺すことは変更してやらねえと内心付け足し訊いてみれば、いやと曹操は否定する。

「当初の予定通り、正面からやり合うのは止めにする」

そう奴が言うのと、黒い霧から捕らえられた白音が現れた。

何やつてんのお前？

「月並みだがこう言おう。」

彼女の命が惜しくば武器を捨てろ」

「嫌だよ」

「は？」

当たり前前事を言えばなんでか曹操だけじゃなく、ブツ飛ばされたヘラクレスとジークフリードも含めた白音以外の全員が信じられないものを見る目で俺を見る。

「恋人の命が惜しくないのか？」

「違えよ。」

仙道と武術の弟子だよ」

「だったら尚更大事じゃないのか!？」

「……はあ」

こいつら、ほんつとシチュエーションに酔いすぎてんな。

「逃げろって言ったのに捕まったのはそいつの問題だ。」

そんな風は無様を晒すようなら、どのみち俺の見えない場所で野垂れ死ぬだろうよ。

保護者じゃねえんだ。手前の尻は自分で拭け」

いつそ舌嚙んで死んでくれれば助ける手間もないし、死体が足かせになって隙を作ってくれるだろうとは流石に言うのは止めておく。

「お前に人の情はないのか？」

「悪魔殺すのに邪魔だから捨てたよ」

それに、こっただけ注意がこっちに向けば……

「破あ!!」

捕まっていた白音が猫魅の本性を露にし、潤沢な氣を足から放ち地震と見紛うレベルの震脚を大地に叩き込んだ。

「なっ……!」

突然地面が揺れ躰踏む曹操に向け指差し呪いを撃った。

「がっ!?!」

揺れと眼球に走る痛みで曹操が混乱する間にニューナンブで白音を掴んでる野郎の頭の風通しを良くし、完全に自由になった白音が地を蹴って離脱する。

「逃げろって言っただろ?」

「子供を人質にされて仕方無かったんです」

膨れながらそう言い訳をする白音に、悪魔の癖にと内心呆れつつ曹操に視線を戻す。

「計画性無さすぎだ。」

捕まえたつてなら、手足とまで言わねえが服を剥ぐくらいしておけ」

全裸で暴れられる人間つてのは意外でもなく多くない。

漫画じゃねえんだ。人質にしたならパンツを膝まで下ろすくらいはしねえと。

決着付けようか。

「退け、曹操」

ニユーナンブの弾を込め直し、構える白音と並んだ所でヘラクレスが四人を庇う位置に立ちそう告げた。

あのさあ…

「ハイそうですかと見逃してやるわきやねえだろ？」

切り札の弾こそまだ温存しちやいるが、通常弾だつて既に夢の国の入場料に近いだけ使つてんだぞ。

その分はきつちりテメエらのタマで支払つていけよ。

「ヘラクレス!!」

「行け!!」

こちらを釘付けにするために特攻を仕掛ける筋肉達磨。

愚直な突進に阿呆と詰り再び黙らせるため棍を構える。

テメエ一人で済ませてやる…

「っ、跳べ白音!!」

途端、凄まじい悪寒が走り反射的にそう言いながら距離を取るため軽身功を使い地を蹴る。

直後、放った拳が地面に当りヘラクレスを中心に爆発が生じた。

「神器か！」

おそらく接触を起点とする誘発系と経験から逆算し、近付かないよう白音に促す。

「俺の神器『巨人の悪戯』は触れた先より爆発を発する!!」

触れれば最後と思え!!」

「爆発の何処に巨人要素があるんだ！」

「つうかジャイアントはギリシャじゃなくて北欧だろうが!!」

どこまで頓珍漢なんだテメエ等!?

しかし真面目な話、かなり厄介なことになりやがった。

白音は魔力操作はお粗末で実戦は格闘オンリーだし、俺にしたって中距離以上は切り札を除き今使える手持ちの魔術も鉛弾も火力は補助程度にしかない。

「ヘラクレス、済まない!!」

ヘラクレスをあつさり見捨てて曹操共が霧に吞まれて消える。

「ちっ!!」

槍か女かどつちかだけでも殺っておきたかったが、こうなりやこいつだけでも確実に

仕留める。

「追いますか?」

「次にとつとけ。」

それよか目の前のヘラクレスヘラクレスが先決だ」

完全に冷えた頭でそう指針を定める。

つうかだ。槍を見たせいとはいえジャネットを騙る女郎に頭を沸騰させるなんて今更過ぎるだろうが。

これ迄だつてジャンヌ・ダルクの生まれ変わりだつて自称する輩と会ったことは有るんだし、一々前世の因縁を持ち出してもお互い損するだけだ。

とはいえだ。

正直、元トロイア兵としちやあアヘラクレスアの血統を仕留めるシチュエーションは悪くない。

どうせどつちかが死ぬ以下の損な結果はねえんだし、こんな時ぐらいいは因縁も上乘せして構わねえだろう。

「白音、わかつてると思うが次にハマしたら今度こそ見捨てるからな」

「貴方がそういう人なのはよく知ってます」

飛び道具にするつもりらしいベンチを片手に白音は唇を尖らせ、すぐに戦場に意識を

戻す。

「相手に触れずに倒しきれぬ本命はありますか？」

「あるにはあるが、持ってきてるのは二発だけだ」

「解りました。」

「援護しますのでお願いします」

「そう言うのと白音はベンチを片手にヘラクレスに飛びかかる。」

「はあああ!!」

悪魔の駒により強化された膂力に氣のブーストを加えた投擲に、ベンチが音速を越えてヘラクレスへと飛ぶ。

しかしベンチはヘラクレスに触れた瞬間爆発が生じ、着弾の衝撃が全て打ち消される。

「その程度効かねえぞ!!」

その隙間を縫ってルーンの炎と氷と鉛弾を叩き込むが、氷と鉛弾は爆発で弾かれ炎は軽い火傷を負わせた程度で吹き払われる。

「温い温い!!」

「さっきまでの勢いはどうした？」

「……調子こきやがってこの野郎。」

捨てるのが勿体無いから確認も兼ねて空にした葉莖を排し、見分けるために紅く塗った切り札の弾丸を籠めてから銃をスイングしてシリンドラーを収め弾交換を終える。

その間にも引き抜いた電灯やら花壇のレンガやらを投げつけ、近付かせまいと牽制を謀る白音へと、ヘラクレスは投擲物を神器で無効化しながら着実に追い詰めようとする。

「どうした？」

「弱腰に物を投げてばかりで臆したか？」

「っ、っの!!」

さつきまでと打って変わり攻めあぐねる状況に苛立った白音が、挑発に乗りレンガを手に維持していた距離を詰める。

ちっ、白音の奴心理戦に弱すぎる。

下手に力を付けたせいで、元から足りなかった辛抱強さが更に目減りしてやがるのか？

少しばかり修正させたほうがいいかと余計な思考を挟み、確実に切り札を当てるため俺も距離を詰める。

「ふっー！」

距離２メートルの所で顔面ヘレンガを投げつけ、爆発で視界が遮られた一瞬を縫って

縮地を使い背後へと滑り込む。

「このタイムリングなら…!？」

反発のエネルギーを丸々載せた貼山靠をぶちかます白音だが、馬鹿野郎そいつは悪手だ。

「そんな!？」

ドンツと衝撃を発し完璧に決まった貼山靠だが、ヘラクレスの野郎はそれに耐えきりやがった。

「効いたが、軽すぎる!!」

巨木に打ち付けたように耐えて見せたヘラクレスが茫然とする白音の首を掴む。

「ぎょうつ……」

「先ず一人!!」

悲鳴の出来損ないを漏らす白音の首をへし折らんと力を籠めようとするヘラクレスの肘を狙い、俺は切り札の禁呪弾を撃ち込んだ。

紅いジャケットを被せた弾丸はヘラクレスの肌に残く刺さった時点でその本性を露にする。

弾丸に使ったリアス・グレモリーの骨を媒介に呪いが放たれ、骨を中心に『滅びの魔力』がヘラクレスの腕を手首と肩の付け根を残し食い千切る。

「ぎゃあああああああ!!」

痛みを感じる暇さえ与えず消し去られた腕に驚き、ヘラクレスは後退りながら漸く襲ってきた痛みにも耳障りな絶叫を上げる。

「俺の腕が……」

「それは一体!?!」

「態々教えてやる理由はねえな」

怒りと痛みと困惑で滅茶苦茶になったヘラクレスの頭に最後の一発を叩き込む。

「うおおおお!!」

『巨人の悪戯』!!』

爆発の反作用で無力化を謀るヘラクレスだが、奴の神器と同じく触れた瞬間発動する禁呪弾の特性に追い付くことなく、『滅びの魔力』に頭を消滅させられて死んだ。

「終わりだ」

ニューナンプを仕舞い放置していた棍を拾いに向かう。

「舞沢さん」

そこに白音の固い声が飛んできた。

「今のは、部長の『滅びの魔力』ですよね?」

「ああ」

否定する理由がないから素直に肯定してやった。

いっそ、このまま縁が終われば楽かと序に全部話してやることにする。

「こいつは禁呪弾という、人間が悪魔を殺すために完成させた悪魔を素材に使う弾丸だ」  
薬室から空の薬莢を抜いて白音から見えるようにしながら教える。

「悪魔を……素材に……」

「ああ。」

昔は鏃に使っていたが、さておき。これには呪術を刻み込んだリアス・グレモリーの骨を使っている。

序でに言えばこっちの多節棍の芯にも同じ仕込みがしてある」

そう言うのと棍の接続を解いて折り畳み懐にしまう。

見れば白音の顔から血の気が引いていた。

驚く必要もないぐらい当然の反応だ。

「舞沢さんは、悪魔の遺体をそんなふうにしてなんとも思わないんですか？」

「……どうだかな」

最初は漸く一矢報えたと嬉々として解体してやった。

ただど繰り返し返すうちにそれも作業としか思わなくなつて、今では素材に使った悪魔からどんな効果を発する武器が造れるか期待するぐらいしか思うものは無くなつていた

ように思う。

「正直、許せないと思う気持ちはあります」

「見損なつたか？」

「はい」

まあ、当然の感想だな。

「だけど、」

「ん？」

「私の中に期待が生まれました」

「……」

何を言ってるんだこいつ？

「私が死んだら、舞沢さんは私の遺体で武器を造りますか？」

「……多分な」

今となつては悪魔は稀少存在だ。

転成悪魔は混ざりものが多く素材に使うには不適當が多いが、しかしそれでも武器として加工できない訳じゃない。

「じゃあ、約束してください。」

私が先に死んだら私の身体を使って武器を造って、それが壊れるまで大事にしてくれ

るって」

そう願う白音の目には一辺の後悔も見えない。

「自分が何を言ってるか解ってるのか？」

頭がおかしいとしか言えない台詞にそう確かめるも、白音はハイと笑う。

「……面倒な約束させるなよ」

「私は面倒な女ですから」

「ちっ、」

嫌味すら笑って受け入れる白音にとうとう白旗が上がる。

「解った。」

約束する。

お前が死んだら死体を武器にして、壊れてなくなるまで使い倒してやるよ」

「ありがとうございます」

本当に嬉しそうに笑うなコラ。

「序でに言っとくよ。」

そんなこと言った奴は四千年近い記憶の中でもお前が初めてだ」

その言葉に目を見開く白音を見ることを止め、俺はヘラクレスの遺体を担いで夢の国を白音と共に脱した。

こんな日が長く続けばいいなと思いました。

朝方上機嫌で出掛けていった小猫ちゃんが夜中に帰ってきたら溶けました。

「えへへ〜」

ソファアで舞沢さんの枕を抱いてゴロゴロしてる姿は幸せそうに見えるけど、なんと言うか、ちよつと引くぐらいなのはどうなんでしょう？

「あ、あの、こ、こ、こ、小猫ちゃんは……」

「知らねえよ」

精一杯勇気を振り絞って何があつたのか尋ねてみましたが、舞沢さんは朝方と変わらない様子でそう言いました。

「と言うより、知らねえ方がいいと言うのが正確だな」

「それって……?」

「要するに、関わらない方が身のためだって話だよ」

と舞沢さんは言いました。

それよりも……

「い、今から、カレー、作るんですか？」

業務用らしい大きなコンロで鍋を回している舞沢さんに香りから正体を察しそう尋ねます。

「今から作れば朝にはスパイスが馴染むからな」

「いえ、そうで、ではなくて」

というより、何度見てもキッチンに立つ姿に違和感が凄いですこの人。

凄く厳しくて怖い人のはずなのに、エプロンに三角巾までしっかりと身に付けて料理に向かう姿は正直似合わないと思います。

「カレー嫌いだったか？」

「大丈夫ですけど！」

そうではなくて、

「襲われたっていうのに、だ、大丈夫なんですか？」

二人共無事でよかったけど、だからこそ備えるとか対策をしなくて平気なんですか？

「さあな」

「さあなつて……」

「来る時は何してたつて来るんだ。」

それが飯食つてる時だろうが、風呂浴びてる時だろうが、それこそベッドで一発シケ込んでる時だろうがな。

一々気にしてたら身が持たねえよ」

そう言うのと再び鍋と向き合ってしまいました。

言ってることはわかるんですが、正直理解できません。

それが僕が臆病だからなのか、それとも彼が泰然とし過ぎているのか、少なくとも彼が普通ではないのは確かだと思います。

「それはそうと、神器の制御は進んだのか？」

「え？」

……いえ、その」

情況が変わり、環境が変わり、小猫ちゃんも変わっていく中、僕だけが封印されたあの日から何も変わってない事に気付きました。

だから僕も変わらなきゃ行けないと思い、少しづつ神器の制御が出来るよう努力してるけど、僕の気持ちとは裏腹にその成果は全く出ていません。

「あっそ」

自分から振っておきながら舞沢さんはあっさり話を終えてしまいました。

彼にとっては僕の事は、興味はないけど把握しておこう程度の存在なので仕方ないとは思うけど、お家賃とか払ってないので穀潰しと言われても否定できないんですが、それでも同じ家に住んでいてその扱いは寂しいと思うのは贅沢なんでしょうか？

「よくは知らんが、魔眼や邪視の類いの才能は、世界を見据える胆力に左右されるって聞いたことがあるな」

「え？」

「実際んなモンは持ったことはねえから受け売りだけだな」

まるで世間話みたいな風にそう言うと言おうと舞沢さんは今度こそ鍋に向かい黙ってしまいました。

……もしかして、僕にアドバイスをくれたのでしょうか？

「あ、ありがとうございます」

お礼を言っても舞沢さんはなにも言いませんでした。

必要はないということなのか、それともどうでもいいのか僕には分かりません。

だけど、小猫ちゃんが好きになった人なんだし、きつと厳しいだけじゃないんだとそう思いました。

「次のニュースです。」

世界規模で温暖化が進んでいるという統計が発表され、それに伴い各地でのゲリラ豪雨の発生や雨量の増加が懸念されています」

つけっぱなしにしてあったテレビのニュースに僕は出掛ける時には晴れていても傘を持っていこうと思いい部屋に戻りました。

くくく

ヘラクレスの挺身により夢の国から逃げおおせた曹操達であったが、一息吐く暇さえ与えられないことはなかった。

「アロハ」。

初めましてテロリストの皆様あゝ」

帰還を果たした曹操達を待ち受けていたのは、全身を同胞の血で朱に染めた白髪の男だった。

「貴様あ……」

虐殺の惨劇を前に言葉を失う曹操の前に立ち、怒りで顔を赤くするジークフリート。

「おやあん？」

どこの誰かと思いきや遺伝子<sup>バ</sup>の提供元<sup>バ</sup>じゃありませんかあ？

丁度いいや。

お小遣いちようだあい」

嘲りに満ちた声で甘ったるくそう手を出すフリードにジークフリートは斬撃の答えを返した。

「あひやあん？」

欲しけりや力尽くつて？

俺ucciそれだあい好き!!」

完全に正気を無くした体で黒塗りの匕首を逆手にジークフリートとの剣劇を開始するフリード。

亜種禁手化までを発動し五本の魔剣を振るうジークフリートに対しフリードは余裕さえ見える様子でゲタゲタ笑う。

「クキヤキヤキヤキヤ!!」

パ。パ。パ。と遊ぶのはたあのしい!!」

完全に馬鹿にした態度で嵐のごとき斬撃をいなし、猿染みた体捌きを發揮して上空を取ると鞭のように脚をしならせ爪先で首筋を狙う。

「ウオオオオオ!!」

辛うじて剣の腹で蹴撃を防いだジークフリートは、獣染みた叫びを上げ更に剣速を高めるも、それすらフリードは狂笑を張り付けたまま受け流す。

純粹に五倍の手数を手手に寧ろ優位を保つフリードにジークフリートは叫ぶ。

「その力を何処で手に入れた!？」

教会の暗部に属する研究機関の一つ、『シグルド機関』の完成体として最高の性能を叩



「じゃあ、夢想のままに溺死しろや」

五本の魔剣を掻い潜り、ジークフリートの首を掻き斬った。

「があっ!!」

首の致命的な血管を両方同時に裂かれ、ジークフリートは溢れた血で肺を満たして溺れ死んだ。

「ジークフリート!!」

手を出す隙間がなく見ているしかなかった曹操が悲鳴を上げた直後、突然ゲオルグの身体が爆ぜ、ジャンヌが燃え上がった。

「ぎゃあああああああ!!」

数千度の炎に焼かれ絶叫を上げてのたうち回るジャンヌだが、数秒と経たず全身が炭となってしまった。

「いい感じでっしょう?」

摂氏三千度のテルミットの炎の味は」

ジークフリートと交差する刹那、ゲオルグが開こうとした絶霧へと手榴弾を投げ、更にジャンヌの足元にテルミット焼夷弾を放っていたのだ。

「残りはおたく一人でしゅねえ?」

守るべき者も並び立つ者も失った曹操へと悪辣に笑い掛けるフリードに、曹操は茫然

とたたずんだままどうしてだと呟く。

「俺達は、這い上がる事さえ許されないのか？」

不幸があつた。

絶望があつた。

怒りがあつた。

だから戦おうと拳を振り上げた。

なのに、その拳を叩き付けることさえ碌に叶わぬまま『禍の団』は、『英雄派』は終焉を迎えようとしている。

そんな燃えることすら叶わなかつた曹操に、フリードは邪悪に笑う。

「あつたりまえでしょう？」

おたくら、望んでこつち側に残つたんだから、何も遺せなくて当然なんでちゅよく？」  
ゲラゲラ笑いながらフリードは嘯く。

「その気になりやあ私どもと違いあんさん等は日の当たる場所に帰れたものを、意地張って蹴つ飛ばして暗闇の中に居続けたからボクちゃんみたいな悪党の餌になつちやつたんです。オホホホホ!!」

碎けて腐り落ちる様が堪らないと笑うフリード。

その言葉を聞き、漸く曹操は悟る。

「諦めれば良かったんだ」

オーフィスが消えた時点で諦めるべきだった。

怒りを飲み下し、悲しみを耐え、絶望に膝を折ってつまらない日常に埋まることを選んでいれば、少なくとも仲間だけは手元に残っていた。

だが、それさえも失わせる選択を選んだのは、間違いなく自分だ。

「く、アハハハハハ!!」

腹の底から沸き上がる冷たい絶望に曹操は笑う。

そんな有様の曹操にフリードは匕首を手につくりと近付き、なんの躊躇もなく首を裂いた。

「中々いい喜劇だったぜ」

愉悦に満ちた笑みでそう吐き捨て、その場を後にしようとしたフリードだが、不意に走った悪寒に思わず切り殺した曹操を確認する。

「……おんやあ?」

そこに居たのは、首から血を流しながらも立ち上がる曹操の姿であった。

しかしその目には生氣はなく、どう見ても立ち上がってくる者の目ではない。

いぶかしむフリードの前で曹操は『黄昏の聖槍』を手に、濁った声を放つ。

『槍よ、神を射貫く真なる聖槍よ』

「なあにが始まるんですかねえ？」

フリードの顔から笑みが消え、ヒ首では足りない判断し足元に転がっていたグラムを蹴り上げ手に構える。

『我が内に眠る主の理想を吸い上げ、祝福と滅びの間を扶れ』

槍を中心に沸き立つ聖なるオーラにフリードは知らず汗を流す。

「こりゃあ、コカビエルの二の舞踏んだかもしんねえな」

ふざけた口調が鳴りを潜め、今すぐ逃げろと警鐘を鳴らす勘を振じ伏せ其れを見届けた。

『私の遺志を語りて、輝きと化せ』トウル・ロンギヌス・ゲッターデメルング『真冥 白夜の聖槍』

その変化は余りにも乏しいものだった。

豪奢とさえ形容できた槍は、穂先は青銅になり握りはただの木へと変わった。

ただし、槍の穂先からは誰のものかも分からぬ赤い血が滴り続ける異様な状態になっていたが。

「……………」

その結末を見届けたフリードは目を見開き硬直していた。

「マジかよっ！」

そうして漸く動き出したフリードの顔には、喜悅もなく、ただ怒りの貌が刻まれる。

「殺つてやるよ」

ギチリと柄が軋むほどにグラムを握り、フリードは踏み出す。

「テメエだけは、生まれた時から殺したくて堪らなかつたんだ『Y a h w e h』!!」

曹操の身体を糧に現世へと復活を遂げた『聖四文字』へとフリードは渾身の殺意を込め斬り掛かった。

釣るつもりが無いときの大物ほど扱いに困るものはない。

カレー仕込んだ序でにターメリックで色付けしたサフランライス（偽）を炊飯器に入れ、翌朝食い頃になるようタイマーをセットして朝を迎えた訳なんだが……

「おいしーい」

見知らぬ巫女服少女がそれを勝手に食っていた。

……なにもんだこいつ？

寝てる間だって気配感知は切っていないなかったから、忍び込んだならその時点で気付いていた。

だが、現実には少女は気配感知をすり抜けてカレーを食っている。

その事から下手に手を出せば不味いと判断し、どうするべきかと迷っていたらインターホンの報せが鳴る。

「うーちゃん？」

氣から正体を把握し一旦少女を放置してドアを開けると、やや焦った様子のおーちゃんが見事に居た。

「どうしたうーちゃん？」

「朝早くすまんの。」

実はな、御主に人探しを頼みたいのじゃ」

神様が人探しとなれば、これは相当厄介な案件に違いない。

「とりあえず中に入れてくれ。」

詳しいことはそれからだ」

神様と立ち話というのはいつもの話だが、しかし玄関でそれは宜しくはない。

そうやって招いてからリビングに向かいつつ内容を尋ねる。

「人探しつつても、うーちゃん直々につてことは普通の人間じゃねえんだろ？」

「うむ。」

人と言ったが、その正体は龍ぞ」

「龍？」

「主は『無限龍ウロボロスドラゴン』、又は『無限のオフィス』を知っておるか？」

「まあ、名前ぐらいはな」

しかしなんでまたそんな歩く核弾頭みたいな怪物をうーちゃんが探すんだ？

「あ、うーちゃん様」

と、リビングに着いたらさっきの幼女がうーちゃんに気付いて挨拶した。

さつき見た時より皿の中のカレーの量が増えているからおかわりしやがったらしい。

「おんしは何をしとるのじゃ!!」

オーフィス!!」

その様子に怒りを露にするうーちゃん。

あ、どうりで。

人が間近で山の全容を見渡せないのと同じだ。

オーフィスクラスになれば、その気がでかすぎて気配感知が通じなくても仕方ないわ。

探す手間が無くなったかと安心するべきか、それとも核弾頭が部屋に居ることに恐怖するべきか迷っていると、うーちゃんがオーフィスを叱り付けた。

「勝手に人の家に入って物を食べてはいかんと教えたじゃろうに!」

「ここ、うーちゃんの神気ある。」

うーちゃんの社違う?」

そういうことかい。

つまり、オーフィスはうーちゃんの残した神気からここが社の一つと勘違いして、それで忍び込んだらカレーがあつたからついで食べてしまったと。

流石歩く核弾頭。

つうかだ、

「なんでまたうーちゃんがオフィスの面倒を見てんだ？」

「自業自得じゃ」

溜め息を吐くうーちゃん。

「腹を空かせておったこやつに、その正体を知らぬまま神饈を分けてやってしもうたのよ。」

そうしたらこやつ、物を食うのも初めてだったらしくあまりの感激に妾に仕えたいと申してな。

とと様や叔母上でも日ノ本を更地にする覚悟なく追い返すことは叶わぬ相手故、致し方無く望むまま神仕としたのじゃ」

そう語るうーちゃんの背は僅かに煤けているように見えた。

「妾のような一穀物神に斯様な龍の手綱など握れぬということと様と来たら……」

「流石にタケさんだつて本気でまづいと思つたらどうにかするつて」

「それが分かつておるから頭が痛いのじゃ」

実際、見てる限りはタケさんが静観する程度にはオフィスは問題無さそうに見えるし、本人も望んでそうしている以上うーちゃんの胃は大変そうだが手綱そのものは切れていないのだろう。

と、話を聞いていたのかオフィスの俺を見る。

「お前、この家の主？」

「一応な」

関わりたくないが、泣きそうなうーちゃんを思えば我慢するしかないか。

「ここ、うーちゃんの社違う？」

「違うぞ。」

序でに言うが、お前の食ってるカレーそいつは今日の朝飯につて仕込んだもんだ」

そう言えばオフィスの俺と皿のカレーを交互に見遣る。

「これ、お前が作った？」

「そうだぞ」

「……」

「食いさしを返そうとすんなよ？」

やつちまったもんはしゃあねえからちやんとくつちまえ」

その方がぶちまけられて台無しにされるよりはまだマシだからな。

「……ん」

暫し固まった後、オフィスのスプーンを置くと俺の前に立ち、掌を出した。

「食べ物盗ったお詫び。」

それと美味しかったお礼」

そう言うのと掌に二匹の細長い蛇のようなものが現れた。

「……………」これは？」

「我の蛇。」

皆欲しがった」

オフィスの蛇、ねえ。

物質化した『無限』の欠片なんて代物、確かに欲しがる輩は少なくないだろう。

「一応貰っとくわ」

使い途があるかは兎も角、何らかで必要にはなるだろう。

「ん」

これで解決と思ったのか、オフィスは再びカレーを食べ始める。

「ほんにすまんのう」

「まあいいや。」

カレーはまた仕込めばいいし。

折角だからーちゃんも食ってけ。

胃が大丈夫ならだが」

「奉納は有り難く頂くぞえ。」

天竺料理はそう卓には並ばぬしな」

そう言いながら席に座るうーちゃんにもカレーを用意するために炊飯器を開けるも、多目に四人前は炊いておいたサフランライスに米一粒残さず無くなっていた。

「すまんうーちゃん。

食パンと冷凍のナンから好きに選んでくれ」

数秒後、泣きギレしたうーちゃんの怒号が朝のリビングに木霊した。

~~~~~

で、結局ナンで朝飯を済ませたうーちゃんは満足したオーフィスを連れて帰り、カレーの香りで空腹を増長させた俺と白音だけが残された。

ヴラディはうーちゃんの怒号に目を回して夢の世界に旅立っている。

「お腹空きました」

「ファミレスのモーニングとコンビニだったらどっちだ？」

「牛丼屋のカレー」

「お前なあ…」

一番近くで駅前じゃねえか。

いやまあ、この状況でコンビニのカレーは無いのは解るがよ。  
「しゃあねえ、さっさと支度し…」

最近出費が激しいなと思いつつ立ち上がるうとした瞬間、ぞわりと悪寒が走り、咄嗟にチャクラを廻して氣の索敵範囲を拡げられるだけ拡げる。

「舞沢さん!？」

悪寒は白音も感じたらしく仙道を発動し辺りを警戒する。

しかしそれに構う暇はない。

そしてその悪寒の原因が何なのか俺は把握しベランダへと飛び出す。

「白音、ヴラディを連れて俺の部屋に隠れろ」

棍を繋げ、腰を沈めながらそう言う。

俺の部屋は封印術式で固めた異界じみた強度の防護で固めてあり、上級神クラスでもなければ絶対に破れはしないシエルターにしてある。

「舞沢さんは？」

不安そうに問う声に俺は短く告げた。

「事態を把握したら戻る。

いいな? 俺が開けるまで絶対にドアを開くなよ」

そう言う俺は縁に足を掛け、異変の元凶であろううーちゃんの近くに出でた邪気目

388 釣るつもりが無いときの大物ほど扱いに困るものはない。

掛  
け  
飛  
び  
出  
し  
た。

よりにちもよつてこいつかよ

小周天を行い現場に急行した俺の視界に入ってきたのは、蹲るオーフィスに向け剣を振り上げる黒い馬に乗った骸骨騎士と、間に入りオーフィスを庇い両手を拡げるうーちゃんの姿だった。

無限の龍神が無力化されていることから自分の手に余る相手だと本能的に察しながらも、損得勘定を走らせうーちゃんの生存を優先し速度を加速させ棍を振り抜いた。

「ぜりやあああ!!」

ドゴンツ!!と轟音が響き、棍に打たれた馬が宙を舞う。

「おんし……!」

「今しがたぶりだなうーちゃん」

吹っ飛ばされた馬は痛がりながらも空中で静止し、骸骨騎士が剣を構える。

「単刀直入に聴くぜ。」

「オーフィスはどうなってる?」

「わからぬ。」

「あやつを前に急に腹が空いたと蹲ってしまったのじゃ」

「腹が空いた？」

おいこら。

あんだけ食つといて腹が空いたは…いや、

「も一つ確認。」

あの骸骨騎士は『天秤』を持ってなかったか？」

「う、うむ。」

おんしの言う通り、剣に持ち変えるまで天秤を手にしておったぞ」

「……マジかよ」

想定される中でも最悪の事態じゃねえか。

「うーちゃん。」

オーフィス連れて早く逃げろ」

「ならぬ！」

逃げるならおんしもじゃ!!」

身を挺するなど言いたいんだろが、そうじゃねえようーちゃん。

「彼奴は『飢餓』の権能持ちだ。」

放っておいたら大惨事じゃ済まねえ」

「……知っておるのか？」

「ああ。

奴は『第三の騎士』。

ヨハネの黙示録に記されたアポカリプシユの予兆だ」

俺の言葉に反応したのか骸骨が骨をガタガタ鳴らせて笑ったように見えた。

「はつきり言うぜうーちゃん。

俺は奴をぶち殺したい。

だから、下がってろ」

そう言いながら地を蹴り第三の騎士へと躍りかかる。

初手から加減はしない。

呪を発動させ『滅びの魔力』を棍に纏わせ殴りつける。

「…!?!」

棍のオーラに第三の騎士はあからさまに反応し馬の腹を蹴って回避をさせる。

「逃がすか!!」

ニューナンブを抜き狙い様に連射すれば禁呪弾の一発が馬の前足を掠め消し飛ばす。

足を消滅させられ馬が悲鳴を上げ、直後に騎士が手綱を手放し天秤を構える。

来る!!

全開でチャクラを廻し氣を纏った直後、天秤がカタカタと左右に揺れて片方が沈み、

俺は強烈な飢餓感に襲われた。

まるで一月絶食を強制させられていたかのような空腹感に全身の筋肉から力が抜けそうになるも、調息を駆使し胃を強引に膨らませ全身の筋肉を氣で補強し耐える。

喰らって解つたが、こいつは予想以上にキツイ。

俺に餓えて死ぬ経験が無かったら、耐えられずにオーフィスと並んで蹲っていたらう。

だがな、

「経験済みなんだよ!!」

死に方の経験値は腐るほどあるんだ。

どの程度までなら全力維持できるかも把握してる。

足りない分は大周天で補い、足の筋肉が切れるほど力を込めて騎士へと飛びかかる。

「……」

回避は間に合わないかと判断した騎士が剣で受け止めるも、『滅びの魔力』が触れた場所から確実に消し去り、馬上で振るうに適した長さの剣が三分の一にまで短くなった。

「避けるのじゃ!!」

このまま削りきると節を解放しようとした矢先に飛んできた警告に俺は反射的に後ろへと跳ぶ。

刹那、黒馬が失った足の残りで先程まで居た位置を風ぎ払った。

あのままだったら良くて相討ちだったか……。

妙に軽くなった身体に違和感を覚えつつ汗を拭うとうーちゃんの悲鳴が響く。

「もうよい!!」

それ以上戦えば主の身体が持たぬ!!」

うーちゃんの悲鳴に、どういふことだと汗を拭うのに使った掌を見て、理解する。

さつきまで鍛えた筋肉でがっちりしていた手の肉が大きく減り、まるで引きこもりのように細くなっていた。

おそらく飢餓感に肉体が自食作用を行ったためだろう。

推察される己の体重から、筋肉ばかりか下手をすれば骨まで食われているかもしれない。  
い。

体調から、全力で戦えて残り三十秒といったところか。

まあいい。

どうせ元より全力で戦えるのは短時間のみ。

「止めぬか!!」

「無理だな」

都合がいいことに奴さんかなり腹を立てたらしく逃げるそぶりはない。

時間は惜しいがうーちゃんに余計なちよつかいをもらうわけにはいかない口を開く。

「こいつを放置すれば山のような餓死者が出る。」

そうしたらうーちゃん泣くだろ？

そうしたら結局俺がタケさんにぶち殺されるさ」

「馬鹿者!!」

冗談めかして言えばやはりうーちゃんは怒ってしまった。

だが、いい休憩になった。

身体を壊す勢いで大気の氣をチャクラを廻す燃料とし、弱った身体を氣で補強して騎

士へと走る。

「くたばれ!!」

俺の突貫に騎士は串刺しにしようとしたと細くなった劍を突きだした。

掛かった。

その突きに俺はアスファルトを踏み砕きながらフルブレーキを掛ける。

足の骨が割れる音がしたが構わない。

棍の呪を解き先端を真っ直ぐ剣先へと合わせ軽身功で後ろへと退避。

そして棍を手放し騎士の脳天にニューナンプの照準を合わせて引き金を絞った。

ぱんっ

それで終い。

禁呪弾に頭を食われた騎士は残る身体を馬ごと塩の塊へと変じさせた。

「……勝った」

正直最後の一手は賭けだった。

引き金を絞るだけの筋肉が残ってなければ、引く際の反動で腕は使い物にならなくなっていたはだろう。

「この、戯けが!!」

遅ればせながら襲ってきた空腹と疲労に意識を薄れさせていると、うーちゃんが涙目で俺を叱り付けた。

「悪い、出来れば、飯、食わせてくれ」

そこまで言ったところで、俺の意識は落ちてしまった。

ああ、ぶち殺さなきやな

目が覚めてみれば外が騒がしいことになっていた。

「何があつた？」

目覚めるまでに半日、うーちゃんが態々用意してくれた粥をゆっくり流し込みながら尋ねると、うーちゃんはそれよりと口を開く。

「猫達がお主が戸を開けねば出ぬと申しておる。

粥が冷める前にはよう出して参れ」

そう言われうーちゃんの粥で回復した身体を更に無理矢理代謝を加速させて立ち上がれるようにしてから部屋の戸を開ける。

「悪い、遅くなつぷふお!？」

開幕ボディーブローが突き刺さり、俺は一瞬エリシユオンでヘクトール将軍が腹を抱えて爆笑している幻影を見た。

「遅いです。

それに美味しそうな匂いとか許せません」

「こっちはさつきまで半分死にかけてたんだよ…」

く。  
芯まで響く一打に膝が笑い立てないままそう弁明するも、白音はぷいっとそっぽ向

「確かめたら戻るって言いました」

「うーちゃんが殺されそうだったんだから仕方ねえだろ」

うーちゃんこと宇迦之御魂神は日本の穀物全般を加護する神だ。

彼女に万が一があれば、最悪日本人の狂気ともいえる米が実らなくなる。

そうなればタケさんまで怒り、大地は荒れ嵐が止まぬ果てに日本は大惨事どころでは済まなかったろう。

「何をしておる！」

妾の粥を冷ます気か！

「ごめんなさいうーちゃん」

うーちゃんの怒りの声に俺を放置して慌ててリビングに向かう白音。

「あ、あによ……」

「とりあえず行け」

「はい……」

心配してくるヴラディを一蹴し、去るのを確認してから改めて身体が弱っているのを自覚する。

「ガワは兎も角体力がな……」

うーちゃんの権能入りの粥で見た目だけは白音が気付かない程度に回復したが、第三の騎士により奪われた体力は回復に最低二日は擁するか？

とはいえ、二日も休んではいられねえよな。

第三の騎士は何とかしたが、奴が現れたって事は既に第一の騎士と第二の騎士が顕現していると見るべきだ。

それに、第四の騎士も現れていないという保証はない。

なによりもヨシユアは封印を解することを拒み、天使は最低でも封印を解放した上でラツパを吹く資格のある天使は一人残らず日本神話が殺し尽くしたはず。

だとするなら、それを成したのは……

「本当に蘇りやがったな『』」

72の神霊の呪で名を消され存在を歪められた全ての元凶。

いかなる呼び名も奴の本名足り得ず『聖四文字』としてのみ存在を記す俺の憎悪の起源。

しかし、そこまでだ。

奴の所在が判らねえ以上今は備える以上の出来ることはない。

ゆっくりはしてらんねえが、だからこそ備えを出来る限りやっておかねえと。

リビングに戻ると欠食児童みたいな勢いで粥を食う白音達とそれを嬉しそうに見るうーちゃんの姿があった。

「で、表の騒がしきは何なんだ？」

漸く本題に入ればうーちゃんは無言でテレビを付けた。

映し出された画面に昼のニュース番組が表示され、その番組内で緊急速報が報じられていた。

これがどうしたと言いかけた俺だが、画面の上の端に記された一文に文句を飲み込む。

そこには、『神の降誕？ 神話の再来!?!』という一文が書かれていたのだ。

『では、もう一度御覧ください』

固まる俺を知らずニュースキャスターが重要らしい録画を再生する。

再生された映像はヴァチカンの広場らしい。

そこには、白、赤、灰色のフルプレートを着した男達がドクロを模した兜を携え壇上に立つ姿が撮されていた。

その中の一人、灰色の甲冑を着込む老人、ヴァスコ・ストラーダが語る。

『皆の者よ、備えるのです。』

主は語られました。

ヨハネに記させた終末が始まると。

然る後に千年王国は始まるとも仰せになりました」

演説はそこで切られスタジオに画面は戻ってしまつたが、そんなことはどうでもよかつた。

何故なら、画面の中に一人だけ絶対見るはずのない顔見知り居たからだ。

「フリード。

テメエ、何があつた？」

赤い甲冑を着込んだ『フリード・セルゼン』の姿に、俺はそう呟いていた。

くくくく

「浮かない顔ですな、ジュリオ」

主の言葉を伝える演説を終え、来る終焉から選ばれし子羊を守るための『方舟』へと入つたジュリオ・ジェズアルドにヴァスコ・ストラードが声をかけた。

「……すみませんストラード枢機卿。

やはり私には荷が重すぎます」

ジュリオは神より拝命した白い鎧と己が与えられた役割に、己をより相応しい者が居

るとそう首を振る。

その言葉にストラダーはふむと理解を示す。

『第一の騎士』。

確かにその役割は私たちより大きなもの。

君がそれを苦に思うのも仕方ないでしょう」

ですが、とストラダーは論ず。

「貴方にその役割を望んだのは主の御意志。

であればこそ、貴方はそれを為さねばならぬのです」

「……はい」

死したと聞かされた主の復活。

それに伴い始まる黙示録。

命の書に名前を記すことを許された選ばれし子羊達が方舟へと集い終えた時、主は世界を終わらせ、ジュリオは己に宿った神器を用いて大洪水を起こし過去の人類史を洗い流す。

そうして人類を千年王国へと進むと、そう聞かされた。

「テオドロも君ならば必ずや千年王国の到来を成してくれると信じて送り出したのです。」

重く辛いでしょうが、それこそ貴方が越えるべき試練だと思いなさい」

「……分かりました」

千年王国へは自分が救いたいと願っていた孤児院の仲間達の名も記されている。

彼らを救うためにも、自分の役割を放棄するわけにはいかないとジユリオは決意を新たにした。

そうしているとガシヤリと金属を擦り合わせる音を発てながら外に向かおうとするフリードが通りがかる。

「出陣ですか 『第二の騎士』？」

「ああ」

白髪に隠された貌はよく見えない。

「ソマリヤからアフリカを一周して戻る」

「何日程掛かりますかな？」

ストラーダの問いにさあなとフリードは言う。

「一日掛からねえだろ。」

全員自滅するんだ」

そう言い、顔の左側を憎悪に歪めた歪な顔を隠すように赤いドクロの兜を被り『方舟』から出ていった。

## 再会した姉様がリア充になってた件

あのニュースを見た後、舞沢さんは直後に部屋に籠ってしまいました。そうしてもう丸一日部屋から出てきてくれません。

「開けてください舞沢さん!!」

天照大神の天岩戸隠れを擬似的に再現する術式を施したというドアは、仙道を駆使して全力で殴り付けてもびくともしません。

舞沢さん以外が開けるには内側から開けてもらうしか方法はありません。

部屋の中には水や保存食が備蓄されていましたが、だからといって籠り続けて良いということはありません。

「小猫ちゃん、僕たちもいかないと…」

警句に従い全員分の逃げる準備を終えたギャー君が私にそう言います。

日本神話は聖書の神の黙示録に当り、国を閉じてやり過ごすことを選びました。

黙示録の啓示の公開により、世界の信仰は大きく変わってしまいました。

いえ、変わったのではなく、信仰の有無が明確になったというのが正しいのでしょうか。ヴァアチカンからの正式な発表という体で成された黙示録の開示により、元より世界人

口の3分の1以上の信仰を得ていた聖書の神の力は黙示録を成すだけの力を得てしまいました。

その力は日本神話単体で抗える規模ではなくなり、他の神話体系と協調してようやく拮抗出来るけど、そうした場合地上の命を省みるだけの隙間はないとの事です。

未来視の神の観測と知恵の神の総力を挙げた計算結果は、オーフィスの助力があれば日本神話が総力を結し国を閉じることでどうにか黙示録を日本が生き残れるだろうという結果が出たため、日本神話は民を擁護するため国を閉じる決断を下しました。

しかしそれでも災害や国を閉じる弊害から少なくない犠牲は出てしまうそうです。

私達も京都か遠野の妖怪の隠里へ避難するよううーちゃんから警句を貰いましたが、舞沢さんはそれに従う気は無いと部屋に籠ってしまいました。

「ギャー君だけ先に行ってください。

私は舞沢さんを待ちます」

「そんな…」

今彼から目を放したらもう二度と私の前には現れてくれないと確信があります。

それに、怒っているのは私も同じです。

彼がほんの少しだけ私を見てくれたけど、それはまだ無関心から名前を覚えてくれたに変わっただけの事。

後少しで本当に私を見てくれるかも知れなかったのに、聖書の神のせいであつてしまひ私は凄く怒っているんです。

「白音!!」

どうにか扉を壊せないかと考えていると、突然空間に切り目が入りそこから姉様が飛び出してきました。

「ひえ……」

姉様の登場にギャー君が尻餅を付いていますがそれよりもです。

「姉様?」

「大丈夫!？」

あの野郎に捨て石になれとか言われてない?」

「……はい?」

姉様?」

「今すぐ天界に行くわよ。」

あつちから辺獄に入れば黙示録からも逃げられるわ!!」

さあ早くと急かす姉様に、私は無言でボディに一発打ち込みました。

「し、しろねさん……?」

「なにいつてんですかねえさま?」

彼が私を捨て石に使う？

「りようかちもみてくれてないのに、そんなふうにいっわけないじゃないですか」

「し、白音え……」

「それぐらいみてくれてればわたしはこんなにくろうしてないんです」

姉様が涙目で私を見ますが、苛々してる私には通じません。

というより、こんなことになったのは全部聖書が悪いんです。

「よし、まいさわさんがでてくるまえにせいしよもやしてきましょう」

「落ち着いて白音え!!」

猫魅の姿を隠すのをやめた私を仙術を駆使してまでしがみついて止めてきます。

「はなしてくださいねえさますりつぶしますよ」

「恐!?!」

と、さつきまでいなかった人が増えてます。

あれ? でもこの氣は……

「姉様の師匠ですか?」

知らない仙人ないし仙道使いに多少苛立ちが収まった頭でそう訊ねると、男性はニヤ

リと笑いました。

「似たようなもんかな?」

まあ、俺ツチとしてはこう手取り足取り腰取り教えてもいいとはアウチツ!!」  
その男性がイヤらしい笑いかたでそう言うのと、姉様に脛を蹴飛ばされました。

「誰が私の師にやん？」

あんま調子こいてるともぐわよ美猴」

「全く嘘つて訳じゃねえだろ？」

いくつか術の指南はしてやったのは本当じゃねえか」

美猴と呼ばれた多分妖怪の男はそうへらへらと笑いました。

「とかいっていきなり手を出したのは何処の誰にや？」

「あん時や体内の陰の氣が多過ぎて、黒歌の氣のバランスが崩れかけてたのを治すために俺ツチの陽氣と重ねて太極を廻したんだって何度も言っただじゃねえか。」

それに、最後までではシてねえじゃん」

「乙女の柔肌触った時点で有罪にや」

……………これって、アレですよね？」

「発せてしまえ馬鹿ツプル」

「白音!」

私だつて彼とそんなふうにはイヤイヤしたいの分かつて見せ付けて来るような姉様なんかも上げてしまえばいいんです。

「で、さつきから何やってんだテメエ等？」

そんな状況を弁えないやり取りをしていたら、いつの間にか彼が戸を開けて出てきていました。

ですが彼はパンパンに膨らんだ背囊と銃身の長い銃を肩に提げ、革製のポケットが沢山付いたジャケットを下に着込んでいる、まるでこれから戦場に出向くような出で立ちでした。

「舞沢さん」

やっぱり、行くんですね？

「私も」

連れていって。

そう言うおうとするのを見向きもしないで彼は姉様を見て言いました。

「迎えに来たんだろ？」

早く連れていけ」

「…っ！」

彼がきつとそう言うだろうと分かっていた。

だけど、本当にそう言われて私は悲しくて胸が苦しくなっていました。

「あんた、自分で何言ってるか解ってるの？」

姉様が語尾も忘れ彼に向かって怒りを向けています。ただ彼は変わりません。

「お守りは終わりだ。

だからさっさと引き取れよ」

「……言ったわね？」

姉様の気が部屋を押しギチリと空気が軋んだ音が響きました。

ギャー君がそれに泡を吹き、舞沢さんも彼は彼で「準備運動代わりにやるか」と背囊を下ろして棍を手にしました。

手を下すため隙を窺う二人に美猴が割って入りました。

「待った待った。

なんでおたくらんなに喧嘩腰なんだ？」

「すっこんでなさい美猴。

妹泣かせる屑はぶつ飛ばさなきゃ気が済まないのよ」

尻尾がびたんびたんと激しく波打ち姉様の怒りの具合をよく知らせています。

「で、お宅さんは……あ、こりやダメだ」

一目見てから美猴は私に言いました。

「奴さん死ぬつもりだ。

いや、正確に言うなら生きるつもりが無い、か。  
どっちにしろ、こいつの事は諦めた方がいいぜ」

「嫌です」

その言葉が真実だとしても、私は絶対に彼から離れるつもりはありません。

「なあお宅さあ、こんだけ言ってもらってんだから少しは省みてやんなよ」

「知るか」

棍を繋げて彼は言います。

「今から聖書の神にジンプウ決めようってイカれに何を言わせたいんだ孫行者?」

孫行者?

「それは爺だ。

俺ツチは美猴。

戦闘勝仏の孫だよ」

戦闘勝仏?

「あの、誰ですかそれ?」

「日本じや孫悟空の方が通りが良いか?」

にしても、爺を知ってるのか?」

「棒術と仙道の基礎を学ばせてもらった事があつてな」

まあ、千年以上前の話さと棍をくるりと回します。

「ああ、どうりで氣の巡りかたが。」

それとさっきの話だけど、間に合わないかも知れないぜ？」

「はっ。」

どういうことですか？

驚く私たちに向け、美猴は言いました。

「オリユンポスのゼウスが聖書の神に仕掛けたんだよ。」

それも、オリユンポスとしてじゃなくローマ神話のユピテルとして。

ギリシヤなら勝ち目はないだろうが、キリスト教を弾圧してのけたローマ神話としてなら可能性はあると思わないか？」

## 我の他に神はなし

始まりは落雷からであった。

鼓膜を突き破らんばかりの轟音と共に落雷が発生し、それが収まるとそこには背に大鎌を背負うギリシャ形式の鎧一式で身を固めた長身の壮年が立っていた。

『我が名はユーピテル。』

かつてこの地に繁栄したローマ帝国を守護していた神である』

まるで雷音のような重厚な声が周囲に響き渡る。

『聖書の神よ。』

汝が所業、最早座して眺めるに能わず。

我が怒りに応えぬなら、貴様の信徒は一人残らず我が雷霆に焼かれるものと思え!!』

雷光を固めたような長物、『雷霆』を『方舟』へと突き付けそう言う。

神というに相応しい重厚な気配を放つユーピテルに『方舟』の信者達は恐怖するが、次いで放たれた『声』に恐慌はたちどころに鎮まる。

『怯えるな皆の者』

ユピテルの進路を遮るように天から光が差し、白いローブを纏う曹操の身体を宿主と

して復活した聖書の神がゆっくりと降りてくる。

『赤い竜を束ねし者よ。』

貴様に我が信徒を害する資格はない』

その姿に内心で自らの推察が間違っていないようだと思いきや、雷霆を突き付けユピテルは堂々と宣う。

『現れたな聖書の神め!!』

今日この日を以て貴様の神話を終わりにしてくれるわ!!』

対し『曹操』は愚かとそれを切り捨てる。

『滅ぶは貴様ぞ。』

座しておれば千年王国完成の後に配する新たな『システム』の恩恵に与れたものを』

『戯れ言を!!』

咆哮と共に一蹴し、ユピテルは雷霆を上段から投擲する。

『穿て雷霆!!』

『させぬ!!』

信仰を失い弱体化したとはいえ、ユピテルの放った雷霆は人間を殺すには十分な威力を秘めている。

避ければ『方舟』に被害が行くと『曹操』は聖槍から聖なるオーラを発し、それを防

護膜として展開することで雷霆を防いでみせた。

『おのれ小癩な真似を！』

忌々しそうにそう言いながらも、疲弊した様子を僅かに見せる『曹操』に仕込みの効果への確信を深め、勝機の香りに酔い始めるユピテル。

膜をそのままに外へと歩みでると『曹操』は嘯いた。

『信仰を失い弱体化してなおこれほどの威力か

だが、恐れるに足りん』

『ほざけ!!』

人の身に因らねば現界すら覚束ぬ残滓風情が!!』

挑発ともとれる台詞にユピテルは激昂のままアマダスの大鎌に持ち変え『曹操』へと斬りかかる。

『オオオオオ!!』

全身を駆動させ、まるで芝刈機のように幾度も大鎌を振り回すユピテル。

対し『曹操』は聖槍の穂先を巧みに翻してそれを捌ききる。

槍と大鎌。

どちらも最大に威力を發揮するのは近距離よりの中距離であり、奇しくも互いの剣戟は最適距離を維持したまま完全に噛み合い激しい打ち合いへと発展する。

十を咬ませ、百を払い、二百を越えて打ち合いは三百に到ろうとした時、ほんの僅かにだが変化が現れ始めた。

『むう……!?!?』

掬い上げるように振り上げた斬撃を受け流し、その威力を糧に大きく距離を取る『曹操』。

そうして着地すると肩で息をし始める姿にユピテルは勝機は目前と哄笑する。

『やはりか!!』

大鎌を片手に、空いた手に雷霆を握りユピテルは指摘する。

『貴様は黙示録の封印を解くために『神の子』ヨシユアとの概念的な融合を果たしておるな?』

ユピテルを始め、多くの神は望まぬとも聖書を見聞きする機会は少なくなかった。

そうした中で黙示録の内容についても知り得ていた。

故にこそ、今回の黙示録の開始には疑問があった。

黙示録の封印を解くことが叶うのは七つの目の子羊のみ。

それは暗喩であり、正体は神が認めし『人間』を指している。

しかし、歴史に於いてそれだけ聖書の神に認められたのはたったの三人だけ。

叡知の指輪を授けられたイスラエルの王『ソロモン』

エジプトより民を解放し十戒の石板を預けられた『モーセ』

そして奇跡を起こす御技を授けられ原罪を背負いローマに処刑された『ヨシユア』

内二名は天に昇ることを拒否し、ヨシユアのみが天へと昇った。

聖書の神は如何なる理由かまでは知らぬが、死に際しヨシユアの魂を内に取り込んだのだ。

『三位一体の解釈とその人間の肉体を持ち貴様は黙示録を開始しようと企んだ!!』

『それは違う』

弾劾するように指摘するユピテルに『曹操』は否と言う。

『貴様の言うことは半分は正しい。』

確かに私は天界で眠っていた我が子の御霊を内に宿した。

だがそれは『黙示録の獣』の封を確実のものとするため。

黙示録の開始は、私の意思により始まったものではない』

『戯言を!!』

だが、今此所で貴様の魂までも消滅すれば黙示録の封印がこれ以上解かれることはないので明白!!』

雷霆を一際輝かせユピテルは宣う。

『故に全知全能の神として、そして未来永劫続くローマとして告げる。』

此所で果てよ聖書の神よ!!』

放った雷霆から耳を塞いでさえ鼓膜を突き破る轟音が轟き、目を閉じてさえ眼孔を焼く閃光が周囲を焼き払う。

そうして何もかもが焼き付くされたかに思われたが……

『……ありえん』

衣を焼き焦がしながらも、五体一つ欠けることもなく『曹操』は雷霆を受け止めた姿でそこに在った。

『馬鹿な!!』

その現実が認められないとユピテルは叫ぶ。

『どういう事だ!?!』

貴様が『神の子』として在るにも関わらず、何故『私』<sup>ローマ</sup>が殺すことが叶わなかった!?!』  
 狂乱するユピテルに対し『曹操』は然りと告げる。

『貴様が『人の子の紡いだ歴史』に準えることで私に刃を届かせようとしたことは最初から解っていた。』

確かにそれならば今の私を殺すに足るであつただろう』

擬似的に人類史を再現し、神の子を処刑したローマとして相対することで自らを討ち取ることは出来ると嘯いた『曹操』にユピテルは力の限り吠える。

『ならば何故貴様はまだ立っている!!』

理屈が通らないと叫ぶ声に『曹操』はまるで諭すように告げた。  
『貴様と同じよ。』

この身はすでに一度朽ちた身。

故に、死より復活した我にはその縛りは通じぬと言うことだ』

そう我が子の弟子達は記したであろうと締め括る『曹操』。

『ふざけるな!!』

その言葉にユピテルは激昂の限りを以て叫ぶ。

『何が復活しただ?』

あんなもの、到底復活等と『黙れ』があっ!!』

ユピテルの言葉を遮り強烈な聖のオーラを叩き付け黙らせる。

『我が子を愚弄する言葉をこれ以上吐かせるものか』

『き、貴様あ…』

都合の悪い真実を秘する『曹操』に、ユピテルとしての側面アバターを剥がされたゼウスは怒りのままに睨み付ける。

そうするゼウスに対し『曹操』は聖槍の石突きで大地を打ち告げる。

『汝、姦淫するなかれ』

そう告げた直後、突然ゼウスの全身から力が抜け落ち、立つことさえままならなくなつて大地に這いつくばる。

『な、何が…』

『貴様の罪を告発したのよ』

『罪だど?』

『然り。』

多くの不貞を働き、貞淑なる女達を数多く悲嘆の淵へと突き落とせし汝が罪。

私はそれを明らかにした』

堂々と告げる『曹操』。

しかしゼウスはそれを否と叫ぶ。

『神の精を受けるは人の誉れ!!』

いずれ英雄となりし血脈を授ける事の何が罪か!』

自分の行いは何より正しいのだと叫ぶ姿に、『曹操』はいつそ憐れみを籠めてゼウスを見下す。

『その考えこそが多く悲劇を産んだ。』

それさえ考えられぬものに千年王国の大地を見る資格はない』

そう、聖槍をゼウスに突き刺した。

『ぐおっ!?!』

オリュンポスと同じ硬度を誇るはずの鎧をあっさり貫き通した聖槍に、驚愕と苦痛で呻くゼウスに向けて、『曹操』は告げる。

『意思を捨てその権能を我に捧げよ。』

『それが汝の罰である』

そう告げる言葉通り、己の全てが聖槍に吸い込まれていくのを感じゼウスは叫ぶ。

『おのれ聖書の神よ!!』

私は決して、決して貴様を許しはしない!!

何兆の時が過ぎようと必ず現世へと舞い戻り貴様を滅してくれる!!』

一片残らず聖槍へと取り込まれるまで、ゼウスは雷音のような咆哮を上げながら聖書の神を呪い続け、そうしてこの世界から消えた。

## 日本って、こわかったんですね

ユピテルと聖書の神の決闘の映像は全世界に向け放送されました。

しかしそれはユピテルが聖書の信徒を徒に虐殺しようとし、それを聖書の神が誅するという形に編集されたものであり、結果として聖書の神の正当性を訴えるものとして世界は認識させられました。

そうして世界に神の実在と避けられぬ終末が迫っているという実感が更に広まり、混乱を見せていた各地での暴動は更に広がりを見せました。

そうした中で日本も蚊帳の外というわけにもいきません。

だけど、国の行政機関は相変わらず事態の解決案も出せずにぐだぐだしていました。そんな国会に業を煮やした三貴神様達が議事堂の一部を破壊しながら派手に乱入して、自分達が国土の被害を抑えるのに手を貸してやるから死にたくないなら本気を出せと尻を蹴飛ばす姿を日本全土に放映させました。

日本を守護していた神の登場に、漸く引き抜かれた牙を新たに生やした日本の動きは劇的でした。

日本古来の神が力を貸すなら、自分達も何もしいわけにはいかないと奮起の体制に

入ったのです。

行政の指示など知ったことばかりに各部署は独自に連携して聖書の記述を参考に來る被害を推測し、急増シエルターの敷設を始めインフラの崩壊に伴う食料と医療設備の不足に至らぬよう確保するため奔走し自衛隊も警察機構と連携して混乱の発生を直ちに鎮圧するため待機姿勢に入りました。

そうして上が準備を進めれば、民勢もまた勢いを増していました。

「さあ全品七割セールだ!!」

人生が終わる瀬戸際、死ぬならせめて後悔なんて残させないぞ!!」

そんな煽り文句と共に現在、日本の各地で特売セールが開催されています。

ただ同然にまで値引きされた嗜好品が飛ぶように売り払われ、その赤字分は家庭用発電機や保存食や貯水ケースに然り気無く値段を嵩ましすることで補い、国内は寧ろ世界が顎を外す勢いで好景気に沸いています。

とはいえ誰もが事態に前向きなわけではありません。

軍事特需も真つ青な勢いで景気が上向きを示す横では死を前に自棄を起こして暴走する連中もいますし、中には救いをもたらしてくれなかつた日本神話への怒りや絶望から神社の破壊を敢行する愚か者や、聖書の神への帰属を訴える者と聖書の神への怒りを持つ者の間で流血沙汰にまで肥大化する事態も起きていました。

「人間って、凄いですね」

夢の国で最後の夢をなんて煽りをCMで流す逞しさを發揮する日本の態度に、呆れを通り越してしまった私はついそう漏らしてしまいました。

「窮地の前にこそ人間ってのは本質が露になるもんだ。

どうしようもないなら寧ろ返り討ちにしてやる。

どうせ死ぬなら笑って死んで悔しがらせてやる。

日本人ってのは、昔から理不尽にこそ抗う奴等ばつかったからな。

開き直った後のヤバさは世界のどこより質が悪いんだよ」

カレーを煮込みながら舞沢さんはそう答えました。

ユピテルの暴挙により予定していた渡航の手段が使えなくなり、舞沢さんは非常に機嫌を悪くし近付くのも危険な状態になりました。

ですが、美猴が条件を満たせば聖書の神の元へ乗り込むのに金斗雲を使わせてやると言い、なんとか鎮まってくれました。

そしてその条件が、五日間私と二人つきりで過ごすことでした。

それも、私を妻のように大事にするというものでした。

当然ながら私と姉様で猛反対したのですが、当の舞沢さんはそれを飲みました。

どうしてと問えば舞沢さんは落ち着いた様子で言いました。

「どうせ予定のルートでも半月近く掛かる算段だったんだ。

それを短縮できるなら断る理由はねえよ」

その言葉に姉様がキレて場外乱闘が始まりましたが、その隙を突いて美猴は私に言いました。

「これが最後のチャンスだ。

後悔しないようにやるだけやってみな」

そう私に語りかけて二人の仲裁に入りました。

最後のチャンス。

その言葉は私に重く乗し掛かりました。

ここでもなにもしなければ、舞沢さんにとっての私はただの記録の一つになってしま  
う。

そうさせないために何をしなければならぬのか、まだ私はまだ何も見いだせていま  
せん。

だけど時間は待つてくれません。

今まで住んでいたマンションを姉様達に貸し出して私達はI D Kのアパートを居と  
しています。

舞沢さんは余計な何かは不要とばかりに今まで通り私に稽古を付け、勉強を教え食事

を作っています。

そんな姿に、私は確かに幸せを感じていました。

ですが期日まであと二日。

この二日で何も残せなければ私は……

「おい」

いつの間にか舞沢さんがカレーを皿によそりテーブルの前に座ってました。

「食わねえと冷めちまうぞ」

そう言って付け合わせのサラダに手を付けました。

「ごめんなさい」

慌てて私も食事に手を付けます。

「舞沢さんは料理得意なんですよね」

「それでもねえよ」

なにか話題をと思ひ、そういえば聞いたことが無かったのだと思ひ出して私は訊いてみました。

「身体を作るのは食事だ。

食に手を抜くと身体を鍛えるのに不都合が生じるし、味覚は意外な時に警報器の代わりになってくれる場合があるから鍛える価値もあるしな。

そうでなくても時代や地域で食えるもんも差が酷かったからな。

自分で作る方が安全で確実且つ合理的だから覚えるようにしてただけだ」

なんでもなさそうにそう言いますが、顔には嫌なことを思い出したと書いてあります。

「何か思い出があるんですか？」

「色々な」

げんなりした様子で彼は言います。

「健康に良いとか謳って、ろくでもないもんやとんでもないもん食わされたことがあつてよ。」

飯時に言うもんじゃねえもんもあつただけさ」

「そうですか…」

珍しいことに目が死んでいます。

彼らしくない様子に、よっぽど酷い何かなのだと察して私は聞くのを止めました。

「で、明日どうするよ？」

「え？」

「夢の国。」

明日で一時閉館するらしいから、前のリベンジに行つとくか？」

「……はい」

それがどういう意味なのか、私はその時何も分かっていないままただ嬉しくて頷きました。

## 私は決めたんです

最終日であつて、夢の国は人でごつた返していました。

「面倒だから忍び込むか」

夜通しで待つている人も含めれば十万以上の来客の姿に舞沢さんはそう言い、圏境を使つて視認も危ういほどに気配を消すとするりと人混みを縫つて中へと入つていつてしまいました。

「ま、待つてください!」

誘つたのに置いていくなんて酷すぎます!

私も彼に倣い圏境を使い追い掛けると、舞沢さんは僅かに人気の無い場所で待つていました。

「遅いじゃねえか。」

「見る時間無くなつちまうぞ?」

「むう」

他の人たちに失礼極まりないことを悪びれた様子もなく言う舞沢さんに、私は頬を膨らませ抗議しますが彼ははからからと笑い飛ばしました。

「猫がハムスターの真似か？」

下手に似合う分お勧めしねえぞ」

……この人は私を喜ばせたいのか怒らせたいのか時々分からなくなります。

「ほらさつさと行こうぜ。」

パレードまで10時間しかねえんだからな」

そう言つて歩き出した彼を私は急いで追い掛けます。

「とりあえずポップコーンでも買うか。」

何味にするよ？」

決めました。

今日はこの人の財布を空にしてやります。

「全部」

「マジか？」

それってかなり歩き回る羽目になるぜ？」

「構いません。」

一緒に歩けるだけで十分ですから」

「……まあいいか。」

ジャンクで腹を満たすのもこの醍醐味だしな」

私の密かな目論見を気付かない様子でそう言うと、地図を一瞥して最初の露店へと舞沢さんは向かい始めました。

そうして私達は夢の国で食べ歩き続けました。

「新作だつていうが、チエロスの海苔塩味は斬新すぎねえか？」

「美味しいけど夢の国で食べるものじゃないです」

終末前最後とあつて少しでも見て回ろうと走るギリギリの急ぎ足で動く観客を尻目に私達はゆつくり歩きます。

時折ぶつかりそうになりますが、氣で周囲の流れを読みぶつからぬよう先じて位置をずらしているのもそんなことは一度も起こりません。

「皆凄いですね。」

「こんなになつても秩序を保つてゐるなんて」

「神様が見てるのを実感したからな。」

血に刻まれた信仰が表に出てる内は悪いことはそうは出来ねえさ」

まるで川を遡る鮭のような光景に舞沢さんはそう言いました。

そんなふうには私達はいき急ぐように夢の国を駆け抜ける彼らを眺め、そうして日が傾くまでこうしていました。

「今度は素直に見れそうだな」

警備員が道を確保する様を横に舞沢さんはそう言いました。  
「そうですね」

あの時は邪魔が入ったけど、今度こそ最後まで見ていこうと私は決めていました。  
と、不意に舞沢さんは回りの喧騒にも遮らせず静かに語り出しました。

「なあ白音。」

お前、『百万回生きた猫』って話を知ってるか？」

「……いいえ」

唐突にどうしたのかと思いつつも私は正直に言いました。

すると舞沢さんは語り始めました。

「ある猫が居た。」

そいつは百万回の前世を覚えたまま生きていた。

良い主人が居た。

悪い主人が居た。

沢山の飼いが猫には居たが、猫はそのどれをも嫌っていた」

そう語る彼の顔は見えません。

「ある時猫は主人を持たない野良猫だった。」

猫は自尊心を満たすため過去の記憶を牝猫達に吹聴して注目を集めていたが、一匹の

白い牝はその猫の話に全く興味を示さなかった」

夕暮れにパレードが始まりますが、私は彼の話に必死に耳を傾け続けました。

「猫はその牝猫を振り向かせようと必死になって、いつの間にか本気でその白猫に惚れてしまった。」

そうして本気で想いを告げると白猫は猫を受け入れ番になった」

だけど彼は言います。

「猫は妻と子に囲まれて幸せだった。」

だけどもある日、白猫は眠ったまま息を引き取った」

それは悲しい結末。

「白猫を喪った猫は悲しみに暮れたまま暫くして息を引き取った。」

そうしてもう二度と生まれ変わることはなかったそうだ」

そう語り終えた舞沢さんに私は思ったまま言いました。

「いい話、と思いました」

結末は悲しかったのですが、それでも二人はきつと、死んだ後もずっと一緒に居られた  
と思つたからそう思いました。

「俺はこの話が嫌いだ」

「……どうしてですか？」

「猫が嘘つきだからだ」

それは以前彼が口にした言葉。

「何もかも忘れたくないくせに、それを嫌いだと嘯いて、そうした挙げ句本気で欲しいものを手に入れて、その果てに勝手に死んだ猫が嫌いだ」

それはまるで、羨むようでした。

「本当に嫌いなら覚えてなんかいられないんだよ。

俺みたいない呪いでも無い限り、どんな大事なことでさえ忘れるってことが正しい生物の在り方だからだ。

猫はどんな主人だって好きだった癖に、新しい主人のために嫌いになっていくのが気に入らない。

そうまでした癖に、最期の最期まで嘘を貫けなかった猫が嫌いだ」

そう語る彼に、私は自然と問いを投げていました。

「……どうして、私にそれを？」

「さあな」

パレードの最後尾を眺めながら彼は言います。

「ただの気紛れ。

きつと、そんなもんだ」

……嗚呼。

私は、漸く自分が勘違いしていたことに気付きました。

私は今までずっと舞沢さんは強い人なんだと思っていたけど、本当はほんの少しも強くなくなかなかったんだ。

何処にも逃げる場所がないから、ただ前に走り続けるしか選べなかつただけの、何処にでもいる普通の人だつたんだ。

「舞沢さん」

最後のパレードが終わり、夢の国が一時の微睡みに沈もうとする中、私は胸に宿った想いを舌に乗せて彼へと差し出しました。

【一緒に連れて行ってください】

【私のことは忘れてください】

## 終幕? 舞台ごとぶち壊すんだよ。

「私のことは忘れてください」

それを言われた瞬間珍しく固まった。

それが不味かった。

「がっ!?!」

呆けた次の瞬間には白音の掌が水月に押し付けられ、白音の氣が丹田から全身に流し込まれていた。

「て……め……」

氣が全身を滅茶苦茶に掻き回したせいで回らぬ舌で怒りを発しようとするが、白音は泣きそうな顔で笑いながら言った。

「ずっと貴方の側に居たかった。

だけど、貴方は私が側にいても辛いだけだから、せめて、貴方の迷惑にならないようにします」

「待……」

「さよなら」

氣を洗い流し殴り倒せと冷静な判断が訴えるが、それをやる前にとにかく白音をぶん殴ると思いが滅茶苦茶に荒れ狂い、しかし白音はそれに気付かないまま夜の闇に消えた。

「ふ……ぎ……け………るな……!!」

頭が沸騰する。

何が迷惑になりたくないだ？

てめえ、俺が、置いていかれるのが嫌いだって知ってんだろが!!

「があっ!!」

上手く回らないチャクラに怒りは更に荒れ狂い、俺は滅茶苦茶に掻き回された身体に鞭打ってなんとか言うことを聞いた右腕で、自分の鳩尾をぶん殴った。

「い……えっ!!」

無理な体勢からの殴打は威力は大して出せなかったが、横隔膜を突き上げられ生理現象で身体が勝手にえさぐさ。

そしてその反動で空気を押し出された肺が酸素を求め空気を吸い上げ、ほんの僅かだが調息が行えた。

「ひゅう……」

産まれたたで練った程度のあるだけマシな氣を喉のチャクラへと注ぎ込み、無理練り

回転させ調息に必須な肺と横隔膜の支配を取り戻す。

そうして器官を正常に機能させ、白音が経絡に流し込んだ氣を洗い流し終えたのは一時間も要した頃だった。

「く、くく……」

漸く立ち上がれるようになった俺の口の端が勝手に釣り上がり、とうの昔に動かなくなつた感情がギリギリと唸りを上げる。

「しろねえ……」

最後にこの感情が本当の意味で起きたのは何時だったか、なにもかも忘れない俺でさえ定かじゃねえが、それでもだ、

「俺を怒らせて、逃げられると思うなよ？」

血管が切れるほどにぶちギレさせた事を骨身に刻み込んでやる。

「ちよつといいっすか？」

脚に氣を溜め飛び出そうとしたところにそう水を差された。

「あゝあゝ？」

人の邪魔し腐つた某の首を引き抜いてやろうかと睨み付けてみれば、そこに居たのはドク口の仮面にドク口の意匠をあしらつた鎌を携えた人と冥府の死神の氣が混じつた異様な小娘だった。

「一目でこいつがオリュンポスの死者の国冥府の死神だと理解した。  
「ひええ…」

殺気をだだ漏れにしたまま叩きつけたせいとか小娘は今にも漏らしそうな様子でビビってやがる。

「こいつの事はどうでもいいが、エリシユオンは冥府の管轄。

部下の不始末とヘクトール將軍に責が向くのは腹の座りが宜しくねえ。

「なんの用だ砂利ん子」

殺気を収めて訊ねると小娘はしよっぱい顔をしながら口を開く。

「いきなり砂利って酷いっすよ…」

「こっちは急いでんだ。」

「ナンパってなら死んでからにしろ」

「いやいやいや。」

「死んだらデートもなんも出来ないじゃないっすか」

「死神なら魂だけでもヤれんだろ」

「魂だけに欲情する死神なんて上級者っすよ!!」

「空気を混ぜっ返すために下ネタをぶちこめば面白いぐらい小娘は反応を見せる。」

「で、改めて冥府の死神が何の用だ？」

迎えてつてならもう少ししたら逝くから待つてろや」

適当を見計らつて用向きを訊ねると小娘は「なんなんすかこの人……?」と脱力しながらも片手に握つていた麻袋を差し出しながら目的を口にした。

「ヘクトールからあんたに届けもんつす」

「將軍から?」

タイミングがタイミングなだけに微妙に嫌な予感を覚えながら麻袋を受け取つてみれば、中には禍々しい色の液体の入つた小瓶と古めかしい兜が一つ入つていた。

「これは?」

將軍の兜とは意匠が違いすぎると問うて見れば、その答えは耳を疑うものだった。

「それは『ハデスの隠れ兜』つす。

瓶の中身はサマエルから抽出した毒つて聞いてるつす」

……マジでか?」

「なんでそんなもんを?」

正直頭が回らなくなりそう聞くも、小娘は知らないつすよとぶつたぎる。

「あ、でもハーデス様から言付けはあるつす。

『居なくても困らんが、その気があつたら愚兄を解放してやつてくれ』つて言つてたつす。

「どういふ事つすかね？」

「……………」

つまりアレか？

前に將軍が言つてた俺の七転八倒を楽しんでる面子にハーデス様まで入つてると？  
で、取つて付けたように今必要なもんを持つてきたつて事は、そういうことなのか？

「くくく……………」

なんつうか、もう笑うしかない状況だと今更になつて理解した俺は、さつきとは別の意味で込み上げる笑いを必死に堪える。

「な、なんすか急に？」

「いや、ハーデス様に言つといてくれ。」

『ゼウスは粗末なモンをきつちりもいだから帰してやる』つてな」

「え？　え？」

訳がわからないと困惑する小娘を放置し麻袋を肩に担いで俺は歩き出す。

「ちよつ、せめて説明するつす!!」

後ろでなんか喚いてるが知つたことか。

漸く理解した。

つまるところ、全員グルになつて俺と白音をくつつけたがつてゐるつて訳なんだな？

だからこの展開が面白くなってちよっかい出してきたと。

ああ、いいぜ。

そんなにバカ躍りがさせてえってなら、何もかも巻き込んで滅茶苦茶にしてやるよ。

「お望みのラブロマンスなんざ知ったことか。

デウス・エクス・マキナ御都合主義持ち出さなきや解決しねえグランギニョルばか騒ぎにしてやるよ」

白音に抱いたのと同じか、下手しなくてもそれ以上に据えかねる怒りを燃やしながら俺はシナリオを滅茶苦茶にするために動き始めた。

勢いでやってしまいました。今は反省しています。

永きに続く流血の歴史により、現代の混沌を体现していたエルサレムの地は、現在の混迷を来す世界の中で最も安定していた。

というのも、曹操の身体を用いて復活した聖書の神がこの地に『方舟』を顕現させ、命の書に名を連ねた者を集め始めたからだ。

そのためエクソシストを始めとする教会戦力は総力を挙げて周辺各国の紛争を鎮圧。

これ以上の混迷は御免だと声高に批判する現地住民や来る終末に恐慌し武力に訴える過激派、そして黙示録を阻もうと聖書に仇為す者を聖書関係者達は悉くを排斥した結果、エルサレム近辺に限っては非常に治安が安定したのだ。

しかしそれは黙示録を前提とした砂上の楼閣。

彼等がやったことは燻り続ける火種を枯れ山に放逐するに等しい所業であり、それから終末で洗い流されると安く擲った暴挙。

もしも終末が正しく成されなければ、その対価は永劫に等しい借金となって彼等に振り掛かるだろう。

しかしそれは未だ未来の話。

そしてそれは彼女の預かり知らぬ話だ。

白音は圏境で悪魔の氣を隠し、巡礼者を偽って市街に潜り込むことに成功した。

しかしいざ事を起こすという段階に至って足踏みをする羽目となっていた。

というのも、白音の思惑自体が乗り込めばどうにかなる筈という甘いものであり、入念な下調べもなく踏み込んだ聖地には聖書の神の氣が満ちており、悪魔の身である白音の力は半減させられていた。

しかしそれでも感嘆すべき状態なのだ。

下級はおろか最上級悪魔であっても、今の聖地に踏み込めばそれだけでただの人間以下にまで弱体する程に強固な結界が張られている。

しかし白音は悪魔の氣配を隠すために氣を全身に纏わせていたため、本来なら消滅必至のところを半減程度で収まっているのだ。

氣を探知し人気がない場所に潜り込んだ白音はまごつく己に怒りを覚える。

(早くしないと舞沢さんが来てしまう。)

その前に何としても四騎士を討たなきゃ…)

白音自身己が聖書の神を討てるとは最初から考えていない。

故に白音は四騎士に狙いを定めていた。

(勝利の上に勝利を重ねる第一の騎士。

戦争を引き起こす第二の騎士。

疫病と獣を従える第四の騎士)

そのどれもが危険極まる存在だが、何より第一の騎士を白音は最優先の目標としていた。

その理由は、舞沢が降した第三の騎士を加えた四騎士の中で、ただ一騎、その権能がはつきりと解らないことが理由だ。

(『勝利』の上に『勝利』を重ねる。

何を指して勝利というのか解らないからこそ、討つべきは第一の騎士)

しかしその騎士がエルサレムの何処に居るかまでは知ることが叶わず手をこまねいていた。

(せめて居場所さえ判明してくれば…)

焦る気持ちを抑えていた白音は、自分の隠れている建物へと向かう氣を探知した。

(氣付かれた?)

もしそうならば非常に宜しくないと白音は窓から身を乗りだし一息に壁を伝い屋上へと移動した。

そうして氣の正体を確かめた白音は意外な光景に驚いた。

「匙先輩?」

そこには銚のような三叉の槍を担いでエクソシストから逃げている匙元士郎の姿があった。

「穢らわしい悪魔が!!」

「どうやって忍び込んだかも含め全て吐いて貰う!!」

「死んで溜まるかあ!!」

凄まじい形相のエクソシストの集団から必死に逃げる匙の姿に助けようと思うも、それは自身の首を絞める行為だと踏み留まる。

「……」

しかしあのままでは何れ匙は捕まり殺されてしまおうだろう。

リスクとの天秤に揺れる白音は、しかしすぐに追い詰められた匙の姿にフードを目深に被り屋上から飛び出した。

「クソツ!!」

袋小路へと追い込まれた匙は意を決して三叉の銚を構える。

「観念しろ悪魔め!!」

光銃を突きつけるエクソシストの怒号に匙は必死に銚を突き出す。

「会長のためにも死ねないんだ!!」

がむしやらに突き出された銚だが、しかし精鋭たるエクソシストに通じるわけもなくあつさりとななされカウンターで膝を腹に打ち込まれた。

「げえっ」

衝撃で反吐を撒き散らしながら蹲る匙の腹をエクソシストは更に踏みつける。

「くたばれ悪魔」

がちがちと歯を震わせる匙に見せつけるようにゆっくりと引き金を絞る指。

しかしそれは背後で響いた殴打音に遮られた。

「何!？」

慌ててそちらを見れば、目深に被ったフードで顔を隠した白音の襲撃を受け壁にめり込んだ仲間の姿があった。

「貴様、悪魔を庇いだてするつもりか!」

怒声と共に光銃を向けるエクソシストだが、まるで蛇のように滑らかな軌道ですると懐に潜り込んだ白音の繰り出した五指を畳んだ圧拳を鳩尾に突き込まれ、そのまま膝から崩れ落ちる。

「お前は……」

「話は後」

目を見開く匙の腕を掴み、白音は足首の可動だけで地を蹴りそのまま三角跳びで裏路

地を抜ける。

「うわあああああ!!」

「口閉じないと舌噛みますよ」

そう忠告した直後があがつ!と悲鳴が上がり静かになる匙に、手遅れだったかと白音は静かに黙祷しながら安全圏へと離脱した。

~~~~~

白音が離脱したすぐ後、必死で立ち上がったエクソシストは壮絶な顔で気炎を吐いた。

「主の意向に逆らう愚図共があ!!」

敬虔な信徒にして、悪魔と手を組もうとして失落した天使に代わり神の審判の代行を担っていると自負していたエクソシストは、悪魔を庇いだてした白音を何としても裁くべしと憎悪をたぎらせ息巻いていた。

すぐさま戦力をかき集めんと、まずは壁に叩きつけられた仲間を引き剥がそうと痛む身体を圧して立ち上がったが、しかしその姿に息を呑む。

倒れた仲間はその首をへし折られ苦悶を刻んで事切れていた。

「誰が!？」

螺切らん勢いで捻られた形跡から壁に打ち付けられた際のものではない。

他に仲間が居たのかと周囲を見回すも、路地の中に気配はない。

仲間を追って逃げた？

否。

であるなら自分を生かしておくことに益はない。

と、不意に己の腹に棒の先端を突きつけたような軽い衝撃がはしる。

ボツ!!

直後、くぐもった発砲音と共に正面からトラックに跳ねられたような表現のしようもない衝撃が腹部を貫き、エクソシストの体が僅かに吹き飛ぶ。

もんどり打ち地面に叩き付けられ、自分が撃たれたのだと理解したのを最後にエクソ

シストは意識を闇に落とした。

エクソシストの作った血溜まりに路地裏から出る方向に足跡が生まれ、血の足跡を刻むもそれも数歩で消え去り路地裏に静寂が訪れた。

## 相互理解なんざ不可能だよ

私には理解できない。

私は過去を見通し、世界をあまねく見通し、未来の果ての果てまで見通している。

故に私は行動した。

全知全能を以て世界の基盤を刷新し、力なき子羊達の安寧のための器を世界に放出した。

しかしそれでは足りなかった。

故に世界を再誕するために、臆病な者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、呪いをする者、偶像を拜む者、すべて偽りを言う者を焼き払う第二の死の投下をするため再び人の世に降り立った。

だが、私には理解できない。

世界は悲劇で満ちている。

世界は絶望で満ちている。

世界は悪夢で満ちている。

私の遺した『神器』と『システム』<sup>愛</sup>を以てしても悲劇は終らない。

他の神が放棄した責務を代しても絶望は終らない。

如何に悪しき人を間引こうと悪夢は終らない。

私には理解できない。

何故お前達はそんなにも愚かなのだ？

何故お前達はそんなにも間違えるのか？

何故お前達はそんなにも命を軽んじるのだ？

理解できない。理解できない。理解できない。

多くの神話から叡智をかき集め、並び立つ全知全能たるゼウスの叡智を重ねても理解できない。

何故、お前は私と一つになった私の子ヨシユアの前に立ち塞がるのだ ● ● ● ?

匙を連れエクソシストの気配の無い場所まで逃げ切った白音は入り口の無い屋上で足を止めると一旦休憩することにした。

「取り合えず追っ手は撒けたみたいですよ」

「……」

三叉の銚に寄り掛かるように蹲る匙を安心させるためそう言うも匙は無言のまま答えない。

「あの……」

舌を噛んでいたから喋れないのかと近寄った白音に、直後下から掬い上げるような軌道で匙の拳が振り上げられた。

「な……」

反射的に交わした白音が一步下がると、匙はその目に赫怒を宿した顔を持ち上げ吐き捨てた。

「日本神話の手先がなんのつもりだよ？」

その言葉に匙がどうして自分に怒りを向けるのか理解した。

匙からすれば日本神話は自分達から家族や未来を奪い上げた略奪者であり、自分もその仲間だと見えているのだろう。

「あ……」

何を言えがいいのか惑う白音。

匙は白音を睨み付けていたが、やがてぼつが悪くなったのかそっぽ向いて悪いと言った。

「塔城が悪い訳じゃねえのは分かってたんだ。

たださ、やっぱり感情が納得しねえんだよ」

そう言い、匙は鬱屈した感情を吐き出す。

「俺はただ会長が好きで、家族を守りたくて悪魔に転生したのに、なのに日本神話は冥界を滅ぼしてしかも何も悪いことなんかしてなかった会長まで日本から追い出したんだ。

それをどうして納得できんだよ？」

そう何度も畜生と漏らす匙。

日本神話からしてみれば、その考えこそ筋違いなのだど吐き捨てる。白音は言いたかったが、しかし納得はされまいと話を変える。

「それで、匙先輩はどうしてエルサレムに？」

「あ？ ああ。」

俺はポセイドン様に聖書の神を討てと送り出されたんだよ」

その言葉に白音は一瞬呆気に取られた。

舞沢の言では絶頂期の万分の一以下まで弱体化していたとはいえ、本来の全力ならシヴァとも拮抗し得るゼウスを降した聖書の神を倒せ？

一体何をどうしたらそんな誇大妄想に走れるのか困惑する白音に、溜まっていたものを吐き出し少しだけ調子を取り戻した匙は傲慢するように銚を示す。

「このトライデントの力で悪魔の俺も全力を出すことが出来る。」

それにトライデントにはポセイドン様の権能を一部振るうことが出来るんだ。

こいつを使えば聖書の神だって倒せる筈なんだ」

「……………」

正直どう言えばいいのか白音は解らなくなった。

見切り発車で飛び出した自分が言えた義理では無いだろう。

だが、匙のそれは余りに甘い見通し、否、希望的観測にすらなっていないただの妄言だ。

実際はトライデントを使いこなせず、エクソシストにいいようにされていた事さえ頭から抜け落ちているようにトライデントの有用性を嘯いている。

しかしそれを指摘したとて与えられた玩具にはしやぐ匙には届かないだろう。

「なあ塔城。

お前さ、まだあいつと居るのか？」

「え？」

唐突にそう言われ、首を捻る白音に匙はとんと理解できないと口にする。

「あいつはグレモリー先輩を殺したんだろ？」

「だったら、」

「なんでだと言う言葉を遮り白音は口を開く。

「私は卑怯な女なんです」

「え？」

思いがけない言葉に固まる匙に、ではなく己に言い聞かせるよう白音は語る。

「私はいつだって自分が一番大事でした。

部長の眷属になったのも姉様が私を置いていったから。

魔王の妹の庇護を得れば安全だから。

「だから私は悪魔に転生したんです」

リアス・グレモリーが謳っていた情愛を白音は都合よく利用した。

それは意識しての事ではなかったが、しかし白音は本能的にリアスの未熟さと甘さを

利用して生き延びた。

「舞沢さんも最初はそう。」

欲しくもない扱背負いきれわないされた仙術爆弾をどうにか出来る人だから、絶対に師事するために手段を選ばず擦り寄っただけでした」

無意識の奥で自分の感情さえ利用する浅ましい子供。

それこそが白音の本性だった。

しかし舞沢は最初からそれを見抜いていた。

「酷い人ですよ。」

打算も愛も変わらないなんて言っておきながら、それでも私を手元に置いてくれるなんて、それじゃあ私はどうしたらいいんですか」

見捨ててくれれば折れてしまえた。

嫌ってくれれば諦められた。

だが、舞沢は望めば望むだけ与えてくれた。

ただ、一つの想いだけは汲もうとはせずに。

「私は舞沢さんを愛しています。」

だけど、あの人にはそれはただの重荷だから、だからあの人が成したいことの為に命をおおうって決めたんです」

「成したい」とっ？」

匙のオウム返しに白音ははいと頷く。

「その為には四騎士を排しなければなりません。」

だから、私は彼等を殺します」

それが無謀であることは承知している。

だけど、騎士一騎でも道連れにすれば舞沢は楽になる。

そうでもしなければ、白音は舞沢の隣に居られないとそう思っていた。

『随分大口を叩いてくれる』

「!?!」

在る筈のない第三者の声に咄嗟に構える白音とトライデントを抱く匙。

そうして声の発生元に目を向けると、そこには光を微かに反射するシャボン玉が浮かんでいた。

『見付けたぞ主の御業に逆らう悪魔共。』

同胞の仇も含め、主に代わり裁きを下す』

「逃げて!!」

ただの泡ではないと白音は即座に縁を蹴り飛び出した。

数秒遅れ匙も飛び出すと直後にさつきまでいた屋上から破裂音が響き聖なるオーラが放射される。

「くっ!!」

「ぎゃあああ!!」

氣を纏う白音は呻く程度で済んだが、匙はもろに食らい地面へと落下していく。

「匙せ…」

助けようと羽を広げようとした白音はしかし、周囲を先程と同様のシャボン玉数百に囲まれていることに気づき、即座に逃げの一手を打つ。

『逃がしはしない。』

来る新世界に君達は不要だ』

抑揚の低いその声と同時にシャボン玉がピラニアを思わせる勢いで白音へと迫った。

# 戦う理由はそれぞれあるんだ。

神様は人間達を救いたいと思っていた。

だから手を差し出した。

だけどその度に人間達はその手を振り払ってしまった。

神様は困惑した。

人間達は滅びることを由とするのかと。

それでも人間達を救いたかった神様は決めました。

神様の手を振り払うものは全て殺してしまおうと。

そう決意した神様は、だけどひとつだけどうしても解りません。

人間達は何故、自らの滅びを拒みながらも自ら滅びへと向かうのか、と。

神様は問いました。

「だけど、誰も答えを返しません。」

蛇に唆され約束を破った男と妻も

怒りから弟を殺した兄も

自分との約束を守れなかった父も

自らに従い悪を洗い流した大地を踏んだ家族も

友と袂を分かち囚われた信徒を開放した指導者も

役目を終え帰ってきた息子も

誰も、誰も答えてはくれませんでした。

~~~~~

次元の狭間にて地上の混乱を眺めていたリゼヴィムは、ふと思い付き隣で微笑ましそ  
うに地上を眺めている『狐』に提案した。

「あのさあ、今からエルサレムにトライヘキサを落としてみない？」

聖四文字による大粛清。

それによつて起こる結末はさして楽しくないだろうと思ひ、聖四文字の思惑を正面か  
ら覆せるだろう数少ない切札であるトライヘキサの投入をリゼヴィムは提案した。

しかし『狐』はいんやあとにちやりと嗤う。

「確かにいとらいへきさあを今からやつたればあ、聖書の神さんのお計画をぶつ壊し  
てえくだはりますでしょうけどお、どうせひつくり返すうやつたらもおとおもろい機  
会がありますう」

「へええ？」

あえて放置する意味を思い付かず首を傾げるリゼヴィムに、『狐』は邪悪に笑いながら嘯く。

「とらいへきさあは、聖書の神さんのお千年王国が出来たあ直後に放るんや。

聖書の神さんのお絶対秩序のお国が完成してすうぐ崩壊したら、聖書の神さんとお神さんの羊いはさあぞ良い声で啼いてくれはると思いません？」

嗤う『狐』の案にリゼヴィムはゾクリと背筋を震わせる法悦を覚えた。

「君さあ、本当に良いね」

悪魔より邪悪で、人がどうしたら最も不幸になるのかを知っていてそれを愉しそうに実行する悪辣さに、リゼヴィムは『狐』に心から敬意を抱いていた。

いや、敬意など生温い。

それは最早畏敬であり、敬愛であり、いつそ愛とさえ言えるほどに惹かれていた。

「君は自分を妖怪だと言うけど、本当に妖怪なのかい？」

「…さてなあ？」

リゼヴィムの問いに『狐』は戯けるように嘯く。

「それ言うならあ、あんさんはほんまにあに悪魔なんですかあ？」

「勿論さ。」

真なる魔王ルシファーと最初の悪魔リリスの間に産まれた唯一無二の子。

由緒正しき本物の悪魔が俺だ」

そう胸を張るリゼヴィムだが、『狐』はにちやりと嗤った。

「せやけどそれはおかしくあらへんかあ？」

「…？」

「聖書が正しい言う前提やけどお、ルシファーは天より墮落したあ天使でえ、リリスはアダムの最初の番の人間やないんですかあ？」

「…」

そう言われリゼヴィムは僅かに瞠目する。

「まあ、聖書は大夫都合よおあちこちの神さんのお話取り込んでますから、どこまでもホントか分かりませんけどお？」

でもお、ルシファーとリリスの話が本当だとしたらや、あんさんは墮天使とお人間の混ざり子言う事になりますねえ？」

「違う!!」

『狐』の言葉を怒りさえ込めてリゼヴィムは否定する。

「ルシファーは悪魔だ!!」

ママンは悪魔だ!!

そして二人の子である俺は悪魔だ!!

例え聖四文字だろうと絶対に否定させるか!!」

そう感情のままに吠えたりゼヴィムに、『狐』はせやと言う。

「誰が何と言うたかてえ、自分が何者か決めるんは己どすう。」

あんさんは悪魔やあて自分で名乗るから悪魔なんや。

そしてうちもお、誰がどないにいほごこうがあうちはあ『妖怪』やあて言い張りますう」

コーギトー・エルゴー・スム。

真実が如何なるものであろうと、自分を何者だと本当に定義出来るのは己だけだと

『狐』は嘯く。

「…ぷっ」

と、突然リゼヴィムは哄笑した。

「確かにその通りだ!!」

俺は自分を悪魔と定義したから悪たれと在る!!

父が悪魔だから、ママンが悪魔だから!!

だけどなにより俺が俺が悪魔だと思うから悪魔なんだ!!

誰かに否定されたら悪魔じゃなくなる?

否だ!!

誰かから認められる必要なんてない!!

俺は、俺こそが悪魔なんだ!!

アハハハハハハハハハハ!!」

そうして目が覚めたように楽しそうに笑い倒すリゼヴィムを横に『狐』は熱の籠もつた視線を地上に遣る。

「それに、あんさんはほんまにこのまま聖書の神さんのお一人勝ちになると思いますう?」

そう嘯く狐にリゼヴィムは笑いを潜め、そうだなと言う。

「聖四文字がエルサレムに籠もつた時点で奴の勝ちは確定だろうさ」

仮に拠点に選ばれたのが日本であれば、ないしインドであれば答えは違うだろう。

世界中に信仰を持っていようと、日本は神道の、インドはヒンドゥー神話のホームグラウンドである。

その根が土着神である彼等が信仰を捧げる国の中で戦うならば、現在最強を争える二教のその力は根差す天地からの恩恵も合わさり聖四文字をも優に勝るだろう。

逆に彼等が地の利を失えばその力は大幅に制限されてしまう。

そしてエルサレムはユダヤ、イスラム、キリストの三教が聖地と崇める地である。

当然地の利はその三教が共に頂く聖四文字のものであり、日本神話とヒンドウー神話のどちらにも不利にならざるを得ない。

だからこそ殆どの神々は打つて出ることを諦め、黙示録に対し守りを固める道を選んだ。

唯一、エルサレム侵略の歴史を持つローマが崇めたユピテルならば勝ち目もあつたが、しかしそれも最悪の形で敗北した。

妥当な結論を言うリゼヴィムに、しかし『狐』はそうとは限らないと嘯く。

「何処にでも居りますやろ？」

勝ち目が無い言うて、だからどうしたんやって牙剥くど阿呆つてモンは。

そないな奴に限つてえ、とんでもない真似しはるもんやあ」

『狐』は思い出す。

絶望的な実力差を見せ付けられ、血河屍山を築こうと「だからどうした」と弓を張り槍を構え刀を握つた侍達を。

そうして『狐』に負けていいと思わせた彼らの強さを。

その眩しさは今も『狐』を魅了し続ける。

「今回は見せてくれはるかなあ？」

世界をやり直すうて言いはる神さんを、死んだぐらいで諦めずに殺してみせる人間つ

てもんを」

そう愉しそうに嘯く『狐』の横顔を、リゼヴィムは自分でもわからないほど面白くないと思つた。

~~~~~

数多のシャボン玉を掻い潜り空を翔る白音は、暫くして違和感を感じた。

(誘導されている…?)

シャボン玉の群れの中にあらかさまに層の薄い箇所が幾つもあり、最初は罠と警戒したが暫くする内に罠とは違う『意』を感じ取つたのだ。

敢えて気づかぬ降りを続けていた白音だが、それがエルサレムの外へと向かうのではなく中心部の『方舟』に向かうよう誘っていることに至り、どうするかと迷う。

(このまま逃げ続けても何れ狩られるだけ。

ならば、)

虎穴に入らずんば虎児を得ず。

このまま八方を塞がれるのを指をくわえて待つより敢えて誘いに乗り期を見計らう。

(舞沢さん)

愛しい人の事を想い、それを振り切るように白音は空を蹴り『方舟』の正面に着地した。

そうして待ち構えていたのは王冠のような飾りの付いた鬪體を模した兜を被る白い鎧姿の騎士であった。

『声からして若いとは思っていたが、よもやこんなに幼い娘が悪魔とは……』

兜越しにくぐもった声がそう嘆くかのように溢れたが、ついで放たれた声は怒気が含まれたものだった。

『よくも神の身元たるこの聖都で同胞を殺して回ってくれたな。』

その報いを受けろ！』

そう言い放った瞬間、白音は背中を走る悪寒に本能的に左へと跳んだ。

直後、白音が居た場所に白音をまるごと覆い尽くす巨大な氷柱が発生した。

『避けた？』

だが、そう何度も続く筈がない！』

閉じ込めるつもりで発した攻撃をかわした白音に今度は落雷を落とす。

立て続けに飛来する雷撃をしかし白音は紙一重で避け続け前へと走る。

(どういふことだ?)

一度目は偶然でも、音速の三倍にも達する雷撃をこうまで避け続ける白音にデュリオ

は違和感を感じていた。

一方回避を続ける白音もまた、デュリオの言葉に疑念を抱いていた。

（殺した？）

私か？）

潜入してから今日まで、白音は某蛇のごとく身を隠すことに注視し続け、交戦と呼べるものは匙を救出した一度のみ。

疑念を抱いた白音は、しかしすぐにその誤解の原因に思い至る。

（舞沢さん、貴方もエルサレムに来ているんですね）

ならば、猶予は無い。

大気の『氣』の歪みに合わせ地を蹴って雷撃を躲し、一気呵成に白い騎士へと駆ける。

『くっ!?!』

鋭い踏み込みに神器では間に合わないと言われ牽制のジャブを放つデュリオ。

ジャブとはいえ聖四文字より与えられた『四騎士』の加護と二天龍の鎧に匹敵する鎧そのものの性能により、並の者なら気付く間さえなく頭蓋を砕く程の威力を込められた拳が白音に迫る。

しかし相手が悪かった。

「覇あっ!!」

バンツ!!

拳が当たると刹那、白音は震脚を踏んでデュリオの腕を真下に打ち落とす。

そのまま衝撃で体勢が崩れたデュリオの兜越しに掌打を打ち込んだ。

『くっ、があっ?!』

加護が無ければ兜ごと頭を砕かれていたと錯覚する程の衝撃にデュリオの身体は仰け反り、たたらを踏もうとした身体はしかし打ち落とされた腕を掴んでいた白音によりぐいっと引つ張られ無理矢理直される。

この機を逃せば次は無い!!

そう白音は守りを捨て注ぎ込めるだけの氣を四肢に廻し、肘を、掌を、習い修めた八極拳を叩き込む。

「セイツ!! タアツ!!」

肘打、掌打、拳打、靠撃、それらが鎧を通してデュリオの身体に突き刺さる。

その衝撃は鎧の防御を抜いて悲鳴さえ上げられないデュリオを打ち据え、突き抜けたダメージが内蔵を傷付け決して無視はできない痛みを覚えさせた。

『ブフツ!!』

スリットから吹き出した喀血が白音に掛かりその白い髪を血に染め、そして偶然眼に入り堪らず白音は開拳を打って間合いを開かせた。

打ち飛ばされたデュリオは立ち上がる事ができないまま、えづき激しくむせ返る。

『グエツ、ゴホツ!!』

兜が脱げ落ち、吐いた血で顔を赤く染めたデュリオが喘ぐ前で、白音もまた苦痛に膝を付いていた。

「ハア、ハア、ハア、」

酸欠に喘ぐように短い呼吸を繰り返す白音。

(無理を、し過ぎた、かな?)

エルサレムを覆う聖四文字のオーラから身を守る気さえ攻撃に回したツケは高く、肺から焼かれるような痛みを全身を駆け回らせていた。

しかしいつまでもそうしてはいられない。

まだ追い込んだだけで、完全にトドメを刺した訳では無いのだ。

「…つぐー!」

喉を鳴らして痛みを食いしばり顔を上げた白音。

そして彼女が見たのは、濁流のように自身へと迫るシャボン玉の津波だった。

立ち上がりうと身を震わせていたデュリオは、藻掻きながら思考の片隅で走馬灯を走らせていた。

「主よ!!」

何故、何故皆の命を召し上げたのですか?!?!」

それはデュリオが『四騎士』に指名された直後の事だ。

曹操の身体を器として復活した聖四文字は、神器を宿しながらもその負荷により苦しんでいた子供達を集め、その魂ごと神器を回収したのだ。

当然子供達は一人残らず息絶えた。

それが耐えられず真意を問いたたださんとしたデュリオだが、先じて『四騎士』に指名されたストラダによりその意志は阻まれた。

「落ち着きたまえデュリオよ。」

主は何も皆を軽んじた訳ではない。

彼等の苦痛を取り除く為自ら御身の傍に連れて行かれたのだ」

「ですが!」

「デュリオ。」

デュリオ・ジエズアルドよ。

お前は何か勘違いをしていないか?」

尚も食い下がるデュリオに剣呑な気配を纏うストラダ。

その威圧は怒りに吞まれかけたデュリオに冷水をかける程の強烈な気配であった。

「彼等は主自ら殉教を許されたのだ。」

それをお前は間違いだと言うつもりか？」

「それは、」

「ああ。デュリオよ。」

お前の嘆きは分からなくは無い。

確かに共に在った者達の殉教を悲しいと感じる気持ちは私にも経験がある。

だが、デュリオよ。

彼等は肉体を失いはしたが、それはほんの僅かな間に過ぎないのだ」

そう語るストラダーの目は法悦に満ち、感極まったのか涙を流していた。

「主は仰られた。」

間もなく黙示録を経て地上に真なる千年王国が開かれると。

その暁には自ら召し上げた仔羊達を、千年王国の民として遣わすことを告げられたのだ」

そう語るストラダーの目には正気の光は無い。

神の威光に焼かれ、盲目に付き従う狂信者と成り果てていた。

「千年王国が完成すれば皆が生き返る…」

「そうだデュリオ。」

一時の別れとして辛いと思うだろうが、これは試練なのだ。

『騎士』の役割を果たし、再会の喜びを分かち合うための尊い痛みなのだ」  
分かったな？

そう言うストラーダに、デュリオはハイと頷くことしか出来なかった。

「負け、られない、んだ…」

ストラーダの言葉が狂気の妄言でないとは言い切れない。

しかし、もうそれに縋るしか道は無いのだ。

神の言葉を信じ、再会の可能性を信じて『騎士』として千年王国建国の礎に邁進し続けねば、デュリオは立ち上ることさえ叶わない。

「僕は、絶対に、負けられないんだ!!」

震える脚を叱咤し、血を吐きながらデュリオは魂の叫ぶままに咆哮した。

準備万端で来てるに決まってるだろ？

「パランス・ブレイク禁手!!」

龍と悪魔の物語に於いて、デュリオ・ジエズアルドは転生悪魔の技術を模した天使の手により転生天使として変成し、その身に宿す神滅具『煌天雷獄』を禁手化させていた。

しかしこの時間軸においてデュリオは天使へと変成しておらず、神滅具の禁手化に至ってはいなかった。

だが、想いを糧とする神器は聖四文字の調整を経てデュリオの「子共達を千年王国に生き返らせる」という妄執を糧とし、奇しくもそう在るはずだった物語と同じ亜種禁手化へと辿り着いた。

「フラス・エッロ・デイ・コロリ・テル・アルコパレーノ、スベラントア・デイ・プリスコラ聖天虹使の 必 罰、 終末の綺羅星!!」

禁手によりデュリオの肉体に変化が生じ頭上に天使の輪が生まれ、鎧を通り抜け12枚の黄金の翼が生え伸びた。

ダメージと変成に痛む体を無視し、デュリオは苦痛に膝を着いた白音目掛け増大した力を封入した数多のシャボン玉を瀑布の如く解き放つ。

「くっ!?!」

辛うじてシャボン玉に気付いた白音は咄嗟に軽身功を発動し上空へと逃げる。

「逃がすか!!」

すかさず飛ばしたシャボン玉を繰り宙へと逃げた白音を追わせるデュリオ。

辛うじて白音の方が速くシャボン玉に触れてこそいないが、しかしいつまでも逃げ切れるものではない。

「やるしかない…」

ジリ貧になる前に仕留めねばと着地と同時に地面を踏み砕き、自らを砲弾の様にデュリオ目掛け飛び込んだ。

「甘!!」

迫る白音に避けようとするばさつききの二の舞とデュリオはシャボン玉をばら撒き迎撃を図る。

白音は両腕に『氣』を集中させ限界まで硬身功を高め、両腕を盾に自らシャボン玉の波に突っ込んだ。

「アアアアアアア!!」

腕に触れたシャボン玉が弾け炎、凍気、電撃、鎌鼬、汎ゆる自然エネルギーのダメージが白音に牙を剥く。

『氣』の防護を貫き腕が切り裂かれ焼け爛れ凍りつき、あらゆる方向の痛みが同時に白

音の神経をぐちゃぐちゃに掻き糞るのを獣の様に吠えて耐える。

そして体感時間で数分、実際には一秒にも満たない時間を掛け白音はシャボン玉の波を突っ切った。

「何だっ!?」

まさか耐えきれられるとは思っておらず、掛け値なしに手加減無しで攻撃を放ったデュリオは驚愕から僅かに硬直してしまう。

そしてその隙を見逃す白音ではない。

「猛虎・」

盾にした両腕の感覚は最早無い。

これを外せばもう自分に勝機はないと白音は全身全霊を籠め己の最大火力を放つ。

「硬爬山!!」

箭疾歩からの掌打、更に拳打を半歩踏み込む震脚と共に放つ。

放った拳が砕ける音がしたが、しかし脳内麻痺で痛みを描き消した白音は止まらない。

二度続けての打撃に遂に鎧が罅割れ、その身に拳打から繋いだ肘撃がデュリオの胸に突き刺さる。

「ぐぐっ!!」

白音の肘がデュリオの肋を砕き骨が肺を突き破って押し出された空気と共に咯血する。

「これで、倒れる!!」

血飛沫が舞う中白音は猛虎硬爬山最大の肝、虎爪掌を放つ。

(避けられない!?!?)

振り下ろされた掌打に、死神の鎌を幻視するデュリオ。

刹那の時間が引き伸ばされ、ゆっくりと迫る掌。

しかしその掌は届かなかった。

『耐えよデュリオ!!』

白音の背後より飛んできた聖光の刃が白音の背を切り裂き吹き飛ばした。

背中からの衝撃に白音の身体はデュリオへとぶつかり二人は纏れ合いながら吹き飛んだ。

「ゴホツゴホツ!? …す、ストラード猊下?」

吹き飛ばされたデュリオの視界の先、手にデュランダルを携えた灰色の甲冑の騎士が立っていた。

『遅くなつてスマンな。』

無事、とは言えんようだが立てるか?』

デュランダルを左右の空いている方の鞆に収めガチャリと甲冑を鳴らせながら歩み寄るストラダー。

鬮を模した兜が一瞬本物の頭のように思えたが、そんな妄想を軽く頭を振って拭い大丈夫ですと答え、立ち上がろうとして痛みから失敗する。

「ぐうっ!!」

『無理をするでない。』

『その汚物は私が処理しておく』

そうデュリオを通り過ぎ、這って逃げようとしていた白音を踏み付けた。

「があっ!!」

『おのれ汚らしい悪魔の分際でよくも神の地を踏んでくれたな!!』

爪先を捻じ込み背中への傷口を更に深く抉るストラダー。

「ぎいッ!! あがあっ!!」

聖光が細胞を焼き白音の意思を無視して悲鳴を上げさせる。

そして今度は鳩尾に爪先を叩き込む。

「げうっ!!」

『簡単に死ねるとは思うな。』

貴様が殺した同胞の数だけ生きたまま四肢を裂いて、内蔵を引きずり出して鳥の餌と

してやるからな!!』

狂ったように叫びながらストラダーは何度も白音を蹴り飛ばす。

「……」

その余りにも残虐な行いを見せ付けられ、デュリオは慄き本当にそこまでする必要があるのかと疑問を過らせる。

だが、その疑問に答えを得る日は来ない。

「……」

と、サンドバッグのように飛ばれていた白音が唐突に笑い出した。

『……何を笑っている?』

やり過ぎて狂ったかと訝しむストラダーを、白音は泥と血で汚れた姿で嗤った。

「滑稽、ですね」

『……』

「せいぜい、私を殺して、それで、笑っていればいい」

『貴様……』

嗤う白音にぶるぶると拳を震わせるストラダー。

「お前達の、神様は、必ずあ『黙れ!!』『あ?!』」

蹴りが白音の身体を鞠のように飛ばす。

『貴様のようなクソの役にも立たない世界のシミが、神の恩赦を理解しない虫ケラ如きが神の徒である私を嗤うか!!』

激昂のまま喚き散らすストラーダ。

ストラーダの感情に釣れる様に地面から犬の特徴を持つ怪物が何匹も現れた。

『お前には鳥の餌さえ勿体無い!!』

主より与えられし獣のクソになるのが相応しい末路だ!!』

ストラーダの怒号に従い獣達が白音に喰らいついた。

「ア…!？」

獣の一匹に喉笛を押さえられ悲鳴さえあげられず獣に食られていく白音を、ストラーダは愉快そうに笑う。

『ふはははははははは!!』

見るがいいデュリオよ、これこそが神に逆らう愚か者の末路だ!!』

そう視線をデュリオに向けたストラーダはそこで信じられないものを見た。

上半身を起こしたデュリオの真後ろ、そこにデュリオの頭にポンプアクション式のシヨットガンを向ける男が立っていた。

『逃げるデュリオ!!』

「え…?」

ストラダーの声に背後を見ようとデュリオは振り向きかけ、  
ボツ!!

ショットガンから吐き出された散弾を至近距離で浴び頭を消し飛ばされた。

『デュリオ!!』

頭を失い崩れ落ちるデュリオの身体。

『きいさあああまあああああ!!』

怒り狂いデュランダルを抜いて飛び掛かるストラダーに対し、男は安全ピンを抜いたスタングレネードを放る。

放られたスタングレネードは即座に爆ぜ、強烈な閃光と爆音はストラダーの視界を白く染める。

『ぬおおおお!!?』

しかし怒りに燃えるストラダーは止まらない。

視界を奪われたストラダーは即座に聖光を自身を中心に全方位に放ち追撃を防ぐ。

しかし警戒した追撃は来ず、スタングレネードの効果が消えた後にあつたのはデュリオの死体だけだった。

『いない…?』

『っ、まさか!?!』

獣に喰われている筈の白音の方を確かめるも、しかしそこにあったのは頭を失い横たわる獣の死体だけだった。

『おのれえ…』

デュリオを殺しスタングレネードを使ったのも全て目晦まし。

奴の狙いは最初からあの悪魔だったのだ。

怒りの余り目眩を起こすストラダーダを尻目にハデスの隠れ兜を被り直した舞沢は瀕死の白音を抱え『方舟』から離れていく。

「ま……さ……ど……」

「喉に穴開けたまんま喋んじゃねえよ」

まともな声を出せない白音をそう制し人払いの結界を張った仮拠点に飛び込む舞沢。そこには手錠で手足を拘束され口枷を嵌められた匙が転がっていた。

舞沢はハデスの隠れ兜を脱ぎ、白音を乱雑に捨てる。

「むーむー!!」

白音の姿に喚く匙を無視して舞沢は瀕死の白音に言う。

「お前さあ、あんだだけ啖呵切つといて結局これとか何考えてんの?」

呆れたと言いたげな舞沢の態度に匙が更に喚くも無視して言う。

「これに懲りたら二度と馬鹿な真似はすんじゃねえぞ?」

分かったか？」

しかし白音はほんの僅かに首を横に振る。

「あのさあ…」

まだ分からないのかと言いかけて、白音の唇が動いていることに気付き黙る。

【私は、あなたの隣に居たかった。

あなたの全部が欲しかった。

だから、それを邪魔する奴らが憎くて、でも私じゃ勝てないから一人でも道連れにできればそれで良かったんです】

読唇術で読み取った白音の想いに舞沢は眉間に皺を寄せる。

【ありがとうございます。

臆病な私に、あなたのために死んでもいいって思えるぐらい好きにならせてくれて、ありがとうございます】

そう笑い、白音はその体重を２１グラム軽くした。

くくく

白音が死んだ。

当然だ。

白音の力は精々駆け出しの仙人がいいところ。

聖四文字どころかドラゴンにだって勝てるかどうかって程度の奴が生きのこれる場所じゃねえんだよ。

で、この阿呆は最後になんて言った？

死んでもいいって思えるぐらい好きにならせてくれてありがとう？

馬つ鹿じゃねえの？

「つうか、馬鹿以外の何もんでもねえんだよ」

死んでもいい？

それで本当に死ぬ奴は馬鹿なんだよ。

やった事があるからそう言い切れるんだよ。

「ムガムガ!!?」

「煩え」

後ろの煩いのにその辺の小石を拾って脳天目がけ指弾を撃ち黙らせておく。

トライデントなんていいもん持つてるから白音に使うはずだった対聖符くれて生かしたのだが、やっぱり殺しておくか？

…ああ、いや、やっぱり生かしたのだが便利だな。

「ハデス様、材料寄越したのはアンタなんだから今回は見逃しといてくれよ？」  
そう断つて俺は懐から紫色の薬品が入ったハイジエッターを取り出す。

そいつを白音の薄い胸に押し付けトリガーを引いた。

プシュッ！

空気で中の薬品が白音の中に注がれる。

材料の関係で2回分しか用意出来なかったが、果たしてどうか…

と、白音のビクンと身体が大きく跳ねた。

そして白音の身体の表面が薄皮のように白い膜に覆われ、間もなく罅割れて剥がれ落ちた。

膜が剥がれ切った白音の身体には、先程までの傷は一切残っていないかった。

「成功したみたいだな」

アスクレピオス直伝の製法はともかく、材料のいくつかが代用品だったから効果に不安があったが、どうやら杞憂だったみたいだな。

そうして脱皮のついでに汚れた服を剥ぎ、傷一つない綺麗な身体になった事を確かめながら予備のマントで白音を包んでおく。

「おい起きろ」

いつまでも寝コケてる転生悪魔の脇腹を軽く蹴飛ばして叩き起こす。

「オゴゴゴ…」

起きたらなんか妙に痛がりやがる。

リアクションが派手なのは良いがいつまでも蹲ってんじやねえよ。

「こいつが起きたらさっさとエルサレムから逃げろよ」

「ムガ!?!」

それだけ言い残し、トライデントを手に俺は白音の借りを返すついでに聖四文字との決着を着けるため拠点を後にした。

## 加減も遠慮も侮りも必要ない

挑発がてら兜は被らずに戻ってきてみれば髑髏騎士改めストラダーダは頭を消し飛ばした白騎士の前で祈っていやがった。

その姿に俺は思ったまま口にする。

「憐れだな」

流石にこの距離で聞き逃す筈もなく、ストラダーダはガチャガチャと喧しく鎧を鳴らしながら俺を兜越しに睨んできた。

『…貴様あ』

怒りを煮詰めたような感情の籠もった良い殺気だが、だけどそれが益々憐れに見える。

「教会史上最強のデュランダル使いなんて聞いていたが、こうまで落ちぶれると憐れというか、滑稽だな」

そう吐き捨てるといつの間にかストラダーダがデュランダルを目の前で振り上げていた。

『神に唾を吐いた罪、ここで死んで贖え!!』

並ならこれで終いだらうが、そうしてやる義理はねえ。

「ふっー！」

呼吸を吐きデュランダルの軌跡にトライデント短く握り添えていなす。

そのまま六合大槍の理を以てトライデントの柄を抜いて伸ばしストラーダの胸を狙い突く。

『その程度!!』

しかし堕ちたとはいえストラーダも卓越した武人。

すかさずデュランダルの片手に持ち替えもう一本の剣を抜きトライデントの穂先を払う。

「……デュランダル?」

いや、刀身はよく似ているが別物だ。

『否!!』

これこそ我がデュランダルの基に弟子が鍛え、主より祝福を授かりし我が真なる剣。

デュランダルの越えし最新の聖剣『デュランダルII』!!

このデュランダルIIを抜いたからには貴様に勝ち目があると思うな!!』

.....

『くくく。』

どうやらデュランダル二振りを前にして漸く己の愚かさを理解したようだな？  
しかしもう遅い!!

デュリオの仇、そして悪魔に加担した罪は死以外で贖えるものではないわ!!  
『テンション高めに笑ってるストラーダに対し、俺は心底どうでもよくなった。』

「憐れだな。ドウリンダナ」

『……何?』

心底憐れみを込めて最初から語り掛けているドウリンダナに向けて言う。

「將軍から流れてローランに改悪されたのもまだマシだったんだな。」

使い手が脳味噌腐らせた挙げ句、あんながらくたと比べて劣つてると思われるだなんて、ほんつと憐れだよ」

きつとその爺がマトモなままだったならそんな風にはならなかったろうに。

本当に、神様つてのは傍迷惑極まりねえな。

地上に出てくる時は限界まで力削いで人間の振りしてる日本神話見習えよなつたく。  
相手にされていなかったと漸く理解して、いい感じに頭の血管切れそうな爺ストラーダを初めて敵と認識して、俺は告げる。

「ドウリンダナソを振り回すのはテメエじゃ役者不足だ。」

いい加減返してもらうぜ」

ヴァスコ・ストララーダという男を武人として評価していたからドウリンダナを使うのもまあいいかと思っていたが、もうそんな価値はない。

『殺す』

と、ストララーダの足元から白音を玩具にしてくれた駄犬が5匹現れる。

『主の慈悲は貴様には無い。』

主より与えられし『魔獣創造』の餌としてくれる』

怒り過ぎて逆にテンションが下がったらしいストララーダの声と同時に駄犬共が俺に迫る。

「さて、殺るか」

確認のため俺はハデスの隠れ兜を被り右に跳ぶ。

『姿を隠しても無駄だ!!』

言葉の通り、駄犬共は消えた俺を正確に追ってきた。

五感全ての感覚から消え去るハデスの隠れ兜でも逃げ切れないか。

「まあ、想定内の範囲だ」

小周天法で強化した肉体のスペックをフルに駆使し、先頭の一匹をトライデントで串刺しに。

一旦トライデントを手放し次いで迫る駄犬に虎爪掌を叩き込んで頭を潰す。

そのまま理を八卦掌に切り替え走圏を用いて回り込み3匹目の胴を打ち4匹目の背骨を砕く。

そうして5匹目が涎を撒き散らしながら牙を剥いて噛みつくこうとするが、走圏から十二形拳『蛇』の歩法に変え真横に移動し喉笛を握り潰す。

『いくら殺そうと無駄だ!!』

『魔獣創造』で生み出せる獣は無限だぞ!!』

そう言う間にも新たな駄犬が生み出されていく。

まあ、厄介つちやあ厄介だが、この程度なら対処経験済み可能な範囲だ。

トライデントを回収し、3体を刺殺。

数が増え手数が足りなくなってきたからトライデントから多節棍に持ち替え『滅びの魔力』を発動した三節状態で一回転しながら振り回す。

『おのれ生意気な…!』

俺の動きは見えずとも消滅していく駄犬からこちらの居場所を把握したストラーダがパチモンを振りかぶる。

するとパチモンから光力が柱のように伸び、そこそこ見栄えのする光景を発した。

『これならば避けようもあるまい!!』

そう言ってストラーダは駄犬を容赦なく巻き込みながら俺が居た場所を横薙ぎに

払った。

「まあ、常套手段だな」

駄犬共が目印になるとはいえ、見えない相手を範囲攻撃で狙うのは当然だ。

経身功で上に避け、少々賭けだが圏境を用いてから剣線が抜けた場所に着地する。

さて、効果があると楽なんだが：

「無くは無いつてどこか」

新たに呼び出された駄犬共は、さつきまでと違いまっしぐらに突っ込んで来ずに俺に気付くのある程度の接近を必要とするようになった。

「とはいえどうするか？」

最初のを荒方始末し、更なる追加分の索敵範囲から一旦退避しどう攻めるか考える。

駄犬の様子で向こうも潮目の変化に気付いたらしく、無闇矢鱈に駄犬を散解させず周りに配して警戒網を敷いていた。

ここから一番簡単なのは狙撃する事だが、白音の戦いから鑑みるに禁呪弾程度の火力は無いと貫通は期待できないだろう。

とはいえ禁呪弾も残り少ない。

試しで使う訳にもいかない。

となればだ、

「いつも通り真正面から不意打ちだな」

棍から再びトライデントに持ち替え兜を脱ぐ。

「飽きてきたからケリ着けようや」

挑発する俺の声にストラーダは面白いように反応した。

『態々有利を捨てるとは血迷ったか!!』

その増長のツケは高く付くぞ!!』

そう叫んで駄犬共をけしかけるストラーダ。

手札を見せないよう迫りくる駄犬を六合大槍で薙ぎ払い、懐まで入り込んだ奴は八極拳で処理する。

小周天法でスタミナも底上げされているから疲れはしないが、流石に百を超える数の暴力の前に徐々に余裕が無くなってくる。

さて、面倒だしいい加減突っ込んできてくれないもんかね？

と、僅かに視線を切った隙にストラーダの姿が無くなった。

『悔い改めろ!!』

威勢よく槍の間合いの内側に入り込んでドウリンダナを振り下ろすストラーダ。

死角を突いたなら斬り殺してから宣え阿呆。

どう頑張っても間に合わない状態だが、しかしそれを間に合わせてこそ一流の武人。

何よりこの状況は狙い通りなので焦りはない。

「揺らせ、トライデント」

トライデントを盾に斬撃を受け流し、流しきれない勢いは石突を地面に突き立てることで相殺する。

そうして石突が埋まった瞬間、トライデントの『権能』が発動した。

直後、地面が跳ね上がった。

『何い!?!』

中々知られていないが、ポセイDONは海神であると同時に地震を管理する役割も担っている。

そしてポセイDONのトライデントは地面に打ち込むことで地震を引き起こすポセイDONの『権能』を僅かばかりだが借り受ける事が出来る。

ただし、この僅かは古代ギリシャ基準でだが。

『地震だど!?!』

グワンと波打ったと錯覚するほどの縦揺れにストラダーは狼狽えバランスを崩し多々良踏む。

体感マグニチュードは6から7前後で時間は2秒程。

アジアつつうか日本で暮らしていれば地震なんてそれ程珍しいモンでもないが、ヨー

ロッパ等の内陸部では地震なんて数年に一回あるかどうか。

それ故にストラダーは慣れない地震、それも大災害クラスの振動に平衡感覚を完全に崩した。

しかし敵もさるもの。

生まれた隙は数秒程度ですぐに立て直す。

だがそれで十分。

既に抜いていたニューナンブをストラダーに向けて引き金を絞る。

ばあん

軽い破裂音が鳴り響き、悪魔の骨を弾頭に仕込んだ禁呪弾がストラダーに牙を剥く。

『ぬおおおおお!!?!!』

しかしストラダーも墮天使幹部を人の身で追い詰めたと言われる男。

達人でも回避不可能だろうタイミングで放った禁呪弾を躲してのけてみせた。

まあ、そうでなければ困るんだが。

七節状態の棍を握り躲したストラダーに向けて突きを放つ。

ストラダーはドウリンダナとパチモンの二本で突きを受け止める。

『正直今のは焦ったぞ!!』

あの様な隠し玉があつた事は褒めてやる。

だが、貴様の様な神を敬わぬ者に儂は負けぬ!!」

そう叫びながら連続して放つ棍の鞭打を捌いていく。

幾度も剣戟を繰り返し、そして時が満ちた。

『なっ…!?!』

ドウリンダナを振り下ろしたストラーダが、ほんの僅かにだがドウリンダナに引つ張られた。

何が起こったのか、それは後だ。

七節棍をドウリンダナに絡み付け、更に走圈を用いて一気にバランスを崩させ追撃の蹴りを放つ。

当然ストラーダはドウリンダナを手放し、追撃を避けるためローリングで俺との距離を離れた。

『…何をした?』

パチモン一振りを構えながら唸るようにほざくストラーダ。

だが俺が答えるまでもなく柄頭を失ったドウリンダナを見て答えに辿り着いた。

『デュランダルの柄を…それでか』

あの時ストラーダは確かに禁呪弾を避けた。

とはいえ無傷では済まなかった。

弾はデュランダルの柄尻を砕き、そのためドウリンダナの剣のバランスが変わつていたのだ。

極まつた達人の領域では得物のバランスが僅かに変わるだけで勝敗の天秤が傾く事は少なくない。

漸く手元に來たドウリンダナの刀身を撫で、内心でヘクトール將軍に報告する。

『しかし不壞の根源たる聖遺物を失つたデュランダルなど鈍らと同じ。』

新たなるデュランダルの糧として叩き砕いてやるわ!!』

「…あ？」

何つったテメエ？

不愉快極まりない事をほざくストラダーに、流石にイラツとした俺は棍を懐にドウリンダナを握る。

「將軍から許可は貰つてる。

力を貸せドウリンダナ」

俺の言葉に反応したドウリンダナがその柄を自ら伸ばし槍となる。

『なん…』

絶句する爺を無視しバランスを確認してから背中に括つておいた革のラウンドバツクラを左腕に括り付け、六合大槍ではなくスパルタ式の槍術フランクスの構えを取

る。

最も、装備内容は本家スパルタ式の重歩兵ではなくイピクラテス式の軽歩兵仕様だが、まあレオニダス一世には勘弁してもらおう。

『まさかデュランダルにその様な仕掛けがあったとは。

だが、そうであろうと私の有利は変わらん!!』

またぞろぞろと駄犬を呼び出しパチモンを構えるストラータ。

しっかしだ。

「幾ら神様に盲してるつつつても、流石に耄碌し過ぎだろ」

呆れてつい漏らしてしまった。

『貴様、この状況でまだ嘲るか』

そんな様がいつそ愉快に思え、笑いながら俺は言う。

「ドウリンダナのこの機能が封印されたのはヘクトール將軍以降どんな使い手もこの伸縮自在の柄を扱いきれなかったからだ。

だから、聖四文字は聖遺物なんてゴミクスで無理矢理封印したんだよ」

お陰様で見つけるまでに散々つばら時間を掛けさせられたが、代わりにその時間でヘクトール將軍の薫陶を完全にものにすることが出来た。

後は、俺が何処までドウリンダナを使い熟せるかだ。

『主だけでも万死に値するというのに、主に列することを認められた聖者たちをも貶めるとは、貴様は必ずジユデツカの奥底に沈めてくれようぞ!!』

脳味噌の血管が切れそうな勢いでキレながら駄犬共と一緒に斬りかかるストラダーを、俺は新たに装備した盾とドウリンダナで迎え撃った。

## 番外編

### アナザールート【グランギニョル】前

「気に入らねえ…」

さつき響いた振動に俺は開いていた携帯をしまい万感の思いを込めて吐き捨てた。

ここ暫くの間に起きた自分らしからぬ振る舞いに漸く合点がいったからだ。

始まりはおそらく、あの日、兵藤の屑を見捨てた頃だろう。

隣に居たのが墮天使だと気付いていたが、気が乗らなかつたのと面倒臭いので無視した翌日、野郎は悪魔に転生していやがった。

何もかもがおかしくなったのはそこからだ。

はぐれ悪魔狩りで偶々グレモリーとブッキングした俺は、興が乗ったままに奴等を適当に痛め付けてやった。

そして翌日、今日が最後と登校したら奴等に包囲されるも、自分の所属を明かし今日までに駒王町で狩ったはぐれ悪魔の数と被害者の総数を盾に詰問してやれば、グレモリーは己の非を認め俺はあっさりと解放された。

性根を入れ換えて土地の管理を徹底するとほざいたグレモリーの心胆を確かめるため、数日狩りを控えていたらグレモリーに新たな眷族が増えていたが経緯を聞き放置することにした。

そうして今は白音の懇願に応え仙道の師事をやっている。

まったく、どれもこれもあり得ねえ。

今までなら墮天使は見つけた時点で最優先で殺しに掛かっていたし、ブッキングしたならその時点で誰かしらを殺して手駒を削っていた筈なのにただ適当に痛め付けるだけで終わらせた。

そうなったなら翌日の登校なんてする筈もねえし、詰問にしたってやるならもつと徹底的にやっていた筈。

それに、白音の師事もそうだ。

何の対価も無しに仙道を教えるとはざく人を舐め腐ったら悪魔なんざ、指導に託つけてレイプとリンチを繰り返して路地裏に転がる肉塊にしてやっていただろうに、何をトチ狂ったか手取り足取り懇切丁寧に太極を通して基礎から教え込んでいる。

そうしてらしくないことを繰り返していた事に漸く気づいた。

「どうしたんですか？」

川の中ほどで氣の体感を高めていた白音が俺にそう訊ねる。

無視してもいいが……いや、この流れはもうどうにもならねえんだし、やるだけやっておこうか。

「別に。グランギニョル茶番劇に巻き込まれたのがうんざりしてただけだ」

「ぐらん、ぎこによるっ」

首を傾げる白音に俺は吐き捨てる。

「白音、世の中には神様さえ巻き込む無駄に大層で、それでいてあんまりにも杜撰で御都合主義ばつか蔓延る茶番劇つつももんが度々起きるもんなんだよ」

例えば、同じ女の腹から産まれたそれぞれ違う神の血を引く六人の兄弟を中心に起きた、法と自由の天秤を掲げた悪なき争いの物語。

例えば、大神が画策する人類淘汰の大戦争の引き金を引いた王子による英雄殺しの物語。

例えば、神の啓示を受けたただの村娘が魔女として火炙りにされる悲劇の物語。

例えば、隠された王の後継者が選定の剣を抜いて国を統一し滅びていった騎士の物語。

例えば、兄殺しの王子が神剣を手に孤独な遠征を成し遂げる英雄の物語。

「あるんだよ。」

どんなに有り得ないことも起きて、端から見たらふざけるなど叫びたくなる御都合主

義に守られて大成する『茶番劇』<sup>グランギニョル</sup>つてのがな」

「それが、起きていると?」

「多分な」

そうであるなら、おそらくこの『茶番劇』の主役は兵藤なのだろう。

「白音。永く生きたいなら兵藤の糞野郎には反発すんなよ。」

そうすりゃ、ちよいとはいいい思いをするだろうからさ」

そう言うのと白音はよくわかりませんと言った。

「まあ、その時になれば分かるだろうよ」

これが何かを変える一石になるかもしれないし、ならないかもしれない。

だが、さつき見た携帯の番号から日本神話に纏わる一切が消えていた事から、遠からず俺も退場させられるのだろうと確信していた。

今出来るのは、せめてあのパリスさえもが聖人に見える兵藤<sup>哥</sup>が、僅かでも苦痛に喘ぐことを願うことだけだった。

~~~~~

それは唐突な別れでした。

「があっ!!」

コカビエルとの決戦の最中、私を狙って放たれた光の槍を舞沢さんが底い胸に受けました。

「舞沢さん!!」

崩れ落ちる身体を支えるも、治療する間もなく舞沢さんの氣はどんどん小さくなつていきます。

「ちっ、此処までか」

「喋らないでください!」

消えていく舞沢さんの温もりに恐怖のままに叫んでも舞沢さんは聞く耳を持たず私に言いました。

「白音、俺のことなんかさっさと忘れちまえよ」

「嫌です!!」

「どうして、どうしてそんなこと言うんですか!？」

「チツ、……まあ、いい……」。

「次は……上手く……やら、……ねえ……と……」

「そう言いかけ、舞沢さんの命は消えてしまいました。」

「舞沢……さん……?」

嘘、嘘ですよ？

だって、舞沢さんは、私達の誰よりも強かったのに、そんな、どうして？

「危ない!!」

突然視界がブレ、私が居た場所を、舞沢さんの身体を爆発が掻き消してしまいました。

「チツ、足手纏いを消してやろうというのに」

「テメエ!!」

よくも小猫ちゃんを!!」

周りの叫び声が酷く遠くに聞こえていますが、だけど私はそんなことよりもコカビエルの攻撃が舞沢さんの身体を塵も残さず消した事が受け入れられずにいました。

これでもう彼は悪魔になることさえ出来なくなってしまった。

それはつまり、本当に舞沢さんは何処にもいなくなってしまったのだと。

私はその事が受け入れられるようになるまでもとも時間を必要としました。

だけど、私を置いて時間は進んでいきます。

さつきまでの窮地は、あの人の死はなんだったのかと思うほど呆気なくコカビエルは追い詰められ、その後白い童の氣を持った何者かに倒されてしまいました。

その後冥界は墮天使と天使との和平を結び、その会談でテロリストが襲撃を掛けました。



持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い!!

もう嫌だ。

こんな気持ち悪い世界で生きなければならぬなんて耐えられない。

舞沢さん、私は貴方が恨めしい。

世界がこんなにも気持ち悪いだなんて気づかせた貴方が、もう何処にも居ないなんて赦せない。

だからせめて、貴方に教えて貰った仙道の教えと八極拳を完全に修める事が貴方が居た事の証なのだと自分を鼓舞して私は復習を続けます。

「小猫ちゃん?」

唐突に兵藤先輩が私に声を掛けてきました。

「……なんですか?」

正直視界に入れることも苦痛ですが、一応同僚なので八極拳の型を続けながら返事をします。

「いや、さ、最近落ち込んでるから心配でさ」

「……貴方には関係ありません」

その鼻っ柱に寸勁を叩き込みたい衝動を振り伏せそう拒絶しても兵藤先輩は私に絡んできます。

そして言いました。

「見てらんないんだよ。」

あんな奴の事なんか、さっさと忘れたほうがいい」

「……………」

抑えろ。

何を言われたって我慢するべきです。

例え…

「部長を散々馬鹿にした上に、悪魔になるぐらいなら餓鬼になったほうがマシだなんて言った揚げ句、何より部長のおっぱいの魅力を全く理解しなかった最低のお“お”!?」

あまりにも耳障りだったので貼山靠で屋上から追い出しておきます。

部長には先輩が汗の匂いを嗅いでいる姿が気持ち悪かったから追い出したと言って

おきましょう。

「軸がブレておるな。」

それでは威力が分散してしまうぞ」

「っ!?!」

構えからやり直そうとした直後に背後から耳朶へと滑り込んだ指摘に、私は振り向き様に全力で掌打を撃ち込んでいました。

「本能の底から沸き上がる手加減してはならないという警告に従って放たれた掌は、しかし相手の掌をパシンと慣らすだけで受け止められてしまいました。」

「功夫が足りんな。」

「…いや、迷いがあると見るが如何に？」

「そう口にしたのは老齡の人間……いえ、」

「仙……人……？」

膨大な氣を身に宿しているのにそれが周囲に一切のゆらぎを与えぬ様に私は思わず口にしました。

「なんの。」

「儂はただのくずれよ」

私の漏らした声に仙人は可可と笑いました。

「太極に至りながら未練と我欲のままに外れた老い耄れぞ。」

仙人など烏澁がましい。

「言うて精々が邪仙止まりよ」

彼はそう笑い、そして私を鷹のような鋭い目線で見遣りました。

「して、これも何かの縁だろう。」

折角の才が陰るのは忍びない。

その悩み、儂に話してみぬか？」

「……」

そう言われ、私は話すべきか迷いました。

突っぱねてしまうのは簡単です。

だけど、どうしてか私はこの人を信じられるような気がしていました。

だから、意を決して口を開きました。

「……信じてもらえませんかもしれませんが、私は悪魔に転生した猫？です」

「ほう」

「私は昔の事で仙術を扱うことを恐れていました。

最近になってある人から仙道を習い、拳もその人に師事しました。

ですが……その人は私を庇って死んでしまいました」

思い出すだけで辛い。

胸に秘めていた憎悪を言葉にする度、私の胸の奥で燻っていた感情が明確になってい

くのが分かりました。

「私は悔しいんです。

あの男を奉り上げるのに邪魔だから、ただそれだけの理由であの人が殺されたことが、悔しくて、憎くて、なのに我が身可愛さに何も出来ない自分が憎くて憎くて堪らな

いんです!!」

私が抱いていたのは、誰でもない自分への怒りだったんです。

「私は悪魔で居ることが恥ずかしい!!」

あんな破廉恥な男を英雄に奉り上げる悪魔の仲間で居ることが恥ずかしい!!

なのに、私は死ぬことさえ出来ない!!」

私は結局、臆病者なのだ。

初恋に殉ずることも出来ず、恐怖に震え、立ち竦んで蹲る事しか出来ない誰よりも恥知らずなのだ。

だから、そんな自分が誰よりも嫌いなんだ。

裡から溢れだす激情が涙となって溢れるのを抑えられず私は幼子みたいに泣きじゃくってしまいました。

「ならば、変えてみるか?」

そうして私の感情が少しだけ落ち着いた頃、彼はなんともなしにそう言いました。

「儂はかつて、ある弟子より太極への道を示された。

そうして太極に至り、己の裡に辿り着き答えを得た。

これも何かの縁。

お主が本当に己を変えたいと願うなら、儂が太極に至る道を示してやろう」

「……どうして？」

偶々知り合っただけの私に、どうして？」

そう尋ねると彼は莞爾と笑いました。

「道に迷う幼子に手を差しのべるは老木の愉しみよ。

それに、主は筋がよい。

儂の拳を握ろうという才在る者に、指導の一つもやれんで開祖は名乗れぬわ」

……開祖？

「え？」

「じゃ、じゃあ貴方は……」

「応とも」

彼は真つ直ぐ拳を構え、堂々と名乗りました。

「李氏八極拳開祖、李書文。」

時には『神槍』とも呼ばれた武術家よ」

その瞬間、私は巨大な歯車が狂う音を聞いた気がしました。

## アナザールート【グランギニョル】中

「小猫ちゃんが退学した!？」

放課後、部室へと向かった兵藤一誠は、そこで部長から信じられない言葉を聞かされた。

「どうしてそんな…?？」

困惑する一誠に、酷く沈んだ様子でリアスは言う。

「わからないわ。」

生徒会の方に退学届けを置いて、そのまま姿を消したみたいなの」

唐突すぎる小猫の行動にソーナも止める間もなかったそうだ。

「コカビエルの事があつてからずっと落ち込んでいたから、立ち直れるまで様子を見ていたんだけど、まさかこんなことになるなんて…」

主として間違っていたのではないかと嘔悩するリアスへ、一誠はそんなことはありま  
せんと否定する。

「部長はなにも間違つてません。」

小猫ちゃんはずっとあの野郎の事で悩んでました。

もし悪い奴がいるとしたら、小猫に好かれてたのに置いていった奴に決まっています」

自分達はなにも間違っていないと主張する一誠にリアスは僅かに顔を上げる。

「そう、そうよね」

そうして僅かに顔を綻ばせたリアスに一誠は更に言う。

「それに、小猫ちゃんは退部届けを出していかなかったんでしょう？」

だつたら小猫ちゃんは部を辞めた訳じゃない。

部長の眷属まで辞めるつもりはないっていう証拠じゃないですか」

無茶苦茶な強弁を張る一誠。

だが、それに水を差すものは居ない。

それどころか、その場に居た誰もがその言葉を支持する。

「見てなさい小猫。」

帰ってきたらたつぷりお説教して上げるんだから」

そんな、致命的に歪んだ箱庭から立ち去る白音に、李書文はよいのかと問うた。「別に儂が師事をするからと、古巣を棄てよとは思わなかったが」

体幹を全く揺らすことなくぴんと伸びた背を追いながら身一つの白音は答えた。

「あの場所にもう用はありません」

それにと胸に手を当てる。

「私の大事なものは全部『ここ』にあります」

そう嘯く白音に李はそうかと言う。

「お主にはこれから常に死線を越えてもらう。

そうさな…、早くて三月もあればお主なら太極に至れるだろう」

とんでもないことを告げる李の言葉に白音は異もなく分かりましたと言った。

原作イレギュラーに居レない存在ライの介入により、齒車は軋んで欠けた。

しかし世界はそれでも回る。

だがそれではただただ舞台が踊るだけ。

それを世界の外側から、『陰』はにちやりと嗤いながら眺めていた。

『なあんや？』

ちいつと昼寝えしとつとるうちにい、えらいおもしろうなろうとしてはりますなあ』

しかし『陰』はあかんと嘯く。

『せやけどたりひんなあ。』

もお一押しせえへえんと、舞台は揺れやしまへん』

そうして『陰』は人の形をとる。

「日の本の神さんもう相当腹あ据えかねてる見たいやしい、腑抜けた同胞もちいつと灸を据えたらんとあかんようやねえ」

くすくす　くすくす

『陰』は厭らしく嗤う。

「さて、後は名前はどうしたろ。

『玉』はあ安直やきに『葛』のほうがおもろうなるやろ」

そんなことを呟きながら『陰』は一度闇へと消える。

くすくす　くすくす　くすくす

まるで玩具箱から玩具を選ぶ童のように純粹な邪悪に満ちた笑い声は、ゆつくりと小さくなっていった。

## アナザールート【グランギニョル】中2

塔城小猫の失踪は、眷属として成長するため離れて修行していると言う形で収められ、そうして竜と悪魔の物語は辻褃を合わせながら進んでいった。

駒王学園の夏休みの際に冥界であったレーティングゲームの会合での『禍の団』の襲撃こそ無かったものの、リアス・グレモリーとソーナ・シトリーの対決は禁手化と更なる力を得た兵藤一誠の本来以上の活躍により、リアスはソーナを降して軍配を掴み勝利を納めた。

夏休みが終わり、『禍の団』と繋がりがああるディオドラ・アスタロトとのレーティングゲームでも、オーデインの不在というアクシデントこそあったが、転生天使となった紫藤イリナやデュリオ・ジェズアルド等の協力者と共にディオドラを討ち、その後現れたシャルバ・ベルゼブブも、覇龍への変異の代償を支払いながら兵藤はシャルバを討ち取ってみせた。

そうして兵藤は冥界の英雄へと奉り上げられ順調に栄華を踏み締める。

しかし、

しかしだ。

本来であれば磐石なる壇上は、邪悪に満ちた策謀により既に腐った古木へと差し替えられ、それを知らぬまま冥界の英雄は腐った足場を踏み締める。

くすくす　くすくす　くすくす

『葛』と名乗る存在は兵藤の道程を眺めながら厭らしく嗤う。

「あんじようしてはりますなあ。

せやけどお、大しておもろおない管巻きいほもう十分どす。

片目の御老神の件ものうなつてしもうたからあちいと酸っぱいかもしれへんけどお、仕込みも済んでもうたしい、そろそろいただきまひよかあ」

艶やかな金毛の尾を揺らし、『葛』はにちやりと笑みを歪めた。

「おいでやすう冥界の英雄はん。

あんさんらにはなあ、英雄らしゆう聖書はんのお礎になつてもらいますう」

「先生」

「気付いておるよ」

その日、偶然京都を訪れ偶発的に遭遇した『英雄派』の凶行を塵殺を以て解決した白

音と李は、ほぼ同時に異変を察知した。

「どうしたのじゃ？」

母を救った礼をと食い下がっていた九重は二人の変化に首を傾げる。

「異様な『氣』が『表』の方に撒かれたようだ。

放つて置けば良からぬ禍となるだろう」

李はそう言うのと然し態々関わる謂れも無いと考え、不意に白音に目を向ける。

「如何した白音？」

剣呑な空気を放つ白音に問うと、白音は振り向きもせず言った。

「先生。

どうやら此処が、私の結末の場所みたいです」

ドス黒い陰と清水のように澄んだ陰の『氣』を渦巻かせる白音に、李はそうかと頷く。

「では、儂とはここまでだな」

「お世話になりました」

師の言葉に白音は振り向いて膝を着くと、右手を包む拱手と感謝の言葉を捧げる。

全身で感謝を告げる白音に李は莞爾と笑う。

「お主ほど筋の良い弟子は久方ぶりであった。

次に見えたなら、死力を尽くしどちらかが果てるまで拳を交わそうではないか」

言外に次に会ったら殺すと言う李に白音は是非にと応じる。

「では、お達者で」

「うむ」

そうして白音はその場を去っていった。

「なあ、仙人殿」

そんなやり取りを見ていた九重は堪らず尋ねる。

「お主ら師弟なのじゃろ？」

「なの…」

まるで理解できないと言う九重に李は可成と笑う。

「仙道を修めど、儂の本質は業に魅入られそれを極めんとした修羅よ。」

故に、強き者が居れば誰であろうと死合わずにおれんのじゃ」

「それが愛弟子でもなのか？」

手塩に掛けた者さえ殺すのかという問いに応ともと嘯く。

「弟子だからこそ、儂を越えて更なる境地に至るやもしれん。」

「そう思うとな、疼くのよ」

語るに連れ、李の頬は自然と吊り上がっていく。

「此奴を殺せば儂は更なる高みに至れるかもしれない。」

そう思えば、是が非にでも殺したくて堪らなくなるのよ」

先程までの好好爺然とした彼と、同一人物とは到底考えられない狂気を纏う李書文。ごきりと指を鳴らし笑うその顔は正に鬼。

殺戮の喜悦に酔い、生死の狭間にこそ愉悦を感じる悪鬼の貌であった。

~~~~~

修学旅行で京都を訪れた兵藤は、何事もなく一日目を終え、その夜、アザゼルに連れられ京都入りしていたセラフオール・レヴァイアタンと再会していた。

「レヴァイアタン様はどうして京都にいらつしやったんですか？」

「京都の妖怪さん達と協力体制を結びに来ました☆」

そう語るセラフオール。

「日本の妖怪さん達は皆中々話を聞いてくれなかつただけど、この地の妖怪さん達を纏めている九尾の御大将から色好い御返事が来たのよ☆」

「京都の隠れ家は妖怪連中の隠れ里の中でも最大規模だ。」

「……この協力を得られるなら、他の隠れ里との話し合いも視野に入れられるだろう」  
セラフオールの話にあざゼルが注釈を重ねる。

「へえ…あれ？」

料理を食べながら話を聞いていた兵藤は、そこである疑問を覚える。

「アザゼル先生。

冥界は日本神話とはどうなってるんですか？」

兵藤のその言葉に、二人は難しい顔をした。

「何も無い」

「へ？」

「というより、奴等は徹底的に地上との関わりを避けているんだよ」

テーブルをとんとんと叩きながらアザゼルは言う。

「最後に俺が奴等の姿を見たのは3000年も前だ。

その後も俺達墮天使の侵入を妨げる代わりに奴等の聖剣を移譲されたのも、アララト

山で聖書親父の神が死ぬ前なんだよ」

まるで地上に関心を持たない彼等が分からないとアザゼルは酒を煽る。

「だがそれも過去の話だ。

京都と協力体制を敷ければその内日本神話とも協力体制を結べるだろうな」

そう締め括るとアザゼルはその場の全員にもつと騒ぐよう煽り、京都の夜は更けていくのであった。

## アナザールート【グランギニョル】後1

翌日、セラフオールはアザゼルと共に裏京都の中枢へと赴いていた。

「魔王セラフオール・レヴァイアタン殿、堕天使総督アザゼル殿。

ようこそお出でくださいました」

本来の段取りであるならアザゼルは引率を言い訳に京都観光を堪能していたのだが、取立て事件も起きなかったことに加え、七月下旬頃から各神話勢力の急激な渋りが発生していたことが気にかかり協議の席に同伴を願い出たのだ。

しかしそれも、今回で裏京都との協力体制が結べれば今後の展開は良い方向に影響を及ぼすだろうと二人は考えていた。

その影響は日本の妖怪勢力全体に伝播し延いては日本神話とも、更には日本神話とも強い繋がりがある仏教、道教とも正式な交渉の場を結べるだろうと胸算用まで考えていた。

狐の面を着けた侍女に連れられ二人が辿り着くと、そこには八坂は居らず、代わりに日本人形のような黒髪の妖狐が座していた。

「お初にお目えにかかりますう。」

本日は裏京都総大将八坂に代わりい、うちこと『葛（かずら）』がお相手しますう」  
四つ指を着いてまるでお手本のようなお辞儀をする葛と名乗る妖狐。

「よろしくね葛ちゃん☆」

そう気軽に言うセラフォルーに対し、アザゼルは背筋を這うような悪寒を感じて  
いた。

（なんだこいつの目は？）

葛はおよそ日本人の美を寄り集め形にしたような美人だが、しかしその目の奥は深淵  
でも流し込んだような漆黒が宿っていた。

「如何したんどすう？」

「っ!？」

顔を上げ不思議そうに小首を傾げる葛にアザゼルははつと咳払いを払う。

「いや、総大将はどうしたのかと気になってな」

「ああ」

得心したと葛はきゆうと笑う。

「実はあ、先日『英雄派』等と嘯くうごろつきもん共にいちいつと小突かれてもうてなあ、  
今は無理したらあかなくてえ休ましますう」

「英雄派？」

『禍の団』か!？」

知らぬところで協議を潰されかけていたことに緊張を走らせるセラフオールとアザゼル。

しかし葛はクスクスとそれを笑い飛ばした。

「そやかもしれへえんけどお、そいつらあもういてもうたりましたしい、なあんも心配あらへんでえ」

「倒した？」

裏京都単独でか？」

『英雄派』がどのような構成かは分からないが、だとすればなおのこと彼等との協力体制を取りたいと思った。

しかし葛はいんやあとやんわり否定する。

「丁度旅の仙人はんが要らしてなあ、そいつらみいんなお弟子はんとおお二人で吹っ飛ばしてしまいましたんや」

「仙人？」

「ええ。」

李書文いう仙人どすう」

その名前に二人は絶句する。

李書文。

近年にして仙人へと至った大陸屈指の拳法家であり、眷属に加えようとした貴族悪魔を幾多血祭りに上げるばかりか、その強さから神滅具使いではないかと危惧した墮天使を残らず返り討ちに、人類の盾にと恭順を迫った上級天使でも歯牙にさえ掛けられず八つ裂きにされ、かのヴァスコ・ストラードさえ「あの戦士は次元が違う」と接触を断固拒否した規格外。

そんなバランズブレイカーヤペーが日本に恭順を示したのかと戦慄するアザゼルを余所に葛はクスクスと笑う。

「なあんやえらい恐ろしゆうもんみたいにしてはりますけどお、あの方はあそないに恐がらずうとも心配しはる必要あれへんでえ？」

「いや、しかし、」

その危険性をどう伝えればと吃るアザゼルをセラフォルはまあまあと嗜める。

「アザゼルちゃんアザゼルちゃん。」

とにかく今はお仕事を先しましよ☆」

「お仕事お？」

セラフォルの言葉に葛は再び小首を傾げる。

「なんや？ 裏京都のお観光の手続きいとちやいますんかあ？」

「違うわよ☆

私達、裏京都と対『禍の団』で協力体制を結ぶために来たのよ☆」

惚けた様子の葛に交渉か素か判断しかね、セラフオールは単刀直入に用向きを切り出す。

「『禍の団』との協力体制え？」

そう言ううと葛はああとポンと手を叩く。

「それやったらもお此方は決まっとりやすう」

そう葛はにちやりと嗤う。

「京都はあ、裏も表えもあんさんらに何ひとつう手えは貸さんよ」

~~~~~

京都二日目、銀閣寺から金閣寺を回る一誠達は純粹に京都を楽しんでいた。

と、渡月橋に差し掛かった所で松田がそれに気付く。

「おお！ 可愛い子…って」

「どれどれ…マジかよ」

「…嘘」

松田の声に元浜と桐生が見たのは橋の反対側から歩いてくる白音の姿であった。

「小猫ちゃん……なのか?」

一誠が戸惑うのも無理はない。

三ヶ月前は140cmに届かない小柄な少女だったが、現在はその身長を大きく伸ばし一見ただけでも160cmは優に越えていた。

更にその身に纏うのは生成色の胴衣に黒の股下と拳法家のような身成をしていた。

顔立ちもかなり大人びており、更には特長的だった雪のような白い髪を伸びたのを後ろで纏めていたため、一誠は三ヶ月前に行方不明となった塔城小猫と目の前の白音が同一人物なのだと納得できなかつた。

「今まで何処に行つてたんだよ?」

部長や皆心配してたんだぞ」

戸惑いながらも再会に喜び近寄る一誠達だが、白音は何の感情も見せず黙り続ける。

そうして一誠が5メートル程の距離まで近付いた時、白音はポツリと溢した。

「不思議ですな」

「え?」

「さつきまであんなに昂つていたのに、いざ目の前に来てみたらなんとも思えませんでした」

まるで一誠を路傍の石ころでも見ているかのような無関心さでそうごちる白音。  
「小猫ちゃん？」

言っていることが、何よりどうしてそんな目を向けるのか分からず戸惑う一誠に対し、白音はまあ良いですと呟いた。

「どちらであつても、殺ることは変わりません」

次の瞬間、白音の身が滑るように一誠の懐へと潜り込み。

「先生なら、これで終いにするんでしょね」

橋板を踏み抜かぬよう手加減した震脚を踏んで、一誠の水月に掌打を打ち込んだ。

## アナザールート【グランギニョル】後2

二人は葛が何を言ったのか理解出来なかつた。

「まあ、そういう事ですうでえ、縁が無あつたとお引き取りゆう下さいな」

その口許に愉悅を滲ませながらそう嘯く葛に漸く理解が追い付いてきたアザゼルは、その苛立ちを隠すことなく吐き捨てるように言う。

「お前等、『禍の団』を放置する意味が分かつて言っているのか？」

正面を切つて愚弄されていると受け取り怒るアザゼルのセラフォルーが制する。

「ストツプアザゼルちゃん。」

「気持ちは同じだけど、少しだけ我慢してね☆」

「しかしだな」

いつそ力に訴えてやろうかとさえ考える程に苛立ちを抱えたアザゼルを下がらせ、セラフォルーは改めて葛に向き直る。

「どういふ事なのか教えてもらえらるわよね☆」

態度を崩さずそう発するセラフォルーに少しだけ体を見せる葛。

「なんやあ？ いきりいたつて乱暴してくるう思つたんやけどなあ？」

「これぐらいで怒ってたら外交なんて務まらないわ☆」  
でも、とセラフオールは続く。

「何にも教えてくれないと、私もちよつと過激にやっちゃうかもね☆」

内容次第で武力も用いると茶化すセラフオールに、葛はせやなと応ずる。

「まあ、別立て隠すう事でもあらしまへんしい、そこまで言うならきつちし話したる」  
そう言う葛は指を一つ立てる。

「理由は三いつ。

一つうは、今回の件は全部八坂の独断やちゆうこと。

そもそもお、裏京都に他所様に貸すよおな剛のもの人手なんてあらしません。

そないなとこに力だあなんやとお貸しなんて出来まへんて」

そう語る葛をアザゼルは否定する。

「そんなわけないだろ。

少なくとも裏京都の要の総大将は竜王クラスでも遜色は無い筈だ」

「あんさん阿呆かあ？」

総大将が竜王にい引けを取らんやちゆうたら、他にも当然おるやろおなあてそない  
訳あらへんよ。

それともお、墮天使ちゆうんは他に強おもんがないなら、裏京都がどないなあても

かまいやしいへんちゆうて、結界の要の総大将引つ立ててくう積もりなん？」

「ぐっ」

「そもそもお、裏京都は妖いの隠れ里の中では下から数ええような弱小どす。

戦働いき期待すんならあ、裏京都なあ目えくれてへんで広島の本山はんや四国の犬神はん、それが水戸の土蜘蛛はんや奥州の迷い家の天狗はんたちにあたるほおがええでえ？」

「弱小だと？」

竜王クラスの長を抱えておきながらしゃあしゃあと嘯く葛にアザゼルは疑問を発する。

「せや。

よお考えて見い？

なあして国の生き神様がおわすう所に、人間喰うてまうよおな輩の棲み家があるん？」

「それは……裏京都が京都の結界の要の一つだからだろうか？」

アザゼルが知識から導き出した答えに葛はちやうと否定する。

「答えは逆や。

折角やからあ、この裏京都ちゆう場所についてえ少し話したる」

そう前置き葛は語る。

「この裏京都が出来たんうは、今から大体千年前や。

そんな時、京都には一人の陰陽師がおったんや。

名あを清明ちゆうんやけど、知つとりはりますか？」

その質問にセラフオルーが答える。

「知ってるわよ☆

サーゼクスちやんが『悪魔の駒』の完成が間に合つてれば安部清明も眷属に加えたかつたつて悔しがつてたもん☆」

その答えをさよかと流して葛は話に戻る。

「その清明のおつかはんなあ、名あを『葛の葉』ちゆう妖狐なんよ。

ところであんさん等は坂田金時ちゆうお侍さんは知つとりますよなあ？

それともお、足柄山の金太郎の方が通りが良いでつしやるか？」

「……まあ、名前ぐらいはな」

「ならええどす。

んでや、こおの金時もなあ、おつかはんが山に住む鬼女やつたんやけどお、そのおつかはんなあも

鬼やからちゆうて殺されとるんよお」

何が愉快なのか葛はクスクスと笑いながら語る。

「んでえ、焦ったんはあ晴明や。」

例え宮仕えのお侍さんのおつかはんやろおと、妖怪はあ生かしてくれへん。

せやあたらお手前は？

言うまでもなあ関係あらへんわ。

それどころおか、狐ちゆうことでえ執拗に追われるやろうて頭抱えたぐらいやわ」

「狐だから？」

「せや。」

なんぼおか前に『玉藻の前』つちゆう九尾の大狐があえらい悪さあしおったきに、人間が京都一帯の狐皆殺しにしはったんよお」

その様を思い出したように更に笑いを深くする葛。

何故それが笑いのツボに入るのか、どうしても理解できなくて引く二人を尻目に葛の話は続く。

「せやから晴明は一計図ったんよ。」

この国におわすう狐を神仕とするう『宇迦之御魂神』のお御力を借りてえ、母親を基点とする『幽世』を京都のど真ん中に作つてもうたんやあ」

「それが、裏京都の始まりだと？」

「ここまで来れば誰でも解る答えにせやでと葛は頷く。

「その後、稀にい入り込んでくるうもんが居着うたりして規模がちいつとずつう大きゅうなつてたんやけどお、明治いの焼き畑で表え居ずらあなつたもんが一気にきおつてなあ。

「今では御覧の有り様どすう」

「そう締め括る葛。

「これまでの話から二人は裏京都は成り立ちは古くても勢力として見れば烏合の衆だとはつきりと理解は出来た。

「せやから、腕にい自信があるいうもんが全くおらへえんとは言いませんが、少なあともお貸しいするよおなアテはあらしませんなあ」

「そう言いきる言葉にセラフオールはニツコリ笑う。

「それなら仕方無いわね☆」

「でもと続く。

「私達は別に戦力だけが欲しい訳じゃないの☆

「勿論借りれるならそれに越したことは無いけど、どちらかと言うと貴方達には他の勢力とのお話の仲立ちをお願いしたいって思ってたの☆」

「他のおどすか？」

「そうよ☆

一番は日本神話ね☆

さつき言つてたウカノミタマちゃんとは、今も会つたりするのかな？」

「いんやあ。

『宇迦之御魂神』はあ信仰をちいつと利用しはるんを黙認しとるだけやあ。

あんの神はんは人に甘い御方ですうんで、自分に害いはなく晴明が死後日本神話の使い走りにいなるうて約束したから見逃しとるだけやて、裏京都とおは實際無縁も同じいや」

「そつかあ……」

残念という体を大仰に身体で表すセラフォル。

そんなやり取りに苛立ちを抑えてアザゼルは問う。

「で、二つめつてのは？」

「単純にい、あんさん等を疑おとるからどす」

「ああ？」

三大勢力が信用できないと言い切る葛に語気を荒くするアザゼル。

「せやかてなあ、うちらあも『禍の団』ちゆう連中についてえはツテを通して色々調べましたんやけどお、調べえば調べえるほど、あんさん等が疑わしゆう思えますんよ」

「どういふことかな？」

「うちらのお調べえたところによるとお、『禍の団』はあ主によおろつぱ、あふりか、アメさんの土地でやらかしとりますよなあ？」

「……ああ」

肯定しながらアザゼルはそのツテとは何かと頭を巡らせる。

しかし葛の言葉がそれを遮る。

「それっておかしゆうちやいますか？」

「何がだ？」

「てろりすと云うんは、弱小があ強おもんにいちよつかいかけるもんやろお？」

「其れの何処がおかしい？」

「だつたらなあして唐や天竺に殆どちよつかいかけてへんのや？」

「それは、」

「それに、被害に遭つてるのは殆どおがその地の土着の神さんばつかしやあ。

こんなんはてろりすと言わへんで只の弱いもん苛めや」

そう言い切る葛。

しかし其れにセラフォルは異を唱える。

「そんなこと無いわよ☆

私達三大勢力だつて被害に遭つてるわ☆

「せやな。」

「でも、それやつて地上のあんさん等に直接害の及ばんもんか、あんさん等が『英雄』  
いうて喧伝しとる赤龍帝の近くばっかやないか」

「それは…」

その言葉にセラフオールは一瞬二の句を失う。

そこに葛は更に畳み掛ける。

「でえや、なにより信用でけへんよおなつたんは、黒鳩はん。あんさんや」

「俺が?」

「せや。」

「あんさん等の中でえ『禍の団』の尻尾掴みはつたんはあ墮天使やつたんやろお?」

「……………ああ」

今更隠しだてするようなことででもないかと肯定するアザゼルに葛は問う。

「ほんでえ、当然その設立者も掴んでありますよなあ?」

「……………」

何を言いたいか察しアザゼルは苦虫を噛み潰してしまふ。

「アザゼルちゃん?」

その顔にいぶかしむセラフォールの前で葛は問う。

「そないなあお顔で今更知らんちゆう事はあれへんよなあ？」

今更隠そうものなら三大勢力の和平にさえ輝が入りかねないとアザゼルは観念して  
答えを口にする。

「『禍の団』を設立したのは『神の子を見張るもの』を離反したサタナエルという墮天使  
だ」

## アナザールート【グランギニョル】終1

打ち込まれた掌打に、一誠はまるでダンプカーに撥ねられたような錯覚と同時に視界が急激に青一色に染まった。

(…………え?)

理解も追いつかない混乱の中で更に背中にタンニーンの掌で押し潰されたような衝撃が走り視界が真っ暗に染まる。

そして、漸く痛みが追いついた。

「ぐっ、ぐげうえええ……」

鳩尾から拡がる激痛にえええき悶絶する一誠にドライグの必死の声が響く。

『しつかりしろ相棒!』

しかし一誠に応じる余裕はなく、痛みの中でえええきながら痙攣する。

一方、嵐山の山中まで一誠を殴り抜いた白音はその手応えに眉を寄せていた。

「…………やっぱり浅かった」

願わくば今の一撃で終いにしたかったのだが、思いの外威力が乗らず師である李書文のように二の打ち要らずとはいかなかった。

そして同時に、白音はかつて想い人が遺した言葉を思い返していた。

(やっぱり兵藤が『主役』なんですね)

彼は言った。

時に世界は、ただ一人を主役とした都合良い物語の舞台に成り下がるのだと。

そしてそれを白音は自らの拳を以て確信させられた。

(そして私の『役割』は……)

思考する白音は、しかしその意識を中断させられた。

「塔城貴様!!」

一誠を殴り抜いた事を漸く理解したゼノヴィアの激昂の声に白音はそちらに意識を向ける。

しかし向けるだけで白音は自分に向けられる非難の声や困惑の視線に構う必要はないと存在を切り捨てた。

「聞いているのか!!」

感情のままに胸ぐらへと手を伸ばすゼノヴィアを、白音は一步下がることとするりと回避した。

「なっ!?!」

端からはまるでゼノヴィアが自ら空振らせたかのようにさえ見えるほど自然な動き

でゼノヴィアから逃れた白音は、ポケットへと手を入れ捨てるのも厄介だったモノをアーシアに押し付ける。

「え？」

「返しておいてください」

そう言うのと白音は歩法を用いて滑るように一誠を追う。

「き、消えた!?!」

その余りの速さに消えたような錯覚から騒ぎ出す桐生達だが、アーシアは持たされた『それ』に目を釘付けにされていた。

「どうしてですか？」

解らない。

何故、自分の手の中にチェスに使う『戦車の駒』があるのかアーシアには理解できなかった。

「まさかそれは、塔城の『悪魔の駒』なのか……?」

だとしたら、『今』の彼女は『誰』なのだ？

「つ……ああ……」

白音が辿り付いたのは漸く痛みが静まり一誠が身を起こした所であった。

「こ、小猫ちゃん……っ？」

混乱の極みにある一誠に対し、白音は一言告げる。

「構えなさい」

腰を軽く沈め即座に打ちに掛かれるよう構えてそう言うも、訳が解らない一誠はそれを異とする。

「何でだよ!？」

どうしてこんなことをするんだ!?!?」

戦う理由なんか考えもしないでそう訴える一誠に、白音は端的に告げる。

「構えないのなら、そのまま死んでください」

八極拳の歩法『箭疾歩』を用いて10メートル以上の距離を詰め眼前に迫る白音。

まるで時間を削り取られたように錯覚し、瞠目する一誠の胸に白音は肘撃を突き立てた。

ドゴン!!

宛ら自動車事故の際にしか聞かないだろう凄まじい打撃音が響き、一誠の身体がくの字に折れ曲がる。

「ぎゃあっ!!」

悲鳴を上げて背後の樹へと叩き付けられる一誠。

しかし白音はギチリと歯を噛み締めた。

(まただ)

手応えは完璧だった。

だと言うのに、一誠を殺しきれなかった。

白音の武が未熟だから？ 否。

確かに武人として見れば完成には程遠く、頂点は遥か彼方だろう。

が、しかしこの三月の間、李は呼吸の間すら惜しまねば死に絶えるだろう苛烈でも足りない修羅場へと白音を叩き落とし、しかし白音は地獄がりゾートと思わせる奈落の底から這い上がって此処に至ったのだ。

その過程で白音が掴み取った武と理は、使い方を誤らなければ龍さえ食い千切ると李が太鼓判を押している。

ならば一誠が今の白音を以てしても届き得ないほど成長していたから？ 否。

確かに兵藤一誠は力に溺れず怠ることなく鍛練は続けていた。

しかし忘れるなかれ、一誠は非才にして無能。

神滅具を宿す運に見舞われ、多くを得る機会に恵まれた希運の持ち主ではあるが、しかしそれ以上に何かを持ち合わせてはいない。

敢えて明言しよう。

兵藤が白音に勝てる可能性は存在しない。

ならば何故兵藤一誠を白音は殺しきれない？

答えは一つ。

(そんなにその男が大事か茶番劇!!)  
主役

兵藤一誠を主役とした茶番劇が白音の力を削ぎ落としているからだ。

そも、この茶番劇に於いて白音の出番は存在していなかった。

ここで一誠が本来戦うべきは、白音ではなく、李書文と共に白音が打ち倒した『禍の団』の一派。

彼等の謀略を京都妖怪と共に退け、そしてその恩義を盾に三陣営は京都妖怪との共闘を約束する事が本来の筋書きであった。

しかしイレギュラーが生じた。

悪魔と関わることなく人として生を終えるはずだった李書文と、人に討たれ現世との関わることを止めた『葛』。

筋書きに囚われない二人の介入が筋書きを狂わせに狂わせ、その狂った辻褄を合わせるために茶番劇は離反した白音を一誠に倒させ、元の鞘に納めることで狂った筋書きを正そうとしているのだ。

悲しみに沈むことなく得た全てを否定する茶番劇に怒りを募らせながら、しかし白音はそれでも冷静さを失わず抗う。

「ハアアアツ!!」

崩れ落ちようとする一誠へ箭疾歩で懐に潜り込み掌打を叩き込む。

「ゴフツ!!」

競り上がる胃液を吐き出し白眼を剥く一誠に白音の攻め手は停まらない。

闘歩から肘打を、そこから開拳に繋げ更に身を捻りながら震脚を挟んで貼山靠を叩き込む。

全力ならば並の者なら初手の一撃で、例え『戦車の駒』を用いた転生悪魔でも絶命は避けられない連撃を喰らい、一誠は痛みから気絶と覚醒を強制的に繰り返させられながら背後の樹へと幾度も叩きつけられた。

「がっ……………っ……………ぐえええ……………」

崩れ落ち情けない姿でえずきながら悶える一誠。

そんな姿を前に白音は油断を持たず構え続ける。

(そろそろアーシアさん達が来る頃でしょうか?)

例え力を削がれようと、だったら死ぬまで殴り続けてやると考える自分を相手に今の一誠が生き残る目はない。

ならば都合良く助けの手が入るのだろう。

「塔城!!」

案の定、背後からデュランダルを抜いたゼノヴィアが斬り掛かってきた。

『騎士』の加速力を乗せた斬撃を、白音は冷静に刃に腕を添えることで軌跡を逸らし受け流すとその力に沿って身を投げ出し死角から伸びた『擬態の聖剣』を避ける。

「なんだと!？」

「嘘お!？」

(二人にとって) 完璧なコンビネーションで放った二の矢までを無傷で退けた白音を信じられず悲鳴を溢すイリナとゼノヴィア。

「一誠さん!!」

片手間にして痛い目を見る必要はないと一度距離を離れた隙にアジアにより一誠が治療を受けてしまう。

「まあ、こうなりますよね」

茶番劇の思惑のままに三人を見逃した己の失態を、やはりさして脅威とも感じず白音は構え直した。

~~~~~

誰かが口を開くより先にアザゼルは弁明をする。

「別に隠していた訳じゃない。」

駒王会談でこの事も話す筈だったんだが、『禍の団』の襲撃でうやむやになっちゃったんだよ」

黙っていたのはあくまで機会を失ったからであると言いつ張るアザゼル。

「それにサタナエルは既に俺が手ずから誅し終えている。」

だが、その時点で『禍の団』は創立者が消えた程度で存続を危ぶむような規模じゃなく、更に首魁のオーフィスの存在を含め三大勢力総出でも勝算は高くないほど危険な集団だった」

サタナエルはあくまで発端であり、『禍の団』は聖書とは関係なく世界の敵だとアザゼルは言う。

「だからあ、他の神話体系も手え貸しいやって言いたいんか？」

そう問う葛にアザゼルはそうだと頷く。

「せやけどなあ、うちはそうは思えへんよ」

「なんだと？」

「さつき言うたなあ。」

『禍の団』放置してエエんかあって。

うちはな、放つておいても構わへんと思うでえ？」

それほど規模の存在を、まるで大した問題とも思わない様子で葛はいう。

「あんさん等は世界の窮地だあなんやと言いますけどなあ、それかて『日本』はなあんも動いてへんのやから、『禍の団』は所詮そんなもんやつて事や」

そう嘯く葛。

しかし二人は葛が言った意味を全く理解していなかった。

「何を言つてやがる？」

現に『禍の団』はどれだけの被害をもたらしていると思つてやがるんだ！」

ついに語気を荒げたアザゼルだが、葛ははあと溜め息を吐く。

「あんさんほんまにこの国を、いや、人っちゅうもんを見てきたんかあ？」

「はあ!？」

「よお考えてみい。」

なあして日本の神さんはまあだ信仰を保つてんのや？」

「それは、」

僅かに思考を挟みアザゼルは口を開く。

「この国が大陸から離れているからだろ？」

手を出す旨味があまり無いから放置されたんだろう」

そんな無難な答えを阿呆と斬って捨てる。

「おんなじ条件の土地なあ他にいくらでもあります。

そやなあ、それだけならえげれすうの神さんやって残ったらなあおかしいやないか」

「アイルランドの隣はローマだ。

それに」

「日本やて隣いは大国の唐や。

唐がしよつちゆう乱れてるう言うたかてろおまもおんなじやろ？」

「……」

言われ否定できず黙るアザゼル。

「えげれすうと日本の違いはなんどす？」

よお考えて見い。

日本にはあんさん等が来る前から仏も来おつたしい、人やて元にい国取られた唐も攻めて来おつたし、露つちゆうその上の国やアメさん率いる世界全部敵に回して喧嘩したやないか。

なあおのになあしてこの国は神さんは生き残つたんや？」

言われてアザゼルは、そしてセラフォルもおかしいと思つた。

特異な歴史、独特の風土に隠れて気付かれないが、日本が今日まで独立を保っていることはこれまでの世界の歩みを見渡せば余りに異様なのだ。

世界からどこより離れたオーストラリアでさえ国は篡奪という篡奪の果てに神の信仰は聖書に取って変わられているのに、日本神話は未だ存続を危ぶむ心配さえない。

そもそもにして日本に旨味が少ない程度で仏教が見逃すはずがない。

そんな温い教義が聖書と世界を三分するなど不可能だからだ。

考えれば考えるほど答えに行き詰まる二人を嗤うように笑みを歪めながら葛は嘯く。

「分かってへんかあ？

なら教えたる。

答えはなあ、『日本』がこの国の神さんを護ったからや」

「はっ。」

言っている意味が解らず呆けた声を尻目に葛は言う。

「あんさん『集合的無意識』ちゆうもんは知つとりますか？

もしくうは『普遍的無意識』ちゆうたほうがええか？」

「……ユングのだよな？」

まさか日本の『普遍的無意識』が日本神話を守ったと言いたいのか？」

「せや。そのまさかや。」

このお『日本』つちゆう奴はなあ、日本の神さんをほんまに好きなんよ。

それこそお、自分にい火い着けて焼畑してまうぐらいになあ」

あまりに突拍子もない言葉に呆気に取られる二人を無視し葛は語る。

「仏さんを受け入れなあ日本の神さんが滅ぶう。」

せやから自分焼いてえ、仏は日本の神さんの別側面やて屁理屈受け入れさせるよう下地整える。

唐にい負けたら日本の神さんが滅ぶう。

せやから自分焼いてえ、公家はんから権力巻き上げて戦うもんが国を治めるよう下地整える。

あんさん等受け入れたらあ日本の神さんが滅ぶう。

せやから自分焼いてえ、あんさん等を閉め出してえ絶対染まらへん自分達だけの文化を育てるう下地を整える。

露に負けたら日本の神さんが滅ぶう。

せやから自分焼いてえ、世界のやり方を取り込んでおんなじ土俵に上がれるよう下地整える。

刃物やのおて銭を武器にせな日本の神さんが滅ぶう。

せやから勝てへん大戦を起こして自分のなんもかんも焼け野原になるまで焼かせる

よう下地整える。

『日本』はあ、神さんの為ならなんぼやって身を焼いてまうんよ。

そうまでしてでも日本の神さんを護ろう 『日本』が形振り構わへんから日本の神さんは今も信仰を保つとんのや」

そう葛は嗤った。

そうして場は沈黙が支配する。

神を人が守るなんて不可能だと否定しようにも、現実はこの国の神は生き残り続けている。

それに葛の言葉が妄言だと切り捨てるにも、どうしようもないほどにタイミング良い時代の編纂を乗り越えてきた日本の歴史は世界の大事と符号が合わさりすぎている。

仏教の浸透に合わせた大化の改新。

モンゴル帝国襲来に備えるようなタイミングで成立した鎌倉幕府。

キリスト教排他の為に行われたような鎖国政策と独自文化の発展。

ロシア帝国との戦争を前提としたような文明開化。

そして経済戦争に向けたかのような日本帝国の崩壊。

特に日本帝国の崩壊に到っては土地に刻まれた爪痕は悲惨の一言に尽きるが、しかしそれが現在の世界が核戦争に踏み切ることを思い留まらせ、ばかりか植民地であったア

ジア圏の解放と経済圏としての価値を認識させたとも言えるかもしれない。

なによりも、彼の戦争に負けておきながらこの国は本質的に喪つたものは人だけなのだ。

武力の放棄にしても自衛権は残され軍事力は完全に喪われてはおらず、国主に関しても一族朗党に害は及ばず、何より日本神話は悪魔に土地を乗っ取られた今も信仰されている。

そして牙をものがれ身を削がれておきながら、しかし凄まじい速さで次の経済戦争に乗り込んで上位へと食い込み、現在は数多の観光客により外貨を稼ぎ技術とメディアを通じて世界の視野に食い込み続けている。

「せやから、『禍の団』があほんまにあかんちゆうなら、『日本』はとおの昔に頭のおかしい奴てろりすにさせてえ、自分達を焼かせてその怖さあを共有させるうぐらいしてます。

それが無いつちゆうんは、少なあとも日本の神さんがどうこうされる心配あれへん程度やって『日本』は考えとるんや」

そう締め括ると葛はぽんと手を叩いた。

「そろそろ宜しいですかあ？」

ほんならお引き取「待てよ」：はい？」

話は終わりだとしようとした葛にアザゼルは待ったを掛ける。

「どうしたのアザゼルちゃん？」

今回の交渉は失敗したと今後の方針に着いて考え始めていたセラフオールの疑惑の  
声に答えずアザゼルは言う。

「お前達の言い分は納得した。」

だからこそ、あと一つはなんだ？」

葛は初めに三つの理由から同盟を拒絶した。

最後の話でうやむやにされていたが、それはなんだとアザゼルは蒸し返したのだ。

「なんや？」

今更言う必要ありますか？」

「退いたとはいえ俺もトップだった男だ。」

今後の『神の子を見張るもの』のためにも知っておく義務がある」

そう問うアザゼルに私も知りたいわ☆とセラフオールが便乗する。

「冥界の外交官として、今後のためにも是非聞かせて頂戴☆」

「……さよか」

せつかく今だけは見逃したろお思ったんやけどと、二人に聞こえない程度に呟くと解  
りましたと葛は顔を上げる。

「そんならお話しますすう。」

「うちらが、何がなんでもあんさん等と関わりとおない理由をなあ」

「そう言ううと葛は口許を袖で隠した。」

「正直言うとなあ、さつきまでののは半分建前なんよ」

「は？」

「あれだけ言いたい放題言っておきながらそう口にする葛に怒りすら通り越した。」

「しかし次の言葉で発言の一切を封じられる。」

「あんさん等は日本神話の逆鱗に触れてもおた。」

「せやから道連れは御免やすう」

「今、こいつはなんと言った？」

「日本神話の逆鱗だと？」

「せや」

「一体何の事だ」

「天之尾羽張」

「その名前にアザゼルは背中に氷柱を突き刺されたような悪寒が走った。」

「それって何？」

「伊弉諾ちゆう日本でいっとお大事なな神さんが持つとる剣や」

アザゼルの変容をいぶかしみ問うセラフオールに葛は語る。

「伊弉諾はんなあ、娘え等に国い任せた後、その剣だけ持つて表舞台から隠れてもうたんや」

そう自慢話の雰囲気でする葛だが、アザゼルはその笑みが邪悪を煮詰めた闇の塊のように見える。

「もしもお、もしもおや。」

その剣が他所のお神さんの所に在りましたら、日本の神さんはどないするやろうなあ？」

パキリ

まるで葛の言葉を引き金とするように何処かで齒車舞台が砕ける幻聴崩壊が響がいた。

## アナザールート【グランギニョル】終2

二つの剣線が白音へと迫る。

片やギリシャの綺羅星の如く並ぶ英雄英傑の中にて轟く勇将の手に在り、よりその後フランスの英雄の手に渡り数多くの勲功をもたらした不壊の聖劍。

片やイギリスの英雄譚に始まりその後数多の聖劍の代名詞ともなった騎士王の聖劍。使い手さえ確かなら無双を約束するだろう二振りだが、今の白音を相手にするには使い手はあまりにも力不足であつた。

高速で幾度も振るわれるデュランダルを白音は最小限の動きでいなし、躲しきれないと判断すれば刃の腹に腕を叩き付け軌道を逸らして受け流す。

その隙間を縫い『擬態の聖劍』が股下の死角から白音の急所を刺し貫こうとするも、白音はまるで見えている様に危なげなく躲してしまふ。

「今のも避けるの!?!」

驚愕するイリナ。

そもそも仙道を修め圏境という視覚に頼らぬ知覚圏を手に入れた白音に死角など存

在しない。

それに、イリナの剣の変幻自在など李書文の槍に比べたら赤子の棒遊び程の脅威にさえ及ばない。

状況は白音の有利。

しかしながら白音は白音で攻めあぐねてもいた。

(長拳無しで得物持ちを二人同時に相手するのはまだ手子摺りますね)

八極拳の最大の弱点である射程の短さ、それが二人を生かしていた。

そもそも八極拳は至近にて不利を被る槍術の難点を補うべく発達した武術である。

故に八極拳は長拳や武器技術を同時に修めねば、今の白音がそうであるように相手に態勢を整える猶予を与えてしまう。

ならば李や白音が悪いのかと言えそうですがではない。

忘れているかもしれないが白音が武を磨き始めたのは半年程前からだ。

そんな状態の白音に今日までに八極拳のみならず長拳にまで手を伸ばし極めろというのはあんまりではないか。

一応、李からは蠟螂拳と形意拳の型は習っているが、実戦に用いられる程修めてはいない。

故に最も信頼する八極拳のみで戦う事を決めたのだ。

先にゼノヴィアから仕留めようと攻め手に移ろうとした白音は、しかし氣の流れから一誠の復活を感じて内心舌打ちを打つ。

(アーシアさんが面倒過ぎる)

どれだけ追い詰めようと、とどめを刺しきれねばアーシアが回復させられるため決定打に至らない。

改めて彼女の厄介さを体験し白音は打開の為切り札を使うべきかと考えるも、しかしそれを拒否する。

(アレは先生も認めてくれたけど、だけど制御に意識を割かれ過ぎる。)

扱い切れない力なんて相手の思う壺です)

そう考えていた白音は、そのほんの僅かな戦場からの意識の乖離の間に、一誠がすぐ近くまで迫っていたことに気付かなかった。

(やられた!?)

茶番劇の掌から逃れられない事に怒りを抱く間も無く一誠は右手に宿る神器を白音へと翳し、龍のオーラを放った。

「喰らえ!!」

『洋服崩壊』かと咄嗟に身を捻るも、しかし一誠は白音の服に触れる事なくその場に留まる。

「何『乳語翻訳』!!』…はい?」

今、なんと行つたコイツは?

パイリンガルと巫山戯た台詞に耳を疑つた白音は、しかし突然の異変に見舞われる。

『会いたいよ』

「な…!?!」

以前より確実に育つた自分の胸から突如自身の声が聞こえたのだ。

「言わないって言うなら、君のおっぱいから聞かせてもらうぜ小猫ちゃん!!」

「はあっ!?!」

一誠の言葉に訳がわからないと悲鳴を上げる白音。

同じく一誠の籠手から『また俺の力をくだらない事に使われた!!』とドライブの悲嘆の声だし、白音の混乱を余所に白音の胸は文字通り胸の内を曝け出していく。

『おいて行かないで』

「っ!! 黙れ!!」

これ以上言うなと胸を抑え付けるも白音の胸は無慈悲に語る。

『ねえ、何処に居るの?』

私、貴方が教えてくれた事、全部出来るようになったんだよ?』

「止めて…やめてえ…」

聞かれたくない、誰にも明かしたくない胸の内を暴かれ戦いの最中にあつても耐えられず白音は蹲つてしまう。

『どうして？』

お願い、置いていかないで。

私を貴方の側に居させて』

「嫌あ……やだあ……」

身一つで太極に至つた時にこの気持ちを抱えていた事は白音自身自覚はしていたし、それを飲み込む事もできた。

しかしだからといって、それを無理矢理曝け出されて耐えられるかは別だ。

『舞沢さん、貴方に会いたいよ』

嘘偽りを許さない白音の願いを暴かれ白音は崩れ落ちた。

崩れ落ち、顔を覆つて嗚咽を零す白音の前に一誠達は混乱に見舞われていた。

何故なら、『乳語翻訳』によって開明した彼女の胸の内からは主であるリアスへの想いは全く存在していなかったからだ。

『乳語翻訳』により今だに吐露を続ける言葉から、確かに彼女が塔城小猫であつたことは確信できたのに、にも関わらず自分達への感情は全くといって存在しない。

兵藤一誠は、致命的な性欲さえ除けば『主人公』として一応妥協できる存在だ。

仁義を大事にする気持ちは持っているし、仲間に対しても情深く大事と考えている。しかし、同時に年若い者特有の独善的な感情の押し付けや先走った自意識からの他者への配慮の無さも人並みに持っている。

事、性欲が絡めばそれは更に酷くなり、下手をしなくても並の性犯罪者のそれよりもタチが悪かった。

そんなある意味で普通な少年は、それ故に致命的に誤ってしまった。

「舞沢って、誰だよ？」

3ヶ月前、戦いの最中に命を落とした知己の存在を、さして相手を知る機会もなかったからと記憶から忘却してしまっていた。

バキン

その眩きと同時に何処かで歯車が碎ける音がした。

同時に空気から温度が消え、一誠が『乳語翻訳』を解除した訳でもないのに白音の胸の聲が途切れる。

『相棒』

さつきまで泣いていたとは思えない程警戒心を露わにしたドライグの聲が響く。

「ドライブグ？」

『お前、龍の逆鱗に触れたようだぞ』

その言葉を証明するように先程まで蹲っていた白音が幽鬼のようにゆらりと起き上がる。

「…今、なんて言いました？」

僅かに首を傾げ表情が抜け落ちた貌を向ける白音。

「…、小猫ちゃ…」

「今、なんて言いました？」

怯えるアーシアの呼び掛けに応じず、猫のように縦に割れた瞳孔で四人を睨めつけながら再び同じ問を投げ掛ける白音。

同時に、何かが崩壊しているような得体の知れない感覚が四人を襲うも、しかし白音の問いがそれに構わせない。

「今、なんて言いましたと、聞いているんですよ!!」

直後、白音を中心に膨大な気が荒れ狂った。

くくく

「……ほう？」

同時刻、大陸行きの船を求め大阪へと赴いていた李は、突然大気中の氣が京都へと流れを変えたことに気付き、そして思い当たる原因に向け僅かに口角を吊り上げた。

「羽化するか白音よ。」

ならばこそ、望むままに存分に励め」

〃〃〃

「一体何が!？」

突然の変容に理解が追いつかない一誠達は渦巻く氣の中心で吠える白音をただ見続けていた。

「アアああああ嗚呼ああア!!」

吠える白音の顔に悲哀と赫怒と憎悪がない混ぜになった混沌が刻まれ、見る者に恐怖を刻む恐ろしい貌となっていた。

「ふぎけるな」

『ゆるさない』

頭部から隠していた耳が生え、下穿きを貫き伸びた二本の尾がゆらりと揺れる。

「ふざけるなー！」

『ゆるさないー！』

荒れ狂う氣の奔流は白音へと吸い込まれて行く。

それに伴い白音の身体にも変化が起きた。

髪の色が白から透き通った翡翠色の輝きを放つものへと変化し、その整った顔立ちと合わせて天女のような美しさを醸し出す。

此れこそが白音が羽化登仙に至った在るべき姿。

転生悪魔から仙人へと至り、『仙狸』へと進化した白音の本当の姿である。

「なんて・綺麗なの…」

翡翠色のオーラを纏う白音は基督教徒であるイリナをして美しいと褒め称えさせる。

しかし、

「ふざけるな!!」

『ゆるさない!!』

白音は怒りを、嘆きを、絶望を、それら全てを齎した『茶番劇』へと全ての感情を叩き付ける。

その怒りのままに、白音は自ら禁じていた更なる羽化登仙へと踏み込む。

そもそも白音が常に羽化を成していないのはその姿で居続ける事が非常に困難だか

らだ。

羽化を成している間、白音は平時とは比べるのも馬鹿らしいほどその力を増すが、代償に世界との繋がりをより深くし、ほぼ無制限に大気と大地から氣を吸い上げ取り込んでしまう状態になってしまう。

それは嘗て仙術の扱いにしくじり暴走した、姉の惨劇を再来させる危険な状態でもあったのだ。

故に李は白音に武を磨くよう師事した。

武を磨き、心身をさらなる高みに至らせる事が羽化を自在に扱い熟す最短の道だと自らの経験から導き出していたからだ。

白音はそれを是とし羽化を封印して自らを鍛え続けていた。

そうして是としながらも白音は知っていた。

自らの羽化登仙には更にもう一つの形が存在することを。

同時にそれが羽化とは真逆の魔境であることも理解していた。

一度成せばもう戻れない。

正しき姿を捨て自ら外道へと墮ちる者に救いは無いのだと本能で理解していた。

だが、

「舞沢さんがいない世界に」

『舞沢さんがいない世界なんか』

白音は魂から咆哮する。

「いたくなんてない!!!」

『全部壊れてしまえ!!!』

白音の叫びに応じたかのように翡翠の輝きが血のようなドス黒い紅へと染まり、更に尾が同じ色の炎を纏い地獄の業火のように揺らめかせる。

同時に髪の色も血を浴びたように赤黒く染まり全身を炎の様な黒い紋様が這い回る。

それは白音が仙人から魔性へと自ら堕ちた証。

邪仙、否、人食いの妖猫『火車』へと生まれ変わった白音の新たな姿であった。

「小猫……ちゃん……?」

美しく変身したかと思つた矢先に変わり果てた白音に戸惑い思わず一步下がる一誠。

その真横をゼノヴィアが駆ける。

「ゼノヴィア!」

「こいつは最早塔城ではない!!」

今此処で倒さねば間違いなく私達の災いとなる!!」

白音から感じる恐怖を振り払うため、ゼノヴィアはデュランダルを振りかぶる。

「ハアアアアアアアアア!!」

裂帛の気合と共にデュランダルを振り下ろした。

だが、振り下ろされたデュランダルを白音はすり抜けるように躲すと白音の手がゼノヴィアの顔を掴み、そして、

「邪魔」

まるでトマトを握り潰すように、なんの労力も見せずゼノヴィアの頭を握り潰した。

「ゼノ・ヴィア？」

さつきまで生きていた仲間があっさり殺された事が理解できず呆ける一誠。

一誠達に構う様子もなく白音は手に着いたゼノヴィアの血肉を眺め、徐ろにそれを舐め取り、そして、馳走を口にしたようにチシャ猫の様な顔で啜った。

「ウワアアアアアアア!!」

ゼノヴィアの死を、相方であったイリナが真つ先に現実を理解し狂ったような叫びを上げて『擬態の聖剣』を振るう。

「よくもよくもよくもゼノヴィアを!!」

『擬態の聖剣』を糸のように細く何重にも重ねて白の周囲を包囲する。

しかし白音はそんなイリナに構うことなく手に着いたゼノヴィアの血肉を舐り指の隙間までしゃぶる。

「やめろイリナ!!」

「切り刻まれて死ね!!」

嫌な予感から制止の声を上げる一誠の声も虚しく激情のままイリナは柄を引いた。

今の白音に『擬態の聖剣』による全方位同時斬撃を躲す術はない。

そもそも、そんな必要はない。

カキイイイーン!!

白音の身体に触れた瞬間、『擬態の聖剣』は甲高い音を起てて砕け散った。

「そんな…?!」

避ける素振り処か気づいてさえいたかも怪しい白音に『擬態の聖剣』を砕かれ絶望を過ぎらせたイリナだが、いつの間にか右手を鉤状に構えた白音の姿に浸る暇は与えられなかった。

「お腹空きました」

そんな場違いな台詞と共に右手がイリナの右胸を貫き、その心臓をもぎ獲られイリナは絶命した。

「イリナアアアアアア!!」

「いやあああああ!!」

一誠とアーシアの悲鳴を背後に白音は旨そうにイリナの心臓を食る。

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ!!」

昨日まで普通に笑い合っていた自慢の仲間が無価値に殺され食い散らかされる様に、一誠はこれが夢なんだと現実を否定しようとする。

それをドライグが引き戻す。

『正気にもどれ一誠!!』

そうでないかと全員死ぬぞ!!』

ドラゴン故に敵を生きたまま喰らう事も然して珍しいモノではないドライグは逸早く冷静さを取り戻し激を飛ばす。

「済まないドライグ」

激を受け多少持ち直した一誠は、覚悟を決め顔を上げ、そして瞠目する。

「元聖女のお肉、美味しいかな?」

視界の中に、目の前で口元を血糊で真つ赤に染めた白音がアジアへと飛びがかった。いる光景が飛び込んで来た。

「ひっ!?!」

恐怖に引き攀つた悲鳴を上げるアジア目掛け腕を振り上げる白音。

「やらせるか!!」

アジアだけでも守ってみせるとその身を盾とする一誠。

振り下ろされた五指に防御すらおぼつかず二人は吹き飛ばされた。

「キヤアアアア!？」

「があっ?!?!」

想像を絶する衝撃に二人纏めて大きく吹き飛ばされた。

一瞬で気絶と覚醒を幾度も繰り返しながら何度もバウンドを繰り返して地面を削り、ようやく静止がかなったのは300メートル以上吹き飛んでからの事だった。

「一誠さん!! 一誠さん!!」

『しっかりしてくれ相棒!!』

アーシアとドライグの必死の呼びかけに朦朧とした意識を必死に繋ぎ止める一誠。

そのまま立ち上がろうとするが、下半身が言うことを聞かず上手く行かない。

「どう…」

何度やってもうまく行かず流石におかしいと視線を下げた一誠は、その理由をようやく理解した。

「あ、ああ、ああああ…」

視界の先、そこにある筈の自分の足は、腹からまるまる引き裂かれ泣き別れになっていた。

## アナザールート【グランギニョル】終3

「はあむ」

遠くで聞こえる兵藤の悲鳴を聞きながら食べる兵藤のお肉は大変美味です。

以前なら悲鳴は耳を塞ぎたくなるほど恐ろしいもので、人の形をした物を食べるなんてとんでもないと思っていました。が、今聞いている悲鳴は大変心地よく、衝動のままに口にしたゼノヴィアの血肉はそんな忌避感が吹き飛ぶぐらい美味しいものでした。

だけど、人間は簡単に食べてはいけませんね。

人間は美味し過ぎるから、他の物を食べたくななくなってしまう。

例えるなら血は蜂蜜で肉はケーキで骨はクッキー。

天使や悪魔が混じった混ざりものでさえこれだけ美味しいんですから、純粋な人間はもつと美味しいんでしょう。

そんなご馳走は、そうそう食べてはいけません。

とはいえ今の私が以前の感性を完全に喪ったわけではありません。

もう一つの羽化を経て、おそらく私は完全な妖怪になったのでしょうか。

だから、嘗てと今の両方の認識が混ざり合っているのが今の私です。

故に妖怪の本能は人間は悲鳴が気持ちよくて美味しい食べ物と思うのと同時に、だからといってただ悲鳴を聴きたいから人を甚振るのは良くないことだとも思いますが、お腹が空いたからと何も悪いことをしていない人間を食べて良いとも思いません。

だから、さつき言ったように無闇矢鱈に食べたりはしません。  
ご馳走ばかり食べていたら太つちやいますから。

それにしても、さつき迄の私はどうしてそんなに怒っていたのでしょうか？

兵藤が舞沢さんを忘れていたからなんだというのか？

世界が茶番劇だからってどうしたというのか？

そんなこと、どうでもいいのに。

会いたいなら探しに行けばいい。

さつき迄は気付けなかったけど、舞沢さんはこの世界のどこかに必ず居ると識りました。

だから探して見つければいい。

何年でも、何十年でも、何百年掛けたって逢えるなら惜しくは無い。

見付けたら、沢山お話して、たくさん修行して、沢山エツチして、沢山舞沢さんとの子供を産んで、もう逃げられないよう魂を

お腹の中に隠してしまおう。

そうすればずっとずっと一緒ですよね舞沢さん？

そうと決まればこんな所で油を売っている暇はありません。

先生と再会したら殺し合わなきやならないので、死なないためにも修行も怠れませ  
ん。

食べてもいいお肉

兵藤を見過ごすのは勿体ないですが、考えれば考えるほど兵藤に構うのは時間の無駄遣いですね。

そうなればさつさと「グオオオオオオオオオオ!!」ん？

突然龍の氣が膨れ上がりました。

それに兵藤の悲鳴も聞こえません。

「あ、不味い」

嫌な予感に駆られ地面を蹴って跳べば、さつきまでいた場所が炎に焼かれました。

「あれは…」

丁度いい太さの木の枝に着地して炎が来た方向を見れば、そこには赤い龍らしきモノが居ました。

龍特有の美しさは皆無で、龍というよりなりそこないという感じですが、氣は龍なのであれは龍なのでしょう。

なんで急にとも思いましたが、氣の様子から兵藤が変異した姿なのだと思うので、お

そらく私と戦うためにあんなったのでしようね。

だというのに、赤い龍はなんでもか籠へと向かっていきます。

「…まあいいや」

構う理由は無いです、さっきの様子からして理性は無い様なのでこのまま放置して  
いけば無闇矢鱈に人が死んでしまうでしょう。

羽化して人が死ぬことへの関心は薄れていますが、それでも手の届く所で何の罪も無  
い人が理不尽に死ぬ事を見過ごす程私は今も非情ではありませんし、今のあれなら羽化  
した今の私の調整にはなるでしょう。

だけど、一つだけ残念に思いました。

「大きさはともかく、あんなったら美味しくなさそうですね」

油断だけはしないよう、それだけ注意して私は枝から地面に降りると龍へと一歩踏み  
込みました。

くくく

「足が!! 俺の足が!?!?」

自らの惨状を理解した一誠は狂乱した泣き喚く機械に成り下がった。





『止めておけ。今の状態で覇龍は不可能だ』

留めようとする相棒の声も一誠には聞こえない。

「無限を喰い、夢幻を憂う!!」

我、赤き龍の霸王と成りて!!」

とにかくあのバケモノを殺さなきゃ今度こそ殺されてしまう。

前は何とかなったんだから大丈夫。

俺は冥界のヒーローなんだから絶対上手く行く。

おっばいドラゴン是最強じゃなきゃいけないんだ。

「汝を紅蓮の煉獄に沈めよう!!!」

体裁も何もかなぐり捨て、周りに持ち上げられ知らずに肥大させられていたプライドを浮き彫りにしながら、ただただ死にたく無いが為だけに覇龍を行う一誠。

しかし彼は知らない。

自ら発したたつた一言が、その幻想を終わらせていた事を。

「ガッ!!? ギャアアアアアアアアアアア!!?」

龍のオーラを撒き散らしアーシアを吹き飛ばしながら変身を始めた一誠は、すぐに凄まじい絶叫を上げた。

「一誠さん!?!」



りに積もった負の感情の塊に叶うはずもない。

「イヤだ!!」

俺はおっぱいに抱かれて死にたいんだ!!」

そんないつそ哀れとさえいえる願いを吐きながら、兵藤一誠の魂は抵抗虚しく微塵に割かれ、幾多の怨霊の一部分と成って果てた。

そして、制御基盤を喪った神器は最悪の形で暴走を開始する。

「ヒィっ!?!」

赤い鱗に覆われた一誠の身体が突如肥大して鱗の生えた肉塊となり、その表面の一部が触手となってアーシアを絡めとった。

「止めてくださいー誠さん!!」

必死に呼び掛けるアーシアだが、肉塊は触手を引き寄せながら身を裂いて巨大な乱杭歯が並ぶ凶悪な顎を開いた。

「あ、ああ…」

自分がどうなるのかを察し涙を流すアーシア。

そして、食べやすいようにか上へと持ち上げられた所で、アーシア・アルジェントは生まれて初めて神を呪った。

「主よ、どうして私達に神器ごんなものを授けたのですか?」

バクン

死した神に届かぬ呪いごと肉塊はアーシアを喰らいその身を噛み砕いて咀嚼した。

ぐちやりぐちやりと骨と肉が粉碎される気持ち悪い音を響かせながら、『聖母の微笑み』を取り込んだ肉塊は醜悪に肥大しながら本能のままに咆哮する。

グオオオオオオオオオオオオオ!!

此れこそが、『茶番劇』を粉碎し三大陣營の終わりを告げる黙示録葛が描いた茶番劇の喇叭の音だった。

~~~~~

歯車が碎ける音を聴き、葛は袖で隠した口許をきゆうと歪めながら嘯く。

「もしここでえうち達があんさん等と仲良うしたら、間違いなく日本の神さんはうち達を許しいはしまへんやろなあ。

せやから、うち達京のものは表えも裏もお手えは貸しまへん」

それが最初の言葉の真意だとそう語る葛。

「つまり何か？」

日本神話は俺達と戦争を始めるって言いたいのか？」

「さしてなあ？」

日本の神さんはこうするうやろなあつて想像は出来ますけどお、実際どお動くかまでえはわかりません」

「ふざけるな!!」

立ち上がり怒鳴るアザゼル。

「俺達がどれだけ世界の均衡を保つために奔走したか、それを知らないなんて言わせねえぞ!」

「そない言われてもなあ、今のご時世妖怪は隠れ家から早々出まへんしなあ。

それに、聞いてる限りの墮天使つちゆう連中は、そっちの神さんが余所の神さんの力やら武器いやらをあつちやこつちやからかき集めえたら撒いた挙げ句う、それを持たされたあもんをいともうて回つてゐるって聞いたりましたけど、それつてうちのお聞き間違いですうん?」

「其れは…確かに昔は他に手段が無いからそうしていたが、今は違う!!  
そもそもだ。

今更俺達との戦争を起こして、一体何になると言うんだ!」

「少なあとも、日本の神さんの鬱憤は晴れますわなあ。

それにいや」

と、セラフオールーを見遣る葛。

「悪魔はんは悪魔はんで日本の神さんにい散々喧嘩売りはつてますしい、そろそろ堪忍袋も破あけるんとちやいますう？」

その言葉に意味がわからないとセラフォルは眉を潜める。

「…どういいう事かな？」

『悪魔の駒』のお事や。

知らへんとは言いませんよなあ？」

減った同胞の数を補う為とアジユカ・ベルゼブブの手によりばら撒かれた『悪魔の駒』は、冥界の人口増加とレーティングゲームという新たな市場開拓を為したが、その反面で他神話との決定的な溝を産んだのもまた事実。

「日本の神さんは人やろおと妖やろおと、手前の某いで悪魔になるうは構わへんつて考えやけどお、にしたつてちいっとばかしやり過ぎと違いますう？」

そう問う葛に、セラフォルはそれは穿ち過ぎだと反する。

「確かに残念な行違いからはぐれ悪魔になってしまいう者や、強制的な転生を強いる『悪魔の駒』の悪用が目に着くのは確かよ。

でもそれは極一部の話。

殆どの人は自分の意志で私達の同胞になって幸せに暮らしているわ。

貴女達も私達と地平を共にしてくれれば必ずそれが間違いだと分かってくれる筈よ」

そう言い切りさり気無く食い下がるセラフオルー。

「まあ、そないに言うならそうなんやろなあ。

せやけどや」

サンツ!!

葛の言葉が終わる直前、まるで鋭い刃が風を斬ったような音が響く。

「日本の神さんのお鬱憤は、そないにい悠長にしてると思いますう？」

そう言った直後、葛の身体が左右に別れた。

「なっ!？」

突然の事態に驚く二人。

左右に倒れる葛の身体の背後に、一人の偉丈夫がいつの間にか立っています。

「お前は……」

「お初にお目に掛かる。

我が名は大国主大神。

此度は日本神話の見解を告げに参った」

遅参の件、お目溢しを頂こうとそう告げた。

「一体いつの間に……」

話に集中していたとはいえ誰かが入ってくれば気づかぬ筈はない。

しかし大国主大神は忽然と姿を表し手にした直剣で背後から葛を斬り殺した。

その言葉が余りにも頓珍漢だと大国主大神は小さく鼻を鳴らす。

「葦原中國は我の守護せし地。

その中であれば何里離れようと、如何な結界が阻もうと我に辿り着けぬ場所はない」

「……」

その答えに言葉を失う。

今が神代の頃ならそうだろうと頷ける。

だがしかし、『システム』によつて定義され直された現代でそれを成せる神がどれほど居るといふのか？

否、主神クラスでさえ簡単には成せるものではない。

それを当然と口にした大国主大神に、アザゼルは背筋に冷たいモノを過ぎらせた。

と、そこに聞こえるはずの無い声が響く。

「なんやあ？」

野分はんが来るう思つとりましたあけどお、あんさんが来るうは予想外どすうオオナムチはん？」

左右に分かたれた姿で嘯く葛。

アザゼルもセラフオールもそれに驚く暇すらない。

まるで輝きを放つような美しさを形にしたような大国主大神は、能面のように感情を表さず静かに言う。

「義父上はお忙しい身だ。

このような些事にお出で頂く必要はない。

それとして、布津御霊で斬つて死なぬとは相変わらずしぶとい狐だ」

忌々しそうに葛を睨む大国主大神。

「そおでもありまへんよお？」

もう一時もせんでもこの身体あは使いもんにならなくなりませう」

「減らず口を叩かず狭間に戻れ」

取り付くしまもない態度に葛は半身の身体でにちやりと唾う。

「せやねえ。

仕込みも終わりましたしい、こつからは狭間でじいっくり愉しませて貰いますう」

そう言うと同時に葛の体が崩れ、黒い泥のようなナニカとなつて畳に染み込むように消えた。

まるで悪い夢のようなやり取りに完全に置いていかれていた二人を大国主大神は視界に収める。

「では告げる。

我々日本神話は「待ってくれ」

静止の声をアザゼルが上げるが、大国主大神は構わなかった。

サンツ！

直剣を、神剣『布津御霊』を振るいセラフオールを逆袈裟に切り裂いた。

「なっ…」

斜めに斬られ、瞠目したまま声を発する暇すら与えられずセラフオールは殺された。

そして剣線を翻しアザゼルをも斬り裂こうと袈裟掛けに振るわれたが、なんとか回避を試みた結果奇跡的に即死は免れる。

しかし、その代償は安く無かった。

「ガアアアアッ!」

即死は免れたが、肩から通り抜けた布津御霊はアザゼルの肺を始め背骨の半分までを切り裂いていた。

神経を断たれ崩れ落ちるアザゼルに、今度こそトドメを刺そうと柄を握り直す大国主大神。

「何故だ!」

なんで俺達に刃を向ける!」

大国主大神は告げた。

『我々日本神話は天使と悪魔を滅す』

寄り道は幾度もあれど、主亡き後も均衡を崩さぬため身を粉にして来た胸を張って  
言えるアザゼルは、そんな自分達がどうして罰せられるのだと叫ぶ。

その問いに大国主大神は眉間を僅かに寄せ告げた。

「貴様達大地に降る人外が世界に不要だからだ」

「なん…」

「この星全て、遍く全て神の手より離れた。

それに気付かない貴様らこそが世界を歪めていると知れ」

そう吐き捨て布津御霊を心臓に突き立てた。

「ガバツ!」

衝撃に血と悲鳴を吐くアザゼル。

「ふぎ…けるな…」

視界が暗く狭まる中、アザゼルは力無く手を振り上げながら末期の台詞を零す。

「にん…げんだけ…で…せか…いを…まわせ…る…はずが…」

「それこそが貴様等の傲りだ」

死体となったアザゼルが抱いていた人間への愛を勘違いと言い切り、大国主大神は布

津御霊を腰に提げる。

「その小狐」

一連の出来事を腰を抜かしへたり込んで眺めていた侍女のふりをしていた八雲に向け、大国主大神は告げる。

「貴様達妖は人間の影だ。」

人がいる限り貴様達影は消えようと無くなりはしない。

ゆめゆめ忘れぬ事だ」

そう言うと大国主大神は忽然と姿を消した。

「私達は、人間の影……」

それがどういう意味なのか、年若い八雲にはまだ解りかねるものであった。

## アナザールート【グランギニョル】終4

神滅具『黒刃の狗神』を宿し、運命に翻弄されながらも必死に生きてきた幾瀬鳶雄は、その日、その運命の終幕に立たされた。

「初めまして。というべきなんでしょうね」

任務を終え仲間達と別れて行動していたところ、唐突に呼ばれたような気がし抗うことなく赴いた鳶雄は、そこで一柱の神と出会った。

それはまるで温かい日差しの中で満開に咲いた花のような、冬の訪れを前に今にも風に吹かれて散ってしまいそうな儂げな花のような、真夏の日差しに負けぬよう大輪を咲かせる花のような、身を刺すような冷たい空気の中でも力強く咲く花のような、そんなどれにも当て嵌まるような花としか表せない女神だった。

女神は鳶雄に語り掛ける。

「ご足労を掛けましたね。

ですが、この度はどうしてもそなたに願わねばならない話がありました」

「いい、いえ、大丈夫です」

自分を慈しむ目を向ける神の言葉に鳶雄はやや吃りながらもそう答え、その内心では

己の裡から湧き上がる感情に戸惑っていた。

彼女を前にして最初に思ったのは、畏れ多いという畏敬とまるで行方しれずとなった母と再会できたかのような安堵であった。

勿論彼女とは初対面だ。

なのに、最初から識っているような懐かしさを、逢えたことへの無常の歎びを感じていた。

今すぐにでも抱きしめたいという想いを、しかし鳶雄は蓋をして抑えつける。

「それで、俺に何を？」

問う声に女神は嬉しそうに目を細めてからやや目を伏せると申し訳なさそうに口を開く。

「そなたの魂に宿りし神の呪縛に囚われた、在りし形を歪められた私達の父神の剣を返して頂きたいのです」

「魂に囚われた？」

そう言われすぐには思い付かなかった鳶雄だが、さして間をおかず思い当たるものに気付く。

「もしかして、クロのことですか？」

クロこと『黒刃の狗神』は戦う際に身から刃を生み出している。

それが尋常ならざる力を發揮することが常であり、名前こそ知らないが彼女の言う劍の事ではないかと思ひ至つたのだ。

飛雄の言葉に首肯を返す女神。

「ですがどうやって？」

応じるにしろ断るにしろ、魂と繋がった神器を取り出す手段は無い。

いや、あるにはあるが飛雄の知るそれは死を意味する。

「方法は三つ。」

一つは自然と剥がれるようそなたを黄泉路に送る事。

もう一つは魂との接続を力で断ち抜き取る事。

一つはそなたに人としての生を捨ててもらわねばならず、もう一つの方法もそなたの身と御霊に深い傷を残す故に抜いた後のそなたの生は約束できません」

今すぐ死ぬか、死ぬ可能性が高い方法を口にされ鳶雄は当然拒否したいと思う。

「そしてもう一つは、そなたを一時の鞘としすべての縁を捨てその生を終えるまで高天ヶ原で過ごす事です」

「高天ヶ原……」

その言葉に飛雄は言葉を無くす。

その言葉の意味を突き詰めれば、つまりだ

「俺に『神の子を見張るもの』を裏切れと？」

「そう、受け取って構いません」

「そんな…」

女神の言葉に鳶雄は否を口にしようとしたが、しかし思いに反し喉は震えるだけで言葉にはならなかった。

女神が何かしたわけではない。

魂とも違う、鳶雄の『血』ともいうべき何かが鳶雄を留めたのだ。

『血』は鳶雄の意思とは裏腹に女神への恭順を望む。

「そなたの苦難に何もしなかった私達が今更手を伸ばす事を不快と思うは当然です。

ですが、それでも私はそなたにこれ以上傷ついて欲しくはないので。

どうか、私と共に高天ヶ原に来てはくれませんか？」

自らも勝手な願いと自覚し、それでもと望む女神の言葉に抗い難い望郷の念を懐き頷きそうになる。

しかしだ。しかし、

「…出来ません」

鳶雄は全てを振り切りその願いを拒絶した。

女神が一切の悪意なく、自分を想っている事は疑うまでもない。

だけれども、だけれどもだ。

「俺は、みんなを裏切りたくはないんだ」

『神の子を見張るもの』の一員としての生活は決して平坦では無かった。

辛い事も、逃げ出したい事も、膝を折って蹲りたい事も、ふざけるなど投げ出したくなる事も沢山あつた。

それでも、仲間との日々は楽しかった。

最初は巻き込まれただけで、押し付けられた運命だったかも知れないが、それでも逃げ出さず今日まで来た。

それを投げ捨ててしまえば、決して鳶雄は自分を許せなくなる。

鳶雄の答えを聞いた女神の反応は、意外なものだった。

「…ありがとう」

断られたというのに、口から溢れたのは感謝の言葉だった。

聞き間違いかと問おうとする鳶雄より先に女神は微笑みと共に言う。

「私達が貴方達の手を離れたことは間違いじゃなかった。

貴方はもう、私達が手を差し伸べなくてもちゃんと生きていける。

それを示してくれてありがとう」

目尻に雫を湛えながら哀しそうに、だけれどそれ以上に嬉しそうに女神は言う。

その感謝の言葉に胸をかきむしりたくなる衝動に駆られるも、それをする資格は自分には無いと只管に必死に拳を握る。

「それが答えだな」

重い空気を裂いて新たな声が二人を割って入る。

ワインレッドのレディーススーツを着込んだ、まるで燦々と輝く真夏の太陽のような印象を与える女神であった。

「お前の答えは確かに聞き届けた。我らの末の人の子よ」

「大神様」

ハッと気付き慌てて傳く女神。

そして鳶雄もまた、言われるでもなく姿勢を正して平伏していた。

「面を上げろ。と言うのは些かならず酷な話だな」

鳶雄の態度に少しだけ困った様子でそう嘯く女神。

さもありません。

彼女は天照大御神。

この国の主神にして太陽の擬人化した存在。

太陽を直視するなど只の人間には、それも『日本人』ならば尚更無理な話だ。

尊顔を閲するだけで魂が否応なしに恭順してしまう。

それ故に鳶雄は本能的に平伏してしまったのだ。

「人の子、いや、幾瀬鳶雄と言ったな？」

「…はい」

名を呼ばれただけで感激に打ち震える己を縛して声を発する。

「お前の覚悟は確かに受け取った。

だが、それでもと様の剣は返してもらわねばならぬ。

故にだ、お前には私達を恨む事を赦す」

その言葉と同時に鳶雄の手綱を引き千切って『黒刃の狗神』が暴走した。

「やめろクロ!!」

鳶雄の静止も聴かず『黒刃の狗神』は全身から刃を伸ばし針鼠のようになって天照大御神へと飛び掛かる。

「宿主を護ると謳われながら主にさえ牙を向くか駄犬が!!」

轟!!

天照大御神の怒りを受け睨まれた『黒刃の狗神』が一瞬で炎に包まれる。

如何程の熱量か想像もつかない業火に焼かれ一瞬で原型を失う『黒刃の狗神』。

「ガッ、アアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

『黒刃の狗神』を焼く炎は宿主である鳶雄の魂にまで延焼し、魂を炙られる未知の痛み

に鳶雄が悲鳴をあげた。

炎は『黒刃の狗神』を一振りの剣を残して焼き尽くしすぐに消えたが、魂を燃やされた鳶雄は耐えられず意識を失い倒れる。

「大神様!？」

「狼狽えるな咲耶姫」

伏した鳶雄に声を上げた木花咲耶姫神を制し天照大御神は倒れた鳶雄を優しく抱き上げる。

そして熱に浮かされて苦しそうではあるが、意外にしつかりとした呼吸をしていることを確かめ、僅かに口許を綻ばせた。

「ああ、強い子だなお前は」

『黒刃の狗神』に組み込まれた天之尾羽張は早魃の神格である家具土を殺した故に、同じ太陽神である天照大御神も殺してしまう可能性があった。

そのため鳶雄への手心を掛けることはしてやれず、『黒刃の狗神』を焼き尽くした際に鳶雄の魂も諸共に焼き尽くす事も承知で『黒刃の狗神』を炎に焚べた。

しかし鳶雄の魂は天照大御神の炎に耐えて生き残った。

おそらく『黒刃の狗神』の中にあつた天之尾羽張の力により天照大御神の炎が効きづらくなっていたからだろう。

しかしそれでも鳶雄の魂が脆弱なままだったなら魂は燃え尽きていた。

天照大御神は鳶雄を木花咲耶姫神に預ける。

「この子を頼むぞ咲耶姫」

「畏まりました」

慈しみ鳶雄を抱く木花咲耶姫神を僅かに羨ましそうに見てから天照大御神はキツと眦を吊り上げ、そしてポケットから糸を取り出し自らの髪を角髪に結び上げ始める。

「咲耶姫。」

今一度だけ、私は自らの禁を破る」

「はい」

それは太陽神として在るべきと自らに定めた誓い。

「聖書に連なる人ならざるものを滅す。

呪うなどという遠回りはしない。

私自ら滅す」

長として決して戦場に出ないという誓いを破り、天照大御神は重ねに重ねた我慢の紐を解く。

元より天照大御神は後ろで見ているだけで我慢できるような性分ではない。

事あれば自ら戦装束に身を包み先頭に立ってしまう苛烈な神なのだ。

ワインレットのスーツはいつの間にか戦装束へと変わっており、手には背丈を超える大弓を携えていた。

本気の姿に木花咲耶姫神は述べる。

「どうぞで御意のままに。」

我等が長よ」

木花咲耶姫神の言葉を背に天照大御神は天之狭霧神を呼び冥界の天へと移動する。

「須佐之男尊」

「ハハハ」

天照大御神の呼び掛けに国之狭霧神を介して参上すると、須佐之男尊は臣下の礼を払い宙に膝を着く。

「私の名代として天界へ赴き、お前の剣を返してもらえ」

天照大御神の言に須佐之男尊は一切の問を発さず短く「御意」と応えその場を退く。

「さて、終わらせようか」

そう口にし、天照大御神は弓を構える。

「我、天照大御神はここに告げる。」

今から放ちし矢は葦原中國の、否、大地に住まう神より独り立ちを成さんと足掻く者たちの足を掴みし邪悪を穿つだろう」

宣誓と共に莫大な神気を凝縮させ一本の矢を生み出すと、天照大御神はそれを番え全霊を籠めて弓を引き絞りながらその矢を天に向ける。

そして、天照大御神は矢羽を掴む指を離した。

放たれた矢はひゆうと風を切つて真つ直ぐ天へと昇り、そのまま冥界の空を射抜くかと思われた刹那、まるで意志があるかのようにピタリと静止した。

静止した矢は僅かに迷うように揺れた後、鏃の先端を真下へと向け、そして真つ直ぐ大地へ向かうとそのまま冥界を穿った。

直後、冥界に新たな『太陽』が生まれた。

天照大御神の神気により生み出された太陽は日本人の認識を基に天体の太陽同様核融合を開始する。

そして太陽から放たれる100万度を優に超える熱風が秒速450キロで冥界を駆け抜けた。

その結果は言うまでもない。

「呆気ないものだ」

冥界は一切の例外もなく灰さえ残らず燃え尽きた。

悪魔、墮天使、龍。

それら全てが熱風に焼かれ塵と化してどこにあるかも分からない冥界の果てに追い

やられていった。

天照大御神の神気により生み出された太陽の光は悪魔が見れば目が焼け爛れ、吹き荒れた太陽風はそれが微風であったとしても触れただけで溶け落ちる猛毒であった。

それが如何なる金属をも溶かす熱を孕みながら音さえ置き去りにする速度で駆け抜けたのだ。

もし仮に、奇跡が起きて生き残りがいたとしてもどうにもなりはしないだろう。

「残るは地上に残るモノのみ」

自分の分は果たしたと天照大御神は感傷を抱く事もなく天を見上げた。

くくく

天照大御神の名を受けて天界へと赴いた須佐之男尊はゆっくりと天界を見物しながら一人最上部を目指し歩いていった。

「情けない奴らだ」

多くの天使が居る筈の天界は完全な伽藍堂と化していた。

あまりに静かすぎてつい独り言が溢れてしまう。

「天照大御神の名代として相応しいよう着替えて来たと言うのに誰も出てこないとは

な」

そうごちる須佐之男尊の髪の間から、一匹の百足が這い出てくる。

天使達は出て来ないのではない。

天照大御神の命に従い名代に足るよう根の国の支配者としての姿で天界へと赴いた須佐之男尊が無尽蔵に撒き散らす穢れに触れ、天使達は誰一人逃れることも出来ないまま消滅してしまったのだ。

そこに下級上級の区別は無く、転生天使どころかセラフすら穢れから逃れられず無へと消えた。

そうして誰も居なくなつた天界を歩きながら須佐之男尊はごちる。

「しかし参つたな。

こう無駄に広いと俺の剣が何処に有るかサツパリわからん」

誰か道案内をしてくれないものかと、須佐之男尊は困りながら天界を彷徨うのだった。

## アナザールート【グランギニョル】✂

終わりの話をしよう。

世界は終わった。

少なくとも、リアス・グレモリーにとって世界は終わったのだ。

修学旅行に出たアーシア・アルジェント、ゼノヴィアの死。

更に同地にて神滅具の暴走により不死身の異形と化した兵藤一誠が次元の狭間へと放逐された事實はリアスをこれでもかと打ちのめし絶望の縁へと叩き落とした。

それだけに留まらず、地上に出払っていたために難を逃れたアジュカ・ベルゼブブと幾ばくかの悪魔達を除いた全ての悪魔が忽然と冥界ごと消え去ったのだ。

愛情を注いだ下僕と帰るべき地を一気に失ったりリアスの喪失感は凄まじく、一時は記憶喪失にさえなってしまうほど。

しかしリアス・グレモリーの悲劇喜劇はここからが始まりであった。

さして間を置かず、図らずも最後の魔王となったアジュカが殺されたのだ。

下手人は不明。

犯人どころか如何なる手段を用いたかささえ分からぬまま、仰ぐべき魔王を全て失った

悪魔達は今度はサーゼスクの妹であるリアスを神輿に持ち上げたのだ。

たかだか18年しか生きていないリアスを主上とするのは無謀だという声も無くは無かったが、それ以上に悪魔達は、何よりリアス自身が視野狭窄に陥っており、辛うじて他の者より状況が見えていたソーナを含む現実を見据えている者たちの説得にも耳を貸すことはなく、リアスは持ち上げられるままに新たな魔王を名乗った。

そうして魔王を名乗ったリアスは、とある妖怪からの転生悪魔により冥界を消し去った真犯人を聞かされた。

その悪魔は言った。

犯人は『禍の団』の協力者である日本神話であると。

最初こそ日本神話にそれ程の事が可能なかと疑いの感情を抱いたリアスであるが、転生悪魔はこう嘯いた。

日本神話は密かに聖書の神が封印したトライヘキサを手に入れ、その力を天界と冥界の双方へと差し向けたのだと。

そうして転生悪魔はこうも嘯いた。

日本神話は悪魔に奪われた土地を取り返すために機を伺い、そうしてリアスの眷属を殺し赤龍帝を狂わせたのだと。

愛情深いグレモリーであるリアスはその言葉に激怒し、転生悪魔の言うまま日本神話

への反攻を決意した。

その転生悪魔の影に本体にはない臀部から伸びる9つの尾が揺らいでいることに気が付かないまま。

リアスは周りの反対を押し切り、尚も食い下がるものは『滅びの魔力』を奮って魔王らしく力尽くで黙らせ日本神話への宣戦布告を行った。

それこそが本当の破滅の始まりだった。

リアスは残る悪魔と共に日本各地の神社を攻撃した。

社を焼き、神体を破壊して感情の赴くまま日本神話の象徴を破壊したのだ。

それに対し、日本神話は動かなかった。

否、動く必要がなかった。

何故なら日本神話を攻撃するということは、即ち『日本』を敵に回すということ。

それは虎の尾を踏むどころか、龍の逆鱗を剥ぎ取るのも同じ蛮行。

リアスの行動に対し日本神話が動くより先に日本の貴重な文化財産を破壊された政府がなぜこんな真似をしたのか、今すぐ止めるよう話合いに動いた。

政府に対しリアスは言った。

「貴方達には関係ない。」

これは日本神話と我々悪魔との問題だ」

そして今日までの行いを仔細に渡り開示し、自分達がいかに正しく、そしてこの国を守ってきたかを洗いざらい語った。

その答えに政府は、キレた。

「ふざけるな」

「日本が悪魔の領地？」

「種の存続のために人間を悪魔にしていた？」

「逆らった者ははぐれ悪魔になって人間を殺していた？」

「ふざけるな!!」

リアスの主張は足並みが揃わないことで有名な政府を与党野党政治屋売国奴一切を異口同音にブチギレさせて釣りを出すに足るものだった。

そして政府の怒りは国民にまで波及し、合わせて赫怒の怒号を響かせた。

リアスは知らなかった。

人間は、こと『日本人』は超えてはならない一線を超えた相手に対し、悪魔よりなお悪辣極まる悪意の塊となることを。

怒りは国を走り神が動くまでもなく疾走した。

そうなって最初に犠牲者となったのは駒王町であった。

駒王町は炎に包まれた。

犯人ははぐれ悪魔により家族を殺された駒王町に住む者であった。

悪魔の支配する地を炎で禊ぐと、同じように悪魔により親族を奪われた者が結託し町ごと燃やしたのだ。

避難勧告などありはしない。

住人の誰が悪魔になっているか分からないなら全員燃やせと住民ごと焼き払われた。

その凶行に呆然とするリアス達に5大宗家を筆頭とする陰陽師に高野山や比叡山を始めとした仏教僧に加え、個人で拝み屋を営んでいたあらゆる退魔に携わる人間が一斉に襲い掛かった。

一人一人は悪魔の敵ではない。

しかし全国から悪魔を狩らんと数千人が列を成し昼となく夜となく行き着く暇さえ与えぬとどちらかが滅ぶまで終わらない徹底的な殲滅戦を仕掛けたのだ。

そこに加え政府から許可を下ろさせた完全武装の自衛隊が戦闘車両を率いて同じく用意できるだけの銃火器を持ち出した警察官と共に続く。

終わりの見えない人間との戦いに流石に疲弊を始めたリアス達に、更に予想外の敵の援軍が襲い掛かる。

それは一目で八十を超えていると見て取れる老人たちであった。

彼等の装備は猟銃や農具、車両もトラクターや軽トラなどおよそ悪魔との戦いに有効

とは思えない武器であつたが、彼等の執念と憎悪は他の誰より深いものだった。

老人達を突き動かす根源、それはリアスが発した身勝手な主張への怒りであつた。

国のためにと死んでいった兵がいた。

帰りたいと願つて叶わず散つた兵がいた。

強制的な徴兵に泣きながら戦列に並んだ兵がいた。

死にたくないと呼びながら神風隊として飛んでいった兵がいた。

もう数えるのも億劫な程の同年代の屍を置き去りにして戦地から帰還できた日本兵の生き残りが彼等であつた。

彼等は置き去りにした犠牲者たちが胸を張れる程に復興し栄えている今の日本がどれ程尊く、そして『戦わない』という道を選びそれを保ち続けてくれている事を感謝をしていた。

それを、悪魔共は破らせた。

故に赦さない。

もはやこの身はお迎えを待つだけの古びた老木。

なればこそ、今一度我が身を戦争の狂気の火に焚べて、貴様達を道連れに焼き尽くしてくれる。

現役 of 自衛官や歴戦の退魔師さえ半歩下がるような壮絶な鬼気を放ち老人達は最後

日本兵の生き残り

の一花を咲かせに駆ける。

そんな彼等の怨念はリアス達の氣勢を削ぎ落とし、7日7晩続いた戦いはリアス達に散逸しての敗走を選ばせた。

しかしそれで終わるわけが無い。

同じく怒りに燃え、しかし戦いの役には立てないと戦地に赴かなかつた若い者たちが一斉に牙を向いたのだ。

街中の監視カメラというカメラを使いリアス達に休む暇を与えぬよう追跡を行った。

そのため寝ることはおろか水を口に含む暇さえ失なつた悪魔達は一人また一人と狩り取られ捕らえられていった。

姫島朱乃も捕らえられた一人だった。

捕らえられた朱乃は姫島の本家に引き立てられ、宗主の代理に戻る意志はあるかと尋ねられるも母への仕打ちを謝れと批難と罵倒を返した。

裏切り者とはいえその経緯は無視出来ないという宗主の嘆願があつたために、一度だけならと慈悲を見せての返答に姫島は宗主の嘆願を排し朱乃を『利用』する事とした。

悪魔に堕ちたとはいえ朱乃の才は切り捨てるには惜しい。

故に、その胎盤だけ有ればいいと無用な四肢を切り落とされ舌を噛まぬよう引き抜かれ嚴重な封印が施された地下室に幽閉された。

そうして朱乃は昼も夜も関係なく男の胤を受け入れさせられ続けた。

暴れるための四肢は奪われ、泣き叫ぼうにも舌はなく、死ぬことも許されず男に身体を貪られる日々。

そして一年後、遂に望まぬ子を孕み産み落とす。

これで助かったと僅かに安堵した朱乃だが、しかし現実是非情だった。

「羽があるな。殺せ」

生まれた子に墮天使の翼があつたというだけで産まれた子は首の骨を折られて殺された。

望まぬとはいえ自ら産んだ子を目の前で殺され絶望から声にならない悲鳴を上げる朱乃だが、しかし絶望に浸ることさえ姫島は許さなかつた。

「胎盤を遊ばせていないで次を孕ませろ。

今度は羽が無いように」

身勝手な言い分を残し「コトリバコにでもしてしまいか」と呟きながら赤ん坊の死体を手に下がる男に怨嗟の声を放つことさえ許されず、再び幾人もの男達が朱乃を犯し始める。

時間の感覚さえなくなるほどに繰り返される凌辱、いや、家畜の種付けとしか言えない扱いに朱乃は徐々に憎しみさえ抱く気力さえ無くしていった。

朱乃はその後、狂い死ぬまでの百年間毎年子を産み続けたが、生きることが許された赤子は3人だけだったという。

逃げ場も無く助けてくれる者も無い中、悪魔は更なる敵に見舞われた。

それは来日したエクソシスト達であった。

リアスの告白には主の死と天界との同盟も含まれており、その話は全世界に広められていた。

それにより教会は大打撃を受けた。

リアスにより神の實在が証明された中で主の死という事実はその基盤を大きく揺らがせ、世界規模での混乱を引き起こしていたのだ。

同時に聖書に異端と切り捨てられ迫害を受けた末に信仰が絶えた神話に復興の兆しを見え始めたのだ。

その流れを放置すれば今度は自分達が悪と断ぜられる。

それを恐れた教会は神は死してなどおらず、リアスは私達を陥れるための嘘を吹聴したのだと日本に戦力を送り込んだのだ。

対悪魔のエキスパートであるエクソシストの参列により元より100人と残っていなかった悪魔は加速的に数を減らしていく。

その中で木場もギヤスパームもエクソシストにより殺され、遂にはソーナさえ捕えら

れ、とうとうリアスは一人の転生悪魔を残し同胞を全て奪い尽くされた。

必死に逃げ続け、プライドを捨てて下水道の片隅にまで落ち延び漸くリアスは腰を下ろすことが許された。

半月以上手入れの暇もなかったために美しかった紅い髪はくすんで痛み、透き通るようだった肌も垢と泥で饅えた異臭を放ち始めていた。

年季の入った浮浪者でもまだマシに見えるほどに落ちぶれたリアスは悲嘆する。

どうしてこうなったの？

私達を平和を望んでいたのに、貴方達人間との共存を願っていたのにどうして？

願いと裏腹に世界中から敵と見なされている事に暗闇の中で嘆きの問を吐き出すリアス。

くすくす　くすくす　くすくす

と、嘆くリアスを前にまるで堪らないと言わんばかりに転生悪魔はにやりと嗤った。

なあしてこおなったかあてえ？

そんなん決まつとりますう。

ぜえんぶあんさんが悪いんやあ。

あんさんが日本の神さんとお、事を構えよお言わなければあこおはなりまへんでし

たあ。

あんさんはあ、日本の事を舐め過ぎたんですう。

自分の神さん馬鹿にしてえ信じてるうもんが黙つとるわけありまへん。

その上、あんさんはなんもかんも喋つてもうたから火に油や。

この国の民いはなあ、3 ippu 触れたらあかんもんがありますう。

飯と土地と神さんや。

それに手え出したら、そいつをいではるまでそれこそ地いの果てまで追いかけてくるんですう。

なあして黙つてたあ？

それは決まつてますう。

まあさか洗いざらい言うなんてえ思わへんかつたからや。

あんさんがあ、あまりに阿呆やから開いた口が塞がらへんかつたんよお。

なあ、今どないな気分ですう？

土地焼かれてえ、大事な下僕みいんな殺されてえ、溝鼠みたあな無様晒して這うしかなあ気分はどないです？

なん？ ウチが唆したから悪い？

確かになあ。

あんさんがそないに無様晒しとるんが見たあて、裏で色々やつとりましたしい、そないに言えば確かにうちが悪いですなあ。

でえ？ 今からうちをいともうたりますう？

まあ、『悪魔の駒』が使える程度にまで落としたりうちならあんさんでも殺す目えぐらいはありますけどお、その後はどないしますん？

ここやて遠からず見付かるやろしい、もつかい逃げ回つてずうつと鼠くうて餓え凌ぎますかあ？

なんならあ、思ったよりい愉しませてくれた札に今からうちがいてもうても良いでえ？

…なんや今の？

もしかしてえ、今のおが『滅びの魔力』ですう？

ちいつて肌がピリイツてしましたけどお、手加減しはつたにいは手え抜き過ぎとちやいますう？

手加減いうんは、こうすんや。

あははははは!!

ええ声やなあ!!

ついでえに顔も焼けてもおたから、誰もおあんさんがリアス・グレモリーやなんて思

わへんやろなあ。

……ぷっ、なんやそれ？

そないにぶるぶる振るえて土饅頭の真似ですかあ？

はい？ 尻尾？

…ああ、あきまへんなあ。

あんまり愉しゅうなり過ぎてえ、少おし本<sup>・</sup>体<sup>・</sup>が<sup>・</sup>あ<sup>・</sup>出<sup>・</sup>ても<sup>・</sup>お<sup>・</sup>て<sup>・</sup>ま<sup>・</sup>し<sup>・</sup>た<sup>・</sup>あ<sup>・</sup>。

本体はあ本体ですう。

うちなあ、ちいつと力あが強過ぎますんでえ、地上で愉しむ<sup>・</sup>時<sup>・</sup>い<sup>・</sup>は<sup>・</sup>尻<sup>・</sup>尾<sup>・</sup>の<sup>・</sup>端<sup>・</sup>っ<sup>・</sup>こ<sup>・</sup>だ<sup>・</sup>け<sup>・</sup>を<sup>・</sup>出<sup>・</sup>す<sup>・</sup>よ<sup>・</sup>お<sup>・</sup>し<sup>・</sup>て<sup>・</sup>ま<sup>・</sup>す<sup>・</sup>ん<sup>・</sup>よ<sup>・</sup>。

本体が何処ですてえ？

『次元の狭間』ですう。

まあ、うちのこととは置いといて、一個だけ謝つときますう。

アジユカ・ベルゼブブなあ、邪魔やったからうちが殺しましたあ。

信じられへん？

ほんまにほんまですう。

それとお、最初にいあんさんに日本の神さんがトライヘキサ持つとる言いましたでしよう？

あれな、嘘なんや。

日本の神さんは、トライヘキサなんか使わへんで冥界消したんや。嘘やない。

日本の神さんが本気出したただけやつたんよ。

でえ、それ踏まえてどないしはりますう？

：つてえ、今更尻尾巻いて逃げはるんかあ？

まあ、それもええですう。

さっきのなんもかんも信じられへんつちゆう顔も良かったですしい、それ込みでえあ  
んさんには十分愉しませて貰いましたから、そのまま地べたあ這いつくばって生きて  
くう言うなら好きにしたらええ。

それがいつまでえ叶うか眺めるんもお、それはそれで愉しめそうですからねえ。

——その後、リアス・グレモリーの行方について語られることは無かった。

人知れず野垂れ死んだか、生きるために路地裏で夜鷹のように春を鬻いでいるのか、  
はたまた誰にも想像もつかない手段で再起を狙っているのか、それは誰にも分からな  
い。

少なくとも、悪魔が主役の茶番劇がこの先起きる事は無いだろう。

あつてせいぜい、想いを拗らせた妖怪と拗らせる原因となつた前世を持つ少年の  
グこランギニョルけおとしめいた物語があるぐらいだろう。

## アナザールート【グランギニョル】おまけ

幼馴染の『遠野晶』は変な奴だ。

目つきは悪いし、いつつも気怠そうな態度で不機嫌そうで、授業態度も悪くて、何を考えてるか分かんない変な奴だ。

だっていうのに、動物にはなんでか好かれてて、誰かが本気で助けを求めればどんな時でも意見ぐらいはくれるし、成績は全科目で学年上位だったりする。

何でも出来るのに何もしない。

だけど必要なら何でもやる。

勉強も、運動も、護身の陰陽術も、誰かとの関わりも、自分に必要ならなんでもやる。だけど周りからなんて思われても一切構わない。

両親の前では普通の男子高校生に見えるけど、近くで見えてきた私にはそれも義務でやっつてるだけに見える。

「晶はさ、高校卒業したらどうするの？」

通学の途中、隣を歩く晶にそう尋ねると、晶は私を見ないで答えた。

「さあな。」

なるようになるだろ」

「自分の将来なのに適当過ぎない？」

あんまりな答えに文句を口にしても晶は変わらない。

「どうにかなったって、精々人間が一人死ぬだけだ。」

悪魔じやあるまいし、神様を怒り狂わせて世界ごと滅ぼされたりなんかしねえよ」

「……」

まるで死が怖くないように皮肉げに嗤う。

またこれだ。

晶は神様が嫌いだ。

正確に言うなら、神様が嫌いなんじやなくて神様が世界に関わるのが嫌いらしい。

なんでと聞いてみても、意味の分からないことを言われた。

「デウス・エクス・マキナ都合主義みたいにな、全部致命的に手遅れになってから介入してくるか  
らだよ」

全く意味がわからない。

三十年前に悪魔が日本で暴れた時だって、日本の神様は地上での戦いを私達に全部任せてくれたのに、その言い方だとまるで私達が日本の神様に騙されてるみたいに聞こえてしまう。

そう文句を言っても晶は「好きに受け取れよ」と全く相手にしない。「ただ、そうだなあ。」

もしかしたら卒業したらそのまま香港に行くかも知んねえな」

「はい？」

いきなりとんでもない事を言い出した。

「…なんで？」

「香港の映画会社から俳優をやらないかって、スカウトの話があつたんだよ。」

去年の夏の選抜戦の動画を見たとかでな」

そう言われてなんの事なのか漸く合点がいった。

去年の夏休みに、帰宅部だった晶は空手部の顧問の先生からレギュラーが怪我をして全国大会の選抜戦に参加出来なくなったからと代わりに参加してくれと頼まれた。

最初は他の部員に出させると晶は断ったけど、怪我をした先輩の代わりになれる部員がいらないからと土下座までする先生の説得に、面倒臭くなつて晶は団体戦の控えならと折れて参加した。

だけど、準決勝で事件は起きた。

準決勝でぶつかった相手校の中将が、代理で参加した晶に踵落としをしたのだ。

後で聞いた話だけど、その選手がやっていたのは空手じゃなくてテコンドーだったら

しくて、晶の強さに咄嗟に大会では禁止技だった踵落とし（テコンドーだとネリチャギというらしい）を放ってしまったそうだ。

普通なら反則負けで終わるんだけど、事件はそこから始まった。

「どうせ反則負けなんだ。

本気で遊んでやるから掛かって来いよ。

縛り無し of 全力でな」

そう言つて晶は、プロテクターを脱ぎ捨てて足を開いて両手を揃えて斜めに向ける奇妙な構えを取つたのだ。

私にはわからなかつたけど、その場にいた多くの人には晶が巨大な螳螂に見えたらしい。

その挑発に相手もプロテクターを捨てて構え、そして周りの制止も聞かず二人はぶつかった。

戦いは数分で晶の勝ちに終わったけど、見ていた私達にはそれがもつと長い戦いをしていたように感じた。

そして、隣で見ていた武道に詳しい人が漏らしたのを聞いた。

「あの選手、螳螂拳だけじゃなくて八極拳まで使いやがった」

その人に聞いてみたら、晶の最後の攻撃は震脚という武術の踏み込みからの猛虎硬爬

山という何年も修行した達人でないともたもに放てない八極拳の大技だつていう話だ。そんな事があつて結局は二人共反則負けとなり、空手部の方はなんだかんだで選抜戦を勝ち抜き全国大会まで進んだんだけど、晶のインパクトが強過ぎてあんまり話題にならなかつた。

その時の戦いが後日動画投稿サイトに上げられていて、晶に雑誌の取材が来たりと一時期大騒ぎになったのだ。

だつていうのに、晶はそんな中でも変わらなかつた。

「ダリイ、ウゼエ、メントクセエ」

この調子で誰も相手にせず、告白してきた女子も袖の一振りでも追いついてしまった。というか、晶は何処で武術を習つたのだろうか？

自慢じゃないけど、晶の事は幼稚園の頃から見てるけどマラソンしているのを見たことがあるぐらいで、誰かから武術を教わつたりしている姿は一度も見た事はない。

と、そんな事を考えていたら昨日の事を思い出した。

「そう言えば昨日の帰りにさ、公園の池で変な事をしてる人が居たんだよ」

「浮浪者の水浴びでも見たのか？」

「違うよ。」

黒髪の綺麗な女の人なんだけど、池に八角形の板を浮かべて見入つてたの」

そう言うとき晶は立ち止まって私を見た。

「見ていたって、いうその板の中心に、2つの勾玉が描いてなかったか？」

「え？」

えつと…確かにそれっぽいのが描いてあったような？」

珍しく食い付いてきた晶に面食らいながら思い出して言うとき晶は顎に手を当てて呟いた。

「そいつはおそらく後天図だな。」

八卦、大陸の占い道具だ」

こういう方面の晶の博識ぶりは本当に凄い。

授業態度は悪いけど授業の陰陽術では一番に式神を動かしてみせだし、神仏修羅全般や怪異や妖怪についてなんかは先生の方が逆に聞きに来たりする。

他にも魔術や呪術、マニアックな易卜まで知ってる。

本当に、どこで調べたんだろうっていうぐらい詳しくて正確なのだ。

「まあ、何にしろ俺には関係…」

そう言いかけて晶は固まった。

「晶、どうしたの？」

視線を追うと、そこには昨日見た女性が私達を見ていた。

「いやそんな筈は、だけどまさか?」

「晶?」

ぶつぶつ呟いている晶の様子があまりにもおかしくて何度も声をかけてみるけど、晶はそれどころじゃない様子で気付かない。

と、そこで女性がゆっくり私達の方に歩き出した。

「やつと、やつと見つけました」

そう、感極まった様子で女性は晶の事を知らない名前で呼んだ。

「ずっと探してました舞沢さん」

舞沢?

一体誰と勘違いをしてるの?

そう口を開く前に晶は警戒した様子で言葉を発した。

「なんで生きてんだ白音?」

悪魔は三十年前に絶滅したんじゃないやねえのかよ?」

え? どういう事?

混乱する私を置いて二人は話を続ける。

「絶滅した筈ですよ。」

私も姉もとつづくに妖怪に戻りましたし」

「…ああ、羽化天翔を成したのか。

って事は、今は仙狸か？」

「いえ、色々あつて火車に墮ちちやいました。

今はお盆の時だけ地獄で亡者運びのアルバイトをしています」

「そいつは何よりで。

で、態々前世の因縁持ってきた理由は？」

「まどろっこしいのは省きますと、貴方を捕まえに来ました」

「…へええ」

「白音さん？　の言葉を聞いて晶は獯猛に笑うと私に鞆を押し付けてきた。

「持ってる」

「ちよつと!？」

訳がわからないまま声を出しても晶は制服を脱ぎ捨てて私に向かって投げながら言う。

「捕まえるって言うが、何の為だ？」

「決まっています」

「そう彼女はニツコリ笑った。

「大好きな貴方が、何処にも逝かないようにです」

直後、地面が揺れた。

「ひゃっ!？」

地震かと驚いたけどすぐに違うと理解した。

何故ならさつきまで10メートルは離れていた筈の晶との距離がほぼ無くなっていて、さつきまで白音さんがいた地面が割れていたのだ。

勘違いじゃなければ、今の地震は白音さんの踏み込みの衝撃という事に…

「つて、晶!？」

地面から晶に視線を戻すと晶は片足を上げ両手をそれぞれ別の形に握った奇妙な形を、白音さんは両手を上と前に開いて腰を沈めた姿で対峙していた。

晶のシャツが所々不自然に裂けているのつて、まさか僅かに目を離れた間に戦ったつていうの？

「舞沢さんは酔拳も使えたんですね」

「そう言うお前は虎拳か」

酔拳つて、酔えば酔うほど強くなるつていう？

「晶未成年なのに飲んでるの!？」

「それも朝から!？」

びつくりしてそう言う二人はバランスを崩して私を睨むように見た。

「そんな訳ねえだろ」

「気の抜ける冗談は止めてくれませんか？」

なんでそんなに息ぴったりなのよ？

「だって、酔拳ってお酒飲まなきゃいけないんじゃないの？」

「そいつはフィクションだ。」

本来の酔拳もとい酔八仙拳は、酒に酔った仙人達の動きを基にしたとされる立派な一  
拳法だ」

「第一、酔った状態で拳を握ったとしても足腰に力が入らないから威力なんて乗りませ  
ん」

…なによ二人して。

「なんでそんなに仲が良いのよ？」

「それは勿論、私と舞沢さんが愛しあってるからです」

ムカムカして唇を尖らせた私のぼやきに、白音さんは嬉しそうに顔を赤くして身をく  
ねらせる。

気持ち悪い動きの筈なのに美人がやるとなんでも様になるって本当なんだ…。

対して晶は「んなわけねえだろ」と預けた制服を着込みながら呆れ返ってる。

「ハア…白けたからヤメだ。」

お前だつて本気で殺る気じゃねえんだろ？」

「そんなことないですよ？」

いつの間にか晶の後ろに回り込んだ白音さんが猫みたいに晶の首筋に顔を擦り付けながら言う。

「舞沢さんがまた何処かに逝つちやうぐらいなら、今すぐ八つ裂きにして全部食べちゃいます」

ゾッ!!

そう三日月のような笑顔で嗤つた白音さんに私は恐怖で総毛立った。

素人の私でも解るぐらいの殺気を至近距離で浴びてる筈の晶は、だけど変わらない。

「成程。」

確かにお前は妖怪だ」

関心と呆れの混ざつたような皮肉げな笑みを浮かべる晶。

「人知に外れた友愛と殺意が絢交ぜな傍迷惑極まりねえ愛情は、感性だけが半端に人間に寄つた悪魔にや持てねえ代物だよ」

「そんなに褒めないでくださいよ」

嫌味の筈なのに白音さん：もう呼び捨てでいいか。

白音はどうしてそんなに嬉しそうなのか全く理解出来ない。

何よりも、

「早く行かないと遅刻しちゃうわよ!!」

「おいおい」

白音を引き剥がすよう、晶の手を掴んで無理矢理その場から走り出す。

「放課後校門で待つてますね」

去り際にそう言う白音を無視して私は走る。

「どうした?」

「煩い!!」

訝しむ晶にそうとしか私は言えなかった。

だって、だって私は、ずっと隣に居たのに晶があんなに楽しそうにしているのを初めて見た事に気付かされて悔しかったなんて、どう言えいいのか全く分からないのだから。

その時の私はまだ知らなかった。

白音の乱入が、私と晶の関係を言葉にならないものにしてしまうなんて、この時の私は予想も出来なかったのだ。

## アナザールート【グランギニョル】備忘録

『狐』

オリキャラという名の作者が考えつくチートオブチートなシナリオクラッシュャー。

自称妖怪との事だが、その正体は妖怪の規格に収まらない説明不可能な化物。

狐というのも地上で好む姿が狐に酷似しているからそう呼ばれているに過ぎない。

天地開闢以前の、天之御中主神、盤古、カオス、ユミル、アプス等天地開闢の神が天地を分かつ前から意識を有しており、『無限』と『夢幻』さえ子供扱いしている。

天地開闢の後は『次元の狭間』に本体を置き、分体を地上に遣わして人間を遊び遊んでいた。

それが変わったのは今から千年前。

分体を『玉藻の前』として日本に送り込んだ時の事だった。

『狐』は時の帝に惚れたのだ。

悠久とも言える永く在り続けた存在は、初めての恋に衝動の欲するままに帝を捕り殺しその魂を取り込もうとした。

しかし当時最強の陰陽師安倍晴明に思惑を見破られ『日本』を敵に回し戦を仕掛けら

れた。

最初こそ只の蹂躪であったが、いくら倒されようと臆することなく挑み続ける人間の姿をいつしか眩しく素晴らしきと感じるようになった。

『狐』は人間の強さの果てが、人間がどこまで行けるのか見たくなった。

その後『狐』は自らを妖と名乗るようになり、神の目に余らぬ程度に自重を覚え、生物の絶望の断末魔に愉悦し、絶望の中でも折れずそこから這い上がり牙を付き立てようと立ち上がる姿を愉悦するようになった。

例えるなら外道麻婆、アマツカス、主任、這い寄る混沌を悪魔合体した白面の者という究極害悪体。

故に、『狐』に目を付けられるということは『難易度？虚淵』である。

### 『李書文』

強くし過ぎて最早作者にも手の付けられない人型災害。

元はただの武人であり、悪魔に目を付けられることなく生を終えるはずだったが、晩年に師事したとある弟子が本物の仙道を納めていたことから運命が変わる。

不老不死に興味は無かったが、さらなる境地への探究心を抑えきれず弟子より仙道を習い、僅か一年で太極へと至り羽化登仙を成して寿命から解き放たれた。

因みにその弟子は仙人になった喜悅のまま、感謝の念を込め自重無しの全力を振るい殺してやった。

羽化登仙後は鬼籍に入り全国を行脚しながら武人としての高みを目指し修行を続けた。

そしてその実力は仙人の枠さえも超え、強き者との死合に餓えた挙げ句、須弥山へと単身腕試しに殴り込みを掛け、戦闘勝仏を黄泉に叩き落とし、中壇元帥を半死半生に追い込み、多くの神仏修羅にトラウマを刻み、帝釈天に好きな武器をやるから帰れと冷や汗を流させた。

そんな存在を他の神々が放っておくはずもなく、あらゆる勢力が彼を引き込もうと手を伸ばした。

好きなワルキューレを選べと数多の美女を揃えたオーディン。

夜空にお前の星座を刻もうと持ち掛けたゼウス。

私を殺して影の国の王にならないかと戦を仕掛けた影の国の女王。

一部おかしいものはあるが、他にも多くの勢力が其々が考えつく限りの厚遇を以て李を迎え入れると持ちかけた。(ただし聖書勢力は除く)

しかし五欲から解き放たれた李はそれら全てを蹴った。

地位も名誉も女もいらぬ。

欲しいのはただ、己の武の最果てに辿り着くことのみ。

そしてそんな姿を見たとある神が李と接触した。

その名はブラフマン。

苦行の果てにあらゆる願いを叶えるリアル神龍もといヒンドウー教の最高神の一柱である。

ブラフマンは李の足跡を苦行と認定し、どんな願でも叶えてやろうと望みを問うた。

しかし李はそれを辞した。

「己の力のみで辿り着く境地。

それこそが俺の望みよ」

その答えにブラフマンは感動の余り絶頂した。

そしてブラフマンは願いを叶える代わりに彼を祝福し予言を降した。

「お前が折れぬ限りその武はどこまでも高まる。

その果ては、三界を征すると言われたカルナを超えるだろう」

その予言に李は目指す高みを知り獐猛に笑った。

そうして李は只一人でありながら一勢力と数えられる『規格外』となった。

因みに李が帝釈天から貰った神宝は、何の効果もない只ひたすら頑丈なだけの槍であつた。



## Another IF『英雄派』【で】遊ぼう(1)

墮天使コカビエルとの某で死んだはずの俺は、なんやかんやで死なずに終わらなかつた。

九死に一生を得るなんて言うが、正直あそこで死んでおけばと今は後悔している。

死んでおけば今のような聖書陣営が正しいと、赤竜帝を宿した性犯罪者が選ぶ道が正しいと進んでいく神仏修羅共の吐き気のする茶番劇を横で見ないで済んだはずなのだから。

「舞沢さん、どうしたんですか？」

屋上でドウリンダナを持ったまま転生悪魔になったゼノヴィアの暗殺手段を考えていたら、膝の上からそう白音が問い掛けてきた。

とかいうかいつの間にか膝に乗ったんだこいつは…まさか、圏境か？

俺の感知をすり抜けてだとしたら、完全に追い抜かれてるって事なんだが……。

「別に。」

晩飯の買い出し考えてただけだ」

考えるのをやめ適当に言うと、白音はあっさりとは信じて目を輝かせた。

「デザートはなんですか？」

何普通に一緒に食う前提なんだよコイツは？

まあ、保護観察処分で置き場所に困るからと白音の姉貴を借りてる部屋の一つに監禁して置いているし飯ぐらいは構わねえけどな。

「茶葉の交換時期だし、どうせだから紅茶シフォンにしてバナナソースでも添えるか？」

「じゅるり」

無表情で涎を溢す白音を視界から外しつつ空を仰ぐ。

相変わらず日本神話というか高天ヶ原は音信不通。

五大宗家のお陰で裏側はなんとか均衡を保っちゃいるが、『茶番劇』に我慢の限界を超えた北欧のロキが盤面をひっくり返そうとした辺り、遠からず人間側にも何らかの動きはあるだろう。

と、そんな事を考えたのがフラグだったのか携帯電話がブルブルと着信を告げる。

「ちよつと退け」

白音を退かして着信相手が雇い主である神道系組織の番号なのを確認し携帯に出る。

「どうした？」

『至急京都に向かって欲しい』

「あん？」

挨拶もなしに要件を告げられ首を傾げる。

京都と言えば表舞台から闇へと潜った陰陽寮の管轄の筈だが……？

「構わないが内容は？」

『安倍晴明が張った京都結界の要、『裏京都』の狐の妖怪が聖書陣営への恭順をする可能性があると報告があつた。』

真偽を確認し、場合に拠つては『代替わり』を行つてもらいたい』

『代替わり』、つまり現在の要を排し新しく結界の要を供えろという事だ。

「なんで外様の俺に？」

あちらさん  
陰陽寮は？」

京都の陰陽寮とて無能じゃない。

事妖怪相手に限れば、愛宕山の御大さえ肝を冷やしてのけられる手練は幾人も居る。

いくら『裏京都』の要が竜種に匹敵するとしても勝てない相手では無いだろうに。

『嫌疑の内容から聖書陣営に詳しい者が最適と判断された。』

陰陽寮からの許可は出ている。

回答は？」

「……」

別立て京の妖に情はない。

とはいえ奴等は宇迦之御霊の庇護の者。

そいつらが聖書陣営に与するのは……不愉快だな。

「受けよう。」

「すぐに向かう」

「そう言つて携帯を懐にねじ込む。」

「どうしたんですか？」

「仕事だ」

「一応答えるだけ答えそのまま行こうとすると、白音は裾を掴んで引き留めた。」

「何すんだよ？」

「一緒に連れてつてください」

「そう継るように見上げてくる白音を、俺は腕を振つて振り払う。」

「先方から悪魔はお断りだ」と

「そう言い捨て、そういえばと思ひポケットからマンションの鍵を取り出して投げ渡す。」

「数日掛かりになるだろうから、黒歌の世話はそちに任せた」

「そういや、なんでアレの監視を引き受けてたんだ？」

「後ろから聞こえる呼びかけを聞き流しながら、今まで当然のように引き受け気にもし

ていなかつた事実<sup>に</sup>首を傾げた。

~~~~~

そうして武器だけ携えその日の内に新幹線で京都に到着した。

「さて、さつさと済ませちまうかな」

夕刻は過ぎて夜の帳は降りきっている。

普通なら日を改めるだろうが、相手は妖。夜の民だ。

逆に昼間に顔を出すほうが礼儀知らずだろう。

多少支度は足りねえが、妖怪風情に遅れを取るはずが…

「……あるに決まってるだろうが」

今俺は何を考えていた？

妖怪を見下した？

有り得ねえ…。

確かに『裏京都』の妖の大半は、そこそ腕の立つ拌み屋が祓える程度に弱い。

だが、それを格下と見下して勝てるような人間か俺は？

否。

知識なら多少は優位に立てる。

死にながら積み重ねた戦闘経験なら神話な英雄にだって張り合える。

しかし、しかしだ。

俺はいくら盛つても一流止まり。

天使。悪魔。竜。神。英雄。

人を超えるモノを相手にどれだけ足掻こうと、精々が称賛の一つも零させるが限界。

そんな雑兵に下を見下している余裕はない。

「吞まれてやがるな」

意識を切り替え己の立場を自覚する。

『茶番劇』がよく使う手だ。

意識をそれとなく誘導し、自分の都合の良いように振り回す。

完全に抜け出す事は不可能な以上、意識の手綱を握り流されぬ様にするしかない。

「目的は嫌疑の事実確認と釘刺し。

先ずはホテルにチェックインだ。

その後で陰陽寮に『裏京都』の総大将へのナシと現在の『裏京都』の資料を回収する」

やるべきを口にして優先順位を明確にする。

そうして向かおうとした足を踵返しながら俺は頭の中でだけごちる。

（『茶番劇』が介入したという事は、『裏京都』は黒で確定か）

にしても、総大将の『五月』は何を考えて悪魔に擦り寄っている？

亜細亜大戦での損害で表に関わらなかつた五大宗家、陰陽寮も共に痛手を被り、侵入した聖書陣営に手が回らず主だった地脈は奪われたが、『裏京都』を含め要の多くは未だに日本側が握っている。

五月は『裏京都』の役割を重く捉えていた筈なんだが、だからこそ噛み合わない。

「…待てよ？」

ホテルの部屋に入った時点で俺は前提を誤っている可能性に気付く。

よくよく考えてみれば五月が総大将を撰っていたのは五百年以上前だ。

千年を優に生きる天狐の五月が、何らかの理由で代替わりを為していてもおかしくは無い。

もしそうなら、『代替わり』の際に情報のいくつかを失伝していて、その為に聖書陣営との取引をしなければならぬと勘違いしている可能性もある。

「どちらにしろ、確認が重要か」

聖書陣営からの圧力に屈しようとしているのか、はたまた勘違いから生存の道を聖書陣営に見出したのか、それ次第で取るべき手段も変わる。

そう改め直し、俺は窓から見えた京都の風景を台無しにしている『サーゼクスホテル』

を視界から外しつつ懐の携帯電話に手を伸ばした。

## Another IF 『英雄派』【で】遊ぼう(2)

「今の入口は此処か」

夜半の殆どを情報の精査に費やした翌日。

早朝の朝靄の中、俺は『一条戻り橋』の真ん中で手摺に寄り掛かり思考に没していた。「悪魔のせいで生じた結界の歪みを修整するため入口を変えたとか言ってたが、どう見てもあやかかってるだけだろ？」

視界の端に見える『清明神社』。

平安最強の『陰陽師』であり、妖狐『葛の葉狐』の血を引く『半妖』であり、日本を揺るがした三妖の一角『玉藻の前』を討伐に最も貢献した結果、天皇の計らいで死後には稲荷神と集合された『上人』であり、地質学にまで通じ当時の人間が知るはずも無かったフォッサマグナを鎮めるため『裏京都』を生み出した諸元でもある『天才』。

「残念ながら清明本人は高天原におわしておいでだ。  
助けなんぞ期待できねえよ」

そう吐き捨て、昨夜のうちに判明した誤算に内心頭を抱える。

（真逆葛の葉はおろか、五月の家系までが絶えていたのは予想外過ぎた。

## 第二次世界大戦、恨むぜ)

今の『裏京都』の総大将『八坂』は葛の葉狐とも五月とも血縁を持たない九尾狐。

第二次世界大戦のゴタゴタに紛れて流入した聖書陣営の侵攻により当時の要役だった葛の葉の血縁と予備として控えていた五月の血縁までもが死に、急遽として当時最も力のあつた八坂を総大将に据え置いたそうだ。

(とはいえ、やることは変わらねえ。

釘刺しで済むならそれで良し。

さもなくば、八坂の娘にケジメを取らせる)

まかり間違つて八坂が総大将のままに悪魔に転生しようものなら京都は、いや、日本は崩壊する。

「さて、そろそろ行きますか」

考えているだけでは何も解決しないと、寄り掛かっていた体を起こし、柏手を打つ。

「『恐み恐みも申す。』

境見届ける久延毘古神。

今一時、御身が見届けし境を抜ける事を釈し給え」

宇迦御霊神と同じ田畑の守護神であり、境界の監視者として道祖神とも同一視される事もある久延毘古神に簡易の祝詞を捧げ、一条戻り橋から身を投げる。

下に水は流れておらず、常人なら骨の一本は覚悟する高さだが、元よりその程度でどうこうという事はない。

刹那、世界の色が反転し近代化の影響を受ける京都の風景が一変した。

ぼしやりと水を跳ねさせ、硬いコンクリートとは違う湿った土の感触を靴裏に感じながら着地の衝撃を関節のクッションで受け流し逃し切ると、視界に広がるのは氾濫に備えコンクリートではなく石を積んだ川縁と、切り出した石を土台に太い木を組んで掛けられた嘗ての『一条戻り橋』がそこにあった。

「変わらねえな」

戦に災害に区画整理にと様々な理由から失われたかつての光景そのままの姿に、つい口から懐古が溢れてしまう。

「何者だ!？」

記録をほじくり返し懐かしんでいると、橋から粗末な槍を手にした人型の妖怪が俺に怒鳴りつけてきた。

頭の耳の形から狼の妖怪らしいが：いや、気にする必要はないな。

『陰陽寮』からの要請で来た拝み屋だ。

総大将八坂との面会を求める」

一々気にする必要もないと、威嚇に取り合わず預かった呪の込められた割符を見せな

がらそう告げると、妖怪は警戒しながらも穂先を下げる。

「割符を検める。」

「こちらに渡せ」

「はいよ」

上がつて来いという意味を含んでただろう言葉を、敢えて言われた通り手首のスナツプを効かせ妖怪へと割符を投げ渡し、予想外だったのか飛んできた割符をおたついた様子で受け止めている間に足首の稼働で跳ね橋へと戻る。

「た、確かに本物だな。」

よし、………つて、あれ?」

いつまでも川の中に居るわけがなかりうに川の中を見渡す妖怪に呆れながら「こつちだ」と言う。

「いつの間に……?」

「妖相手に、体術もままならねえ素人を寄越すわけねえだろ」

「ぐっ……」

馬鹿にされたと思ったのか妖怪は俺を睨むが、しかし痲癩を起こす様子もなく「案内する。付いて来い」と先導を始めた。

「なあ、」

懐かしい光景の中を歩いていく途中、前こそ見ているがこちらを警戒して耳をこちらに向けている妖怪に問う。

「なんだ？」

「お前、半妖だろ？」

ぴたりと、妖怪の脚が停まる。

「……それがどうした？」

「別に。確認しただけだ」

「……」

そう正直に告げると、妖怪はなにも答えず再び歩き出した。

そうして暫く歩き、造りのしっかりした公家屋敷に到着する。

「客人をお連れした!!」

「開門を求む!!」

大仰な呼び掛けに応じ、屋敷の扉がぎいぎい鳴りながら両の扉を開いて招く。

「どうぞこちらに」

屋敷に通され、案内が女中の格好をした女に変わり奥へと進む。

少し歩くと、すぐに一枚の襖の前で足を止めた女中は襖越しに中へと声を掛けた。

「八坂様。」

陰陽師様が参りました」

すると襖の向こうから「中へ」と返され襖が開かれる。

そこに居たのは大き過ぎるといぐらいの胸を備えた、女性らしさを煮詰めて鋳型に押し込んだような豊満な金髪の妖狐と、稲穂のような金色の髪と顔立ちから血縁だろうと想像させる幼い娘が待っていた。

「ようこそお出で下さいました陰陽師殿。

お初にお目に掛かります。

『裏京都』の総大将『八坂』に御座います」

「娘の九重です」

二人揃って丁寧な挨拶をすると、八坂と名乗った妖狐は口を開く。

「ささ、まずはお座りください。

茶の湯も飲みやすい良い具合に冷めておりましようから」

「茶番はそこまでにしておけ」

そう促す八坂に対し、俺は吐き捨てるのと三画ルーンを刻んで炎を生み出し、それを二人へと叩き付け燃やす。

「随分な歓迎だ。

中々気が利くと思うぜ」

途端、燃えた八坂親子諸共屋敷がぐにやりと歪み、術によつて構成された屋敷が消え去り手入れのされていらない畑というその正体を顕にする。

「いつからお気付きでした？」

ただ一人、消えずに残つた女中の中に「最初からだ」と切り捨て、俺は半ば呆れのみをやる。

「見鬼を試したか、それともただあしらいたかつただけか。

どちらにしる、この程度の見抜けない間抜けならこれで十分と思つたのは間違いないようだな？　なあ、『八坂』？」

途端、女中の身体が風船のように膨らみ、肢体はスラリと伸び、胸は豊かに膨らみ、纏められた黒い髪は鮮やかな金色となつて背中へと広がる。

「ふふ、陰陽師とお逢いするのは初めて故、少々悪戯心が疼いてしまいましたな。

お許し召されよ」

「ふん。妖のたわむれに一々噛み付くか」

どうやら未だ見定めている最中らしく、こちらを誂うような態度を見せる八坂に俺は冷徹な態度を続行する。

「まあいいや。」

あやかし者はこうでなきやだ。

んじゃあ、まあ、話をしようか」

「此処で宜しいのか？」

「誂いこそしたが、ちゃんとした饗しも用意しておりますが」

「なれ合う必要はねえ。」

特に、

「悪魔に縋るような奴とはな」と、そう口にするとう八坂の眉はピクリと跳ねた。

「はて？」

「おかしな事を申されますな？」

「八坂、お前は『裏京都』の現状に危機感を覚え、宇迦御霊神から鞍替えするつもりなんだろう？」

「何を根拠にその様な」

「セラフオール・レヴァイアタン」

「っ」

今度こそ、八坂は言葉に詰まる。

「実はさ俺、本職は聖書陣営を中心に狩る禍狩りなんだよ」

懐に仕込んだルーンストーンをいくつか握りそれを見せるように腕を抜きながら淡々と語る。

「だからな。事、聖書陣営の情報は細かく調べてんだよ。

故に、セラフオール・レヴアイアタンが京都入りしたのも把握しているし、その目的が『裏京都』との接触だってのも知り得てんだわ」

掴んでいる情報をベラベラと開示してやると、八坂の履物がざりつと砂を囁む音を発てる。

その足音を意に介していない体を装いつつ、気づかれないよう細心の注意を払いながらチャクラの回転を高め俺は薄く口元を釣り上げる。

「あまり人間を舐めるなよ？」

直後、上空に影が差した。

甘い。

最初から気付いていた奇襲を最低限の体捌きで往なすと、さっきの妖怪が八坂を庇いながら穂先を下に向ける構えで間に割り込んだ。

「お下り下さい八坂様!!」

「芳赤!!」

名前を口にする八坂を一瞥する事なく、妖怪は俺を睨み続ける。

そんな様子にまだ早いと判断して動けるよう体幹を意識しながら所感を述べる。

「視線を切らないのは悪くない。

業は宝蔵院流の薙刀術をアレンジ：いや、見取りで齧ったのを下地にした我流って何処か」

「っ!?!」

ざつと推察を並べてみると、見事に当たりだったらしく妖怪は露骨に肩を跳ねさせ目を開く。

「一つ忠告しておく。

宝蔵院流を真似るなら肩幅より短く握るのは間違いだ。

引き戻しが遅くなる」

「貴様……」

なんのつもりだと睨みつける妖怪に肩を竦めて見せながら、俺は八坂に向け問いを投げける。

「『裏京都』総大将八坂。

お前に先ずは問う。

『裏京都』に於ける総大将の役割とはなんぞや?」

「なにを……?」

「問に答えよ。」

裏京都総大将八坂」

訝しむ八坂に『言霊』を織り交せて答えを催促する。

そうして漸く八坂は答えを口にした。

「…総大将は『裏京都』の要。

『結界』の柱としてその成り立ちを支える大黒柱である」

…：…つち、やっぱりか。

「否。総大将の役割はそれだけに非ず。

総大将が担う要『裏京都』のみならず、地の龍の腰骨、即ち中部地方そのものを支える屋台骨である」

嘗て安倍晴明が京の都に妖怪の住まう隠世を壊させない為に執り行った偉業にして大罪。

京の都を陽、『裏京都』を陰として太極を描き、京都そのものをフオツサマガナの要石にする事で大地の鎮静を成し遂げた。

代償として京の都は妖怪の住処を受け入れざるを選なくなったが、しかし当時を含む後世の陰陽師に安倍晴明が生み出した『京都』という結界を凌ぐ代物は追ぞ生み出すことが叶わず、現在までそれは維持されていた。

「なんだそれは…？」

俺の言葉に動揺した妖怪の槍が揺れる。

戯け。精神の揺らぎを槍に乗せるなんて素人か。

内心未熟を叱咤していると、後ろから八坂の戸惑いを含んだ声が漏れる。

「知らぬ…。」

そんな話、誰も言いはしなかったぞ!？」

悲鳴に近い八坂の声に俺は淡々と事実を述べる。

「当然だ。」

この秘密は安倍晴明が自ら『裏京都』総大将ならびに陰陽寮の総領にのみ口伝にて語り継ぐとした秘伝中の秘伝。

俺が知っていたのは聞くにあたって態々造化三神に『必要に能わぬ限り他言しない』と誓約を結んだからだ」

実際のところ、そうするまでも無くとある一件で五月から教えられていたんだが、一々言う必要もない事だ。

「疑うなら陰陽寮の総領に聞いてみな。

すぐにつつうなら携帯貸してやるぜ?」

こうなる事を予想して事前に預かっていた番号を呼び出してみせると、八坂は「いや、よい」と言った。

「いずれにしろ、最早手遅れよ。

京の都の地脈は悪魔達に奪われて久しく、綻びかけた『裏京都』を存えるには悪魔との取引は必要なのだ」

そう告げる八坂の顔は諦めの色が見えた。

「戯け」

しかし、俺はそんな勘違いを一言で切り捨てる。

「お前が掴もうと手を伸ばしているのは泥舟だ。

奴等は所詮人に縋る寄生虫。

人の影法師たるお前達と較べるなんて、厚かましいにも程があるんだよ」

「…はあ？」

俺の物言いが理解出来ないという様に間の抜けた声を漏らす八坂に俺は言ってやる。

「『妖怪』とは人の鏡面存在、人の影法師。

人が人たらんと歩むその背中に寄り添う『人の鏡』。

故にお前たちの終焉は人の終焉。

人の営みが在る限りお前たちに滅亡は無いんだよ」

これだから若い奴はと呆れ混じりに頭を搔くと、二人はぽかんと口を開けて呆けていた。

「だ、だがだ!」

現に『裏京都』は衰退しておるのだぞ!?!?」

混乱の極みとでも言いたくなるような態度に事実を述べる。

「聖書陣営のお陰で人類は絶賛大損害を被り続けているからな。

特にここ百年は『悪魔の駒』のお陰で有望株が青田刈りされてんだから弱る一方だったろう。

人類が衰退してんのに、その影のお前達が平穩無事に済むわきゃねえだろうが?」

そんな事にも気付けない程世間知らずな点については、仕方が無いと言えなくもない。

帝が関東に居を変えたとはいえ、京都は国の中心だった事實は変わらない。

古都へと名を変えたにしろ未だに由緒正しきと銘打たれる都で、楔役において置かれているだけの妖怪の跳梁跋扈する事を許すほど陰陽寮は生温くはない。

そんな状況で妖怪達に時勢を知れというのも酷な話だ。

そうして、自らの役割や有様を失した上に時勢さえ知る機会を限られていた『裏京都』は、目に映る限られた情報だけが頼りとなり、その末に総大将は今現在最も勢いがある聖書陣営への提携に走ろうとしたのだ。

つまるところ、諸悪の全ては人間による自業自得が招いただけの馬鹿踊りでしかない

というのが今回の全てだ。

「ならば人間。」

貴様はどうするつもりだ？」

構えをそのままに、殺気を満たしながら俺を睨む妖怪に問いに偽りなく答えてやる。

「今回の某は『裏京都』並びに陰陽寮両者が連携不足を起こした事による過失。

少なくとも俺が手を降す必要はないな。

特別報告することも無いし、最低限、頭同士だけでも情報交換は密にやれって釘を刺

すだけだな」

「…俺達を退治しないのか？」

「人の話をちゃんと聞け。」

今お前達をどうこうしたらこっちが首を絞めるだけだ。

セラフオール・レヴァイアタンの談合にしたって、今更取り止めたところで後に響くだけだろうし、だったら陰陽寮からも人を寄越させてなあなあにさせるのが無難だろうな」

そう結露を口にすると、八坂は訝しがりながら俺に問う。

「お主、何故にそこまで私達の肩を持つのだ？」

「別に妖怪の肩なんざ持つちやいねえよ。」

聖書陣營がイキつていられるのも精々あと百年かそこら。

なら、その百年の間にどれだけ聖書陣營に流れるの利益を堰き止められるかが最終的な分水嶺だと考えているだけだ」

白音から兵藤の間抜けが馬鹿げた無茶をした挙げ句、1万年という本当にあるかどうかもわからない長さの寿命を百年程度にまで縮めたと聞いた。

この『茶番劇』の主役である兵藤が生きている限り聖書陣營に勝てる術は無いが、逆に言えば兵藤が死んだ後ならやりようはある。

故にいま打つべき手は邪魔をしない程度に足を引く張る事。

竜舌蘭が育つのを待つように自然な形を装い、気が付いた時には致命的な手詰まりに至るよう根を張る事が最終的な目標達成への道だ。

「んじやまあ、用は済んだし帰らせてもらおうわ」

やるべき事はほぼやりきつたと判断し、徐ろに背を向け『裏京都』の出口へと足を向けたところで、ふと気になった事があつたと首だけを向ける。

「そーいや『芳赤』だったか。

お袋さんは元氣にしてんのか？」

そう尋ねると、妖怪は槍を握る手に力を込め睨みながら答えた。

「…随分昔に、俺がガキの頃に死んだよ」

「…そいつは悪かったな」

一言謝罪を口にして、今度こそ俺は『裏京都』を後にした。

## Another I F 『英雄派』【で】遊ぼう (3)

『裏京都』を後にし、再び京都市内へと戻った俺は、この後どうするかと頭を巡らせた。  
「…白音に土産買つとくか」

八つ橋かその辺りの甘い物を適当に幾つか郵送しておけばいいかと結論付け、すぐに帰るかと考えてからやっぱり後二、三日は滞在しようと思つて直す。

(『茶番劇』の介入があつたって事はなんかあんだらうし、そうでなくとも駒王に帰つたら帰つたであのクソウザい連中に絡まれるのは確定なんだから、成り行きの確認がてら少しぐらい羽を伸ばしておくか)

いくら『茶番劇』とはいえ、全部が全部兵藤の阿呆が絡む訳もなからうし、今回は腰を据えて事態を確かめておいたほうがいいだろう。

「とりあえず一旦寝るか」

5日6日眠らずともコンデイションが狂うような軟な身体ではないが、休める時に休んでおいた方がいいのは間違いない。

流しのタクシーを拾いホテルに向かうよう行き先を告げたが、しかし駅の近く更に言うならサーゼクスホテルに近づいた所で渋滞に巻き込まれてしまった。

「…ツチ」

よりにもよつてな位置に、思わず漏れた舌打ちに運転手が苦笑を溢す。

「少し前ならこの辺りで渋滞なんてしなかつたんですが、お客さん運がないですね」

「そうなのか？」

「ええ。」

隣に見えるのと、その向こうに見えるホテルのせいで道が詰まつちやつたんですよ」

そう視線で示す先にはサーゼクスが建てたホテルと、同じくセラフオル・レヴアイアタンの名を冠したホテルがあつた。

「あれらのお陰であちこちの老舗も商売が滅茶苦茶ですよ。」

知り合いの民宿も閑古鳥が鳴いていると愚痴つてました死ね」

茶化して溢される愚痴は、口調こそ穏やかだがバツクミラー越しに見える目には隠しようもない不快感が滲んでいた。

「…うん。」

お客さん、この様子だと歩いたほうが早いかもしれませんよ？」

「じゃあ、そうします」

財布から諭吉を抜き、会計皿に置く。

「釣りは結構。」

興味深い話を聞かせてもらった礼です」

「いいんですか？」

「ええ」

そう金を押し付け、タクシーを降りて駅の前を進む。

「そーいや修学旅行シーズンだったか」

駅の前に屯する学生服の集団に気付きそう漏らしてからふと嫌な予感が過ぎる。

「あいつらの修学旅行何処だった？」

さして知る必要は無いと完全に聞いていかなかったが、定番かつサーゼクスとセラフオルーがホテルを構えている事から京都の可能性は低くない。

問題は近日中であるかどうか。

もしも今日にも京都入りなんて話になっていたら…。

「キヤアアアアアア!!?」

早急な確認と対策をと考えていた矢先、絹を裂くような悲鳴が響いた。

「うおおお!! 女子高生のオッパイいいいい!!」

何事かと視線を向けた先にあつたのは、血走った目で女子高生に襲いかかるサラリーマン風の男の姿。

「……」

その男の姪気が、何故か知った竜の『氣』であるのに気付いた時点で俺は考えるのをやめた。

無心のまま懐からルーンストーンをばら撒きながら歩法で男の背後に回り込むと、右手に『氣』を集中させた貫手を突き立てる。

「あふん♡」

気持ち悪い悲鳴を上げる男に同情しつつ、『心霊手術』の業を以て外傷一つ残さず悪性の原因を掴み取り抜き出す。

『撮影のご協力ありがとうございます!!』

そうして仕上げに撒いたルーンストーンを起点に魔術を行使し、周囲一帯に『事実認識の改変』を行う。

「ああ、なんだ。」

ドラマかなんかの撮影か」

唐突に始まった猥劇に取り押さえようとしていた者や通報のために携帯を手にしていた人達が興味を無くし、紛らわしいと舌打ちなどを残しながらそれぞれの方向へとその場を離れていく。

「あんたも災難だったな。」

『さっさと忘れないと取引に遅れるぞ』

『言霊』で軽い暗示を掛けつつそう背中を押すと被害者のサラリーマンは慌てた様子で走り去る。

「君もご苦労さま。

これ、バイト代ね」

そう諭吉を数枚握らせ追い出してから、最終的な事後処理のために携帯を探りながら右手の中で暴れるソレを見る。

（いつそ笑えるぐらい淫気に塗れちゃあいるが間違いなく竜、それも『ウエールズの赤い竜』に因する力だな）

逃れられないと見るや俺に寄生しようとするソレを『氣』で振伏せながら、こんなモノが徘徊しているそれが何を意味するのか考えるまでも無い現実に溜息を漏らす。

「舞沢!？」

何でここに居るの!?!?」

聞き覚えのある声が名指しするのに嫌々ながらそちらを見れば、案の定、そこに居たのは駒王に居る筈の天使に鞍替えした狂信者の片割れだった。

そうなれば、後の流れは言うまでもない。

「テメエ!! 小猫ちゃんを置いて何してやがるんだ!!」

耳障りな怒鳴り声に、そーいや八坂のスタイルは兵藤が好きそうだったなどどうでも

いい事を思う。

「聞いてんのか!？」

「煩え」

胸ぐらでも掴もうとしたのか近付いてきた兵藤に右手のなんかをぶち込む。

「ぐぼあっ!？」

無理やりねじ込んだ影響でのたうち回る兵藤に「返しとくぜ」とだけ言い、後ろで喧しい連中は無視する。

「つたく、ひと悶着は確定か」

釘刺しが先に出来ただけ御の字かと思いつながら、仕方無しに予定はキャンセルして再び『裏京都』へと向かうため足を向けたが、突然目の前の空間を裂くように虚空から転がり落ちてきた芳赤を反射的に受け止めてしまった。

「……何があつた?」

後ろが騒がしいのは無視し、即座にルーンストーンをいくつか追加で撒いて発動中の魔術を『隠匿』と『人避け』に意味を切り替え大事になるのを防ぐ。

「おまえ…、…よか…、まだ、…ちか…」

「すぐに治療します!!」

息も絶え絶えになんとか声を絞りだそうとする芳赤に、元聖女が近づいて来て神器を

発動するのを俺は遮る。

「無駄だ」

「どうして止めるんですか!？」

お優しい元聖女様らしい言い分に、俺は短く事実を告げる。

「こいつはもう死んでいる。」

永らえているのは意思で耐えているだけだ」

酒呑童子の逸話のように、妖怪は死んだ程度では簡単にくたばりはしない。

とはいえ、それは風前の灯が人間より少し大きいだけで、

すぐに消えてしまうのは変わらない。

「そんな…」

助からないと言いつけると、何故か元聖女は異様なまでにシヨックを受け、涙を浮かべ

悼む。

見ず知らずの相手の死に悼みを感じるのは高尚なんだろうが、こいつの様に誰でも彼でもに對し心から悼むなんて、そんな元聖女を俺は頭のおかしい奴としか思えないし、正直気持ち悪い。

必死に情報を伝えようとする芳赤の言葉を聞き逃さぬよう一語一句しっかり聞き届ける。

「お前が、消えた後…霧に、包まれ…八坂さまがっ!!」

『霧』という単語から二つの可能性を思い、すぐに片方『狭霧之神』のどちらかの線は無いと切り捨てる。

「犯人は人間だな？」

「そう…だ…!」

やはり『絶霧』の可能性が高いようだ。

「頼む!!」

この事を陰陽師に!!

八坂様を助けてくれ!!」

最早一時の猶予もない死相の浮かんだ顔で俺の胸元を掴みながら血を吐き嘆願する芳赤に、俺は死人に鞭打つ必要は無いと「承知した」と告げてやる。

「他に言い残すことはあるか？」

そう問うてやると芳赤は最期に俺にだけ聞こえるような微かな声を絞り出し、一滴の涙を零してそのまま事切れた。

「死に水は勘弁してくれ」

代わりにハンカチで唇を拭い、遺体を抱えて歩き出そうとしたが、

「待てよ舞沢!!」

クソの雑音に思わず足を止めてしまった。

「…なんだよ?」

こっちはチンタラしてらんねえんだよ。

顔を見るのもしたくないから振り向かず聴くと、クソは思った通りの台詞を吐いた。

「一体何が起きてるっていうんだ!?

俺たちにも説明しろ!!」

さも当然とばかりにほざくクソに、感ける必要はないと切り捨てる。

「悪魔には関係ない話だ。

放っておけよ」

「そんな事出来るか!!」

……。

ああ、分かってるよ。

芳赤こいっの死を目の当たりにさせることで義憤を駆り立てて自主的に介入させるのが『茶番劇』目論見なんだろ?

ハイハイ。ご勝手にどうぞ。

精々適当にピンチになって、都合のいいタイミングで援軍に恵まれて、いい感じのパ

ワーアップイベントでも挟んでクソに良いところを総取りさせて、『裏京都』からの信頼も何もかも持っていけばいい。

どうせ逆らったて何も意味なんかないんだ。

やりたいようにならせてやれば…。

「ふざけるのも大概にしておけよ」

ああ？　なんで俺はこんなにブチ切れてんだ？

後ろでビビってるクソ共に向けて、口は勝手に言葉を吐き出す。

「これは『日本』の問題なんだよ。

しやしやり出てくるんじゃないやねえ」

「だ、だけど」

ザンツ!!

遺体を横たえ、ルーンを刻みクソ共のすぐ足元に風を起こして地面に亀裂を刻む。

「十秒やる。」

その線を超えた時点で、今すぐテメエ等は『日本』を敵に回したと見做し塵殺する」

「なんつ…」

「何を言つてやがる舞沢!」

それまで成り行きを見ていたアザゼル黒鳩が口を挟んだ。

「お前はただの雇われだろうが。」

そんな権限が何処に!」

「うるせえくそばか共が!!」

自分がブチ切れているのを他人事の様な視点で眺めながら、俺は漸く合点がいき、嬉しいときさえ思いながら思ったまま口から吐き出してやる。

なんてことは無い。

ただ単に、我慢できないだけだ。

フワワに勝てるかと分かっているからギルガメシュ王とエンキドゥに加勢しないでいられたか?

滅びると分かっているからトロイアを見捨てられたか?

死地に赴くレオニダス王を行くのを見ただけか?

助けられないと知っていたからジャネットを見限れたか?

否!! 否!! 否だ!!

どれもこれも、無駄だと分かっているでも我慢できなかっただろうが!!

半泣きでビビり散らしながらも、斧を手離さずに立ち止まった王を残して逃げるなん

て我慢できず槍を手にとった。

ヘクトール將軍が死に最後の希望だったペンテシレイアさえ死んだ後も、トロイアが一日でも長く続くようトロイアが滅びても生き残りを一人でも増やそうと戦い続けた。

モルテピユライでレオニダス王が討ち死にした後も、せめて軀を辱めさせまいと死ぬまで戦い続けた。

貴族は見捨てどう足掻いても間に合わないと分かっている、ジャネットを救うことを諦めきれなかった。

そのどれもこれも、そう決めた時に御大層な理由なんざ無かった。

いつだって、我慢できないからそうした。

だから今回も同じだ。

建て前なんか何だっていい。

芳こいつが、赤幾度前の前世での俺の子だということさえ関係ない。

前世で親子だったとしても、無事に産まれたのを確かめたのを最後に一度として顔を合わせたことさえなかったんだ。

そんな奴、他人と何も違うわい。

俺が今、聖書陣営を拒絶する理由は唯一。

「コレは俺が買った喧嘩だ!!」

横槍挟もうってなら、まとめて全員ブチ殺すぞ!!」  
百年後の勝利のために耐えるなんざ我慢できねえんだよ!!

## Another IF『英雄派』【で】遊ぼう（4）

訳が分からない。

舞沢の奴、なんでそんな事を言うんだ？

正直、舞沢の事は嫌いだ。

イケメンで、俺が元浜達とおっぱいを見ようと覗きにいくのを邪魔して、小猫ちゃんだけじゃ無く小猫ちゃんの姉にも好かれて、だけど小猫ちゃんが部長を見たことな  
いってぐらい満面の笑顔を浮かべながら懐いているから、嫌いだけど悪い奴じゃないと  
そう思ってた。

なのに、今の舞沢はそんな事が嘘のように俺達に敵意をむき出しにしている。

正直、怖いと思った。

タンニーンのおツサンやヴァーリ、サイラオーグやフェンリルなんかの今まで戦つて  
きた奴らと比べたらずっと弱い筈なのに、どうしてだろう今の舞沢と戦ったら絶対に負  
けると、そうとしか思えなかつた。

舞沢は武器を持つている訳でも得意の武術の構えをしている訳でもないのに、舞沢が  
作つた線を踏み越えた瞬間、『禁手化』していたとしても次の瞬間には地面に倒れている

と、そんな予感が頭から離れてくれない。

『気をつけろよ相棒』

突然ドライグが俺だけに言った。

『奴からは久しく感じていなかった『人間の怖さ』を感じる。

ああなつた人間は、時としてドラゴンさえ喰い千切るぞ』

人間の怖さ…？

それって、なんだよ…？

それにドライグの声はまるでヴァーリと戦っている時みたいにくぐく愉しそうだ。

「その辺りにしておいてくれないか？」

ドライグの警告が本当みたいにアザゼル先生さえ舞沢に言葉を言えなくなっていたら、突然舞沢の後ろからそんな声が割って入ってきた。

「ただでさえ地脈があちこち弄られているのに、これで更に乱されたら、直す手間が掛かって困る」

そう言ったのは、白い着物に縦に長い三角の帽子を被った女の人みたいに凄く綺麗な男だった。

「お前は…」

「京都守護役『陰陽寮』の総領を務める『陰陽頭』の者だ。

名は『加茂晴明』かもの はるあきという」

本当に男なのかと疑いたくなるぐらい綺麗な赤い唇で、男はそう名乗った。

「……くくつ、加茂晴明ね？」

舞沢はなんでもか面白いものを見たというふうには笑うと、急に威圧感を消した。

「それで、注言だけに態々出向いたのか？」

「ああ。」

まあ、序にちよつと背中を押してやろうかと」

そう言っていると、晴明の横から十歳ぐらいの和服を着た女の子がやって来て、舞沢に小さな瓢箪を渡した。

「それをやろう。」

何れ式にでもしようとして持っていたが、お前のほうが良さそうだ」

「これは？」

「悪魔に呑まれた女だ」

なんだってっ?!?!?

あんな小さな瓢箪に女の人があ!?

「何処ぞで言う『はぐれ悪魔』と言うやつでな。」

気を患って暴れていたのを封じておいたのよ」

滅茶苦茶な事を言う清明に、舞沢は悪い顔で笑うと瓢箪を受け取って「名は？」と尋ねた。

「まだつけておらんよ。」

蛇に変じていたが良い『呪』を思いつかなくてな」

「そうかい」

舞沢は瓢箪をポケットに入れると背中を向けた。

「つて、待てよ話は」

「無粋はやめて頂こう『アザゼル』」

アザゼル先生が声を掛けようとすると、清明が邪魔をした。

「仇討ちに余人が割って入るのは如何なものか？」

「……」

そう言つて少しかけて清明が笑うと、アザゼル先生はおかしなぐらいたじろいた。

「先生？」

清明がなにかした様子は無い。

なのに、アザゼル先生はフェンリルとロキが並んでいる時より警戒している。

「お前、何者だ？」

「言つただらう？」

加茂清明。ただの陰陽師だ」

そう言う清明にアザゼル先生は怪しんでいると、今度は清明がアザゼル先生に訊ねた。

「時に『アザゼル』。

お前は探求を趣としてしていると聞き及んでいるのだが間違いないか？」

「……ああ」

「それは良い。

俺は『ある事』について余人と語らい、その本質となんぞやと思ひ馳せるのが趣味でな。

外の者の意見も是非聞いてみたいのだ」

そうどう受け取っていいのか分からない笑みで清明は先生に訊ねた。

「『アザゼル』。

お前は『呪』とはなんだと思う？」

しゆ？

「悪いが問答に付き合っている暇はねえんだ」

「そうか。残念だ」

アザゼル先生がそう言うのと清明は少しだけ眉を下げた。

クソツ、イケメンは何をやってもかっこよく見えるからズルい!!  
「居た!!」

すぐに舞沢を追おうとしたアザゼル先生は、だけど大声を上げて駆け寄ってきたロスヴァイセ先生に引き留められてしまった。

「どうしたロスヴァイセ?」

「どうしたもこうしたもありませんよ!!」

予約していたホテルが使用禁止になっていて、先生方総出で生徒の宿泊先を探しているんです!!」

「ホテルが使用禁止い!?!?」

すごい剣幕でそう叫ぶロスヴァイセ先生に俺達も耳を疑う。

俺達が泊まるホテルって、サーゼクス様が経営してるあのデツカイやつだよな…?」

「何があつた!?!」

「役人の人たちの話だと、提出されたホテルの見積もりと建設期間が合わないことから、耐震設備の手抜き工事の懸念があると急遽抜き打ち検査を実施したとか」

「よりにもよって今日にかよ…」

「それと、京都の建設法にも抵触していたらしく、セラフオールホテルも同様に使用禁止の処置が…」

「マジかよ……」

ええつと……

「先生、それって……?」

「舞沢に構っている暇は無くなったってことだよ。」

とにかく今は宿泊先を探すのが先だ。

いいか、他の奴らと一緒に大人しくしているろ」

なんだよそれ!?

「だったら俺達だけでもと言う前にアザゼル先生はそう言ってロスヴァイセ先生と何処かへ走って行ってしまった。」

「留まっけていても仕方ないようだし、俺も帰らせてもらおう」

そう言っけて晴明は勝手にどっかに行っけてしまった。

そうして何が何だか分からないうちに置いてけぼりにされたような気持ちになった。

「どうなつちやうんでしよう私達の修学旅行……」

アーシアの不安そうな呟きに俺は何も答えられず、モヤモヤした気持ちのまま俺達は先生の言う通り立ち続けた。

くくく

芳赤の骸の処理を済ませ『陰陽寮』經由で集めた装備を手を占いの結果に従って二条城を目指しながら、暇潰しに昔の事を振り返る。

その頃は室町幕府がまだともに機能している頃で、聖書陣営を滅ぼすための手段を探していた俺は、その一環で『裏京都』に足を向けたことがあった。

大妖『玉藻の前』を斃すのに貢献した安倍晴明が作り出した『裏京都』に、聖書陣営を滅ぼすための参考になる何らかがあるかもしれないと思つたからだ。

最も当てにした『裏京都』の口は堅く、目的は完全な空振りに終わったが。

だからすぐに『裏京都』を去ろうとしたのだが、その時世話役をしていた狼の妖怪の女に、なんでか残つて夫婦になつてくれと縋り付かれてしまったのだ。

その時には既に俺の性欲なんでものが形だけしか残っていなかったのに加え、その妖怪に対しても見目は良いが特に惚れた腫れたの類は髪の毛ほどもなかったからそれを拒否したのだが、そうしたら妖怪はならばせめてやや子だけでも残してくれまいかとそう言い出した。

あんまりにもしつこいから、苛立ちを込めてこれ以上付き纏うなら退治するぞと脅してみるも、妖怪は「この胸の苦しさを抱えたまま生きるぐらいなら、そなたに退治されるほうが本望だ」と言われ、どうしたものかと頭を抱えさせられた。

今ならば後腐れなど無いようさっくり始末していただろうが、当時は今程に冷徹には成りきれずに居た頃だったせいで、どうにか穏便にと半端を続け終いには何事かと興味本位で成り行きを眺める外野を巻き込むほどの大騒ぎにまで発展させてしまった。

そうした中で、当時総大将を任じていた五月がある提案を持ち掛けたのだ。

「そやつに子を仕込んでくれまいか？」

代わりに『裏京都』の秘をそなたに包み隠さず教えよう」

その提案に俺は耳を疑った。

正味、渡りに船どころかこちらが払うものなど無いに等しい条件に、当時それが畏とさえ思った。

しかしそんな懸念を五月は笑いながら否定した。

「何、同じおなごとして手の一つも貸したいと思っただけぞ」

そうからからと笑う五月に、拒否しても何も良いことはないと思つた俺は、その提案を了解して妖怪に子を仕込み、一年後に無事に子供が産まれたのを見届けてから『裏京都』を立ち去った。

だからどうしたという事はない。

五月も、妖怪の女も、その子も皆居なくなつた。

もう思い返す必要も理由もなくなつたから、一度ぐらいはきちんと振り返つておこう

と、そう思っただけだ。

八坂の『氣』を追つて二条城の奥、本丸御殿へと続く櫓門を抜けると櫓門に仕掛けられていた薄い霧の結界により寸分違わぬよう意識したらしい紛い物の世界へと移動させられた。

「やっぱり『絶霧』か」

予想通りの状況に、さしたる関心も抱く事もなく肩に背負っていたザツクを壁際に放り捨て、槍を一柄のみを手に歩く。

日が落ちた夜闇の中、日本家屋が並ぶ先の庭園に八坂と一人の男が待っていた。

「お前がそいつをかつ攫つた首謀者か？」

青年の一步手前ぐらゐの漢服の男は、俺の問に「そうだ」と応えた。

「俺は『曹操』。」

カオス・ブリゲード  
『禍の団』の一派、『英雄派』を率いている者だ」

……あー、はいはい。

ここでいつもの聖書陣営の自業自得に繋がる予定だったのね。

というかさ、いい加減マツチポンプ以外でシナリオ書けないの『茶番劇』さん？

と言つても聖書陣営のやらかしの範囲が広すぎて、何をやつてもマツチポンプになつ

ちまうんだろうけどな。

ホント、聖書陣営は今すぐ滅んでくんねえかな？

『茶番劇』が終わるまで無理だろうけどさ。

「んで、テロリストらしくサーゼクスの影響力が高い京都に白羽の矢を立てたと？」

「いや、そうじゃ無い」

「あん？」

「俺達『英雄派』の目的は京都にグレード・レッドを召喚する事だ」

頭を切り替え目的を尋ねると、これまた意外過ぎることをほざきやがった。

「……なんの為にだ？」

「悪魔や堕天使共と違って、俺達は義理堅いんだよ。

クライアントの要望を叶えようって意思ぐらいいは見せておかないとな」

そうあっさりとその目論見を白状する自称曹操。

確か『禍の団』の首魁は『無限』<sup>オーフィス</sup>だったな。

オーフィスの目的は『次元の狭間』への帰還。

『裏京都』の要である総大将を起点とし京都を召喚陣に見立てればグレード・レッドの召喚ぐらいいは出来るはず。

グレード・レッドをどうこう出来るかどうかはさっ引いて、言っている事の筋道そのものは可笑しくは無い。

いずれ打倒するにしてもグレード・レッドを『次元の狭間』から引きずり出すアテがないなら何をしようが絵に書いた餅。

そうしない為に先じてグレード・レッドの召喚手段を確実なものにしておこうって魂胆か。

だが、あんまりにも大言壮語過ぎる。

ざっと『氣』で探った限り隠れている『英雄派』の構成員らしい人間の気配が20以上。

有象無象とまでは言わないが、しかしその多くは悪魔相手にさえ役者不足としか…いや、『氣』の混じりからして『神器』持ちか。

しかしそれでも、仮に全員が『禁手化』していようが魔王一人にさえどれだけ抗えるやらという具合止まり。

まさか今までのブラフか？

…いや、そういう雰囲気じゃねえな。

もうちよい情報が欲しいな。が

「しかしまあ、グレード・レッドとは随分大物を持ち出してくるな？」

「当然さ。」

英雄を目指そうってならそれぐらい出来ないとな」

「英雄ねえ?」

正直、今すぐ腹抱えて笑い転げたいところだが、まだ引き出さなきゃならない話があるから今は耐えておく。

「にしても曹操なんて、アジアの片隅でしか知名度のねえマイナーな英雄の名前は自前か?」

「俺は魏の曹操の子孫なんだよ。」

英雄を目指すにあたって、先祖の名を借りているのさ。

だが、いずれ本物の英雄になった暁には俺こそが『曹操』だと知らしめてやるさ」

顔が引きつってやがるしえらく早口でまくし立てるあたり色々自覚はあつたらしいが、まあスルーしておいてやろう。

「そうかい。」

それで、態々俺を招いた理由は?」

『場』を整えるためにも、もうちよい時間稼ぎが欲しいな。

「結論から言おう。」

俺達と共に来ないか?」

「あん?」

「『神器』をばら撒いて俺達から普通の生き方を奪った聖書の神とその下僕。人間を家畜のように虐げる悪魔。」

人を管理していると嘯きながら実質悪魔と何ら変わらない墮天使。

そんな奴らが蔓延っている世界なんて間違っているだろう？

俺達は3大陣営の廃絶を成して先祖と同じ英雄となる。

同じ志を持つからこそ、お前も『英雄』になる資格がある」

……ちよい待ち。今、マジで笑い死にしかけた。

さも当然とばかりにそう手を差し出す曹操に対して笑いを堪えるため、小周天とチャクラを3つ回転させて得た『氣』を全身に回す苦行の痛みで平静を保ちながら俺は言うてやる。

「面白い話だな？」

先祖は凡夫の俺如き二流のなんでも屋が英雄だあ？」

「産まれを卑下する必要はない。」

少なくとも、お前以上に悪魔を殺した人間を俺は知らない」

そう言い、曹操はどこで調べたのか人の戦歴を挙げ連ね始めた。

「アフリカ、オーストラリア、メキシコ、サウジアラビア、ソマリア、ミャンマー、スロ

ベニア…

数多の内戦地域で暗躍する悪魔達を片端から刈り取る闇の暗殺者『アサシン』。

どれも殺害方法が違う事から複数人からなる集団だと思われるが、実際は立った一人でその全てを行っていた事を俺達は突き止めている」

「……へええ？」

これには正直感心した。

身元を悟られぬよう常に顔を隠し、信憑性の高い欺瞞情報をばら撒く事で真実を徹底してひた隠しにしておいたつてのに、本当にその事実に向り着いた奴が仲間内に居るらしい。

因みに日本以外の活動に紛争地域が多かったのは、単純に身分を詐称しやすかったからつてのと、他に比べて仕事しやすい間抜けな悪魔がその辺りに集中していたからだったりする。

改めて皆殺しにする理由が増えた事を嗤いつつ、俺は「参った」と言いつつ槍を放り捨て両手を上げる。

「流石にそれに気づかれちゃあ逆らえないな。

いいぜ。お前を英雄にしてやろうじゃねえか」

「お前ならそう言ってくれると信じていたよ」

流石に態度だけだろうが、俺の言葉を曹操はあっさり信じるとまるで雲蚊のように隠

れていた連中が姿を見せる。

「これで全員か？」

中にはジュニアスクールに通っているぐらいの子供まで混じっていた事に少しだけ驚きつつそう尋ねると、曹操は「いや」と否定した。

「だが、今回の作戦に参加しているほぼ全員がここにいます」

「そうかい」

ざっと見渡し、優先順位を付けながらそう答えつつ、俺は訊う。

「仲間になるのは良いとしてだ。」

さつき気になったんだが、聖書陣営滅亡までには、何十年ほどを見込んでいるんだ？」

「え？」

すると、何故か曹操は意外とでも言う様に間の抜けた声を漏らした。

「え？　じゃねえよ。」

寄生虫一種を絶滅させるのだから十数年掛かるんだぞ？

いくら聖書陣営が鳥頭だろうが、知性を持った怪物を滅ぼそうってなら数百年は覚悟してるんだらうな？」

因みに俺の計画では『茶番劇』さえ起きなければ科学技術の進歩もあつて後700年程度で聖書陣営の絶滅は完遂できるはずだった。

少しばかり曹操に向ける視線を鋭くすると、どうしてか曹操は狼狽えた様子を見せ始めた。

「どうした？」

真逆『神器』とオーフィスの力があれば数年も要らないだろうなんて、そんな井勘定で活動してた訳じゃあるまい？」

「勿論だとも」

「……………マジで井勘定だったらしい。」

「それについては後で話し合うとして、先ずは自己紹介でもしておこうじゃないか」  
滅茶苦茶強引に話を変えた曹操は、時間稼ぎするように隣の男を促した。

「…幹部のゲオルグだ。」

神滅具『絶霧』を所有している。

ゲオルグ・ファウストは知っているか？」

「火薬の生成中に爆発事故でおっ死んだ錬金術師のならな」

「……………その錬金術師の子孫だ」

ファウストは独身だった筈なんだが…放浪期間中に仕込んだ種かなんかのだろう。

「ジークフリードだ。」

シングル機関の成功例として、『魔帝剣グラム』他魔剣を所持している」

「どうやってそんなに剣を振り回すんだ？」

「足りない分は俺の神器『龍の手』で補っている」

「竜殺しの剣を『龍の手』で持つって、自爆してるじゃねえか」

中々苦勞しているよと苦笑しているが、マジレスは慣れていないのか肩を落としてい  
る。

「ジャンヌよ。」

『聖劍製造』を「待てや」

思わず曹操に視線をくれてしまう。

「さっき英雄の子孫だって言ったよな？」

なんで『性乙女』<sup>ラ・ビュセル</sup>の子孫がいるんだよ？」

投獄中に強姦されてたから死ぬまで処女じゃ無かったが、しかしそこで妊娠してたと  
しても出産なんてする間もなく火炙りで死んでんだぞ？

「私はそのジャンヌ・ダルクの生まれ変わりよ」

「……ああ、そういう」

自慢げなその台詞に回転させるチャクラを2つ程追加させ更なる激痛を受けること  
で唾うのを全力で回避する。

「最後は俺だ！

俺の名はヘラクレス！」

トリを飾るためか無駄に筋肉を強調させた筋肉達磨が意気揚々と名乗りをあげる。

「ああ、『ヘラ<sup>ヘ</sup>ラク<sup>ラ</sup>レス<sup>レ</sup>の子<sup>イ</sup>供<sup>ダ</sup>たち』の末裔か」

メジャーだが、さっきのジャンヌに比べて個人的にインパクトが低かったからそう言うのと、ヘラクレスは「違う!!」と否定した。

「俺もまたジャンヌと同じくヘラクレスの魂を受け継ぐ者だ!!」

「……………」

自信満々に歯を?いて笑うヘラクレスに、俺は無言で背中を向ける。

「?」

そうして数歩離れ、もう少しだけ離れようとする前にとうとう痛みでも制御出来なくなつた感情が遂に吹き出してしまった。



「答える前によう、一つ確認しておくが、まさか、ヘラクレス以外にもギリシヤ系の英雄は居ないよな?」

「:ギリシヤならペルセウス「ぶwふwあwwwwww!!」

まさか過ぎるビッグネームに、言語にすら出来ず最近流行りのwwwとかなる勢いで大爆笑する。

「ひいwwwひいwww:よし落ち着いた」

まだまだ笑い足りないが、あんまり待たせるの可哀相かと俺は笑いを引つ込め、曹操に向き直ってやる。

「ええつと、何がおかしいかって質問だったよな?」

そりゃあ挙げれば二三日は掛かるぐらいあるがよ、何より笑かしてくるのはテメエらのお仲間内にギリシヤの英雄様がおらっしゃられるって事だよ」

「俺がなんだってんだ!?!」

茹で蛸みたい真っ赤になった顔を青筋だらけにして怒鳴るヘラクレス(笑)にまた笑い転げたくなるが、一応真面目にと笑うのを堪え嘯いてやる。

「むしろ何で分からないのかねえ?

ギリシヤの英雄様つてのは、死んだら魂は神の手で夜天の星に飾られるか、さもなければエリユシオンに招かれるんだよ」

冥府の樂園『エリュシオン』。

冥府の支配者ハデス様から認められた本物の英雄だけが住むことを許されたギリシヤ神話の浄土。

ギリシヤ版のヴァルハラとでも言えば分かりやすいか？

「居る筈がないんだよ。」

特にヘラクレスは神の座に列している稀有中の稀有。

仮に人としての半分が別れていたとしても、ならばこそその魂はエリュシオンに居なきゃおかしいんだよ」

そう嘲笑つてやると、ヘラクレスは赫怒に震えながらも反論出来ずぶるぶる震えながら射殺さんとばかりに睨むだけ。

そんな野郎に俺はとどめを刺してやる。

「もしも、もしもお前が本当にヘラクレスの半分、人間として生きて死んだヘラクレスの生まれ変わりつてなら、お前はただそこにいるだけで笑えるんだよ。」

だつてな、」

『私は英雄ではありません。』

「狂気と嘯いて感情に任せ我が子と妻を殺し、ただただ殺戮を繰り返しただけの蛮族だつたんです」

「そう自慢してんだからなあ!!」

グギャギャギャギャギャギャギャギャ!!」

悪辣を煮詰めた悪魔のような笑い声を叩きつけてやれば、ヘラクレス（笑）は赤を通り越して真っ白な顔で俯く。

「ジャンヌの魂にしてもそうだ。

間借りなりににも世界で最大の勢力を持った聖書の天界が、死者の魂はもれなく天界、煉獄、地獄の三界の何処かに在り続け地上に戻ることはないって自らの教義を捻じ曲げてるつてのもおかしくはないか？」

「それは……」

ヘラクレスの惨状を自分も受けるのかと後退るジャンヌ（○）に微塵の容赦も与えず言葉の槍を突き立てる。

「だったら考えられる答えは2つに1つ。

お前が自分をジャンヌ<sup>ラ</sup>・ダルク<sup>ピュセル</sup>の生まれ変わりだと信じている頭の痛い女か、さもなくばジャンヌ・ダルクの再来つって持ち上げられた歴史上の誰かって事かだ」

歴史を紐解けばジャンヌ・ダルクと異名された女はかなりの数が挙がる。

ベトナムの微姉妹。

タイのタオ・スラナリ。

インドのラクシユミー・バー・イー。

ロシアのマリア・ボチカリョーフ。

ウクライナのユーリヤ・ティモシエンコ。

日本にも鶴姫や川島芳子とジャンヌ・ダルクと異名を与えられている女は居る。

「だからこそ、聞かせてもらおうか。」

『お前は誰だ?』

「あ……うう……」

論的な否定を叩きつけられた女は呻くばかりで答えを返さない。

……さて、そろそろ頃合いか。

すっかり空気が冷え切った中、しかし俺は気付いていないように装いながら口を開く。

「それはそうとき、その妖怪、終わったらどうすんだ?」

素直に返すわきやあねえわなど思つての問いに、案の定曹操は「無論殺すさ」と、表面波を取り繕った顔で答える。

「人間に仇なす化け物を生かしておく理由はないからな」

「……化け物ねえ」

何らかの術で意識を持って行かれているのだろう、虚ろな目で虚空を見る八坂を一瞥

してから尋ねる。

「見た目は良いんだし飼つとけば？」

「必要ない」

「あつそ」

即答とは恐れ入る。

英雄色を好むとはよく言ったもんだが、それで破滅してるから禁欲してんのか、それとも色仕掛けにトラウマでもあるのか。

どちらでもいいかと思考を切り、態と見せるように懐を探りホルダーに固定しておいた棒状を物を抜いて俺は言う。

「だとすると、そいつは困るな」

「なんだと？」

『裏京都』の妖は京都の地脈の為に必要なんだよ。

そんなことも知らないで好き勝手するってなら…死ねよ」

直後、曹操達の足元から灰色の煙が爆ぜる勢いで撒き散らされた。

~~~~~

「ガスか!」

突然の煙幕に触れた目が刺激を感じ、即座に催涙ガスだと気付いた曹操は腕で口を覆い、風を生む神器使いの手でガスか晴らされるまでを耐えた。

「アサシンは…」

何処だと見渡そうとした曹操だが、刹那響いた悲鳴に耳を疑う。

「レオナルド?!」

見れば、首をありえない方向に曲げ驚愕の顔で表情が固まったレオナルドが倒れているのが見えた。

「しっかりしろ!!」

まだ間に合うかもと希望を抱いた近くの一人が抱き起こし、そして持ち上げたからだからレバーの外れた棒状の手榴弾が転がり落ちた。

「逃げ…」

最後まで言う事も赦さず手榴弾は無慈悲にも爆発し、助け起こした仲間諸共肉片にして撒き散らした。

「卑怯者があ!!」

見た目から一番若いレオナルドを真っ先に殺したばかりか、その遺体に爆弾を仕掛けて助け起こそうとした者を爆殺するという、尊厳さえ奪う所業を受けてジャンヌが怒り

狂った様子で叫びながら庭園から飛び出す。

催涙ガスに紛れて消えた舞沢を探すため他の者達もジャンヌに続いて飛び出して行く中、ゲオルグは感情を抑え曹操に問う。

「曹操」

「分かっている」

言わずとも理解していると曹操は言葉を絞り出す。

「計画は破綻した。」

グレード・レッド捕獲の切り札だった『魔獣創造』アインゲイアレイション・メーカーを持つレオナルドを失った以上

グレード・レッドを捕獲する手段はない」

たった一手で負けに持ち込まれ、怒りに頭を茹だらせながらも曹操は称賛を口にす  
る。

「これが悪魔を殺し続けた『アサシン』の実力か」

『んなことねーぞ』

直後、すぐ近くで舞沢の声が響いた。

『俺の狙いは『絶霧』の方だったが、まさか他の『神滅具』を引くなんてなあ』

ゲラゲラと汚い嗤い声を上げる舞沢の声は、植木の影に隠れていた一匹の鼠から発せられていた。

「使い魔か……！」

『日本じや『式神』つつうんだよ』

ゲオルグの問いに『どうでもいい話だけだな』と言いつつ嗤う鼠に曹操は怒りの声を叩き付ける。

「貴様、誇りは無いのか!？」

『ねえよそんなもん』

「っ!？」

まさかの即答にさしもの曹操も二の句に詰まり、先じて舞沢の声が冷たく響く。

『俺を調べたんだろう?』

だったら知っている筈だ。

俺が悪魔を殺すのに、正々堂々なんつう手を一度たりとも使ったことは無いってな』

そう語る声はドライアイスから漏れているかのように冷たい。

『卑怯なんてのは正面からゴリ押しで勝てる様な強いやつ戯言だ。

俺の目的は聖書陣営を殺す事。

外道、非道、悪道、そんなもんで天使が、悪魔が、堕天使が確実に殺せるなら躊躇う理由はねえ。

毒を盛る。罠に嵌める。嘘を騙る。男を奪う。女を寝取る。仲間を裏切らせる。協

力者を寝返らせる。妻を裏切らせる。夫を見限らせる。息子を辱める。娘を陵辱する。赤子を攫つて吊るす。無関係な人間を殺す』

次々と語られるひとでなしな所業に、怖気から背中を粟立たせる曹操へと舞沢は告げる。

『悪魔を殺すために俺はそれらを全部やってきた。

聖書に連なる者を殺すために、俺は悪魔以下の畜生になつて殺し続けた。

曹操の子孫。テメエは悪魔を殺すためにここまで来れるか?』

「……」

鉛のような重い問いに、曹操は無意識に一步下がる。

当たり前だ。

曹操達の宿願は『英雄』になる事。

絢爛豪華な功績と幾多もの称賛と賛美の中、勝者となつて歴史に名を残す事。

舞沢のやつてきた事は自らがそう口にした様に悪魔以下の畜生に墜ちること。

成果のために歴史の表舞台から自ら飛び降りる地獄の道。

『神器』の研究のために集つた同胞に犠牲を強いたことは事実だが、しかしそれは『英雄』になるための必要な犠牲だ。

傍からはなんの違いも見えない事で自己肯定を行った曹操に、舞沢は言う。

『所でだ。』

俺が態々時間を掛けてまで話をしてる理由について、なんか思いつく事は無いかなあ?』

「……真逆!?!」

奴は八坂が処分されるのを困ると言った。

話をする事で注意を八坂から逸し奪い取るつもりなのか。

そうゲオルグと二人、反射的に八坂が安置されていた祭壇に目を向けるが、しかし、八坂は祭壇から微動だにさえしていなかった。

「言ったはずだぞ?」

外道、非道、悪道で殺せるなら手を染めるとな」

ザシユツ!!

肉を貫く湿った音が響き、ゲオルグの胸から銀の光が生えた。

「ゲオルグ!?!?!」

ゴキソツ!!

咄嗟に手を伸ばそうとした曹操を嘲笑うかのように背後からゲオルグを刺し貫いた舞沢は『氣』で強化した身体能力任せにゲオルグの首を真後ろに捻じ曲げ、脚で押し飛ばしながら刃を抜き曹操へと押し付ける。

「ゲオルグ?!?!」

相棒とも言うべき古い仲間の無残な死に、感情を抑えきれず悲嘆の叫びを上げる曹操。

舞沢はその間に八坂の元へと駆け寄ると、そのまま肩に担いで地を蹴って今度こそ庭園から脱する。

「……赦さん」

レオナルドを殺し、ゲオルグを殺した舞沢へ曹操は湧き上がる憎悪のまま吠える。

「貴様だけは絶対に殺してやるぞ『アサシン』!!」

漸く壇上へと上がってきた曹操の叫びを耳に、舞沢は小さく返した。

「遅すぎんだよバーカ」

## Another IF 『英雄派』【で】遊ぼう(6)

さつき殺ったゲオルグとかいう眼鏡が『絶霧』の所持者だったらしく、二条城に重なるように作られていた結界が消え、代わりに陰陽師達による人払いの結界が周囲一キロに渡り展開している光景が広がった。

「なんとか第一段階は完了出来たか」

『絶霧』の排除は最優先事項だった。

能力云々もそうだが、どんな状況に追い込もうと逃げる手段が在り続けるといのは策を練る以前の問題だ。

とはいえ物理的、魔術的な手段での逃走の目は完全に消去しきれていないが、しかし承認欲求の塊みたいな連中があれだけ煽られて逃げを打つとは考えづらい。

見繕っておいたテナント待ちの建物に忍び込み、ルーンストーンを撒いて『隠匿』と意味を与えながら残りの装備を確かめっていると横たえておいた八坂が身を起こした。

「何故、助けた？」

どうやらゲオルグは八坂の精神支配も担っていたらしく、意識を取り戻すなりそう尋ねてきた。

「言ったはずだぞ。

お前がどうこうなったら京都が地獄になる。

その為に「そうではない」ん？」

そう言うも、八坂は否定の言葉を口にした。

「『裏京都』に必要なのは『総大将』であろう？」

ならば私が拐かされた時点で私を見切り、別の者を『総大将』に据え置くほうが主らには楽な筈だ」

そう理解しきれないと困惑を口にした。

確かにその通りだ。

極端に言えば『総大将』は誰でも構わない。

安倍晴明は『裏京都』の要を『狐』としたからそうであるだけで、術の一部を改変し起点を別の妖怪種に変える事も不可能ではない。

俺は懐から巾着を取り出し八坂に押し付けながら答える。

「芳赤からの遺言だ。

『俺のもう一人の母上を助けてくれ』。

その程度の手間なら誤差範囲だと思ったから叶えてやることにした」

「……おお」

渡した巾着の中身を察したようで、八坂は巾着を握りしめ嗚咽を溢す。

それを横目に俺は運び込んでおくよう頼んでいた物だろうトランクがあることを確認し、トラップの類に注意しながら蓋を開き中身が間違いないことを確かめてから組み立ていく。

「……これからどうするのだ？」

パーツを組み立てていると、ふいに八坂が尋ねた。

「奴らを殲滅する。」

俺の身分に辿り着いた奴らは生かしておいたら面倒になるからな」

組み立て終えたソレの作動確認をしながら言うと、八坂は違うと言った。

「あ奴らの事ではない。」

「お前の事だ」

「あん？」

作業を体に任せ顔を八坂に向けると、八坂の顔には疑念ではなく何故か俺に向けた憐憫と恐怖の情が見えた。

「初めて見えた時から不思議であった。」

「お前の裡は乾ききつておる。」

「そのように成り果てて、お前は何を成そうというのだ？」

あれか。

妖怪の基本能力ともいえる人間の感情の機微の察し易やが俺をそう捉えたのか。

そういえば、昔も同じように聞かれたことがあったな。

「何を…ねえ？」

知ってどうすると言うのか？

妖怪とはいえ、一度死ねば終われる命がそれを知ってどうしたいやら分からないが、作業の合間の時間潰しに答えてやることにした。

「聖書陣営を滅ぼす。

一万でも二万でも、幾度時間が掛かろうが必ず滅ぼす。

それが俺が成そうと思う事だ」

仮に『茶番劇』のご都合主義で兵藤が百年後もまだピンピンしていようが、一万年後

なら想像しようもない手段でも無ければ居る筈もないし、そこから改めて手段を講じればいい。

そうやって何千、何万、何億掛かろうと、最後の人間になるまで俺は聖書陣営を滅ぼす事を諦めない。

「無理だ。

人の子にその様な年月を耐える方法など存在はしない。

たとえ人魚を喰らった不死もどきになろうと、魂が耐えられぬ」  
「どうかねえ？」

お前が知らないだけかもしれないぞ」

態々『某からの恩恵』の事など語る必要も無いと、そう茶化してみるも八坂は憐れみを深くして更に問う。

「ならば何故お前は怒らぬのだ」

「ん？」

「さとり程では無いが妖怪は人の感情に敏感なのだぞ。

面を飾ろうと意味は成さん。

お前は、憎んでいると嘯きながら全く怒っていないではないか」  
……………。

「怒りも、愉悦も、使命感さえお前には欠片もありはしない。

だから私はお前がこわい。

教えてくれ。お前は、何を「煩え」っ!？」

組み上げきった『豊和M1500』を突き付けながら俺は疎む八坂に殺意を向ける。  
「一々人の腹の中身を探るんじゃねえよ。

俺は聖書陣営を滅ぼす。

それだけでいい。

それさえあれば俺は生きられる」

「お前は…お主は…」

殺気を叩きつけたのに、何故か八坂は恐怖ではなく哀れみを強くする。

「話は終わりだ。

直に陰陽寮から迎えが来るだろうから大人しくしている」

そう言い捨て、先程よりやけに重いと感ずるようになったスナイパーライフルを肩に部屋を後にした。

くくく

「…何故だ？」

舞沢が去り、一人残された八坂は悲嘆に染まる想いを口から溢す。

「何故に、誰も彼の者を救ってやらんのだ？」

八坂は理解してしまった。

彼にはなにもない。

彼の怒りは本物だ。

聖書陣營への憎しみも本物だ。

しかし、彼の裡、根本にはなにもない。

怒りも、憎しみも、悲しみも、愉しみさえ枯れ果て、只々、空虚な暗闇だけが全てだった。

あれに比べれば、我欲に目を晦ませ自分を拐かした『英雄派』のほうが余程人間らしい。

「高天ヶ原の神々よ。

主らはあの男を見てなんとも思わぬのか？

助けてやろうと手は出さぬのか？」

答えは無い。

当然だ。

彼らの主義や方針もあるが、なにより彼らを邪魔だと遮るものがあるからだ。

そんなことは知らない八坂だが、嘆き訴えながらもそれが叶わぬことは八坂も分かっていた。  
『茶番劇』

日本神話は、高天ヶ原の神々は悔しいと臍を噛んでも、怒りで我を失いかけても、目を覆う悲劇を前にしても、人のみで乗り越えねばならぬ事には手を出せないのだと。

隣で口を出してやることはあれど決して手は貸さず人の身のみで生きよと突き放し、

ただ見届けるだけと自らに課し続ける事が彼らが人へ施せる『愛』であるのだから。

舞沢が口にしたのは、身の丈に合わぬ野望でも、実現不可能な妄想でも、狂気に見え  
寡した執念でさえ無い。

そのどれかならば八坂は憐れとは思わなかった。

そのどれかであつてくれたならまだ救いはあつた。

しかしそうではない。

「どうして、あのような男が人の子で居続けねばならぬのだ？」

乾ききつた復讐心。

それは最早復讐心等とは言わない。

『呼吸』だ。

何をしなくともそうしなければ生きられぬ動作だ。

八坂は舞沢の事は何も知らない。

しかしああまで成り果ててな小鬼にも悪魔にも成れない舞沢を憐れまずにいられた  
かった。

「薊。そなたの思い人も、あのような男だったのか？」

芳赤の母、薊が芳赤の父について語るときの隠しきれない憂いを帯びた顔を思い出  
し、八坂はそうそつと呟いた。

~~~~~

「結界が消えた!?!」

元の世界へと放り出された『英雄派』は、それが何を意味するかを悟り怒りの沸点を更に下げた。

「野郎……どこまでも舐め腐りやがって!!」

特に誰よりも馬鹿にされたヘラクレスの激昂は凄まじく、近くに居ただけの構成員達は八つ当たりで自分が殺されるのではと本気で怯えるほど。

「こうなったら街ごと消し飛ばしてやる!!」

「やめないか」

感情のままに『神器』を発動しようとしたヘラクレスを曹操が諫める。

「短絡的に走るな。」

作戦を伝える。今すぐ全員集めろ」

自らの『神器』否、『神滅具』『黄昏の聖槍』を手に指示を下す曹操だが、怒りに呑まれているヘラクレスはそれに噛み付いた。

「短絡的だ?」

すぐ側に居ながらレオナルドだけじゃなくゲオルグまでみすみす死なせたテメエが何を……」

八つ当たり混じりにそう責めるヘラクレスだが、曹操は最後まで言う暇を与えずその襟首を掴むと力任せにその顔を間近に寄せる。

「ああ、認めよう。」

貴重な神滅具使いを死なせたのは俺のミスだ。

だから奴は必ず殺す。

他の誰でもなく、俺達の手で殺す」

心根では自身のみと吐き出したいが、しかし統制を失ったままでは鴨撃ちもいい所だと身を以て痛感させられた曹操は感情に蓋をしてそう嘯いた。

しかし完全に抑え込めず、体格差を無視し無理矢理覗き込まされた瞳の奥に灯るどろりと粘着くような炎を見せつけられ、それを覗き込まされたヘラクレスはひゅうと息を呑む。

「解ったな？」

「解ったなら返事をしろヘラクレス」

「……ああ」

一瞬でも呑まれた自覚がないままヘラクレスはそう答えると曹操は手を離し通達す

る。

「編隊を組み直す。

三人一組を作り、アサシンを発見次第集合。

全員で包囲するぞ」

一人なら楽に、二人でも反応させる間を与えず殺しきるだろう。

だが、三人同時ならばいかなアサシンとて一手打たせるだけの隙を晒すはず。

そうやって逃げ場を奪い、最終的に残った全員で総攻撃を仕掛ければどうとでもなる。

「今更だが奴には『神器』は無いがそれを補う武器と下衆の極みを容赦無く使う頭がある。

深追いはせず、上級悪魔と戦うつもりで慎重に行動しろ」

そう支持を締め括る曹操。

「…悪くない手だ」

スコープ越しに編隊を組んで散る『英雄派』を見ながら、引き金に掛けた指を一旦外して舞沢はごちる。

曹操の見立て通り、三人同時に暗殺を決めるのは舞沢とて困難を極める。

「やれば出来るなら、最初からそうしろよ」

虫を見るように無感動にそう吐き、舞沢はスナイパーライフルを構え直し一人目に狙いを定め引き金を絞った。

「ッ!?!」

舞沢を探していたチームの一つ、その一人が突然ドサリと重い音を点て倒れた。

「隠れる!!」

倒れた仲間を介助するのを諦め二人のうち片方、コンラはそう叫びながら建物の影に言葉通り『沈む』。

(何をされた!?!)

ナイト・リフレクション

闇夜の大盾を使い影を纏って身を潜めながら目だけを外に出すよう影を操作して倒れた仲間をよく観察すると、頭から暗闇に水溜りを広げていることから出血しているのだと判断した。

(殺られた!?!)

野郎、狙撃銃なんて物まで持ってきているのか!?!)

短絡的な考えだが、しかし、短絡故にコンラは正解を引き当てていた。

だとしたらマズイ!!

既にもう一人が襲われた事を伝える為上空に向け『神器』を放ち他の者に知らせてしまっている。

「逃げろ!!」

奴が次に狙うのは『神器』を使い隙を晒したもう一人だとコンラは叫ぶが、しかしコンラは見てしまった。

打ち上げた『神器』の光に照らされ、仲間の真後ろで長いバレルの銃口を頭に向けポイントする舞沢の姿を。

パシユン!!

ゼロ距離から放たれた弾丸は外しようもなく頭蓋を撃ち抜き、撃たれた仲間は当然即死した。

「うわあああああああ?!?!」

同じ人間を眉一つ動かさず殺した舞沢にコンラは恐怖から悲鳴混じりの雄叫びを響かせる。

「ちっ、」

舌打ちを一つ打ち、自然に見えるほど滑らかな動作で排莖と装填を済ませた舞沢は横に跳びながらコンラに向け豊和の銃口を向けるも、しかし全身を影で覆ったその姿に引き金を絞るのを止める。

「俺に銃は効かねえ!!」

俺の『禁手化』 ナイト・リフレクション・デス・クロス 闇夜の獣皮はドラゴンの攻撃だつて通用しないんだ!!」

恐怖から発現した『神器』の『禁手』を無意識に理解したコンラはそう吠える。

「……」

対して舞沢は無言。

結果、恐怖に竦み動けないコンラはそれを攻めあぐねていると思い更に言う。

「どうした？」

ビビってねえで掛かって来いよ!!」

全身を影で覆った為以外の様子は音でだけでしか把握出来ないコンラは舞沢に動きを与えようと挑発するが、しかし舞沢は無音のままに一分、二分と時間だけが過ぎていく。

(くっ、焦るな!?)

奴は焦れて『神器』を解除するのを待っているんだ!

待てば援軍が来る、そうしたら俺達の勝ちだ!!)

そう自らを鼓舞し無音の時を耐えるコンラ。

更に一分が経ち、数時間とも感じられた睨み合いに変化が起きた。

『無事かコンラ!!』

「っ、曹操!!」

影に遮られ多少くぐもってはいたが、間違はなくリーダーである曹操の声に希望が宿

る。

待ちに待った援軍の声に『神器』を解除しようとしたコンラだが、それを曹操の声が待ったを掛けた。

『動くんじゃない!!』

奴はお前の周りに爆弾トラップを仕掛けて逃げている。

下手に動けば吹き飛ばされるぞ!!』

「なんっ…!?!」

あんまりな言葉に怒りで絶句したコンラを落ち着かせるよう、曹操の声が掛けられる。

『すぐに解除する。』

それまでその『禁手』を解くな』

「…ああ』

ぐつぐつと煮えたぎる怒りを堪え、曹操からの言葉を待つコンラだが、しかし一分と経たず状況は変わった。

『何を棒立ちになっているコンラ?』

「曹操?」

先程とは打って変わった怒りの籠もる声に戸惑うコンラ。

「俺に爆弾が仕掛けられていてるって曹操が言ったんじゃないか!？」

そう訴えたコンラに、怒りと呆れの交じる声突き刺さる。

『それは俺の声を真似たアサシンの戯言だ間抜け!!』

「っ!？」

その言葉に堪えていた怒りが爆発する。

「野郎どこまで俺達をおちよくれば気が済むんだ!!」

感情のままに『禁手』を解き、薄闇の中に視界を取り戻すコンラだが、

「テメエ等が全員くたばるまでだよ」

ボンッ!! と小さな爆発音と共にコンラの首から上が弾け、その哀れな死は小さなネ

ズミの目で見届けられて終わるのだった。

## Another I F 『英雄派』【で】遊ぼう（7）

排莢、装填、射撃。

「チクシヨウ！ チクシヨウ!!」

排莢、装填、射撃。

「どうして…俺はまだ何も…」

排莢、装填、射撃。

「イヤだ、死にたく…」

排莢、装填、射撃。

「助け」

排莢、残弾ゼロ。

「……」発も避けられねえのか」

最後の一发を撃ちきり、俺はその成果を残念とさえ思った

戦争嫌いの日本製らしい要求される要件を満たしたそれなりな狙撃銃による、努力で到達出来る程度のそれなりの腕によるスナイピングの結果、用意されたライフル弾は一发も外れることなく『英雄派』の構成員を人間『だったもの』にした。

策を弄した。罨を仕掛けた。優位を与えず一方的に仕留めた。

たったそれだけで『英雄派』は死んだ。

まるで雑兵のように、主人公に蹴散らされるその他大勢のように、なんの見せ場もドラマも無く、只々死んだ。

「……………」

そんな奴等に身下す感情さえ割くことなく、最後の仕上げに向かう。

コツリ、コツリ、と態とブーツの足音を響かせ結界の中心にあたる二条城の門を潜る。

「こつちか」

待ち構えるように動かない『氣』を追ってそちららに向かうと、『英雄派』の最後の一握りである曹操、ジャンヌ、ヘラクレス、ジークフリードが待ち構えていた。

「多くの同胞がお前一人に倒されたのは想定外だった。

認めよう。俺たちの完敗だ」

そう言った曹操は、しかし「だがそれもここまでだ」と掌を返す。

「同胞を倒すためにお前はどれだけ手札を切った？」

銃の弾薬、爆弾、暗器や罨も殆ど使い果たしたんじゃないのか？」

「…へえ？」

その問いに俺は思わず感心の声を漏らした。

確かに手持ちの大半は吐き出しているし、残りも槍も回収できていないから豊和で代用している程度に手札は少ない。

「俺の手札を削るために仲間を使い潰したのか？」

「安くない代償だが、それでもお前を殺すためには必要な犠牲だった」

「そうかい」

阿呆が。

お前達の本当の勝利条件は、俺の情報を抱えた奴が一人でも逃げ延びることだったんだよ。

そうなれば俺の今までの某が聖書陣営に漏れただろうし、兵藤は俺を絶対に許せない敵と看做してそのまま俺は明確な聖書陣営の敵として、『茶番劇』に排除されていた筈だ。

そんな唾棄を腹に飲み込み、記憶にある『槍』を肩に掛ける曹操に水を向ける。

「で、ソレがお前の神器か？」

「ああ。神滅具『黄昏トワイル・ロンギエスの聖槍』。

神の子を殺した槍だ」

そう自慢げに嘯く姿に、手に力が入りすぎて担いだ豊和がミシリと悲鳴を上げる。

「ところで何だが、最後に聞いていいか？」

「なんだ？」

正面からなら負けはしないとも思っているのか、悠長な態度を見せる曹操に感情に蓋をして俺は尋ねる。

「お前らさ、英雄になるって意気込んでるけど、その後はどうするつもりなんだ？」

「どうするつもりだと？」

「『英雄』になったからって人生がエンディング迎えるわけじゃねえんだし、その後はどう生きるつもりなんだよ？」

赤い帽子の配管工なんかを見れば分かる通り、美女を攫ったゴリラを倒そうが、姫を攫った亀を懲らしめようが、偽物の黄色帽子を返り討ちにしようが、配管工はその後も弟と一緒に配管工を続けている。

つまりだ、

「『英雄』は称号であって職業じゃねえ。

だからあるんだろ？ 『英雄』になった後でどんな仕事をやりたいかって夢が。

農家だろうとプロレスラーだろうとアイドルだろうと、今回だけは笑わねえでやるよ。

だから聞かせろよ。

お前達が『英雄』になった後になりたいもんはなんだ？」

人の夢を笑えるような御大層な人間じゃないと誰よりも知っているからそう言ったのだが、しかし、帰ってきたのは揃いも揃って痛いところを突かれたと言わんばかりの間抜け面を晒したままの沈黙だった。

「……そうかい」

よもやここ迄阿呆だったとはな。

手間を掛けたんだし一つぐらいは汲んでやるかという気紛れを捨て、完全に興味を無くしたまま豊和を槍に見立て構える。

「来いよ。空っぽ共が」

そう煽ると、巨大な影が一步前に出た。

「一人で殺らせろ曹操」

「待てヘラクレス！」

総掛かりでやるべきだと制する曹操を無視し、ヘラクレスがバカ正直に突っ込んだ。た。

「くたばれえ!!」

怒りの形相で大上段から拳を振り下ろすヘラクレスに、俺は間抜けと思いつながらパ  
リイを敢行しようとし、構えた瞬間背筋に冷たいものが走った。

(そっかえばコイツの『神器』はなんだ?)

頭に血が昇り過ぎて起動していかないなんてことは流石にないはず。

だが見た限り装備型では無い。

同じく自立型でも無い。

邪眼に類する身体が変異するタイプでもない。

ならば可能性は一つ、接触発動型!!)

「ちいっ!!」

体勢を崩さぬよう足首だけで真後ろへと跳んだ直後、ヘラクレスの拳が触れた部分を起点に爆発が生じ粉塵が撒き散らされる。

「この爆発…『バリアント・デトネーション巨人の悪戯』か?」

だとしたら中々厄介だな。

一見すれば攻撃型の『神器』だが、物理魔力を問わずにダメージを爆発装甲の要領で防ぐ防御兵器として使えば非常に上げつない活躍を見込める『神器』であり、師団級の兵力さえをも使い手のタフネスが続く限り単騎で押し留めることが出来る可能性を秘めている。

なにより、戦闘の殆どが肉弾戦か銃火器に依存する俺との相性は最悪に尽きる。

「二目で見抜くか…やはりお前は危険だよアサシン」

巻き添えを警戒してからか成り行きを見に回る曹操達に構う暇はなく、連続して繰り

出されるヘラクレスの拳に触れまいと本気で回避に走る。

「オラオラオラ!!」

さつきまでの威勢はどこに行った!？」

回避に専念する俺に調子に乗ったらしいヘラクレスが嘲りを込めた挑発を飛ばす。

「さてな」

両の拳が引いたタイミングを見計らい豊和を廃棄して背中に隠し持ったマカロフを抜いて引き金を連続で絞る。

パンパンパン!!

軽い音が連続で響き9ミリパラベラム弾がヘラクレスの胴体に着弾するも、一発目の着弾と同時に爆発が生じ筋肉を破碎する運動エネルギーは纏めて消し飛ばされる。

「俺の筋肉は無敵だあっ!!」

粉塵を引き裂いて殴り掛かるヘラクレスの拳を躲しながら、神器のお陰だろうがと内心呆れつつ残りの連中に視線を向ける。

曹操とジャンヌはヘラクレスを助ける気はないらしく、コーラとポップコーンが似合いうような態度で眺めているばかり。

巻き込まれるのは御免だという意識の現れか、ヘラクレスを信用しているのかのどっちかまでは分からないが舐め腐ってるのは変わらないだろう。

ジークフリードの方は剣を何時でも振るえる体勢を取っているが、玩具を振り回した  
い餓鬼みてえな面からしてやはり加勢に出るつもりは無いらしい。

「余所見してんじゃねえぞ!!」

幾度かで大体を見切り終え、避けようと思えば他愛もなく避けれる所を紙一重を意識  
しているのにも気付かないらしいヘラクレスは、無駄に大振りの拳打ばかり繰り返して  
吠える。

そんなやり取りが少々飽きてきたから、少しは何か言つてやるか。

「脇が甘い。」

それに足腰の使い方もなつちやいねえ。

ただ筋力任せに振り回したつて大して威力は出ねえぞ」

「っ!? 舐めるなあ!!」

折角アドバイスしてやったつてのに、先程より更に雑に腕を振り回し始めた。

「クソツ!!クソツ!!クソツ!!」

テメエなんざ一発当たれば終わりなんだよ!!

あの犬つコロみてえによ!!」

と、余程気に入らなかつたのか、あんまりにも馬鹿馬鹿しい事を口走り始めた。

なので、少し腹がたつた。

「お前さあ、流石にそれはねえよ」

大きく間合いを離し、俺は肩を竦めながら吐き捨てる。

「ああ?」

「叩きのめした相手を踏みつけながら言うならまだしも、勝てねえ相手に向かってそうほざくなんて、英雄らしくねえだろ?」

そう厭らしい笑みを浮かべると、ヘラクレスはひくひくと鼻を膨らませ怒りを顕にする。

「テメ「やってみるよ」ああっ!」

構えを解き、ヘラクレスの間合いまで歩く。

「言ったことが本当か試してやるから、お前の自慢の筋肉で殴ってみろよ」

ほれ、とちよいちよいと人差し指で招いてやると、一瞬間の抜けた顔を見せてからヘラクレスはブチギレた。

「ふっ……、ふざけやがって……」

全身の筋肉を膨張させるように力を込め、ヘラクレスが拳を振り上げる。

「後悔しやがれーっ!!!」

ゴッ!! と衝撃と同時に硬い物がぶつかる音が脳裏に響き、次いで神器の爆発が襲いかかった。

「一発じゃあ終わらせねえ!!」

肉片も残らず叩き潰してやるあああああっ!!」

餓鬼の痲癩もかくやの勢いでヘラクレスは何度も拳を振るい、その度爆発が生じ周囲を粉塵で包み込む。

「チツ、ヘラクレスの奴やり過ぎだ」

「流石にあれでは一溜りもあるまい」

そんな感想が交わされる中、殴り疲れたのか肩で荒い息を吐いていたヘラクレスは、しかし僅かに晴れてきた煙の中の光景に息を呑む。

「っ、馬鹿な…」

「ふうっ!」

呻いたヘラクレスに見せつけるよう、俺は溜めていた息を力強く吐いて煙を吹き払う。

「冗談…でしょ?」

外野が信じられないという目をしているがどうでもいい。

「あーあ。折角の一張羅が台無しじゃねえか」

小周天だけでは厳しいかと念の為大周天までを用いて溜め込んだ『氣』の全てを用いてチャクラを廻し硬気功を行った結果、多少の擦り傷程度で済んだものの服までは耐え

きつてはくれず上着やシャツはボロボロになつてしまつた。

「嘘だ：テメエなんかイカサマをしたに決まつてる!!」

余程受け入れられなかつたのかそんな訳のわからないことを叫びだすヘラクレスに、俺は我慢しきれず笑つてしまう。

「イカサマだあ？」

当然してるに決まつてんだろ？」

何を言つているんだお前は？」

「お前達の『神器』なんつうイカサマを相手にすんだから、こつちだつてイカサマの一つや二つ用意して当然だろうが」

「ぐっ、」

あつさり肯定してやると、ヘラクレスは面白いように狼狽えた。

「じゃあまあ、今度は俺の番だな」

余つた『氣』を循環させ四肢に集中しながら構える。

「や、やらせるかあああつ!!」

感情を撒き散らしながらヘラクレスが腕を振りかぶる。

そんな野郎をまつすぐ見据え、俺は口を開く。

「李氏八極拳奥義『猛虎硬爬山』」

踏み込み、右手を貫く。

「ぐあつ!？」

ヘラクレスの自慢の筋肉はそれだけであっさり打ち抜かれ悶絶するが、その程度で終わらせない。

貫いた右手をわずかに引き五指を立て虎の爪に見立てた『虎爪掌』を更に一步踏み込み打ち込む。

「ぎいッ!?!？」

『氣』で強化された五指は筋肉を引裂き血を撒き散らす、俺は更に左手も『虎爪掌』と形作り更に腹を引き裂く。

「や、や、め、っ、」

そこからは只管引き裂く。

ヘラクレスの絶叫をBGMに、両の五指で肉を裂き骨を砕き内蔵を引きずり出す。

「が……あ、ぎ……」

繰り返すこと二十連撃。

引き裂きに引き裂かれたヘラクレスの胸から腹にかけてがスプーンでくり抜いたようにぽっかりと割り取られ血と臓物の匂いが周囲に満ちる。

「弱すぎだ。」

基礎から鍛え直せ」

もう息はないヘラクレスにそう投げ捨て背を向ける。

そうして解放されたヘラクレスは、ようやく倒れる事ができた。

## Another IF 『英雄派』【で】遊ぼう(8)

ぐらりと、と、視界が揺れ意志とは関係無しに崩れかけた膝を無理やり保たせる。

「やっちゃまったな……」

元よりいくばくかは食らう必要はあった。

仕留めるのに圧倒的実力差を見せつけてしまえば恐怖に負けて逃げられてしまう可能性があったから、苦戦しながらも勝ちを拾うよう調整する必要があった。

だが、野郎の馬鹿台詞にカツとなり必要以上に無茶を重ね余計なダメージを負ってしまった。

(これだから『神器』は嫌いなんだ)

幹部級の墮天使や準魔王級以上の悪魔にはてんで役に立たなくせに敵対すれば量産型でさえ油断出来ない。

実際ヘラクレスの拳は全力の硬気功で防ぎきれているが、『バリアント・デトネーション巨人の悪戯』のダメージは硬気功を抜いて内臓にまで響いている。

(だが、好都合だ)

殺すついでに仕込みを出来た事も含め、状況はかなりこちらに都合の良い方向に傾い

た。

あれだけの殺戮を見せれば大抵は仕切り直すべきと逃げに転じるだろう。

しかし、それを行った相手が弱っていれば？

普通はこう考える。

「ここで決めさせてもらうぞアサシン!!」

視界の端でグラムを上端から振り下ろすジークフリードの姿を捉える。

「まあ、そうくるよな」

裂帛の気合を吐くジークフリードに、俺は嘲りの笑みを浮かべその斬撃を敢えて正面から受けた。

くくく

舞沢の肩にグラムが食い込んだ瞬間感じた違和感に、ジークフリードは内心で困惑させられていた。

(硬い、それに重い!?)

まるで木刀で岩を打ったような鈍い感覚にジークフリードはヘラクレスの打撃に耐えた理由を悟る。

(だが、グラムの切れ味なら抜ける!!)

最強の魔剣への信頼感と手応えからジークフリードは確信し力任せにグラムを押し込む。

その予測は変わらず食い込んだ刃は服を裂き、そのまま舞沢の肉体をも裂きながら刃は走る。

「獲った!!」

肉を裂く感触と共に袈裟掛けに刃を振り抜いたジークフリードだが、普段であれば気づけたはず。

舞沢が絶妙に体幹をずらし、深く食い込むはずの刃を浅く肉の上面を滑らせていたことを。

しかしグラムの鋭さと自らの技量への自信、そして舞沢が弱っているという思い込みがその事実を気付かせず、それ故にジークフリードは致命的にしくじった。

「ギヤアアアアアアアアア!!?!」

切り裂かれた舞沢の血飛沫と共に、ジークフリードの絶叫が響いた。

「なんで!?!」

斬られたアサシンではなくジークフリードから苦痛の悲鳴が迸る事にジャンヌが困惑に満ちた声漏らされる間に、既に舞沢は次へと向かい動いていた。

『カノ』『ナウサズ』『ベルカナ』

引き出したハンカチを割いて伸ばし三画ルーンを刻む。

するとハンカチが燃え上がりながら一本の帯のように変化した。

その炎の帯をグラムが切り裂いた傷口に押し付けて焼き塞ぎ、舞沢は苦悶に身を折り隙を晒すジークフリード目掛け円を描くように身を翻し肩からの貼山靠を叩き込む。

「ガバツ!」

肺が潰れ押し出された空気が悲鳴に似たなにかとなり溢れるが、舞沢は更に容赦なく八極拳から酔八仙拳の一つ『曹国舅』へと型を変え身を伏せながら距離を詰め直し、起き上がる動作から伸び上がりつつジークフリードの喉笛を盃手に握った拳で穿つ。

ゴキリツ!!

突き刺さった拳はジークフリードの気道を潰すに留まらず、首の骨を砕き動脈を破裂させ一息に殺し尽くす。

「いへっ…!?!」

「ジーク…っ?!」

首を打たれ膝を折るジークフリード。

その名を呼ぼうとしたジャンヌは、しかし突如二条城を照らす結界の光が遮られた事に危機感を感じその正体を確かめ、そうして目撃した正体に絶句する。

「へ、ヘラクレス!!?」

それは舞沢が殺したヘラクレスが立ち上がった事によって生み出された影だった。

ヘラクレスが実は生きていた?

それは絶対にあり得ない。

舞沢が割り取った腹部は変わらずポツカリと開いたままでそこからは吐き気のする悪臭が漂っている。

何よりその目に生氣はなく、濁った瞳は焦点すら定まっていない。

「なんで、なんでなのよ…」

あまりに理解し難い事態に恐怖から後退るジャンヌ。

それに反応したのかヘラクレスの死リビンク・デッド、体が半開きになっていた口を開き、喉を震わせ「ううああああ…」と意味の取れない音と死臭を振りまきジャンヌへと襲い掛かった。

「来るなああああつ!!」

迫りくるヘラクレス目掛けジャンヌは恐怖のまま聖劍創造ホーリー・パルスで生み出した退魔の聖劍を投げつける。

造られた聖劍はあやまたずヘラクレスの体に突き刺さり、様相を針鼠の様へと着飾らせた。

しかし、

「うううあああ…」

ヘラクレスは聖剣に貫かれたことに全く意に介した様子もなく相変わらず意味のない呻き声を漏らしていた。

「なんでよ!？」

わたしちゃんとゾンビ殺しの聖剣を造ったのに!？」

不死者特攻の筈の聖剣が効かなかったことに狂乱するジャンヌ。

逃げることも忘れ立ち止まり喚き散らすジャンヌをヘラクレスが抱込むように捕まえた。

「イヤアツ!! 離して!?!？」

丸太のような腕で締め付けられ解放するよう必死に懇願するジャンヌに対し、ヘラクレスからの返答はその首筋への噛みつきだった。

ぞぶり!

「ギヤアアアアア!!」

噛み付いたヘラクレスは更に歯を立て肌を食い破るとじゅるじゅると音を起てジャンヌの血を啜り始めた。

噛み付かれた痛みと生きたまま血を啜られる恐怖と嫌悪感からジャンヌは失禁し、臭い立つ生暖かい液体で下腹部を濡らしながら絶叫する。

前世の汚辱にも勝る拷問に晒されるジャンヌに対し、曹操は当然助けに走りたかったが、しかし舞沢が許しはしなかった。

「さて、後はテメエ一人だ」

斬られた上着を脱ぎすて、逆さに持った豊和を構える舞沢。

「二人に何をした？」

一瞬目を離せば死ぬという直感に従い、『黄昏の聖槍』トウル・ロングスを構えた曹操は疑問の解決と隙を探すため問を放つ。

「どっちも『呪』に喰われたのさ」

「しゅ？」

そうだと舞沢は悪辣を極めた様な笑みを向ける。

「ヘラクレスには殺すついでに体内に陣を刻んで『僵尸の法』を施した。」

「テメエも大陸生まれなら聞いたことぐらいあんだらう？」

「……ああ」

「僵尸。またはキョンシー。」

自然発生または道教の法師が使役する中国大陸由来の動く死体リビング・デッドの事である。

過剰な迄の打ち込みは殺戮と同時に『僵尸の法』の存在を隠す意図もあったのだ。

「貴様、道教まで使うのか」

「仙道のついでに学んでおいた。

アレの良いところは聖属性を意に介さなくせに日の光に当てるだけで消えるって  
辺りが便利なんで、即席の死体人形フレスコ・ユゴレムとして時折使ってるよ」

殺した遺体さえ兵器として振るう悪辣さに曹操の口から「外道が」と罵倒が漏れる。

「ジークフリードはなぜ苦しんだ？」

この間にも舞沢はあつさり答えを暴露する。

『厭魅の法』。

俺自身を触媒に受けた痛みをそっくりそのまま返してやったのさ」

「っ!? だからか!」

舞沢から返されたのはグラムの斬撃、即ち『竜殺し』による一撃だ。

グラムに斬られた処で只人である舞沢には『竜殺し』の呪いは意味をあまりなさず、切れ味のいい剣によるダメージだけで終わるが、『龍トウワイス・クリテイカルの手』を持ち竜の因子を宿すジークフリードにとっては『竜殺し』の呪いは致命的なものとなつたに違いない。

恐ろしいを超越し悍しいと思うほどの周到さと悪意に曹操は不意に溢してしまふ。

「いつから仕込んでいた？」

「お前らを知る前からだよ」

なんでもないと言うように舞沢は嘯く。

「一秒後に悪魔が現れるかもしれない。」

一瞬を待たず墮天使が襲ってくるかもしれない。

とうの昔に天使が狙いを定めていて引き金をいつ引くかと天蚕糸ね引いているかもしれない。

俺はいつもそう考えて、それに備えているだけだ。

お前らに見せた札は、それ等の幾つかを流用してるだけだ」

全ては聖書陣営を滅ぼすため。

そう嘯く舞沢に、曹操はただただ込み上げてくる感情を吐き捨てた。

「狂ってる!!」

「そんなこと言われる前から知ってるよ」

そう、舞沢は豊和を突き立てるため踏み込んだ。

「くっ?!!」

視認するのも難しい速度で突っ込んできた舞沢を、しかし予想していた曹操はしっかりとその動きを捉え、反撃に心臓目掛け『黄昏の聖槍』トウルーロンギズを突き立てる。

(二の槍は考えるな!!)

この一撃で心臓を貫く!!)

一瞬の間さえ与えてはならないと覚悟を決め、相打ちになっても仕留めると槍を振

り抜いた曹操。

「だからそれが狙いなんだよ!!」

どすり、と『黄昏の聖槍』トゥルー・ロンギヌスが舞沢の『腹』に突き刺さる。

その瞬間曹操は己の愚を悟った。

「しまっ…」

「あんだけ脅せば狙いは頭か心臓のどつちかになるよなあっ!!」

先の会話さえもが誘導であつたと嗤いながら舞沢は更に前に踏み込み、『黄昏の聖槍』トゥルー・ロンギヌスを引き抜くのが不可能となるぐらゐまで自らの身体に押し込む。

自ら傷口を深くしてまで槍を拘束した舞沢に一瞬躊躇ってしまったものの、即座に槍を手放し下がる曹操だが。

その一瞬が決定打となつた。

「シヤアアツ!!」

鋭く呼吸を吐き出し槍を腹に刺したまま片足一步で拳の間合いに潜り込んだ舞沢は両手の五指を畳み、ほぼ密着状態からの掌打を叩き込んだ。

「ゴブツツ?!?!」

八極拳で言うところの暗剄、またはジークンドーにおけるワンインチパンチに相当する掌打を受けた自らの肋骨がベキベキと音を立てて碎ける音を聞いた曹操は、直後に発

生じた衝撃に吹き飛ばされ血を吐きながら5メートルもの距離を舞った。

「がああああああああああああ!!」

敗北の事実が受け入れられないと言うかのように絶叫しながら吹っ飛んだ曹操を残心を残しつつ見届け、倒れたまま起き上がれず呻きのたうつのを確かめた舞沢は構えを解き腹を貫いたままの『黄昏の聖槍』トウルー・ロンギヌスを引き抜く。

「っ!」

肉を擦る痛みに耐え槍を引き抜くと、無造作に投げ捨て曹操の元へと向かう。

「アガッ!! カハッ!」

砕けた骨が肺を傷つけたのか血を吐きながら浅い呼吸を繰り返す曹操。

「納得したか?」

そんなわけ無いよなと思いつつ尋ねると、曹操は恐怖を混じらせながらも怒りに満ちた目で舞沢を睨みつけた。

「また、だ!」

まだ、俺は、戦え、る!!」

立ち上がるうとうとのか地面を引っかきながら曹操は血を吐き怨嗟を垂れ流す。

『英雄』になるんだオレは!!

そうじゃなきゃ、オレは何のために生まれてきたんだ!!」

生きる意味が欲しい。

聖槍に振り回されるだけの惨めな生き方は嫌だ。

死の縁にてそう裡なる悲鳴を溢す曹操を、舞沢はなんの感情も見えない目で見下ろしながら告げた。

「お前、間違えてるぞ」

「…っ!?!」

見上げた曹操の殺意の籠もる視線を受け止め、それでも小揺るぎもせず舞沢は言う。

「歴史に名を刻み世界を動かすのは『英雄』特別な個人なんかじゃねえよ。

そいつを成せるのは、血を吐いても止まらないって諦めずに走り続けられるだけのど

こにでもいる『偉人』只の人だ」

『英雄』に世界は動かせない。

『英雄』は世界を変えられない。

何故なら、『英雄』とは、

「どこかにいる誰かのために破滅してその滑稽さで愉しませるのが『英雄』の役割なんだからな」

幾多の時代を生きた。

『英雄』と呼ばれる者の生涯とその生涯を知った後世の言葉を見た。

だから舞沢はこう思った。

ああ、『英雄』とは世界に捧げられた『生贄』の事だったんだな。と。

「違う!!」

舞沢の言葉を血涙を零しながら曹操は否定する。

「『英雄』は希望だ!!」

だからオレは、『英雄』になりたいとそう思ったんだ!!」

抱いた願いを否定させないと叫ぶ曹操に、しかし舞沢は底の見えない闇を湛えた瞳で曹操を見下ろしたまま「だったら」と無表情で問い掛ける。

「お前が知る『英雄』の中に、最後まで幸せで居られた奴がどれだけ居るんだ?」

「……あ」

その問いに曹操は何も言えなかった。

「例えばコサラの王『ラーマ』。

王子の身分でありながら国を追われ、惚れた女を魔王に穫つ攫われた悲運に見舞われながらも十年以上の歳月を賭して数多の冒険の果てに魔王を討ち女を取り返した上に国に凱旋することもなかった。

確かに素晴らしい英雄譚だよ。

だけどその末路は?

十年の歳月がラーマに疑念を植え付けた。

愛した女は嘗てのままで居てくれたのか、そう信じきることが叶わなくなった。その果にどうなった？

簡単さ。

愛した女は身の潔白のために死んだのさ。

多くを得た男が、本当に欲しかったものを手に入れて自分から手放した。

それがラーマという『英雄』の全てだ」

違うか？ と問う舞沢に曹操はただ睨みつけるだけで答ええない。

その態度に舞沢は軽く肩を竦めると「ならコイツは？」と違う話を切り出した。

「『アーサー・ペンドラゴン』」。

エクスカリバーっていう世界有数の聖剣の所持者であり、一時期その子孫が『禍の団』にも居たから知ってるよな？

隠された王の遺児として聖剣を抜き、数多の武器と英雄に足る騎士を従え王として割れた国を建て直した。

確かに立身出世の物語としては素晴らしいよ。

だがその末路は？

身から出た錆で自滅したんだよな。

助言者の言葉を無視してそうとはしらずに実姉を寝所に引き込んで子を産ませ、王妃は王妃で騎士との不倫に耽り、剩え騎士達は自分の信じる正道に暴走したあげく国は崩壊。

終いには姉が生んだ子がクーデターを起こしてしっちゃかめっちゃかになっちゃまった。

まさしく『英雄』らしい末路だと思わないか？」

そう問い掛ける舞沢に曹操は掠れた声を漏らす。

「…やめろ」

しかし舞沢は聞く耳を持たず、更に語る。

「ああ、お前の隣に居た英雄の中の英雄ヘラクレスを忘れちゃいけないよな。

あの英雄ほど滑稽な様も珍しい」

語る。語る。語る。

舞沢は熱に浮かされたように、忿怒に染まった顔で幾多の英雄譚を語る。

アイルランドの魔槍の英雄。

デンマークの猛き王。

ネーデルラントの竜殺し。

イケニ族の復讐女王。

インドの授かりの英雄。

カルタゴの雷光と呼ばれた軍師。

ロシアの恐るべき皇帝。

死ぬまで遠征を繰り返した征服王。

うつけと呼ばれた日本の武將。

親子二世代でアジアを手中に収めながらも、とある離島の国に手を出し制覇に躓いた遊牧民の長。

そして、後世で他の英傑を盛り上げる為だけに悪役の多くを背負わされた、乱世の奸雄と謳われた將。

「もういい、もう、やめてくれ……」

功績の全てが霞むような末路をいくつも並べられ、曹操は俯き地面を濡らしながら懇願する。

そんな様を眺めながら、しかし舞沢はなんの感情も見えない顔で告げる。

「なら、終わりにしよう」

そして、いつの間にか取り出した瓢箪ひょうたんを手に舞沢は告げる。

「最後の慈悲だ。お前に今から見栄英雄えるような死しに様てをやるよ」

## Another IF 『英雄派』【で】遊ぼう（9）

すぐ側で煌々と燃え盛る炎が舞い踊る。

だけどここの光景を幻想的と、そう思うような奴は少ないと思う。

炎を見た凡その者がそれは夜を明るく照らす安寧を齎すものとは程遠い、暗くどす黒い憎悪に焚かれた恨みの火だとすぐに理解出来るだろうからだ。

その炎の中心に、『ソレ』は居た。

女だ。

しかしあんな炎に纏わり付かれた女がマトモな筈もない。

それを示す様に女には両腕が三対生え、臍から下は鱗が生えその下半身は蛇でできていた。

髪は乱雑に乱れ、見れるぐらいの美貌は負の感情で歪み、双眸には炎にも勝る憎しみが絶えず燃え盛って口から呼吸と共に憎しみの炎をふしゆるふしゆると漏らしていた。

『ソレ』は陰陽頭と名乗った男から渡された瓢箪に封じられていた転生悪魔の成れの果て。

理性を失し、名を失いただの暴力装置と化したソレに、俺は名前をやった。

「気分はどうだ？ 『だら』」

その由来は『姦姦蛇螺』。

助けを請うた村人に裏切られ、まつろわぬ蛇神と合一した畏れられる哀れな女。

最近では『都市伝説』と名を変え、人伝の口伝からインターネットのオカルトサイトに場を変えた最新の怪談により生まれ変わった新世代の妖怪。

その呼び名の一つを与え『呪』で縛り、殺した『英雄派』の魂と死を糧に名も無きはぐれ悪魔を『姦姦蛇螺』の似姿を持つ妖怪へと生まれ変わらせた。

他の国ならもつと手間を掛けねば不可能だったが、この国の言霊信仰と『名付け』に深い意味があるという考えから比較的容易に済ませられた。

「たす、たすけ…」

『だら』に抱かれるように拘束され憎しみの炎で死ぬことも許されず焼かれ続ける曹操の掠れた声に、俺は意識を向けることもなく告げる。

「戻れ『だら』」

そう命じると『だら』は怨めしそうに俺を睨みつけるも、しかし『呪』には逆らえず炎を纏いながら曹操諸共瓢箪へと吸い込まれた。

「…ふう」

『だら』が入った影響で血のようなどす黒い赤に色を変えた瓢箪の蓋を締め、簡易の封

を施してから俺は軽く息を吐く。

(終わったな……)

首尾は上々。

目撃者は例外なく塵殺され俺を『アサシン』と知る者は少なくとも京都には居なくなつた。

(残党の根切りもしておかないとな)

曹操がどこで調べ上げたのかも調べて潰さねばならないし、俺についての情報を『英雄派』内で共有させていたか分からない以上容疑者は残さず消さねばならない。

まだやる事は多い。

結末を確認したらしく周囲を囲む人払いの結果が解け夜闇が再び帳を降ろし始める中、俺は立ち去ろうとしてふと、地面に転がる『黄昏の聖槍』に視線が止まつた。

「……」

持ち主がまだ死んでいないからか、槍はただの棒切れの様に転がったまま。

俺はそれを持ち上げ、つい漏らしてしまった。

「…ヨシユア。」

少し、疲れたよ」

何をやっているんだと頭の片隅で思いながらも、だけど口からは普段出せない言葉が

溢れていく。

「お前が馬鹿な信徒のせいで死んでからもう2千年近く経つたのに、人はあの頃から殆ど進んじやいねえよ」

無意味だと分かっている。

コレはヨシユアの死を確定させた『ロンギヌスの槍』なんかじゃない。

本物の槍は、とつくの昔に無くなっている。

俺が壊したからだ。

槍だけじゃない。

最後の夜に使った盃も、遺体を包んだ布も、腕を打ち付けた杭も十字架も遺体を収めた棺さえも、全て焼いて灰にした上で川に流して回収出来ないようにした。

全ては、これ以上ヨシユアに世界を背負わせ継らせないために。

だけど無駄だった。

「どれだけ待っても誰もお前を分かっちゃくれない。

自分達の都合の良いようにお前の言葉を利用して、人も、神も、人外も、誰もが同じ所をぐるぐる回ってばかりだ」

人を謀るために槍を捏造した奴が現れた。

伝説に肖って偽物の盃を本物だと持ち上げた。

己の主張を正当化するために紛い物の釘と十字架を掲げた。

自分達が正しいと言い張る為にヨシユアをユダヤの信者という事実から切り離し、ヨシユアを神の分け身と崇め独立した。

他ならぬ『聖書の神』がヨシユアの伝説を利用して『神器』を造り出した。

「神が必要なくなる日」って、いつ来るんだヨシユア。

後どれだけ待てばお前は、神人じゃ戻なくなるんだよ?」

馬鹿げている。

ヨシユアとは名前以外なんの関係もない神が造った贋作に何を愚痴っているんだ俺は。

これじゃあまるで、神に縋る盲者じゃねえか。

それでは駄目だ。

立ち止まるな。

歩き続けろ。

人の進歩を妨げる人外を排除しろ。

神への憎悪を抱き続けろ。

そうじゃなきゃ、俺はどこにもいけないのだから。

「う……」

微かな呻き声に、カチリとスイッチが切り替わる。

「ちっ、まだ生きてんのか」

それは僵尸ヘラフレスに食い殺されたと思っていたジャンヌから発せられたものだった。

生前の記憶が殺すのを留めたか、はたまたジャンヌの体力が意外にあったのか、まあいいさ。

「せっかくだ。八坂への土産にくれてやるか」

芳赤の敵討ちとして一人ぐらいは廻り殺したいだろうからこのまま連れて行くかと思つた直後、すぐ側に莫大な『氣』が発した。

「真逆、生きてお目にかかれるとはな」

また、という言葉葉は内にしまい俺は『氣』の持ち主に向き直ると、予想通りの姿を見留め膝を着いて包拳礼を捧げる。

「お目に掛かれて光栄です『孫行者』」

そう告げると、バイザータイプのサングラスを着けた黒い老猿は大玉の数珠を弄びながら手を降る。

「そう畏まるのはやめてくれ。」

「こつちは意気揚々援軍になんて息巻いておきながら出遅れた間抜けなんだからな」  
飄々と告げる。

「それと、今は『闘戦勝仏』で通ってんだ。

出来ればそっちにしてくんな」

軽薄とも取れるぐらいフランクな態度でそう名乗る孫行者に「わかりました」と手を解く。

「しかし、自分も仙道を齧る身。

儀礼は欠かせぬことを容赦願いたい」

「硬いねえ」

そう断れば孫行者は呵々と笑う。

「まあそれはそれ。

して、一つ頼みたいんだがいかいかい？」

「なんでしよう?」

「厚かましいのは承知だが、お前さんの手柄を少しばかり分けちゃくれねえか?」

「……」

そう笑う孫行者に俺は少し考え、ならばと答えを口にした。

「二つ飲んで頂きたい件を聞き入れていただければ何なりと」

「聞こう」

「一つ、今件の被害者である『裏京都』に対し可能な限り便宜を図ること」

「承知した。」

帝釈天は渋るだろうが、ぶん殴ってでも聞き入れさせよう」

ニヤリと笑う孫行者。

「んで、もう一つは？」

「須弥山にコイツの封印を願います」

そう『黄昏の聖槍』を前に出した。

途端、孫行者の目から遊びが消え試すような光が宿る。

「ほう？」

持ち主に世界の覇を握らせるとまで言わせるそいつを須弥山にくれちまうのかい？」

「人の手に余る物など、誰の手にも届かぬようにしてしまふに限る。」

闘戦勝仏を従える須弥山の神仏修羅なら叶うと思いましたが？」

人の手に余るといふ気持ちは本当だが、全てが全て本音ではない。

聖書陣営の動乱の中、今まで特段表立った動きを見せていない須弥山の思惑を一つでも拾うためにふっかけているのだ。

俺の言葉に暫し沈黙を挟んだ孫行者は、突如呵々大笑し始めた。

「世界を握る槍を『人の手に余る』と簡単に手放せるとは、こいつは中々に愉快な奴だ。」

いいぜ。須弥山の名代、闘戦勝仏の名に賭けてその槍を今より先に人の世に落ちぬよ

う封じてやろうじゃないか」

そう奪い取るように槍を受け取る孫行者。

「序であやかし諸共使い手も預かろう。」

そのあやかしも人の手には余るだろう？」

よくもまあぬけぬけと。

とはいえその言葉もまた事実。

『姦姦蛇螺』はまだ若い妖怪だが、怨みだけで神と合一したという伝説は伊達はなく、俺の使役術が微妙だという点を差し引いても紛い物の『だら』でさえ中々にじゃじゃ馬で封じるのもかなりキツイ。

「流石の慧眼。

感服いたします」

持て余すぐらいなら手放して構わない。

そう大人しく槍と一緒に瓢箪も渡してしまう。

「じゃあな仙人崩れ。

今度あつたら手解きをくれてやる」

「感謝を。

いずれその日を楽しみにしています」

正直恩恵とトラウマの比率が二度と受けたくないと思う方に傾くぐらい酷い修行だったが、一度言い出した以上どうあっても逃げられないのだから、その時は白音も巻き込んでその後の面倒も含め後の事は押し付けさせよう。

そうして去っていく孫行者を見送り、本当に去ったのを『氣』で確認してから俺も二条城を後にした。

~~~~~

3日後、俺は白音への土産を手に戻りの新幹線を待っていた。

後始末を済ませ次第すぐに駒王に戻る予定だったが、見た目以上に重傷だった事が尾を引き、不幸にも八坂の目の前でぶっ倒れてしまったのだ。

お陰で命の恩人の怪我を放置しておけぬと八坂に拘束され、二日ほど『裏京都』へ強制滞在させられたのだ。

で、

「チクショー!!」

折角京都でエロエロな修学旅行になると期待してたのにー!!」

『良かった!!』

いつものような事が何も起きなくて本当に良かった!!」

なんの因果か兵藤共と同じ新幹線で帰る羽目になったのだ。

「聞いてくれよ舞沢!!」

俺だけが、俺だけが、修学旅行中ずっとネットカフェで寝泊まりする羽目になったんだよう!!」

目敏く俺を見つけた兵藤は気付くなり俺に縋りついてきた。

「知らねえよ。」

自業自得だろ」

構わないと余計にウザいので片手間に相手をしておく。

「俺が一体何をしたって言うんだ!?!」

「普段の行いを省みろ性犯罪者」

「犯罪なんかしていいねえ!!」

俺はただおっぱいが見たいだけだ!!」

「自供したから強制わいせつ罪で実刑判決確定だな。

ええと、携帯携帯」

「ふざけんなあ!!?!」

本気で通報しようとしたら全力で引き止め始める兵藤を尻目にアザゼルが俺に声を

掛けた。

「ちよつといいか？」

「なんだよ？」

「今回の件で、敵方に『神滅具』が関わっていたのは本当か？」

「ああ」

適当に誤魔化して尾を引いても面倒と判断し素直に応じておく。

『黄昏の聖槍』『絶霧』『魔獣創造』の3つは確認した。

ああ、『絶霧』と『魔獣創造』の使い手は殺したぞ」

「……は？」

そう教えると笑える間抜け面を晒してくれるアザゼル。

「まさか、一人で勝ったのか？」

『神滅具』だろうと使わせなきや持ち主はただの人間だ。

殺しようはいくらでもあるだろ？」

そう皮肉を込めて嗤うとアザゼルはドン引きした様子で一步下がる。

『黄昏の聖槍』はどうした？」

「おっとり刀で駆けつけた須弥山からの援軍に使い手ごとくれてやった。

気になるなら自分で確かめな」

そう言うのアザゼルは面倒と言いたげに頭を掻いた。

「糞、よりにもよって帝釈天の所かよ。」

いや、ハーデスの手に渡らなかつただけまだマシか」

様をつけるよ糞鳩が。

内心で罵倒しつつもういか？ と話を切り上げるよう暗に促す。

「ああ。」

色々と言いたい事はあるが、手の一つも貸せずに悪かつたな」

「別に」

余計な茶々入れてくれなくてありがとうございます。

まるで自分達のやるべき事を全て押し付けたみたいな見当違いな罪悪感に内心で舌を出しながら嘯しておく。

「俺は俺の仕事をやっただけだ。」

感謝も謝罪もお門違いだよ」

いずれテメエも確実に殺すんだ。

それまで精々身勝手に仲間意識でも育ててくれ。

その方が殺りやすいからな。

『まもなく、東京行きの新幹線が参ります』

「おっと。」

戻ったら色々と聞かせてもらおうぜ」

そしていいタイミングでアナウンスが流れ、アザゼルは引率のために離れていく。

「テメエもさっさと戻れ」

「ぎゃあっ!?!」

線路に突き落として新幹線で轢かせたら行けるかと考え、失敗時のリスクの高さから辞めて兵藤を内側へと蹴り飛ばす。

「糞、覚えてやがれ!!」

俺の中の可能性で手に入れた新たな力で今度こそお前に勝つてやる」

押し着せて勝つて嬉しいのかと聞きたくなる捨て台詞を吐いて学生共の元へと向かう兵藤を尻目に新幹線を待つっていると、今度は反対側から知り合いがやって来た。

「見送りは要らんと言つたはずだが?」

そう名湯ジト目を向けると、人に変化した八坂と娘の九重が居た。

俺の言葉に八坂は袖で口元を隠し眉をハの字にする。

「言うてくれるな。」

そなたには返しきれぬ恩があるのだ。

もう少しばかり返させてはくれぬか?」

「これで十分だと言った覚えがあるんだが？」

「返し足りんと返した筈ぞ？」

「…つたく」

どういう訳か倒れた後からずっと、八坂は妙に距離を詰めるようになっていた。

まさか惚れた？

無い無い。

大方、次があつたときに備え覚えを良くしておこうって程度だろう。

確かに八坂は女としての魅力に富んでいる。

かなり大きい胸の辺りで趣味が分かれるだろうが、少なくとも…あ、

「死ねええええええ!!」

「阿呆」

案の定、自分の性癖にどストライクな八坂と喋っていたというだけの理由で無駄に嫉妬と殺気全開で突っ込んで来た兵藤を、見もせず突き出してきた拳を掴んで適当な方向にぶん投げる。

「あ、」

運が悪いことに投げた方向は線路側で、しかも測ったかのようにタイミングよく電車が通過した。

「ギヤアアアアアアッ!!」

『最後の最後でこれかアアアああ!!』

電車に撥ねられた兵藤の悲鳴と兵藤のせいで不幸に見舞われた『赤龍帝の籠手』の悲鳴が混ざり合つて響く。

「…大丈夫なのか？」

「悪魔だから平気だろ」

いつそこそこで死んでくれたら楽なんだが、生憎と跳ね飛ばされた兵藤に死にそうな様子はな。

今度試しに、ガソリン詰めたタンクローリー突っ込ませてみるか。

「酷い様じゃな。」

悪魔というのは本当に見下げ果てる生き物じゃな」

心底見下した様子で九重がそう吐き捨てるのに内心同意しつつ頭を撫でる。

「思つても態度に出すな。」

いい女つてのは顔には出さず腹の底で嗤うもんだ」

「わかつたのだ舞沢様!」

頭を撫でてやるとよほど嬉しいらしく、九重は嬉しそうに顔を蕩けさせる。

…なんか、後ろで八坂が企んでる気配がするが気のせいだよな？

「いいか？」

悪魔つてのは企みが浅いくせにプライドだけは高いから、持ち上げて気分さえよくしてやれば勝手に踊ってくれるから上手く踊らせて美味い汁は骨までしゃぶってやれ」

結局の所、『裏京都』は聖書陣営と手を組む道を選んだ。

最も、『禍の団』との事態解決までと期限を設けた上で、『裏京都』が可能な部分で協力するという実質空手形であり、のらりくらりで適当に躲すと八坂自身は嘯いていた。

その裏で須弥山とは陰陽寮とともにがっちり手を組んでいるのだからなんだかんで狐の妖怪は侮れない。

「それじゃあ、そろそろ行くぜ」

そう手を振り漸く来た新幹線に乗り込む。

「舞沢殿」

呼ぶ声に儀礼的に振り向き、そして思わず目を開いた。

「またおいで下さい。」

『裏京都』はそなたをいつでも歓迎しますぞ」

そう語る八坂の後ろに、もういない二人の妖怪の姿を見た。

「…ああ、気が向いたらまた来るよ」

女々しいなとそう自虐し、だけどそれを見せてやるわけには行かないなと俺はそれだ

け言つて、今度こそ薊過ぎ去つた過去と芳赤過去に背を向けた。

言った筈だ。正面から不意打ちだつて。

再度開かれた戦端は、その始まりから苛烈を極めた。

『主よ、愚かしき叛骨の徒の末路を御照覧あれ!!』

『魔獣創造』により生み出された幾頭もの四足の狗を伴いデュランダルⅡを構え飛びかかるストラーダ。

しかし舞沢は使い手の意を汲んで柄を伸ばし槍と成したドウリンダナを奮い、獣全てを斬り裂き捌ききる。

だがそれはストラーダも想定内。

デュランダルⅡを振るいドウリンダナを打ち上げ開いた右半身に光力を纏った左腕を突出す。

「足りねえよ」

しかし舞沢は走圏を駆使し回転しながら左腕を盾でパリイして剣へと柄を縮めたドウリンダナを振るう。

『ぐうっ!!』

臂力に加え遠心力をも加算させたドウリンダナの迅速の斬撃を身を沈め紙一重で躲

したストラーダだが、兜までは間に合わず髑髏の意匠を施された兜は首を刎ねられたように宙を舞う。

神より賜った鎧を損なう失態に己の至らなさと成した舞沢への赫怒に意識を染めるストラーダだが、反して状況はそれを許さない。

舞沢はダンツ!!と地面が浅く陥没する程の震脚を踏み、左肘を眼前のストラーダに振り抜いていた。

逡巡の間も置かず両腕を盾に肘を防ぐも繋げた虎爪掌が腕を落とし逆袈裟にドウリンダナが振りあげられる。

「甘いつ!!」

しかしストラーダとて一度は神域に足を掛けた武人。

振りあげられたドウリンダナをデュランダルの柄尻で叩き落とし光力の波動を放つ。

だが舞沢は焦る様子もなくバックラーで波動を防ぎながら後退。

仕切り直される戦場、互いにさしたる手傷を負うことなく、しかし天秤は僅かにストラーダの不利へと傾けられた。

「成程。」

確かに言うだけはあるようだな」

自然とストラーダの口から賛辞が溢れる。

武器は当然ながら、なによりもフアランクスという古い技術とドウリンダナを組合せたその堅牢さがストラーダを感心させた。

それも当然。ドウリンダナとフアランクスの組み合わせは舞沢が相当昔から考えていたモノだ。

ヘクトール將軍程に才能は無いと自覚していた舞沢は、ならば自分なりのドウリンダナの扱い方を模索した。

そうした中で舞沢はスパルタでフアランクスを身に着け、その問題点こそドウリンダナに相応しいのではと着目した。

護り、持久戦に高い効果を発揮するフアランクスだが、反して重歩兵で獲物が槍である以上近距離での立ち回りは話にならない。

だがイピクラテス式の軽歩兵仕様なら機動性を確保し、かつ剣にも槍にもなるドウリンダナなら距離に応じた形態で対応出来る。

剣でも無理な至近距離なら八極拳で殴り飛ばせばいい。

そうやって考えに考え尽くし、集団戦術であるフアランクスを単一で運用する立ち回りを研究し、そこで己に足りない要素を集め鍛錬以外の掛けられる時間の大半を注ぎ込んで研いたドウリンダナ専用の戦技こそが今からストラーダが相対しているものだ。

千年以上の積み重ねは、盲たとはいえ格上である筈のストラダーを確かに追い詰めていた。

(しかし解せぬ)

ドウリンダナの錆と散った狗を再生産しながらストラダーは一つの疑問を過ぎらせる。

(あの盾、一体何だ?)

主より直接洗礼を受けたストラダーが現在内包する光力はセラフに並ぶ。

だというのに、あの盾は並の悪魔なら塵も残さぬほどの光力を防ぎきった。

(金属ではないからアイギスの盾ではない。)

同じくプリドウエンでもない。

飾りの無さからオハンも否)

セイクリッド・ギア

神器の中に含まれていない知り得る限りの神話に連なる盾を挙げるもその特徴から候補を省き、一枚だけ特徴に当て嵌りそうな可能性に至る。

(大アイアスの盾。)

それがあの盾の正体か)

トロイア戦争に名を残す七枚の皮を重ねた盾。

その逸話から放たれたモノに対して絶大な防御力を秘めているというのはなんらお

かしくはない。

サイズが小さいことは不可解だが、他に思い当たるような強力な盾はない。

舞沢の経歴を知っていたら絶対にあり得ない結論をそうだと決め付け、ストラダーが狗をけしかけながら自らもまた前に出る。

(如何に大アイアスの盾であろうと主の加護によりデュランダルを超えたデュランダルⅡを正面から防げる道理はない!!)

盾を落とさぬ限りデュランダルⅡ以外は役に立たぬと先ずは盾を狙い剣を振り下ろす。

「シィッ!!」

「ひゅう」

裂帛の気合と共に振り下ろされたデュランダルⅡを舞沢は盾ではなく独特な呼吸と共にドウリンダナで受け流し、そのまま背中からショットガンを抜いて半歩下がりがら引き金を絞る。

放たれた散弾は衝撃でストラダーの追撃の手を止めさせるも、しかし鎧に傷を付けることなく弾かれる。

「鉛玉程度が主の御加護に傷を付けられるものか!!」

銃は牽制にしかならぬと嘲り開いた間を詰めようとしたストラダーだが、舞沢が

シヨットガンを手放しその手にピストルを握っていることに気付く瞬時に射線から外れる。

（あれは先程デュランダルの柄を破壊した銃。

アレだけは危険だ）

先程デュランダルを奪われた事からあの銃の弾には何らかの処置がしてあると危険度を高める。

故にストラーダは狗を前に出す。

「チイツ!!」

大量の狗に対し舞沢はドウリンダナを腰にフアランクスを解いて八卦掌を中心に拳法で捌き更にピストルを3発連射して狗を消し飛ばす。

（やはり奴の切り札はそれか）

姿を消していた時と同じ様子で狗が消滅したことを見たストラーダは、やはり銃はこそ真つ先に破壊すべきと狙いを定める。

そして舞沢が銃を六発撃ちきりシリランダールから排莖した所を狙い七匹の狗を舞沢にけしかける。

「嫌なタイミングを!!」

再装填の間を突かれ悪態を吐いて装填を中断し七匹の狗を殴り飛ばす。

その隙をストラーダは突いた。

「貰った!!」

「っ!」

拳を引き戻す際に生じる隙、卓越した舞沢であっても生物である限り無くすることは叶わないその緩みを正確に突かれた舞沢は、間を作るためリボルバーを手放し敷居とす

る。  
当然大量生産品である S & a m p W が、模造品とはいえ聖剣を防げる筈も無く微かなラグを生むだけで真つ二つに切り裂かれる。

憂いは断つたとストラーダは決着を着けに走る。

「地獄で主に侘び続ける!!」

放てる最大の光力を込めたデュランダルⅡを振り上げる。

悪あがきか舞沢は稼いだ間でショットガンを向けているが、通じないことは既に証明されていると無視しそのまま振り下ろす。

それが、罨だと気付いたのは終わってからだった。

ドパンツ!!

デュランダルⅡが舞沢に届くより先にショットガンから散弾に加工された禁呪弾が吐き出される。

禁呪弾は着弾と同時に『滅びの魔力』を発してストラーダの胸から腹を根こそぎ消し去った。

「あつ!？」

支えを失い地面に転がったストラーダは何が起きたのかの全く理解できず、しかし己が致命的に不覚をとったことだけは理解した。

「何故、何故、さっきのは…?」

急激に襲う寒気さえ気にならない程疑問を渦巻かせるストラーダにニ・ュー・ナ・ン・ブを抜きながら舞沢は口を開く。

「簡単な話だ。」

普通の弾とスペシヤルな弾を混ぜて突っ込んでいたんだよ」

「あり得ん!!」

死に水を取る気はないが疑問ぐらいは答えてやると告げた舞沢にストラーダは喚く。

「その様な詐術、何時から仕込んで、いや、一々記憶して闘い続けるなど正気の沙汰ではない!!」

「あのさあ、」

常識を叫ぶストラーダに本気で呆れながら舞沢は嘯く。

「俺はカミサマに喧嘩売ってるイカれだぞ?」

その程度の立ち回りも出来なくて、なんでカミサマ殺せるんだ？」

そう嗤いさえせずに吐き捨て、舞沢は「まあ、」と言った。

「ヴァスコ・ストラーダが、カミサマに狂つていかなかったらこうも上手く嵌める事は出来なかったろうさ」

そう、心から憐れみを籠めてストラーダを見下ろす舞沢。

「テメエがカミサマの力に頼らず磨いた武だけで俺を殺しに来ていれば。

テメエが神滅具なんつうハズレ神器で燥いだけして無かったら。

他にもあるが、テメエがマトモなままだったなら俺は普通に負けてたろうさ」

過大も過小もせずそう評価を告げる舞沢。

「……、くく」

その言葉を聴きストラーダは低く嗤う。

「儂がマトモであつたらだど？」

儂は変わつてなどおらぬ!!

貴様の様な卑怯者が偶々儂を殺す機会に恵まれたただけだ!!」

そう吐き捨て、天を仰ぎ叫ぶ。

「主よ!! この卑しき魂全てを貴方に捧げます!!

どうか、どうか地上全てを貴方の愛で満たしてください!!」

そうあらん限りの声を振り絞り、ヴァスコ・ストララーダは絶命した。

ストララーダの完全な死を見届け、舞沢は軽く肩を鳴らす。

「さて、準備運動はこれぐらいでいいな」

そうごちてストララーダの遺体からドウリンダナに使われていた鞘を奪い、ベルトを調節して腰に吊るし突き立てたままだったトライデントを掴む。

しかし次の瞬間、舞沢の手はトライデントから弾かれた。

「……ちっ、ポセイドンに気付かれたか」

使ったのが匙ではないとバレて封印されたらしい。

僅かに走る痺れを振って逃し、トライデントはそのままに舞沢はハデスの隠れ兜を被って『方舟』へと足を向けた。

「直接会うのは三千、いや、二千年ぶりか」

そう漏らした声はエルサレムの乾いた風に掻き消されて消えた。

そう、だったのか。

『方舟』に一歩踏み込んだ瞬間、世界が変わった。

土埃を巻き上げる乾いた風は穏やかで優しいそよぎに変わり、痩せた土の匂いは芳しい花の香りに変化した。

裸でも寒さを感じなさそうな温かい日差しが差し、何処から流れているのか透き通った清流がさらさらと流れ、そこは、聖書に記された楽園エデンの園のような場所だった。

いや、ようなじゃないのか。

此処こそが聖四文字が創り出したエデンの園であり、アポカリプシュを終えた後に建国される千年王国の土台なのだろう。

「だからこそ、気に入らねえ」

そう吐き捨て俺は適当に歩き出す。

確かに此処に住めば悩みも苦しみも争いも知る事さえ無く居られるだろう。

だけど、ここには生命は無い。

花は咲くばかりで枯れる事は無い。

実は成るばかりで腐る事は無い。

草木はあつても草木や花粉を糧とする虫はいない。

実はただ食われるためだけの飼料に過ぎず、花は種を作るためではなく見るものを樂しませ香りを撒き散らすための芳香剤としての役割しか無い。

天地の『氣』に陰はなく、聖四文字の作る陽の『氣』だけで成り立つ様は酷く歪に感じる。

しかしそれは聖四文字だからと言う訳じゃない。

須弥山も、崑崙山も、高天原も、ヴァルハラも、オリンポスも、善悪問わず神の住まう場所つてのは陽の『氣』しかないのが普通だ。

ならば陰の『氣』とは何か？

それは『死』や『穢』が集まる場所に在る。

根の国や冥府、地獄なんが代表例だろうか。

だからこそ、そこを統べる神は恐ろしい者や忌まわしい者と描かれる事が多い。

実際会えば割と神としては気さくだったり残念だったり人間にとつては善良な神が多い。

閑話休題。

ともかくこんな世界は趣味じゃない。

そんな事を考えていたら目の前に場違いな扉が一つ。

宛もなくふらついていたが、どうやら目的地についたらしい。

壁はなく扉しか無いそれに俺はヨシユアから預かった鍵を差し込み回す。

カチャリ

刺さった鍵は軽い音を立てて回り、手を離せば自然と扉が開いた。

開いた扉の向こうには他と変わらぬ草原が広がるが、俺は気にしないで戸を潜る。

すると、また世界は一変した。

楽園は潜った扉と共に消え、世界の色は白一色。

何も無い世界の真ん中に、ポツンと佇む人影だけが世界の全てになった。

「…来たか」

ハデスの隠れ兜を被っているのに、曹操と名乗っていた男を器とした聖四文字は正確に俺を見据えて口を開いた。

最大の売りが効いていないなら邪魔になるなどハデスの隠れ兜を脱ぎ捨て俺は言う。

「初めましてと言うべきか？」

無駄と知りながらもいつもの態度を取ってみるが、やはり聖四文字は淡々と言う。

「否。」

久しいと言うべきだろう」

そう、聖四文字は俺を『ペトロ』と呼んだ。

ギチリと、魂のどこかが軋んだ気がした。

「それはかつていた誰かの名前だ。

俺に名前はない。

テメエに反逆する、ただのテロリストだ」

湧き上がる怒りのまま感情をぶつけると、聖四文字は何故か不思議そうに口を開いた。

「何故怒る？」

「…あ？」

テメエ…

「私が最善を成さねばお前達が滅びてしまうのに、どうしてそれを成すことにお前達は怒りを積もらせるのだ？」

まるで理解出来無いと言いたげに聖四文字は問を続ける。

「最善だあ？」

んな真似しねえでも、適当にやったりやあ大体上手く帳尻つてもんは揃うんだよ」

そう吐き捨ててやるが聖四文字は否と言う。

「適当では足りないのだ。

それで行き着く先はお前達の種の終わり。

それを回避する為には最善でなければならぬのだ」

「最善最善、だったらエルサレムでやった事も最善だったと言うつもりか?!?!」  
積年の怒りを言葉にしてやれば、聖四文字はそうだとはいやがった。

「あの地を治めていたソロモンは完璧であった。」

だが、ソロモンの次の王の統治でエルサレムは崩壊していた」

後悔も寂寥も感じられない目で聖四文字は言う。

「あのまま次代の王に引き継がれた先のエルサレムはソロモンを失い均衡を崩した78  
柱の神々による覇権争い。」

それは3000年経とうと終わることはなく、エルサレムは今日よりも先まで神の呪  
詛が蔓延し人が生きるに能わぬ死の大地となっていた」

「だから天使の横暴を許したってのか!!」

燃え盛るエルサレムで全てを無くし、シバの女王の軀を抱いて慟哭するソロモン王の  
姿を思い出して怒鳴る俺に、それでも聖四文字は感情もなく告げる。

「確かに天使の献策は最善ではなかった。」

しかし、お前達の滅びを退けることは十分に叶う。

そして天使が自ら捧げた策を無為と斥けては、私の不在の間に天使達が私の命無く動  
く事も無く、そのままお前達が滅びを迎えていた。

天使達の献策はお前達の滅びを退けるため最善を成すために必要だった」

「人類が滅びなきや誰が死のうと何でもいいってのか？」

「お前達の先に待つ滅びの大きさは最善を尽くして漸く退けられる程大きいのだ」

「テメエ……」

やっぱり会話なんざ無駄だったんだ。

どんだけ感性が近くても、根本的な部分では神と人間の考え方が決して折り合うことは無いってのは理解していた。

だが、こいつはそれ以前の話だ。

突き詰めた話、神にとっちゃあ人間なんざ牧場の牛や豚と同じもんだ。

神がどれだけ愛情を注ごうがそいつは目下に向ける、自分達に益を与える価値ある動物に向けるものでしかない。

決して対等ではない。

だが、聖四文字のそれは家畜に向けるものできえない。

ぶつちやければストラテジーゲームのモブ。

全滅さえしなければいくらでも替えが効くモノでしかないんだ。

ヨシユアが鍵を預けてまで願った頼みだが、いくらなんでも限界だ。

殺されて終わるにしても、せめて腕一本は奪ってやる。

そう聖四文字を仕留めるための『切り札』に手を伸ばした俺に、聖四文字は言う。

「ペトロよ。」

人は何故、誤った道へ自ら進むのだ？」

「そんなもん……」

『それが愉しいからだ』

一生悩んでろと吐き捨てようとして、そう、古い記憶が浮き上がってきた。

「……ビルガメシユ王」

人類史に名を残す最古の英雄にして人の身で全知全能を得た偉大なる愚か者。

彼とただ一度だけ謁見を許された、その時の王とのやり取りを思い出した。

くく

ビルガメシユ王は、当時の価値観から逸脱し過ぎていた破天荒な人だった。

国政のために神を崇めているが信仰心は皆無。

国中の女の処女を散らしたのに一人も孕まさず手元にも残さず全員国の男と結婚さ

せる。

神から送られた自分への刺客を育成してから戦った挙げ句親友となる。

他にも色々あったが、とにかく滅茶苦茶だが民からは愛されていた王だった。

どの程度かと言うなら、不死の探求で出奔し、そして帰ってきてウルクを再建すると

宣言したら元ウルクの民が自分の意思でウルクに戻ってくるぐらいだ。

その頃の俺といえ、ぶつちやけてしまえば転生の夢から醒めて心が折れたモブでしかなかった。

自分にある知識なんて現代文明ありき、現代倫理があつて初めて意味を持つものだと思ひ知り、またビルガメシユとエンキドウの一大決戦を見せ付けられ、杉の森のフワワ討伐に参加し役に立たず、グガラシナ襲撃に成す術もなく死にかけ、身の程というものをこれでもかと叩き付けられただのモブの兵隊として神殿で決められた嫁と間に産まれた子供との生活を守ることを目標に生きていた。

ビルガメシユ王はどういった訳か、そんな野郎を直接名指しして呼び付けたのだ。

抗命なんて自殺と変わらない時代だから逆らう事など考えられる訳もなく、言われるままビルガメシユ王に拝謁した俺だが、開口一番が正にビルガメシユ王だった。

「ふむ。やはり普通だ」

一体何がしたいのか伏しながら困惑する俺にビルガメシユ王は愉しそうに俺に言った。

「楽にしろ。」

俺に殺されたくなければな」

「は、はあ」

いや、なんで？

言われた通りにしながらハテナマークで頭の中を埋めている俺にビルガメシユ王は言う。

「お前は普通だが面白い相をしているな。

安寧は薄く、過酷に苛まれながら這いずり廻る未来が見える」

「ええ……」

なんだよソレ？

「だが、お前は折れはしないだろう。

這いずり廻りながら僅かな藁を幾つも掴み、それを束ねて綱を作り、それを以て宿願に手を届かせる。

実に面白い相だ」

……ええつと、

「どうした？

はつきり申せ。不敬罪で殺されたいのか？」

「自分は褒められているのですか？」

やると決めたら本気で殺されると理解していたから、もうどうにでもなれとヤケになり俺は思ったまま口にした。

「分からぬか？」

「申し訳ありませんがさっぱりです」

「そうか」

と、間をおいてビルガメシユ王は何故か笑い出した。

「そうだとも!!」

わからない事は大事なのだ!!」

何がツポに入ったのかとても愉しそうにビルガメシユ王は嘯く。

「全知全能などクソ喰らえだ。」

先の分かる生の何が愉快なものか。

そんな生など俺はいらん!!」

「俺が居なくなつたウルクは千年と続かず滅びるだろう。」

俺の作つた墓とて、いずれ俺を崇めぬ盗人に荒らし尽くされ何処にあつたかもわからなくなるだろう。

だからどうした？

それでも俺は不死より死を選ぶ。

集めた宝を詰めた俺の墓を建てる。

何故ならそれが愉しいからだ」

「覚えておけ俺の民。

それがどんなに愚かに見えようが、嬉しいから人は生きるのだ。

見えぬ明日、暗い夜の先、その先に待つものがなんなのか知らないことが嬉しいのだ。それすら知らぬ者に教えてやれ。

人は、見えないことが嬉しいから生きていけるのだと」

そう言つて、ビルガメシユ王は俺に退くよう告げた。

くく

「ああ、そうだよなビルガメシユ王」

「？」

さつき迄燃え盛っていた激情が質を変えたのを理解した。

「あの馬鹿音が教えてくれたんだよ。

俺はまだ、なんも愉知めつちやいねんえだつてなあ!!」

聖四文字への怒りは変わらない。

だけど同時に憐れだと初めて知った。

「教えてやるよ聖四文字。

人間はなあ、知りたいから間違愉えるんんだ」

崖が危ないと知つていても、そこから見える光景が知りたくて崖に近づく。

食べたなら死ぬ毒と知っていても、それが新たな味への道だと知りたいたいから毒を口にす  
る。

死が恐ろしいと知っていても、自分の限界が知りたいから人は戦い続ける。

「お前はどうかんだ聖四文字。」

お前は、一度でも愉しいと思つたことがあるのか？」

「そのような余分は必要ない。」

それは最善を妨げる」

やっぱりか。

そう答えた聖四文字に、俺は心から言葉を叩きつけた。

「憐れだよ聖四文字。」

お前はその余分を知らないから、誰にも認めてもらえないんだからな!!」

そう俺は懐から『切り札』を引き出した。

仲間はずれは良くないよな？

懐から引き出したのはオーフィスから貰った蛇の一匹と一冊の本。

『無限』の欠片、それにそれは……』

本の正体を見通したらしく困惑する聖四文字を無視し、俺は蛇を握り潰して無色の膨大なエネルギーを周囲に配しながら人の皮を縫い合わせた装丁された本を開き呪文を唱える。

『いあ いあ んぐああ』

冒流的で、およそ人間に発することは不可能と言えるだろう聞くだけで吐き気をする発音を、人の身で無理矢理再現しながら俺は唱える。

「人の子の作った空想の神の呪文？」

今この場でそれを用いる事が理解出来ないと言おう聖四文字。

ああ、戸惑うだろうよ。

クトゥルフ神話に纏わるアウターゴッドは、その一切がこの宇宙に存在しない。

奴等はお前が、《記憶を消してまで》全て残さず地球から排斥したんだからな。

『んんがい・がい！いあ いあ んがい ん・やあ ん・やあ しょごぐ ふたぐん！』

遍く神話、数多の神仏修羅がこの世界に存在する中、クトゥルフ神話だけがこの世の偽りの神話として在る。

何故か？

それは一人の小説家が産み出した架空の存在であるから？

否。

須弥山の一部の神はヒンドゥーに語られる神の別側面であり、デーヴァが存在している以上居るはずがない。

だが、現実にはデーヴァとは別にそれ等は須弥山に属する一柱の神として確立している。

それは人がそう信じ解釈されたから。

信仰という土台を得ることで、新たな神が生まれてくる事は八百万を知っているなら理解出来るだろう。

それはどんな神にも当て嵌まる。

そして解釈される事で同一存在でありながら別個体として分かれたり、完全に別の神が合わさったりされる事がある。

ゼウスとユピテル、シヴァの別側面とされるマハーカーラと大国主、大日如来と天照大神、迦楼羅天とガルダ、シツダールタとヴィシヌ、ヨシユアと聖四文字。

人間の信仰心とはそれだけの力があり、信仰心さえあれば神と神だけでなく人さえ神と集合されてしまうのだ。

故にクトゥルフ神話だけが一柱の神も誕生しなかったなんていう話は無理がある。ならば時間が足りなかった？

これも否。

八百万を見ればわかるだろう。

神が生まれるのに時間は必要ない。

必要なのは実在を信じ捧げられる信仰心。

クトゥルフ神話が語られ始めて百年近く過ぎた。

その間に熱心なファンが多く生まれ、中には作中に語られる儀式を本気で行うような馬鹿まで現れた。

その中で誰一人として、その実在を本気で信じていなかったなんてことがあるだろうか？

何よりアウターゴッドのホームグラウンドは外宇宙そのものであり、本来の信者は外宇宙の生命体なのだ。

その信仰心が在るのだから、そもそも地球に信者は必要ない。

ならば何故地球で語られていながら存在しないか？

答えは逆。

クトウルフ神話とは、ハワード・フィリップス・ラブクラフトの幻想から生み出されたのではなく、ハワード・フィリップス・ラブクラフトが地球から痕跡を抹消されたクトウルフ神話を幻想より掘り返してしまったのが正解なのだ。

それを成したのが聖四文字だ。

聖四文字は地球から邪神を排斥するために、地球の中で隔たっていた各神話を統合再定義し戦力を集めて対抗するよう訴えた。

次いで『システム』を作ることで全ての神が地上からの信仰心に依存しなくても存在出来るようにし、十全の力を振るえるようにした。

そしてアウターゴッドを彼方へと追いやった後、何らかの要因から奴等が帰還を果たした際の対策としてトライヘキサを生み出した。

最後にその僅かな可能性さえ消し去るため、自らを含む対邪神に関わった全ての神仏の記憶からアウターゴッドに関する一切を抹消する事で、地球からアウターゴッドの痕跡を完全に抹消した。

全知全能の神による執拗なまでの排斥はその目論見通りに進み、アウターゴッドはこの宇宙から完全に弾き出され、クトウルフ神話は神の軌跡を遺す逸話から人間の空想に墜ちて地上から消失した。

だが、成した偉業が完璧だった故に聖四文字は裏目を引いた。

世界の統合により神話感の隔たりは消え、各神話の神は終末を行う余暇さえ無くなり互いに信仰心の奪い合いをする羽目になった。

だが、アウターゴッドの侵入を拒む為に生み出した『システム』により信仰に依らない神の存続を約束された為、神々は地上への干渉の必要が無くなり、神々の力を行使するぶつかり合いで無限に肥大するだろう被害も馬鹿にならないと、自ら戦い奪い合うのではなく人間達に誰を神と仰ぐかを自らに選ばせ、同時に星の覇権を握るに足るような管理の手を離し自立して行くのを見守る決意をした。

なお、日本神話だけは世界が統合される前から人間の管理を手放していたから例外としておく。

それを怠惰と認識した聖四文字は、アウターゴッドとの戦うため多くの神話から掻き集められた神宝を人間が使えるよう神器としてデチューンし『システム』を介して分配されるようにし地上にばら撒いた。

与えられた人間にとって、それが福音などではなく、過ぎたる力が巻き起こす災厄の種火となるなんて、感情を介した思考が出来ない聖四文字は考えもしなかった。

そして聖四文字が成した偉業は、完璧ではあったが完全ではなかった。

聖四文字はアウターゴッドを排斥したが、知識の収集のため人間と精神を交換してい

た『イスの偉大なる種族』が地上に取り残されていた事を見落としていた。

俺が偶然接触した奴等は、『システム』の影響で偉大と呼ばれる由縁たる時間の秘密を窮めた奥義の全てを使えなくされ、精神交換を用いて眼前の滅びを延命するだけの存在にまで落ちぶれていた。

いや、俺の『忘却補正』という呪いさえ無ければ目論見通りに行っていたのだから、捨てておいて問題ないと見落としていたのではなく見逃したが正確か。

寄生できる生命体が人間だけという脆弱さ故に精神交換を多様せざるを得なかつた『イスの偉大なる種族』は存在基盤たる精神を酷く摩耗させ、新しい身体に移るのさえ賭けになるほど弱っていた。

しかし自らの滅びよりも自らの知識の断絶を嘆く『イスの偉大なる種族』に、俺は聖四文字を打倒する手段に繋がるのではと決して忘れないという俺に掛けられた呪いを打ち明けその継承を持ち掛けた。

『イスの偉大なる種族』は俺の呪いを知り、喜んで知識の全てを継承させて消滅した。まあ、しかしその全てが宝の持ち腐れになってしまったのだがな。

なんせ外宇宙由来の魔術にしる科学にしる外宇宙の生物が使うことを前提に設計されている。

それを人間の身で再現しようとしてもスペックが足りない。

星の公転を利用した宇宙そのものを魔法陣に見立てた大規模術式と莫大な供物で底上げしても、『システム』に遮られ邪神の召喚はもとより叶わず、外宇宙の魔術も良くて本来の出力の十分の一に届くか否か。

普通で不発、悪くて発狂死という役に立たない事この上ないものでしかなかった。

科学は素材が無い上に理論が『システム』に遮られ可能な限り近付けた模造品さえガラクタと化す。

だが、今この場、この瞬間に限り、その制約が解かれた。

神の世界とは則ち異界。

『システム』の影響は薄く、物理法則さえ振子曲がる聖四文字の住いでなら大規模術式を用意しなくてもオーフィスが寄越した蛇が内包するエネルギーがあれば魔術を完了させられる。

だからこそ、俺はこの場でアウターゴッド『ヨグソトース』の召喚に踏み切った。

『いあ いあ い・はあ い・にやあい・にやあ んがあ』

「…!? 止めよペトロ!!」

アウターゴッド達を地球に呼び戻してはならぬ!!」

聖四文字の全知全能がこれから起きる事の結末を捉え、危険から抹消した記憶を甦らせたらしく初めて聖四文字は感情の籠もった声を発した。

だが、もう手遅れだ。

全知全能なら分かるだろ？

『システム』が無い中でここまで進めた召喚を中断すれば、捧げられた魔力に惹かれ連中は無秩序に飛来して手が付けられなくなる。

加えて『ヨグⅡソトース』はクトゥルフ神話に魅了されたイカれた書き手により、<sup>お前</sup>ヤハウエでもあると解釈されている。

仮に今ここで俺を殺し儀式を中断させ、その影響で他の邪神共の興味を失ったとしても、テメエと同一視された『ヨグⅡソトース』の到来だけは避けようが無い。

今お前に出来る最善は召喚を完遂させ、その上で再封印する事。

それが感情を介入できない奴の限界だ。

『んんがい わふる ふたぐん よぐ・そとおす！』

再現した地球の環境では生まれようもない異形の発声器官から生じる狂気の音色が空間を犯し、オーフィスの蛇から汲み上げたエネルギーを対価に奇跡が始まる。

空が引き裂かれた様に割れる光景に視覚が、その裂け目から玉虫色の血が溢れて身体を濡らし嗅覚と味覚と触感が、その奥に広がる極彩色としか認識しようもない色の光が溢れる世界から届く人類が聞いてはならない音色が聴覚が、五感全てから逃げる場所を奪い魂を狂気に染める。

しかし狂気の汚染は一定まで進むと不自然に止まった。

『種族固定：人間』の転生特典が人間からの逸脱を無理矢理防いでいるのだ。

「最善を捨て、滅びを選ぶのが人間だということのか!？」

聖四文字はヨシユアの死を確定させた槍を握る右手に紅い籠手を、その背にメカニカルな白いコウモリの羽を生やした。

『赤龍帝の籠手』に『白龍皇の光翼』か。

聖四文字の手にあるつつう事は、今回ではまだ二天龍は宿主を得ていなかったらしい。

『おのれ聖書の神!!』

俺達をこうまで愚弄するか!!』

籠手から俺でさええゾツとする程の赫怒を孕んだ殺気を撒き散らすブリテンの赤き竜ごと『ア・ドライグ・ゴツホ』。

『貴様は何処まで貶めれば気が済むと云うのだ!？』

赦さん!! 何があろうと貴様だけは赦さんぞ!!』

同じように翼からもサクソンの白い竜ごと『グウィバー』も、気が弱い者の心臓ぐらいは止めるだろ程の殺気を放つ。

しかしその二つの憎悪を浴びながらも聖四文字は構う様子さえ見せず神滅具の力を

発動する。

『Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!』

『Divide!! Divide!! Divide!! Divide!! Divide!! Divide!!』

赤龍帝の籠手の『倍化』に必要な時間を白龍皇の光翼の『半減』を用いて短縮し、ヨグソトースを返り討ちにするのに必要な力を信じたくない速度で溜めてのけた。

ちっ、当初の予定通りに邪神を呼び寄せていても、ああやって切り抜ける算段だったって事か。

にしても、二つの神滅具が内包する呪詛は簡単に人を狂わせるだろう事がここからでも見て取れる。

歴代の奴等が神滅具に取り憑かれ身を滅ぼされたのも当然という話だ。本当に神滅具は外ればっかだな。

そんな思考を切り上げ、俺もまた儀式を最終段階へと移す。

『よぐ・そとおすーいあーいあーよぐ・そとおすーおさだごわあー!』

呪文に呼応してか、裂け目からヴェールを被る顔の見えない人間のようなナニカが現れた。

そのナニカは手にした銀の鍵を中空に挿すように動かすと、ゆっくりと鍵を回した。カチリ

決して開いてはいけない戸の鍵が外された。

その音を聞いた瞬間、俺は彼方へと呼び掛けた。

「来たれ、あらゆる大地、あらゆる宇宙、あらゆる物質を超越する、『最極の空虚』!!  
その身を戸口とし、始まりも終わりもない世界への道を開け、『ヨグⅡソトース』!!」  
直後に目を閉じたが、閉じる刹那に薔薇の香りと共に世界に太陽に匹敵する閃光を放つ玉虫色の玉が虚空に溢れかえったのを見てしまった。

「コンマ一秒にも満たないだけの直視で魂がごっそりと削られたような喪失感に襲われたが、辛うじて耐える。

「消えよアウターゴツド!!」

貴様達に人の子の未来は決して渡さん!!」

聖四文字の咆哮のすぐ後に、瞼を通してさえ眼球を焼くような閃光と鼓膜を破砕しかねない爆音が世界を覆った。

閃光はすぐに収まり、再び目を開けた先からは狂気に満ちた世界は消え去り、疲弊した聖四文字だけが佇んでいた。

「……くっ!!」

余程負荷をかけたのだろう、二天龍を宿した神滅具は塩の塊の様に白く色褪せて砕けて砂となりつつあり、聖槍も亀裂が入っていた。

一世一代の大魔術は敗北に終わった。

予定通りに。

「聖四文字!!」

疲弊した姿の聖四文字目掛け、すべてのチャクラを廻しながら大地を蹴り、柄を伸ばしたドウリンダナを抜き様突き出す。

「ぐうっ!!」

完全な不意打ちであった筈が、しかし聖四文字は聖槍を振って刺突を弾く。

しかし攻めを止めない。

いや、ここで止めたら勝機はマイナスまで落ち込む。

一度限りの切り札を切つてまで漸く見えたこの勝機、絶対に取りこぼしてなるものか  
!!

「何故だ!」

何故お前達はそのままでしてしまふのだ!?

滅びが恐ろしくないのか!?!?」

槍捌きで応酬を繰り広げながら吐き出された叫び問に、俺もまた叫ぶ。答える。

「だったら、テメエは見た事が有るのか？

お前が散々喚いた滅びの先に、何があるのかを!!」

「滅びの先にだと？

そんなものに意味など」

「それを知りたいのが人間なんだよ!!」

「!?!」

叫びに反応してか聖四文字の動きが僅かに惑い、ドウリンダナの穂先が聖四文字の身を裂く。

「人間は、知らない事が恐ろしい以上に、知らないことを知るのが愉しいんだよ!!」

だから、滅びが待っているってなら、滅びの先に何があるのかが知りたいんだよ!!」

「その果てに何も無いとしてもか?!」

徐々に傷を増やしながらも問い続ける聖四文字。

「だったらその先に、新しい何かを作るのが人間なんだよ!!」

どれほど愚かしくても前に進み続ける。

滅びの末路があるなら抗い尽くす。

それでも駄目なら手段を選ばず新しい可能性を残す。

全てはそう、

「それが、愉生きしいって事だからだ!!」

叫びと共に力の限りを込めてドウリンダナを振り抜き聖四文字へと突き立てる。

ドウリンダナを防ごうとした聖四文字だが、度重なる負荷に聖槍が先に音を上げて砕け、遂に聖四文字を貫いた。

## 遊ぼうぜ。

核である聖槍と器を破壊した事で聖四文字は崩壊し始める。

しかしまだ諦めきれないというのか、ドウリンダナを抜き鞘に収める俺に向けて言葉を紡ぐ。

「…お前達は、弱い」

指先から塩の塊へと変わりながら聖四文字は言う。

「今のまま進もうとも、お前達は互いを憎み、争い、殺し合って、やがて滅びを迎えるだろう」

「だろうな」

争いが無い時代なんて何処にも無かった。

人間が悪を捨てて生きることとは一度も無かった。

誰も奪われることのない世界なんて存在しなかった。

だが、それでも確かに前に進んで来た。

だからこそ、今までの事を無かったことにして神様の庇護<sup>後</sup>下<sup>戻</sup>で生きていくなんて事は出来ねえんだよ。

「お前達だけでは滅びを乗り越えられぬ。

だから私がいる」

「それはもう過去なんだよ」

数多の神が手を離し、人が神を伏して崇めるものから過去の物語へと変えた時点で  
お前達<sup>神</sup>の役目は終わっていた。

「俺達は滅びが何なのか、それを乗り越えるのに何が必要なのか、それを知るために俺達  
は誰の手も借りず俺達だけで先に行く。

俺達の親離れは済んでんだ。

テメエも子離れを済ませろよ」

「…そうか」

私達は、もう必要はないのだな。

その言葉を確りと聞き、ヨシユアとの約束は果たしたと俺は聖四文字に背を向ける。  
「滅びの先を指すと言うなら行くがいい。」

その果てに見るものが、得るものがお前達の望むものであることを私はいの…」

最後の言葉は凄まじい雷音に掻き消された。

「っ!?!」

突然の雷音に殴られたような衝撃を受けバランスを崩したが、なんとか体勢を保ちな

がら振り向くと、そこに聖四文字の姿はなく、血に汚れたゼウスが立っていた。

聖四文字が立っていた場所に佇むゼウスは、俺に構う様子も無く愉快そうに哄笑した。

「ガハハハハハ!!」

見たことか聖書の神よ。

貴様の傲慢なる野望は貴様が愛そうとした者の手で打ち碎かれたぞ!!

『全ての道はローマに通ず』とは人間もよく言ったものよ。

やはり真に正しき神は我等オリンポス、いや、この私はゼウスであったのよ。

ガハハハハハハハ!!」

…ああ、そういや聖槍に封じられてたんだっけあの下半神。

関わりたくないから放つたらかしてたけど、美味しいとこだけ横取りしに動いたみたいだな。

しかも俺を勝手にオリンポスの傘下扱いしてやがる。

まあ、トロイアはギリシャ圏だから間違いとは言わねえが持ち出されたら否定しておこう。

どつちにしろ興味を持ちたくもないし、放つといて帰ろうとしたのだが、ゼウスは目敏く俺に声を掛けやがった。

「待つがよい。

我が威光に恐れを成すは無理も無いが、褒美の一つも賜わずに下がらせては主神の沽券に関わろうというものだ」

死体蹴りでよつぽど機嫌がいいらしく、俺のガン無視を好意的に解釈し馬鹿みたいに笑いしながら俺の肩を掴んできやがった。

今の装備なら全殺しも可能なら弱い弱っているのが見て取れるから、トロイアの恨みを込めて今すぐぶち殺してもいいんだが、正直、そんな手間暇かけてやるような義理さえコイツにはない。

「失礼しました大神ゼウスよ。

今の御身の御姿を見る事を不敬と思ひ退しようと思いましたが、考えが足りなかったようで深くお詫びします」

つうわけで、外つ面だけ取り繕って傅きながら思ってもいない言葉を適当に並べる。

しかしゼウスはそんな事に全く気づいた様子もなく更に機嫌を良くした。

「ふむふむ。

お前の気遣いは実に素晴らしい。

だが偉業を成したものがその様に遜るのは感心せんなあ」

嘘つけ。

そうしたら気に入らねえで殺すのがテメエだろうが。

「まあ良い。」

して、今回の大義見事であった。

褒美として、お前に儂の娘の一人を妻とすることを許し、お前をオリンポスに列することを許そうではないか」

：冗談じゃねえぞ。

ゼウスの娘つて、アテナとアルテミス以外の殆どがテメエのお手つきじゃねえか。

ハデス様個神なら兎も角、オリンポスの紐付きになるつもりがねえし、なによりオリオンの末路を知っていて神を嫁になんか欲しがるわけねえだろ。

「大神ゼウスよ。」

許されるならば願いが一つ」

とにかくこの場を逃げ切るため、俺は適当に対価になりそうな願いを口にする。

「私は予てより英雄ヘクトール將軍の生涯に強い憧れを抱いております。」

それ故に対価をと申されるならば一つ直接お伺いしたい事があります」

主神相手に正面切つての要望だ。

決して安くはないだろう。

「大神ゼウスよ。」

何故にトロイアを戦地と選ばれました？

かの時代、トロイアと同じ程に栄えていた国は他にもあつた筈。

しかし大神ゼウスはトロイアを戦地にお選びになられた。

その真意を知る事を報奨として望みます」

おべんぢやらを並べつつさして知る意味も無い事を尋ねる。

実際、その理由はトロイアの王プリモアスの前王ラオメドンのやらかしが尾を引いていたのだから事は察している。

ラオメドンはアポロンとポセイドンとの約束を反故にして喧嘩を売った揚げ句、最後はトロイアを助けたヘラクレスにまで約束を反故にするなんて馬鹿をやらかして殺されたが、ラオメドンこそがトロイア終焉の引き金だったのは間違いない。

「その問いに神妻を娶る以上の価値があるのか？」

「私にとつて最上の愉悦は啓蒙を得る事。

女の柔肉を抱くより、啓蒙に脳を震わせるほうがより愉悦を得られるのです」

強ち嘘でもないしな。

転生を繰り返した中で性欲なんぞ殆ど無くなつたし、それでもつつうなら白音に頼めば済む話だ。

「ま、まあ、そういう人間もたまにはおるか。

しかしトロイアか……」

納得した様子だが、何故か歯切れが悪くなる。

「……まあ、よかろう。」

ただし、他言無用とせよ」

「? わかりました」

どういう意味だ?

ラオメドンは関係無いのか?

表に出さず疑念を過ぎらせる俺にゼウスは言う。

「お前達がパリスの審判と銘打ったあの林檎だがな、実を言うとあ奴にくれてやったわけではないのだ」

……は?

「宴席に加えられなかったとエリス神が最も美しい女神に渡ると黄金の林檎を投げつけてきおつてな。」

それをヘラ、アテナ、アフロディーテが奪いあつた挙げ句儂の手に転がり込んで来たのよ。」

誰に渡そうと恨まれるのは面倒だから地上に投げ捨てたら、偶々あの羊飼いが拾ったのであ奴に押し付けたのよ」

………。

「今思えばあれこそ我が天意の現れそのものであつた。

特にお前が絶賛したヘクトールは実に良い働きをした。

只人で有りながらアキレウスを相手にあれ程の粘りを見せたことは実にみごとだつた」

………。

「ヘクトール將軍は大神ゼウスに連なる系譜に列しておりましたが？」

あれ？ 何勝手に口が動いてんだ？

「………はて？」

そうだったか？

抱いた女の事など一々憶えておらんからな。

しかしだと言うなら流石儂の血だ。

やはり英雄は儂の血を引いて然るべきなのだ」

ガハハハハハと耳障りな笑い声を撒き散らすゼウス。

正直今すぐブチ殺したくて堪らないが、殺るだけ時間の無駄だ。

そもそも大凡の神にとって、人間とは家畜以下の雑草でしかない。

見目が気に入れば摘み取って遊び、気に入らなければ踏み潰す。

そんな奴等が繁茂していたからこそ、神の中で唯一人間だけを愛する神だった聖四文字は世界中に勢力を広げ、繁栄を成した。

聖四文字の降す天罰は理不尽な間引きでは無く悪を改心しない人間への裁き。

聖四文字の与える試練は神のためでなく其の者が天へと昇るための禊。

そう嘯き、自らが人を愛する神だと吹聴する言葉は多くの人間に希望を抱かせた。

最も、だからといって信徒や天使のあくどいでは済まないような弾圧や虐殺が肯定されるわけではないし許す気も無いが。

だからこそ、無視して帰るのが神には最も効果的だ。

さっさと帰ろうと立ち上がった俺は、不意に右手に何かを掴んでる事に気付いた。

なんだ？

いつの間にと不思議に思いつつ手を開いてみると、手の中には血塗れの鞆丸が握られていた。

「……あ？」

なん、…っ!?

反射的に全力でその場を逃げると、直後、雷の牛が今いた場所を凄まじい速度で通り過ぎた。

「キサマアアアアアアア!!」

儂の隼丸を、儂の王権をよくも奪い去ってくれたな!!!」

次いで響き渡る雷音のような怒号。

そちらを見れば、股ぐらを血塗れにしたゼウスがこれでもかと言うぐらいブチ切れていた。

「……………ああ、そういう事ね」

どうやら俺は、ついさつきまで発狂して幻覚を見ていたらしい。

何処から幻覚だったかはもう判らないが、まあ、そんな事は些事だろう。

そもそもヨグ・ソトースを見ておきながら発狂死を免れていただけで御の字だった訳だし、聖四文字が消滅しているのは間違いない。

ならばもう、前だけ見て生きる理由はない。

だから、折角だ、無意味で無価値な事をしてみよう。

「殺<sup>遊んで</sup>してやるよ糞下半神」

差し当たり、滅んだトロイアの怨みをそう仕向けた張本人に叩き付けてやろうじゃないか。

俺はやっぱりそういう奴なんだよ。

「俺の胤を返せえええええ!!」

雷光を纏い拳を振りかぶるゼウスに対し、俺は丹田を始点に7つのチャクラを全開に回し、身体能力を自壊する限界ギリギリまで跳ね上げさせて背後へと回避。

回避と同時に背からショットガンを抜いて一射。

至近距離で放たれた散弾はほぼ一塊の状態でゼウスに叩きつけられるも、しかしゼウスが纏う雷光に阻まれその熱量で蒸発してしまう。

「人間如きの浅知恵が俺に通じるものか!!」

そう叫び腕を振るうと腕を這う雷光が身体から離れ片翼だけで2メートルはある驚と全長3メートルを超える巨牛を象る。

ブモオオオオオ!!

意思が有るかのように獯猛に嘶いた牛が、地面を蹴つて猛然と突進してくる。

確認がてら散弾をバラ撒いてみるも、牛は臆した様子もなく散弾を蒸発させながらまっすぐ突っ込んでくる。

やっぱり鉛玉は無意味か。

ならこつちも別の手を講じるまで。

「にしてもだ、」

態々牛を象る辺り、ゼウスの権力への固執具合が良く分かる。

牛とは古代に於いて権力の象徴だった。

牛を持つとはその体軀を賄うだけの飼料を確保出来る、則ち大喰らいの牛を飼えるだけの財を有するという証であり、牛の数は国の規模を計る役割も担っていた。

故に牛は王の象徴でもあり、古い時代には神の依代や最上級の供物にも使われた。

例えばそう、初期ユダヤの偶像崇拜を禁ずる前の聖四文字なんかが有名だろう。

突進を躲し、懐から安物のアルミ製のボールペンを抜くと躲したタイミングで鷲が甲高い鳴き声を発しながら俺目掛け急降下を掛けた。

細部まで精緻に再現された鷲の鉤爪を前に、俺はボールペンのペン先を口元に寄せ  
る。

「雷、即ち木気。

鋼、即ち金気。

金持ちて木を克する。

之、即ち金克木也」

呪を込めボールペンを鷲へと投擲する。

ボールペンはまっすぐ鷺の胴体に突き刺さり、すると鷺は俺に爪を突き立てる前にビクンと震えた。

ピイイイイイイイ!!

甲高い悲鳴を上げ、鷺が掻き消え、焦げて金属パーツ以外が溶けたボールペンが地面に転がる。

「貴様、一体何をした!?!?」

分霊とも言える雷光があっさり掻き消され、困惑と怒りで真っ赤になったゼウスが怒号を放つ。

そんな間抜け面へ、意趣返して挑発しつつショットガンを振ってみせる。

「大したことはしてねえよ。」

ただの、人間の浅知恵だ」

大陸の五行思想を魔改造し尽くした日本の陰陽道。

ゼウス本体には効果はあまり期待できないが、知識と手順が完璧なら眷属程度は処理出来る。

「農<sup>神</sup>らが庇護せねばとうに滅びていた猿の分際でえ!!」

「喚くな阿呆」

喚くゼウスに吐き捨ててやる。

「その猿に散々盛って、挙げ句テメエが散々気に入らねえで捨殺しててきたんだろ？」

だから今度はテメエが捨殺されるてられる側になったんだっていい加減理解しろよ。

テメエ、本当に全知全能なのか？」

「キサツ、キサマあつ?!」

赤を通り越して青くなつた顔色でゼウスが『雷霆ケラウノス』を手にする。

おいおい、いくらなんでも煽り耐性低過ぎだろ？

「貴様の魂ごと焼き尽くしてくれる!!」

「そーいやいい加減気持ち悪いから返すわ」

マジでぶん投げる体勢に入つたゼウスに、俺は握つていた辜丸こを無造作に投げつける。

「つ、儂の王権?!?!」

目の前に放り投げられた辜丸こにゼウスが雷霆を手放し必死に手を伸ばす。

その正面でショットガンの銃口を向けられているにも関わらずだ。

「だからテメエは下半神なんだよ」

バンツ!!

ショットガンに仕込んだ最後の禁呪弾をぶつ放す。

放つた禁呪弾はゼウスの手が掴む前に辜丸を砕き、『滅びの魔力』を撒き散らして汚ら

しいゼウスの辜丸を消滅させた。

「お……おおあああああああああ!!?!」

その事実を受け入れられずゼウスが、かつて神々の手で与えられた絶望を前にした多くの人間がそうした様に喉を引き裂くような慟哭を放つ。

「何故だ!?! 俺は全知全能で、テイターン族を天ごと焼き尽くし、運命を支配し、ギガースを廃してガイアを制し、テュホンさえ退けた俺がどうしよべつ!?!」

「喧し〜」

シヨットガンを投げ捨て、過去の栄光に絶るゼウスの横面を三節棍で殴りつける。

そのまま二節から五節、五節から七節へと棍を組み替えながら最大速度で殴り続ける。

「テメエがどんだけ偉かろうと、今のテメエはただの老害なんだよ!!」

説を切り替え、全身をフルに駆使し息衝く暇を与えず全身を打ちのめす。

「きいさいまあああ!!」

撲られ顔を腫らしたゼウスが滅茶苦茶にアダマスの鎌を振るい俺を跳ね除ける。

技巧の無い兇戯のような大振りの返す刃が振るわれるそのタイミングを正確に穿ち、棍を手放し合気の理を以て刃取りを行い鎌を奪う。

「ひいっ!!」

喉から漏れた音が悲鳴に聞こえたが、まあ全知全能の神がたかが人間如きに悲鳴なんか漏らさねえよな？

「鎌つてのは、こう使うんだよ」

両手に持ち鎌の軸を回転させながら脇を通過させる。

そこから再び軸を胴に合わせ前に踏み込みながら全身を一回転。

回転運動に連動し鎌の刃がゼウスの背中から脇腹を撫で切りに走る。

「ぐあっ!」

祖父神ウラノスを断じた刃はサクリとゼウスの切り裂き、自らの武器に浅からぬ傷を負ったゼウスが苦悶の悲鳴を漏らす。

更に呼吸を挟む間もなく三撃鎌術で切り裂いてから一旦距離を置く。

「人間の浅知恵は如何ですか糞下半神？」

「参考になれば幸いです」

鎌を地に立て道化のように一礼して煽れば、ゼウスは歯を食いしばりながらふうふうと赫怒に震える。

「農は、農は大神ゼウスであるぞ!!」

それを、それをお前はっ!?!」

ワンパターンも大概にしるよ。

他に自慢できることないのか？

あ、無いのか。

じゃあしようがない。

「そろそろ仕舞にしようか。

安心しろよ。ハデス様から言われてるから殺しはしねえし出来ねえから。

寄り道しないようバラ刻みにして、オリンポスまで着払いの宅配便で送ってやるよ」

鎌を捨てドウリンダナを抜き、槍形態で両手に握る。

「調子に乗るな猿があっ!？」

感情任せに突っ込もうとしたゼウスが、刹那黒い霧に包まれた。

「ぎゃああアアアアアアッ!？」

雷鳴のようなゼウスの絶叫が轟き、黒い霧はすぐに晴れた先でその身は一変していった。

「…バルムンクだと?」

霧が晴れたゼウスの身に、ジークフリートを名乗っていた野郎がぶん回していたバルムンクとそのレプリカ、それとダーインスレイヴとティルヴィングが胴を貫きリアル黒ひげ危機一発のようになっていた。

「がっ…あ…っ…」

四振りの魔剣は流石に効いたらしくよたつくゼウスの背後に再び黒い霧が発し、そこから現れた紅い髑髏の意匠の施された甲冑騎士が飛び出しその手に携えたグラムを振るってゼウスの首を断ち切った。

「……」

コロコロと絶たれた首が明後日の方向に転がっていくが、そんな事はどうでもいい。

甲冑騎士はグラムを振って血糊を払うと、徐ろに兜を脱ぎ捨てた。

「ぶっはー!!」

あゝ、もう。この甲冑かちちよいいですが重いわ蒸れるわで僕ちんもう限界でザンスー!

普通に聞いたらイラツとしそうな口調でそうボヤきながらぶんぶん頭を振る『フリード・セルゼン』。

そうしてから漸く俺に気付いた体で話しかけて来た。

「あららあ? どこのだあれかと思ったらアサシントソじやあゝりませんか?

もしかしておたく、ゾンビかなんかですかあ?」

「かもなあ?」

にしてもよう、お前さん結局元鞘に収まっちゃまったのか?」

なんというか、なんとなくて今迄のノリで乗ってやるとフリードはケラケラ笑った。

「それぞれ。そーなんどすう。

我様つてば愛しの主様から直々にスカウトされちゃつてさあ、ホントはチョー御免だったんですけどお、マイファザーつてば自分の魂の一部を埋め込んできやがったんですよう。

お陰で毎日毎日毎日毎日、マイファザーの愛の言葉が五月蠅くて叶いやしませんから仕方なくお手伝いしてたんデスウ。

アヒヤヒヤヒヤヒヤツ!!」

道化染みた笑いを撒き散らして戯けるフリードに、俺もまたシニカルに笑い嘯いた。

「そいつは難儀だったなあ。

で、ついさつきそのダディは俺がぶつ殺した訳だが、恨んでるか?」

「ブハツ!!??」

オヒヨヒヨヒヨヒヨ、いやマジ?

マイファザーつてばアサシンタソにぶつ殺されちゃったの?

どおりでさつきからパーパの声がしなくなつたわけだ。

いや最っ高!! 今夜はステーキで乾杯でふう!!」

耳障りなぐらいゲタゲタ笑い転げるフリード。

と、それがピタリと止み、浅く笑みを浮かべたまま口を開いた。

「話は変わるんですがねえアサシンタリ。

僕ちやんさあ、ずっと欲しいもんがあつたんですう。

何か解りますか?」

「さあな。

カジノが倒産するぐらいのコインか?」

「それはそれで魅力的ですけどお、違うんだなあこれが。

俺さあ、神様嫌いなんだよ」

「…奇遇だな。

俺も大つ嫌いだよ」

「だからさ、俺、ずっと欲しかったんだよね。

『神様がいない世界』つてやつが」

そう口にしたフリードの目は溝泥を煮込んだ様に濁り歪んでいた。

「だけどずっと無理だつて諦めてただけだよ、つい最近、その方法を見つけたんだよね」

「…へえ」

確かにそいつは魅力的だ。

一部の例外はともかく、俺も神様なんか居なければ良いと願ったことはある。

「で、どんな方法なんだ?」

「簡単さ。」

人間が一人残らず死んじまえばいいんだよ。

崇める者、観測する者、恐れる者、その一切が存在しなければ神様は神様でいられなくなる。

そうすれば神様は意志も持たない概念へと墜ちるんだ」

「……そいつは知らなかったな」

荒唐無稽にも聞こえるが、フリードの様子からして聖四文字の全知全能から得た答えなんだろう。

「という訳で、僕ちん決めました。

手元に在る聖四文字の権能を使って全人類滅ぼします!!

勿論その他の異形も諸共滅ぼします!!

そうして神様を皆滅ぼします!!」

いつもの調子でそうほざきやがった。

「ですんでえ、アサシントソも死んでくれないかな?」

「そいつはまあ…悪くないかもな」

フリードの提案に俺は前向きとも取れる答えを口にした。

人類が本当に滅ぶってなら、それは俺の『呪い』も終わるといふ事だ。地獄のような生が終わる。

それは魅力的だ。

だが、だ。だ。

「その前にやつときたい事があるんだよ」

「…なんざんしょ？」

盾を抜き、ドウリンダナを握り直す。

「テメエとの決着が着いてねえだろうが。

白黒着けなきや、笑って死ねねえよ」

どうせ死ぬなら、やりたいことはやり尽くす。

そう言つてやると、フリードは獯猛に笑った。

「ああ、ああ、そうでござんした!!」

俺達はどっちが強いのかハッキリしてなかったんだよなあ!!」

愉しそうに笑いながらフリードはグラムを握り肩に乗せる。

「じゃあ、やりましようかねえ。

僕ちゃんとしてもアサシンタソとはちゃんと勝ちたいからなあ!!」

言うなり不意打ち気味に斬りかかるフリード。

それを俺は笑いながら当たり前にドウリンダナで受け止めた。  
「ほざけ、最後に勝つのは俺だ!!」